

博士論文

論文題目

レオン・バッティスタ・アルベルティ『文芸の利益と不利益』にみられる学問像と文人像  
— 同時代の学問界とのかかわり —

I

氏名 横田 太郎

## 目次

序論 アルベルティと同時代の思想	1
1. 従来の作品解釈とその問題点	1
1) 伝統的な作品解釈	1
2) 従来の作品解釈に対する疑義	3
2. 1430年代におけるアルベルティ	5
1) 求職の成功と経済的自立	5
2) ブルーニへの知的挑戦	7
3. 『文芸』がその他の作品と共有する諸特徴	10
4. 本稿で用いる方法論	13
第1章 『文芸』献辞に観察される反感	17
1. 執筆に値する題材の欠如あるいは枯渇	18
2. 歴史書の執筆と小作品の執筆	23
3. 人文主義者が示す傲慢さ	26
4. 超えられない壁としての古典	29
5. 歴史意識における差異	32
第2章 『文芸』序文に観察される学問像	34
1. 人文主義的教育論および学問論と『文芸』	36
2. 『文芸』における「文芸学」とは	41
3. ブルーニ『対話』におけるサルターティ	45
4. 『文芸』の機能をめぐる仮説	51
第3章 文人と快楽：あらゆる快楽の享受から排除されている文人	57
1. 「監獄」としての勉学あるいは読書、「紙片と死んだ羊」としての書物	58
2. 感覚的諸快楽を禁止されている文人	62
1) 文人と高貴な若者との対置	62
2) 批判を恐れる文人	66
3. 精神的重圧としての勉学	68
1) 知的成長の証明としての執筆	68
2) 卓越した知識を獲得する必要性	70
4. ブルーニ『口さがない怠け者に対する糾弾』における禁欲的文人像	71
5. 人文学に内在する禁欲性の暴露	76

第4章 文人と金銭的富：貧困を強制されている文人	79
1. 金銭の価値をめぐる評価の変容	80
2. 文人が期待できる収入	88
1) 統計的分析	88
2) 実利的学問と人文学との対置	90
3) 文人による結婚	94
3. 文人に求められる支出：ボローニャの挿話	98
1) 勉学に邁進する息子と現実主義者の父	98
2) 理想的家父長としての父	102
4. 観想的生と行動的生の両立への疑念	107
第5章 文人と社会的名誉：公益性に欠ける文人	111
1. 高貴さをめぐる諸言説	113
2. 「知識人が帯びる公益性」をめぐる諸言説	116
3. 「文人が帯びる公益性」に対する疑念	121
1) 文人と金持ちとの対比	121
2) 公職からの文人の排除	126
4. 学識の価値への疑念	129
結論 市民的人文主義に対する揶揄としての『文芸』	132
1. 同時代の思想と『文芸』との関係	135
2. アルベルティによる他作品と『文芸』との関係	137
3. 市民的人文主義に対する知的挑戦	144

## 序論

### アルベルティと同時代の思想<sup>1)</sup>

レオン・バッティスタ・アルベルティ (Leon Battista Alberti, 1404-1472) による学問・文人論、『文芸の利益と不利益』(*De commodis litterarum atque incommodis*) (以下『文芸』と略記) は、作者がボローニャ大学を修了した直後の 1428 年頃に執筆されたとみなされてきた。これを受けて、この作品には、もっぱら苦学生として作者が育んだ禁欲的学問観および文人観が反映されていると解釈されてきた。しかし近年、作品の成立を 1432 年以降へと先送りすべきであるとの提案がなされた<sup>2)</sup>。この提案に従うならば、1430 年代前半にアルベルティが「苦学生」から自立した文人へと歩を進め、続いて、フィレンツェ人文主義に対する挑戦を開始していることから、作者が個人的に育んだ禁欲的学問観および文人観を表明する作品としてのみ、この作品を捉える必要はなくなる。むしろ、『文芸』の読解に「アルベルティとフィレンツェ人文主義、また、それを代表する文人、レオナルド・ブルーニ (Leonardo Bruni, 1370-1444) との関係」という視点を導入すべきであると思われる。このように我々の視野を広げることにより、『文芸』は、同時代の思想、すなわち、市民的人文主義との比較において、新たな姿を示すことになるであろう<sup>3)</sup>。

序論では、以下の流れでこの新たな指針の妥当性を検討する。まず、伝統的な『文芸』解釈と、それに対する疑義を見直しておく。続いて、1430 年代から 1440 年代初頭にかけてアルベルティが身を置いていた諸状況を整理し、さらに、伝統的な作品解釈とは異なったアプローチによる諸研究に目を向ける。すると、この作品の執筆をめぐる外部的状況、また、作品内部に観察される諸特徴の双方ともに、上記の指針に基づく新たな解釈を求めていることが明らかになる。本稿では、この指針に従いながら、『文芸』の各章に、同時代における思想の痕跡を求めていく。

## 1. 従来の作品解釈とその問題点

### 1) 伝統的な作品解釈

アルベルティによる自伝、『レオン・バッティスタ・アルベルティ伝』(*Leonis Baptistae de Albertis vita*, c. 1441) (以下『自伝』と略記) は、『文芸』の成立について次のように証言している。

しかし、〔アルベルティは〕文芸なしではいられなかったため、二十四歳のとき、〔哲学〕と数学に打ち込んだ。彼はこれらの学科を十分に学ぶことができると信じて疑わなかった。なぜなら、それらの学科においては記憶力よりも才知を用いる必要があると理解していたからである。／その頃、彼は兄に宛てて、『文芸の利

益と不利益』を執筆した。この小作品において、文芸について何が考えられるべきなのか、経験自体から学んで論じたのである。<sup>4)</sup>

この証言から、『文芸』は1428年頃に執筆されたとみなされてきた。また、近代アルベルティ研究における先駆者、ジローラモ・マンチーニは、フィレンツェへの言及が作品中に確認されることを根拠として、『文芸』執筆時に作者が同地を訪れていたと推論した。14世紀末以降、アルベルティ一族は祖国から段階的に追放されていたが、1428年11月22日にこの追放令は解除されている。同年、ボローニャにおいてバットィスタが教会法を修了したと推定したマンチーニは、同地における騒乱の激化、さらに、バットィスタの兄、カルロ・アルベルティ (Carlo Alberti) が1429年1月にフィレンツェに滞在していた可能性を根拠として、この時期に初めて祖国を訪問した作者が、その経験を踏まえて『文芸』を執筆したと考えた<sup>5)</sup>。このように、「『文芸』の成立は1428年から翌年頃である」という見解は、『自伝』における「その頃」(«Eo tempore»)という曖昧な記述、また、マンチーニによる推定に依拠しているだけであり、客観的根拠を欠いている。しかし、「アルベルティが苦学生として大学生活を修了した直後に『文芸』を執筆した」というこの見解は定説と化し、作品の解釈に大きな影響をあたえてきた。

1404年、ジェノヴァにおいてロレンツォ・アルベルティ (Lorenzo Alberti) とビアンカ・フィエスキ (Bianca Fieschi) との間に庶子として誕生したバットィスタは、その生まれにもかかわらず<sup>6)</sup>、高等教育を授けられた。ガスパリーノ・バルツィツァ (Gasparino Barzizza) が主宰していた学校で人文主義的基礎教育を受けたバットィスタは<sup>7)</sup>、ボローニャ大学へ進学したのである。そして、やはり庶子として生まれたカルロが家業に参画する一方<sup>8)</sup>、教会法を修めたバットィスタ<sup>9)</sup>は文人としての道を選択した<sup>10)</sup>。

しかし、1421年における父ロレンツォの死以降、アルベルティ兄弟は親族との不和に起因する困難に見舞われたとされている。父は、二人の庶子の「それぞれに金4000ドゥカート」<sup>11)</sup>教育資金として残し、自らの兄であるリッチャルド・アルベルティ (Ricciardo Alberti) に遺言の執行を託した。だが、翌年にリッチャルドが死去すると、その管理はカルロとバットィスタのいところ、ベネデット・ディ・ベルナルド・アルベルティ (Benedetto di Bernardo Alberti) とアントーニオ・ディ・リッチャルド・アルベルティ (Antonio di Ricciardo Alberti) へと移譲され、教育資金の支払いが遅延されたのである<sup>12)</sup>。

父の死以降における親族からの風当たりの強さ、また、貧苦にあえぎ、病気に苦しみなながらも真摯に勉学に取り組むアルベルティの姿は、戯曲『フィロドクスス』(Philodoxeos fabula, 1424)の改訂版に付された『注釈』(Commentarium, 1437)や、『自伝』における証言から推測されてきた<sup>13)</sup>。さらに、1430年代を中心に書き溜められ、1440年代初頭に『食間対話集』(Intercenales)として編纂された諸作品のうち、『孤児』(Pupillus)や『苦惱』(Erumna)、また、『指輪』(Anuli)において「運命に屈せず美德の獲得に励む立派な若者」として描き出されている登場人物フィロポニウス (Philoponius) に、作者が学生時代に味わった不遇の

経験が投影されていると考えられてきた<sup>14)</sup>。

アルベルティが大学を修了した直後に執筆され、voluptates (快樂)、divitie (富)、honor (社会的名誉) の獲得を放棄して「文芸／書物によって保全されている事物をめぐる知識」(«cognitio rerum earum que litteris continentur») <sup>15)</sup>だけを希求する文人像を提示している『文芸』も、自伝的言説から構築された「苦学生」の姿を念頭に置いて解釈されてきた。伝統的な諸研究は、「禁欲的な英雄性」<sup>16)</sup>を帯びた「知的苦行の精密な定義」<sup>17)</sup>であるこの作品に、文人は学識を通じて社会参加し公益に寄与する存在であると自負する市民的人文主義に背を向けた、きわめて内向的な学問観と文人観を観察してきたのである<sup>18)</sup>。

## 2) 従来の作品解釈に対する疑義

従来の諸解釈は、アルベルティが苦学生として育んだ学問観および文人観の真摯な表明として、『文芸』が帯びる禁欲性をみなしてきた。しかし、新たな諸解釈は、同時代における学問および文人に向けられた戯画あるいは風刺として、この禁欲性を捉え始めている。ルーカ・ボスケットがこの作品の「成立年代をめぐる定説」、また、「自伝的諸言説の信憑性」について投げかけている疑問は、新たな解釈の妥当性を保証すると思われる。

まず、作品の成立時期について、ボスケットは伝統的な見解が客観性を欠く点を問題視し、『文芸』と兄カルロによる作品、『エフェビエ』(*Ephēbie*)との関連に再注目している<sup>19)</sup>。カルロに宛てた『文芸』献辞の末尾において、バッティスタは兄による作品に言及している。

他方、我が兄よ——ちょうど君の作品、『エフェビエ』における表現を用いてみるが——君は私の小作品を自由に見直し、訂正し、手入れして、君による校正で私の着想をより素敵で威厳あるものとしてくれ。

Tu vero (ut tuo in Ephēbis utar dicto), mi frater, relege hunc nostrum libellum, corrige, immuta tuo quidem arbitrato, emendationeque tua inventionem nostram effice gratiorem ac digniorem.<sup>20)</sup>

この文言が、兄弟の縁戚であるフランチェスコ・ダルトビアンコ・アルベルティ (Francesco d'Altobianco Alberti) に宛てられた『エフェビエ』献辞からの引用であることが指摘されている。カルロは、作品献辞の末尾において、フランチェスコ・ダルトビアンコに対し次のように呼びかけている。

この私の『エフェビエ』を自由に見直し、訂正し、手入れしてくれ。もし、私の着想が魅力に欠けていても、少なくとも君による校正が非常に素敵なものとなるように。

rivedi, correggi, rimuta a tuo arbitrio queste nostre *Ephēbie*, e fa' sì che, se l'la inventionem mia non è da piacere, almanco la emendatione tua sia gratissima.<sup>21)</sup>

献呈者に対する作品の校正依頼は、献辞の結びにおけるトポスとしてみなされるかもしれ

ない<sup>22)</sup>。しかしバッティスタは、兄の手による作品の題名にまで言及している。そのため、『エフェビエ』献辞が1432年1月1日付けであることを踏まえれば、『文芸』献辞はこの日付けより後の時期に執筆されたことになる<sup>23)</sup>。

この点について、ジョヴァンニ・ファッリスが述べているように、「兄による〔『エフェビエ』の〕手稿をアルベルティがかなり以前に手にすることができた」<sup>24)</sup>可能性があるかもしれない。また、ジョヴァンニ・ポンテが指摘しているように、『文芸』の献辞が本文の成立の数年後に加筆された可能性も否定できない<sup>25)</sup>。しかしボスケットは、『自伝』における「その頃」という証言、あるいはマンチーニによる推測に依拠して『文芸』の成立年を推定するよりは、『文芸』献辞の執筆、したがって、『自伝』に示された形における作品の完成を1432年以降へと先送りするほうが妥当であろうと提案している<sup>26)</sup>。

作品成立年をめぐる以上の検討が示すように、『自伝』による証言は、具体性および信憑性にかかわる問題を内包している<sup>27)</sup>。たとえば、『自伝』が伝記執筆における古典的伝統に倣ったものであることが指摘されているが<sup>28)</sup>、この点を踏まえてルチア・ベルトリーニは、その証言が正確な実証性よりも、そこに描き出される人物像、つまり、アルベルティ自身を古代風に描き出すことを重視していると述べている<sup>29)</sup>。また、ロベルト・カルディーニも、『自伝』におけるアルベルティが、自らを「英雄、また、古代的知識人」として理想化していると指摘している<sup>30)</sup>。さらにリッカルド・フビーニとアンナ・メンチ・ガッロリーニは、「自らを非常にさまざまな意趣に富んだ装いをした登場人物にする傾向」<sup>31)</sup>を、アルベルティが残した自伝的証言が示す特徴として挙げている。くわえてマーク・ジャルツォンベックは、アルベルティの作品に観察される「自伝的諸要素は、もっぱら文学的の比喩であることが常である」<sup>32)</sup>と述べている。こうした特徴により、アルベルティが残した諸作品の随所に観察される自伝的証言は、曖昧さを避けがたく帯びることになる。

自伝的諸言説が帯びているこうした曖昧さを踏まえてボスケットは、そこから浮かび上がる、運命に果敢に立ち向かい美徳を希求する「立派な若者」<sup>33)</sup>像がアルベルティによる戦略のひとつであった可能性を指摘している。アルベルティをはじめ、彼の友人、ラーポ・ダ・カスティリオンキオ・イル・ジョーヴァネ (Lapo da Castiglionchio il Giovane, c.1406-1438) やレオナルド・ダーティ (Leonardo Dati, 1408-1472) ら若い世代に属す文人は、文人の「世代間における断絶」<sup>34)</sup>に起因する困難、すなわち、学問界において安定した立場と評価を獲得する際の困難に直面していた。15世紀初頭において、ギリシャ語運用能力、また、コルッチョ・サルターティ (Coluccio Salutati, 1331-1406) のもとに集った文人たちが示した強固な連帯、さらに、教皇庁をはじめ諸宮廷で生じた人文主義的教養への需要の高まりが、フィレンツェを代表する人文主義者の第一世代に属すブルーニらの求職における追い風となっていた。しかし、1430年代にはそうした状況が一変している。まず、ギリシャ語運用能力を持つ知識人の絶対数は増加し、また、前世代に属す文人が主要な働き口を独占し続け、さらに、彼らが引退する際に同世代の仲間、あるいは自らの血縁にその職を継がせていたために、若い世代に属す文人たちの就職難が生じていたのである<sup>35)</sup>。このような状況は、たとえ

ば、カステリオンキオが『教皇庁の利益』(De curiae commodis, 1438)を執筆したことによって示されている。彼はこの作品を執筆することで、「学者が自らの勉学に没頭することのできる安全な港」<sup>36)</sup>としての教皇庁に職を求めたが、結局、この願いを実現することなく短い生涯を終えている<sup>37)</sup>。また、枢機卿フランチェスコ・コンドゥルメル(Francesco Condulmer)に仕えたダーティも、1441年に失職したのち、1455年、教皇庁秘書官の地位に就くまで、求職に奔走していた<sup>38)</sup>。

若き文人たちが直面していたこうした状況を踏まえてボスケットは、『文芸』献辞に観察される「若者と歴史書を執筆すべき文人」との二項対立、また、「先輩文人への反感」に<sup>39)</sup>、「当時の人文主義的文化の枠内に、自ら、また、自らと同世代の文人のための独立した居場所を獲得する」<sup>40)</sup>という作者の意図を読んでいる。もし、このようであるならば、自伝的言説から構築される「立派な若者」像は、作者の個人的な経験あるいは思想／理想の真摯な表明としてよりも、既存の学問界に向けられた対決姿勢の表明として機能していることになるであろう。

ボスケットによる提案は、「アルベルティが大学修了直後に『文芸』を執筆した」という作品の成立時期をめぐる定説、また、『文芸』は、不遇の学生生活においてアルベルティが育んだ禁欲的学問観および文人観の真摯な表明である」という伝統的な作品解釈のそれぞれについて、新たな疑問を生じさせる。まず、作品成立時期について、「作品の成立が1432年以降に先送りされるならば、苦学生としての経験が作品に直接的な影響を与えているとみなすことは妥当であるのか」、という疑問である。もし、作品の成立が先送りされるならば、この作品とアルベルティの苦学生としての経験を結びつけるよりも、1430年代前半において彼を取り巻いていた経済的・社会的・文化的状況を考慮すべきであると思われる。続いて、作品内容の解釈について、「作品の成立時期にかかわらず、そもそも、自伝的証言から構築された苦学生としてのアルベルティ像を作品解釈の大前提とすることが妥当であるのか」という疑問である。自伝的証言の信憑性が疑われるならば、それに代わる指針が必要となるであろう。これらの疑問についてボスケットは、若い世代に属す文人が1430年代において置かれていた一般的な状況に注目し、「世代間の断絶」を代替案として提示している。この提案を念頭に置きつつ、まず、第一の疑問を検討するために、1430年代から1440年代初頭にかけてアルベルティを取り巻いていた諸状況を、今一度、整理してみよう。

## 2. 1430年代におけるアルベルティ

### 1) 求職の成功と経済的自立

『文芸』の成立が1430年代初頭以降に先送りされるならば、この作品が執筆された背景にかんする我々の認識を変えなければならない。そこで、ボスケットが示した実利的な観点における「世代間の断絶」という提案の妥当性を確認するためにも、以下では1430年代から1440年代初頭にかけてアルベルティが置かれていた経済的な状況、また、彼が獲得した社会的立場、さらに、彼と親族との関係について確認する。



サンタ・マリア・デル・カルミネ教会内、ブランカッチ礼拝堂に現存する、マサッチョ (Masaccio) による『教皇座のペテロ』 (*San Pietro in cattedra*, 1428) にアルベルティの肖像画が確認されて以降、一族に対する追放令が解かれるより以前に彼がフィレンツェを訪れていた可能性が指摘され始めている<sup>41)</sup>。この指摘は、『文芸』の成立年をめぐるマンチーニが立てた仮説の根拠を否定するとともに、早くからアルベルティがフィレンツェおよびその文化に慣れ親しんでいたことを示す。ただし、いつアルベルティが祖国を初めて訪問したのか、また、その時点から教皇庁に職を得るまで彼がどこで何をしていたのかについて、確たる証言は残されていない<sup>42)</sup>。しかし、1430年代から1440年代初頭にかけて、アルベルティはその時期の大部分を教皇庁とともにフィレンツェで過ごしている。そして、この時期におけるアルベルティは、自伝的証言から構築される「苦学生」とは一変した姿を示している。

1431年9月24日の時点で、アルベルティはフィレンツェ教区内、ガンガラランディのサン・マルティーノ教会 (*San Martino a Gangalandi*) の教会禄譲渡をめぐる係争にかかわっている<sup>43)</sup>。彼は、遅くとも翌年には、この教会禄を獲得している。1432年10月3日付けで、アルベルティがこの教会の長として、フィレンツェ大聖堂の財産管理委員会への拠出金の支払いを命じられているからである<sup>44)</sup>。また、同年10月7日付けでアルベルティの庶子としての生まれは特免されているが、この勅書において彼が「ガンガラランディのサン・マルティーノ聖堂参事会付き在俗司祭教会の長」 (*prior secularis et collegiate ecclesie Sancti Martini de Gangalandi*) と呼ばれているからである。さらに、同勅書においてアルベルティが「教皇庁文書官」 (*litterarum apostolicarum abbreviator*)、また、グラード総大司教で教皇庁尚書院長官でもあったピアージョ・モリーノ (*Biagio Molin*) の「秘書官」 (*secretarius*) とも呼ばれていることから、彼がすでに教皇庁に職を得ていたことも明らかである<sup>45)</sup>。1433年以降にバルトロメオ・ダル・ポッツォ (*Bartolomeo dal Pozzo*) に宛てられた手紙における、「その他の理由によって私の財産が十分豊かで立派なものであることを、君は知っている」<sup>46)</sup>との証言から、この時期におけるアルベルティが経済的困難を克服しつつあったことが裏付けられるであろう。また、彼に認められていた社会的立場に目を向ければ、1433年12月5日にフィレンツェ政府からコンドゥルメル枢機卿に宛てて、「たしかに非常に豊かで高貴きわまりない一族」<sup>47)</sup>に生まれたバッティスタの推挙状が発行されている。彼は偉大なるアルベルティ一族の一員として、社会的に認識されていたのである。

これらの点について、バッティスタと親族との関係に注意を払う必要がある。なぜなら、以上の特免と推挙は、フランチェスコ・ダルトビアンコおよび後の枢機卿、アルベルト・アルベルティ (*Alberto Alberti*) の力添えによると考えられているからである<sup>48)</sup>。実際、両者とバッティスタとの繋がりには強固なものであった。1435年頃、バッティスタは『家族論』 (*I libri della famiglia*) 第三巻にフランチェスコ・ダルトビアンコに宛てた序文を付しており、『文芸』と近接する時期に執筆されたと考えられている『エカトンフィレア』 (*Ecatonfilea*) をネロツォ・アルベルティ (*Neruzzo Alberti*) と同時に彼にも献じている。また、フランチェスコ・ダルトビアンコは、1441年にバッティスタが主宰した「俗語詩競技会」 (*Certame*

coronario)の参加者であり、1445年以前に執筆されたとみなされている『家族の晩餐』(*Cena familiaris*)の登場人物でもある。そして、アルベルトは『司教』(*Pontifex*, 1437)の登場人物であるが、まさに彼の力添えにより、バッティスタとカルロはバルツィツァの学校に入学したと考えられている<sup>49)</sup>。また、1420年代、アルベルトがボローニャにおいて教皇庁の出納官(*tesoriere pontificio*)を務めていたために<sup>50)</sup>、バッティスタはボローニャ大学を進学先として選んだと推測されている<sup>51)</sup>。さらに、バッティスタの教皇庁におけるキャリアの点のみならず、文人との繋がりについても、アルベルトの後押しがあったことが指摘されている<sup>52)</sup>。

カルロとバッティスタ兄弟の教育資金の管理が任されていたとこたちとの関係も、当初から険悪であったわけではない可能性が高い。ボスケットは、バッティスタが所有していたキケロ『ブルトゥス』(*Brutus*)の写本に、アントーニオの子供たちの誕生日が記録されていることに着目している。この備忘録には、アントーニオの第四子、1434年1月に生まれたジネーヴラ(*Ginevra*)の誕生日までが記されており、1435年3月に誕生した第五子ベルナルド(*Bernardo*)については記載がない。したがって、少なくとも1434年1月までは、両者の関係が良好であった可能性が高いとボスケットは推測している<sup>53)</sup>。また、バッティスタとベネデットとの関係については、パドヴァにおいてバッティスタがベネデットの家に居住していた可能性が指摘されている<sup>54)</sup>。このように、バッティスタが一族全体から完全に疎外され孤立していたわけではないことに注目すれば、自伝的言説に観察される「親族との不和」という不幸も、その程度について信憑性を疑わざるをえなくなるのである。

アルベルティは、貧苦にあえぐ苦学生として、1420年代を過ごしたのかもしれない。しかし、1430年代前半には、そうした状況は一変していたとみなされる。カスティリオンキオやダーティの場合とは異なり、1430年代前半におけるアルベルティは、一部とはいえども一族の有力者との良好な関係を保持し、彼らの庇護のもと経済的自立と社会的認知を獲得しつつあったからである。アルベルティの場合に限定すれば、実利的な観点における「世代間の断絶」は、早々に克服されつつあったと思われるのである。したがって、もし、この時期に『文芸』が執筆されたのであれば、自伝的証言から浮かび上がる不遇の経験を作品の読解指針とすることの是非が、問われることになるであろう。同時に、アルベルティが経済的自立を達成しつつあったことを考慮すると、『文芸』に観察される「先輩文人への反感」を実利的な要因、すなわち、求職の困難さに起因する不満としてみなす必要も、なくなるであろう。そこで、この反感がどこから生じているのか、また、アルベルティにとって「世代間の断絶」とは何を意味したのかを確認するために、今度は、彼とフィレンツェ人文主義との関係に注目してみよう。

## 2) ブルーニへの知的挑戦

前世代に属す人文主義者に対しアルベルティが抱いていた反感が実利的な問題に起因するわけでないならば、それが何に基づくものであるのかを確認しなければならない。1430年

代におけるアルベルティの人生は、求職の成功に伴う経済的自立と同時に、フィレンツェ人文主義との直接的な接触によって特徴付けられている。この時期にアルベルティが、年長の文人、とりわけブルーニに対し、ときに感情的な色彩を帯びる学問的な挑戦を行っているからである。そこで、アルベルティがブルーニに対して仕掛けた諸論争を、まず、俗語の価値をめぐるものについて、それから、行きすぎた古典主義とレトリック偏愛に対する批判の順で、追ってみよう。

まず、俗語の価値について、アルベルティとブルーニとの間における意見の対立が確認される<sup>55)</sup>。1434年から翌年にかけて、フラヴィオ・ビオンド (Flavio Biondo, 1392-1463) とブルーニとの間で、古代ローマにおける話し言葉をめぐる論争が生じている。ビオンド、ポッジョ・ブラッチョリーニ (Poggio Bracciolini, 1380-1459)、また、アンドレーア・フィオッキ (Andrea Fiacchi, ?-1452?) は、古代ローマにおける言語はラテン語のみであったと主張し、他方、チェンチオ・ルスティチ (Cencio Rustici, c. 1390-1445)、アントーニオ・ロスキ (Antonio Loschi, 1365-1441)、さらにブルーニは、学識ある人物が用いるラテン語と、学識に欠けた人物も理解できた俗語とが併存していたと主張したのである。この論争を踏まえ、アルベルティは『家族論』第三巻の序においてラテン語と俗語の連続性を説き、「知識人」<sup>56)</sup>のみならず「大衆」<sup>57)</sup>にも理解されるトスカーナ語には、かつてのラテン語と同等の価値が認められるべきであると論じている。アルベルティは、この見解に異議を唱える者たち——その筆頭がブルーニである——を、「こうした批判者たちは、ラテン語では黙ることしかできないし、トスカーナ語では黙らぬ人物を批判することしかできないのである」<sup>58)</sup>と、皮肉まじりに批判している。

アルベルティはさらに、この時期に『トスカーナ語文法』(*Grammatica della lingua toscana*)を執筆し、作品冒頭において次のように述べている。

ラテン語が全ラテン民衆の共通語ではなく、学識あるいくらかの人物たちの専有物であった——ちょうどいま、ラテン語が少数の人物によってしか用いられていないのと同じく——と主張する者たちは、その誤りを捨て去るであろう、俗語の使用法を非常に簡潔に解説した私の作品を読むことで。<sup>59)</sup>

『家族論』第三巻序に観察されるものと同質の問題意識と対立構造に基づき、俗語の「生きた現実的な使用への無条件なこだわり」<sup>60)</sup>を示すこの作品は、俗語は文法性を欠くためにラテン語に劣ると主張するブルーニへの反論の一環として、前者がもつ文法性を明示するために執筆されたと考えられている<sup>61)</sup>。俗語がもちうる公益性をめぐる対立は、1441年、アルベルティが主宰した俗語詩競技会により、決定的なものとなる。古代ギリシャの競技会を模し「友情」(amicitia)を主題としたこの大会は、優勝者に贈られるはずであった銀冠の「該当者なし」というかたちで失敗に終わっている。

俗語の価値を実質的に否定するこの裁定について、競技会において審査員を務めた人文

主義者たち——ブルーニも審査員の一人であった可能性が高い<sup>62)</sup>——に宛てられた匿名の『抗議』(Protesta, 1441)が現存するが、この作品がアルベルティの手によるものであることが指摘されている<sup>63)</sup>。この糾弾において、「庶民、また、大衆である我々」<sup>64)</sup>、すなわち俗語の擁護者と、「学識に溢れることこのうえない人士」<sup>65)</sup>ではあるが、「あまりにも繊細な耳」<sup>66)</sup>を持ち「喋れもせず黙ったまま」<sup>67)</sup>である審査員とが対置され、後者が非難されている。審査員を務めた同時代を代表する文人たちは、自らは俗語による詩作を行わずに他者を非難するだけであるために、彼らとその裁定によって愚弄した俗語詩人たちに劣るのである<sup>68)</sup>。同競技会は翌年、今度は「嫉妬」(invidia)を題材として開催される計画であったが、ブルーニがアルベルティに宛てた現存する唯一の手紙において、その開催の是非をめぐると考えられる悶着が言及されている<sup>69)</sup>。この問題についてアルベルティは、1442年から翌年頃に執筆された対話編、『辛苦からの避難』(Profugiorum ab erumna libri)において、登場人物、アーニョロ・パンドルフィーニ(Agnolo Pandolfini)に、次のように述べさせている。

だが、バティストよ、君たちが作品を朗読することはできないのではないかと私は疑っている。この時代において嫉妬、そして偏屈は、人々に対して非常な影響力をもつ。誰もが称賛し同意せずにはいられない事柄を、多くの者たちが非難し邪魔しようとするのである。ああ、我が同胞よ、お前たちは、お前たちをしっかりと愛する人物に対して攻撃的であり続けるのか。<sup>70)</sup>

この懸念が示しているように、第二回俗語詩競技会は、結局、開催されていない。俗語がもつ公益性をめぐりアルベルティがブルーニに仕掛けた一連の論争は、学問的挑戦であると同時に、感情的なしこりを残したと考えられるのである。

アルベルティは、俗語がもちうる価値をめぐりブルーニと対立するのみならず、硬直化した古典主義、また、過剰なまでのレトリック偏愛についても、ブルーニに対する反意を示している。『食間対話集』第二巻序において<sup>71)</sup>、「現代における文芸の王」<sup>72)</sup>であるブルーニに対し、アルベルティは「幼稚でつたない私の語りかたによって」<sup>73)</sup>人々を楽しませる方が、「無数の修辞を磨いて黙ったまま年老いる」<sup>74)</sup>よりもましであると主張している。ブルーニが抱いていた修辞学への熱意を考慮すれば<sup>75)</sup>、『家族論』第三巻序、『トスカーナ語文法』、また、『抗議』に観察されるものと同種の「見せかけの敬意と卑下に彩られた対置」が、今度は直接的にブルーニに対する挑発として機能していることが明らかである。さらに、金銭を主題とする諸作品が所収されている『食間対話集』第二巻を献じるという行為自体が、ブルーニへの挑発であったとも考えられている<sup>76)</sup>。なぜなら、『貪欲論』(De avaritia, 1428-1429)を執筆したブラッチョリーニが、1429年にニコロ・ニコリ(Niccolò Niccoli, 1365-1437)に宛てた手紙において、「貪欲であるという疑惑のため、この対話編によって彼〔ブルーニ〕が侮辱されたとみなすのではないかと、私は恐れている」<sup>77)</sup>と危惧しているように、ブルーニは貪欲として悪名高く、その評判に敏感であったからである。したがって、『食間対話集』

第二巻の献呈も、ブルーニに対する知的挑戦であると同時に、感情的な挑発としての色彩を帯びているといえよう。

さらに、具体名が伏せられてはいるものの、「誉れと権威の点で文人たちの王」<sup>78)</sup>である人物、つまりブルーニに献じられたとみなされている『食間対話集』第七巻の序において<sup>79)</sup>、アルベルティはブルーニを筆頭とする人文主義者が主張している完璧な古典様式への執着を、月を罫にかけて捕えようとするファウヌスにたとえて嘲笑している<sup>80)</sup>。この献呈も、キケロを文体の絶対的な規範としてみなすブルーニ<sup>81)</sup>に対する論争であると同時に、中傷的な挑発としての機能を果たしているとみなされるであろう。

1443年、あるいは1444年初頭、教皇庁のシエナへの移転とほぼ時を同じくして、アルベルティはフィレンツェを後にしている<sup>82)</sup>。俗語詩競技会の失敗の前後、俗語対話編『テオジェニウス』(*Theogenius*, 1440) および『辛苦からの避難』を執筆したアルベルティの思想に、ボスケットは「増していく苦々しさ」<sup>83)</sup>を観察している。また、ベルトリーニは、まさにこの時期に、「〔アルベルティ〕が行った知的活動の中心を文学が占めていた時期」<sup>84)</sup>の締めくくりが求められるとみなし、その時期への決別として、『自伝』が執筆された可能性を提案している。アルベルティによる祖国への滞在は、同地の学問界への挑戦と敗北によって特徴付けられるのである。

以上から、アルベルティにとっての「世代間の断絶」は、ラテン語よりも公益に資する俗語を軽視し、また、キケロを絶対視するあまり執筆における自由を制約するフィレンツェ学問界が示す「知的エリート主義」に向けられた反感に起因すると考えられるのではないだろうか<sup>85)</sup>。『文芸』の成立が1430年代初頭以降に先送りされるならば、自伝的諸言説から推測される不遇経験の直接的な反映や、実利的な不満から生じた「先輩文人に対する反感」を『文芸』に読み込むことは必要ではなくなる。むしろ、『文芸』献辞に観察される「先輩文人と若き文人との対置」を思い起こしてみれば、この作品は、フィレンツェ学問界に対しアルベルティが仕掛けた知的挑戦の端緒としてみなされうることになる<sup>86)</sup>。もし、このようであるならば、『文芸』の読解において、アルベルティとフィレンツェ人文主義、とくにブルーニとの関係に我々は焦点を当てるべきである。さらにこの視点は、『文芸』自体が示す諸特徴に注目しても、作品読解の指針として有効であると思われる。

### 3. 『文芸』がその他の作品と共有する諸特徴

アルベルティとフィレンツェ人文主義、とくにブルーニとの関係に注目するという指針は、『文芸』の成立時期にかかわらず、この作品自体が示す諸特徴に注目しても有効であると思われる。『文芸』には、自伝性以外にも、アルベルティの他作品と共通する諸特徴が見出される。すでに概観したように、作品献辞に観察される二項対立や前世代に属す文人への反感は、『家族論』第三巻序、『トスカーナ語文法』、『食間対話集』第二巻序および同書第七巻序、また、『抗議』にも確認される。『文芸』はさらに、1) 皮肉や風刺の多用、2) 反フィレンツェ人文主義の姿勢、3) 示唆を用いた揶揄という特徴を、アルベルティによるその他

の諸作品と共有している。

まず、アルベルティが残した文学作品には、風刺あるいは皮肉が確認されることが指摘されている。エウジェニオ・ガレンは、アルベルティが 1433 年から翌年にかけて『家族論』（第一巻から第三巻まで）と並行して『食間対話集』や『聖ポティトゥス伝』（*Vita Sancti Potiti*）を、また、1450 年代初頭までの近接した時期に『建築論』（*De re aedificatoria*）と『モムス』（*Momus*）を執筆したことに注目し、この著述家の思想が通時的な成熟を示したとの見解に疑問を投げかけている<sup>87)</sup>。アルベルティは、市民的人文主義の理念を体現するとされる理性的な作品と、皮肉と矛盾に満ちて混沌とした作品とを、同時期に並行して執筆しているのである。そのうえで、いわば、こうした光と影の拮抗こそが、作家アルベルティの思想における「皮肉」（*ironia*）と「矛盾」（*paradosso*）を生むと、ガレンは述べている<sup>88)</sup>。実際、風刺に満ちた『食間対話集』や『モムス』といった作品にのみならず<sup>89)</sup>、市民的人文主義を体現する作品としてみなされてきた『家族論』にも、「皮肉」（*irony*）が観察され始めている<sup>90)</sup>。これらの指摘を考慮すると、『文芸』が何かしらの批判性を帯びているならば、それが皮肉をこえた風刺として機能している可能性に目を向けるべきであると思われる。

『文芸』に描かれている禁欲的な文人像が同時代の学問界へ向けられた「風刺」（*sarcasmo*）であるという可能性は、古くはヴァレリア・ベネッティ・ブルネッリにより提案されている<sup>91)</sup>。また、ジョン・オッペルは、『文芸』に「文人は正当に評価されるべきである」というアルベルティによる真摯な主張を読みつつも、そこに描かれている禁欲的な文人を「戯画」（*caricature*）としてみなしている<sup>92)</sup>。アンソニー・グラフトンも、この作品に、いまだ自我形成の途上にあった作者の不満を読みながらも、学者の「戯画」（*parodic figure*）を観察している<sup>93)</sup>。さらに、『文芸』を風刺としてみなすだけでなく、後年の諸作品にアルベルティの学問観の発展、あるいは、彼が理想とする文人像を求める試みもなされている<sup>94)</sup>。このように、『文芸』において論じられている禁欲的な文人が作者の理想を直接的に反映しているわけではないという指摘が、なされ始めているのである。

これらの指摘は、『文芸』に描かれている禁欲的な文人像は、作者の理想を直接的に表現している」という伝統的な立場に疑問を投げかけ、むしろ、社会から排除されるまでに禁欲的なこの「理想的」文人像自体が風刺として機能している可能性を提案しているために、研究の視野を広げてくれる。他方、これらの解釈は、こうした風刺や戯画が、具体的に何を素材／対象としているのかについて、検証を深めているとはいえない。

この点について手がかりとなるのが、フィレンツェ人文主義との比較においてアルベルティの思想が示す特異性である。『食間対話集』や『モムス』の系列に属す諸作品についてはもちろんのこと<sup>95)</sup>、アルベルティが模範とした古典モデル、また、彼が育んだ思想自体が、フィレンツェ人文主義のそれらから乖離していることが指摘されている<sup>96)</sup>。さらに、『文芸』を含めた初期作品群についてカルディーニは、「サルターティからブルーニへと至る新たなフィレンツェ文化の諸傾向とは完全に異質な育成を描写し、異質な立場を表明している」<sup>97)</sup>と述べている。

この問題については、フィレンツェの学問界がアルベルティに向けた沈黙も、注目に値するであろう。フランコ・バッケッリとルーカ・ダッシャは、戯曲『フィロドクスス』、また、『食間対話集』に所収されている『孤児』、『苦悩』、『作家』(Scriptor)と『花輪』(Corolle)に、「アルベルティが注いだ努力に対してフィレンツェが用意した否定的な受容という主題」<sup>98)</sup>を読み込んでいる。同時にカルディーニも、ブルーニやブラッチョリーニといった同時代を代表する文人に献じられている『食間対話集』に対してなされた、フィレンツェ学問界からの「沈黙という対応」<sup>99)</sup>を観察している。さらに『文芸』についても、この作品の写本が二種しか現存していないことが、アルベルティの思想とフィレンツェの学問界との距離感を示している、パオロ・ヴィーティが指摘している<sup>100)</sup>。結局、アルベルティとフィレンツェの文化および思想は、互いに相容れることはなかったと考えられるのである<sup>101)</sup>。

ここで、市民的人文主義に対する反意を『文芸』に読み込む代表的な解釈として、カルディーニによる主張を、簡単に整理しておきたい。彼はこの作品に、「実践の優位、教養の社会的目的、知識人の社会・政治参加、権力およびその政体・制度との不可避な妥協という、市民的人文主義が示す最も特徴的な諸要求に対する拒絶」<sup>102)</sup>を観察している。さらに後年、「〔『文芸』は〕市民的人文主義の理論家、歴史家、人文主義者・書記官長に対する全面的な論争である」<sup>103)</sup>、つまり、ブルーニへと向けられた論争であると、持論を展開している。同時にカルディーニは、「ウモリズモ」(umorismo)、すなわち、「非常に痛烈で辛辣、酷で嘲けるような」<sup>104)</sup>笑いを含む『食間対話集』や『モムス』から『文芸』を区別して、それを「非常に真剣な学術的論考」<sup>105)</sup>のひとつ、また、「非常に辛辣で抗議的、しかし、決して『喜劇的』でも逆説的でもない」<sup>106)</sup>作品、さらに、『義務について』に反する書<sup>107)</sup>であるとも述べている。つまり、彼もまた、この作品に描かれている社会性を欠くまでに禁欲的な文人像を、アルベルティが育んだ思想／理想の真摯な表明としてみなしているのである。

しかし、『文芸』が市民的人文主義、とりわけブルーニに向けられた論争であるというカルディーニによる指摘は、この作品に風刺や戯画を読み込む諸解釈が示す欠点、すなわち、そうした風刺や戯画の素材／対象をめぐる考察が十分になされていないという欠点を補完するであろう。他方、カルディーニによる指摘も、ブルーニのどの作品に見出されるどの文言が、『文芸』のどの文言によって攻撃されているのかという点について、検証を深めているとはいえない。この作品において、作者の兄カルロと父ロレンツォ以外、同時代人の名が言及されていないために、こうした検証は困難なのである。

だが、この点については、『食間対話集』における登場人物、リブリペータ (Libripeta) の解釈が参考になると思われる。『作家』、『名声』(Fama)、『夢』(Somnium)、そして『神託』(Oraculum)に登場するこの皮肉屋は、自らは執筆を行わず、他者の批判ばかりする文人、ニッコリをモデルにしているとみなされている<sup>108)</sup>。アルベルティとニッコリとの間には、何かしら現実的な不和が生じていたと考えられているが<sup>109)</sup>、そうした不和から生じたニッコリへの反感が、「リブリペータ」という示唆を通じた揶揄として表れているのである。ただし、この点については、カルディーニによる指摘にも耳を傾けておくべきであろう。彼は、

リブリペータという人物像が、直接的にニッコリを揶揄しているわけではなく、「人文学の退廃を生々しいかたちで濃縮した姿」であり、「人文主義のもうひとつの側面」を体現していると述べている<sup>110)</sup>。アルベルティによる諸作品に確認される「自らは執筆を行わず、他者を批判するだけである文人」の解釈にも、同様の慎重さが必要かもしれない。なぜなら、『抗議』において批判されているのは俗語詩競技会の審査員であった人文主義者たちであり、『食間対話集』第二巻献辞はブルーニに宛てられており、『家族論』第三巻序において批判されているのは、ブルーニを含めたすべてのラテン語至上主義者だからである。

さて、『文芸』献辞で描かれている「自らは執筆を行わずに、耳ざとく他者を批判する」文人の姿も、ニッコリ——あるいはカルディーニに従うならば、「人文学の退廃」もしくは「人文主義のもうひとつの側面」——を示唆しているとみなされている<sup>111)</sup>。『文芸』にはさらに、ブルーニを指すと考えられる示唆も観察されている。たとえば、作品献辞において若き文人と対置されている「歴史書を執筆すべき文人」が、『フィレンツェ市民史』(*Historiarum Florentini populi*——1429年の時点で、この歴史書は全十二巻のうち第六巻までが完成している——)の作者、ブルーニを示しているとの指摘がなされている<sup>112)</sup>。また、やはり『文芸』献辞に観察される、「何も執筆しないよりは何かしら執筆する方がよい」という見解が、『フィレンツェ市民史』序文からの引用であり、同じくブルーニの作である『ピエトロ・パオロ・イストリアーノに捧げる対話』(*Dialogi ad Petrum Paulum Histrum, 1401-1408*) (以下、『対話』と略記)にも類似の主題が観察されると、カルディーニが指摘している<sup>113)</sup>。さらに、文人による蓄財をめぐる言及されている、「千人の文人のうち蓄財に成功する唯一の文人」の姿が、ブルーニに対する揶揄であるとみなされている<sup>114)</sup>。これらの新たな指摘は、『文芸』における風刺や戯画の素材／対象を、より具体的に明らかにするための鍵となるであろう。

以上から、『文芸』が、1) 皮肉や風刺の多用、2) 反フィレンツェ人文主義の姿勢、3) 示唆を用いた揶揄という諸特徴を、とくに「否定的な系統」に属すとされる諸作品と共有していることが確認された。これらの手がかりはすべて、作品成立の時期を問わずとも、「アルベルティとフィレンツェ人文主義、とくにブルーニとの関係」という視点を『文芸』の読解に導入することを求めているといえよう。そして、この新たな指針に基づいて、この作品の解釈をめぐる先行諸研究が示す欠点、すなわち、1) 皮肉や風刺の素材／対象にかんする具体的な説明に欠ける点、2) ブルーニが代表するフィレンツェ人文主義のどのような特徴を批判しているのかについて、具体的な検討がなされていない点、3) 作品内における示唆の機能にかんする分析が十分であるとはいえない点を、検討し直すことが求められる。

#### 4. 本稿で用いる方法論

『文芸』の成立が1430年代初頭以降に先送りされるならば、その時期におけるアルベルティは、もはや、自伝的証言から構築されるような苦学生ではなく、フィレンツェの学問界へ思想的な挑戦を仕掛ける文人へと成長しつつあったことになる。また、作品の成立時期を問わずとも、『文芸』には、市民的人文主義に挑戦する論客としてのアルベルティの思想と



手法がすでに確認される。したがって、この作品を読み解くうえで、我々は「アルベルティとフィレンツェ人文主義、とくに、ブルーニの思想との関連」を意識するべきであると思われる。

『文芸』がフィレンツェの学問界に対し向けているであろう批判を理解するためには、この作品をアルベルティの思想全体から抜き出して解釈するのではなく、カルディーニが提案しているように、近接する時期に執筆された諸作品、たとえば『死者』(*Defunctus*, c. 1434) や『家族論』といった作品との関係に注目しながら、その全体を読み直すべきであろう<sup>115)</sup>。実際には、ファッリスがこうした読み方をすでに試みており、キケロの思想へと遡る「人間理性」(ratio)への信頼という共通項を、これらの三作品に読み込んでいる<sup>116)</sup>。しかし、同時代の学問界に対する批判の意識が『文芸』に確認されるならば、これら三作品と古典思想との関係だけに注意を払ってファッリスが行った分析は、不十分であることになる。『死者』において、市民的人文主義の理想である「観想的生と行動的生との融合」を成し遂げたと自負する文人が、その理想像について味わう幻滅が嘲笑されており、また、『家族論』において、人文学がその根拠を据える「書物から学ばれる学識」の不完全性が主張されているからである。経験による学びを排除した知は、社会に還元されようとするまさにその時に、その限界を露呈する。このことを、『死者』および『家族論』の作者としてのアルベルティは、十分に認識しているのである。もし、このようであるならば、『文芸』において論じられている「学識の獲得だけを希求するために社会から排除される禁欲的文人像」は、「学識を通じた社会性と公益性」を自負しながらも、知的エリート主義を決して捨て去らないフィレンツェ人文主義の姿を批判的に検討し直すことを、我々に求めていることになる。

以上の方針を念頭に置いて『文芸』を読み直す際に問題となるのが、そのために用いられるべき方法論である。上述の通り、『文芸』において、この作品が献じられた作者の兄、カルロと、献辞の冒頭で述懐される彼ら兄弟の父、ロレンツォ以外、特定の個人名をアルベルティは挙げていない。くわえて、作品中の諸言説に織り込まれているであろう材源についても、カルロによる『エフェビエ』以外、明示されていない。そこで、『文芸』における同時代人および同時代思想への示唆を明らかにするためには、カルディーニが提唱している「モザイクの解体」(*smontaggio dei mosaici*)に依拠することが妥当であると考えられる。

『辛苦からの避難』第三巻冒頭において、アルベルティは建築におけるモザイクの技法にたとえながら、執筆論を展開している<sup>117)</sup>。カルディーニは、この「モザイク」という手法が材源の「書き写し」(«copie»)ではなく「書き換え」(«riscritture»)として著述家の独自性を保証するために<sup>118)</sup>、「重要であるのは明示的な引用ではなく、むしろ、仄めかされた引用であり、偽装され隠された再利用、暗示的な照応が肝要である」<sup>119)</sup>と述べている。したがって、素材の書き換えとしての言説内容を追っていくことが、『文芸』を読解する際にも適当であると考えられる<sup>120)</sup>。

本稿では、この「モザイクの解体」という方法論に従って『文芸』を読み直すことになるが、その際に、最も重要視されるのが、同時代における学問界が示す動向である。そのため、

必要に応じて、キケロやクインティリアヌスを中心とした古典思想、また、ダンテ・アリギエーリ (Dante Alighieri) やフランチェスコ・ペトラルカ (Francesco Petrarca)、さらに、ジョヴァンニ・ボッカッチョ (Giovanni Boccaccio) の思想へと遡る伝統にも目を向けるが、本稿における検討の中心は、1400年代前半、フィレンツェを中心に花開いた人文主義と呼ばれる動きにかかわる思想と言説である。すでに概観したように、『文芸』には、ニッコリやブルーニといった同時代人への示唆および揶揄が観察され始めている。しかし、こうした視点からこの作品を検討する試みは、いまだ、十分になされているわけではない。現時点において、アルベルティの思想とブルーニの思想との関連について、具体的な比較および検討がなされていないからである。

実際、ヴェローニカ・ヴェストリは、既述のブルーニ作品 (『フィレンツェ市民史』および『対話』) に加えて、『軍務 (騎士) について』 (*De militia*, 1421) と『ナンニ・ストロツィへの弔辞』 (*Oratio in funere Iohannis Strozze*, 1427/1428) を、『文芸』と関連する可能性が高い作品として挙げている。ヴェストリはさらに、アルベルティによる他作品と関連すると考えられるブルーニの著作として、『都市フィレンツェ頌』 (*Laudatio Florentine urbis*, 1404)、『口さがない怠け者に対する糾弾』 (*Oratio in nebulonem maledicum*, 1424)、『偽善者糾弾』 (*Oration in hypocritas*, 1417)、『キケロ伝』 (*Vita Ciceronis*, 1413)、『ダンテおよびペトラルカ伝』 (*Vita di Dante e del Petrarca*, 1436)、『諸学科と読み書きについて』 (*De studiis et litteris*, 1422/1426) (以下、『諸学科』と略記)、『道徳学初歩』 (*Isagogicon moralis disciplinas*, 1424/1426)、『セレウコスとアンティオコス物語』 (*Novella di Seleuco e Antioco*, 1437)、『家政論序文』 (*Prefatio in libros oeconomicorum*, 1420)、くわえて、数通の手紙を挙げている<sup>121)</sup>。『文芸』の成立時期が先送りされる可能性が高いならば、これらのブルーニによる作品にも、研究の視野は広げられなければならないであろう。ヴェストリはしかし、アルベルティとブルーニの関係が「疑いの余地なく幅広く豊かであり、同意と反発の関係において構築された」ものであるとしながらも、「いずれにせよ、この問題は現時点における論争、また、継続的な研究における対象である」と、研究の現状について述べている<sup>122)</sup>。

『文芸』とブルーニの思想とを比較し、両者の関係を多少なりとも明らかにすることができるならば、この作品が人文主義とどのようにかかわっているのかという疑問だけでなく、それがアルベルティの思想全体とどのように結び付けられているのかという疑問についても、見通しを明らかにすることが期待される。もともと『文芸』は、同時代の思想とのかかわりにおいてのみならず、アルベルティの思想全体においても、「ある種独特」<sup>123)</sup>な作品としてみなされてきた。たとえばセシル・グレイソンは、『文芸』において論じられている学問分野の幅広さは、後年におけるアルベルティが示す知的興味の広範さを予期させるものであるとする一方、この作品に明らかな「支えを必要としない自己目的としての学問観」<sup>124)</sup>は、後の諸作品には観察されないと述べている。つまり、グレイソンは、『文芸』に示されている思想と、アルベルティが育んでいくことになる思想との間に、ある種の断絶を読み込んでいるのである。しかし、どのように『文芸』が市民的人文主義を批判しているのかが明

らかにされれば、アルベルティの思想にこのような断絶を読み込む必要はなくなるであろう。

以上のような方向性と方法論に従って、本稿では、『文芸』を作品の章区分に沿って見直していく。まず、本稿次章では、『文芸』献辞に注目し、「先輩文人と若者との対置」および「先輩文人に対しアルベルティが抱く反感」を詳細に検討することで、作者が同時代における学問界の動向を十分に意識してこの作品を執筆したであろうことを確認する。続いて、作品序文に注目し、この作品を執筆することで、アルベルティが人文学および人文主義が内包しているある種の欺瞞を暴露しようとしていたのではないかという仮説を立てる。さらに、この仮説の妥当性を、「文人と快樂」について、「文人と金銭的富」について、また、「文人と社会的名誉」についてが論じられている各章に同時代思想の痕跡を求めることで、検証していく。実際、『文芸』を執筆する際に、アルベルティは同時代における人文主義的教育論および学問論の流行、金銭観の変容、また、高貴さをめぐる議論といった、それら自体として矛盾を孕む諸問題を意識していたと思われる。「文人は快樂、金銭的富、また、名誉を自発的に放棄するべきである」という伝統的な知識人観に、「彼らはそうした現世的諸善の獲得から強制的に排除される」という見解を、アルベルティが対置させているからである。そこでまず、文人と快樂との関係については、人文主義的教育論および学問論に注目し、『文芸』が帯びるとされてきた禁欲性が、人文学自体に内在していた可能性を検討する。続いて、文人と蓄財との関係については、1400年代前半に生じた金銭観の変容を確認し、アルベルティが伝統的な金銭観と同時に、新たな金銭観をも揶揄することで、市民的人文主義の理想である「観想的生と行動的生との両立」を否定している可能性を検討する。さらに、文人と社会的名誉との関係については、高貴さをめぐる伝統的諸議論を確認し、市民的人文主義の根幹をなす「学識によって観想的生と行動的生を融合させる」という理想を、アルベルティが否定している可能性を検討する。最後に『文芸』結論部に触れ、この作品においても、アルベルティが「学識の限界」を論じている可能性を検討する。以上の検討から、『文芸』においてアルベルティが提示している、一見、「禁欲的な学問像および文人像」が、作者個人が育んだ禁欲的理想像ではなく、同時代の人文主義的思想を素材／対象とした戯画である可能性が明らかになるであろう。

## 第1章

### 『文芸』献辞に観察される反感

1430年代から1440年代初頭にかけてアルベルティを取り巻いていた外部的諸状況、また、その時期に執筆されたと考えられる諸作品が示す特徴を考慮すると、彼がフィレンツェの学問界に対し、何かしらの思想的な反感を抱いていたとみなされる。さらに、『文芸』は、1) 皮肉や風刺の多用、2) 反フィレンツェ人文主義の姿勢、3) 示唆を用いた揶揄という諸特徴を、アルベルティによるその他の諸作品と共有している。そのため、「アルベルティとフィレンツェの学問界、とくにブルーニとの関係」に意識を向けることが、『文芸』を解釈するための指針として有効である。そこで、本章ではこの指針に基づき、作品献辞に観察される「先輩文人と若者との対置」に改めて注目し、アルベルティが年長の文人に対し抱いていた反感の一端を明らかにすることを試みる。また、この点が明らかにされれば、アルベルティが『文芸』を執筆する際に、同時代における学問界の動向を意識していた可能性が示されるであろう。

兄カルロに宛てられた『文芸』献辞において、アルベルティは作品執筆をめぐる持論を展開している。彼は、まず、自らがこの作品の執筆を決意した経緯を説明し、続いて、執筆に値する題材の枯渇という問題を論じ、さらに、執筆について若い文人だけに許されている自由を主張している。

アルベルティが前世代に属す人文主義者に対し仕掛けた論争からは、後者が示す「知的エリート主義」に対する反感が透けて見える<sup>1)</sup>。たとえば、『食間対話集』第二巻献辞では、「文芸学の王」と「つたなく幼い私(の語り口)」との間に設定された二項対立を梃として、過剰な古典主義およびレトリック偏重に対する批判がなされ、文体の自由な選択が認められるべきであると主張されている。また、『家族論』第三巻序、『トスカーナ語文法』および『抗議』において、「立派な知識人」と「我々俗衆」との間に二項対立が設定され、「俗語の価値」が称揚されている。このように、アルベルティは年長の文人と自らとの間に、いわば、「見せかけの敬意と見せかけの卑下に彩られた二項対立」を構築し、前者を批判している。

『文芸』献辞についても、「歴史書を執筆すべき立派な文人」と「何か新たなことを書くことが許されるべき若者」との間に設定された二項対立の存在が指摘されている。この点については本稿序論において簡単に触れたが、再度、当該箇所を確認してみよう。

たしかに、次のように私は考える。つまり、「知性の訓練を行う私たち若者」にはとりわけ、多くの事柄が許されている。それらは「成熟して完全な博識を持つ人物」には許されない事柄ではあるが。彼らは歴史書を書けばよい、そして、諸侯の生き様、政治や戦争の結果を扱えばよい。他方、私たち若者は、何かしら新奇なものを提示するだけで

あっても、次のような人物がなす非常に激しく、いってみれば、あまりにも厳しすぎる判断を恐れる必要はない。つまり、彼ら自身、まるで幼児のように喋れもしないのに、学者は心ではなく洗練された耳さえ持っていれば十分であるかのように、物事の判断においてあまりにも繊細な耳をそばだてるだけの人物のことであるが。<sup>2)</sup>

フィレンツェの学問界に対しアルベルティが仕掛けた知的挑戦の端緒として『文芸』がみなされるのであるならば、この二項対立によって、年長の文人に対する反感が示されているだけではなく、学問的あるいは思想的な問題が論じられている可能性が高いと考えられる。そこで、この二項対立を構築することで、アルベルティが具体的にどのような問題を提起しているのかを検討してみたい。

『文芸』献辞の読解については、先行諸研究がいくつかの示唆および指摘を与えてくれている。まず、ボスケットが、『文芸』献辞に観察される「先輩との対決姿勢」と、『食間対話集』第二巻献辞および同書第七巻献辞において主張されている「執筆をめぐる自由」とを関連させながら論じている<sup>3)</sup>。また、カルディーニは、『文芸』献辞とブルーニ『フィレンツェ市民史』、さらに、ブルーニ『対話』との関連を主張している<sup>4)</sup>。くわえてオッペルは、『文芸』献辞におけるアルベルティの論調が、「近代主義者」(moderni)あるいは「伝統主義者」(tradizionalisti)と呼ばれる文人、つまり、スコラ的思想の色彩を強く帯びた諸学問を学び、フィレンツェにおける伝統的な俗語文化を支持していた文人の一人<sup>5)</sup>、ドメーニコ・ダ・プラート(Domenico da Prato, c. 1389 – c. 1433)による人文主義批判が帯びているそれと類似していることを指摘している<sup>6)</sup>。そこで、本章ではこれらの示唆および指摘を手掛かりにして、『文芸』献辞においてアルベルティが示している不満の根底に存在する論点を明らかにすることを試みる。以下では、まず、執筆に値する題材という問題について、アルベルティとブルーニとの間に見解の違いが存在することを示す。続いて、歴史書の執筆と小冊子の執筆とを比較し、『文芸』献辞における二項対立の構造を明らかにする。さらに、ドメーニコによる批判に目を向けて、ブルーニの示す歴史意識が、ある種の傲慢さを帯びていることを確認する。以上の検討から、古典の価値をめぐる、アルベルティが年長の人文主義者に対し不満を抱いている可能性が明らかになるであろう。

### 1. 執筆に値する題材の欠如あるいは枯渇

人文主義が示す特徴のひとつとして、歴史意識の誕生、つまり、古典文化を称賛するだけでなく、中世と呼ばれる時期において失われたその文化を自らが回復したことについて、強い自負を示す点が指摘されている<sup>7)</sup>。この意識が依拠している「自らの時代と古代との比較」は古典的なトposであるが<sup>8)</sup>、アルベルティもこの伝統を踏まえた言説を残している。たとえば、彼は『食間対話集』第七巻献辞において、同時代人が古典的修辞を蘇らせたとして示す自負を批判している。自らの時代と古代との関係をいかに捉えるべきであるのかという問題をめぐるこの反感と同種のものが、『文芸』献辞における「執筆に値する題材」をめぐる

る主張にも観察される<sup>9)</sup>。そこで以下では、アルベルティとブルーニが、どのように古典の価値を捉えていたのかを検討する。

アルベルティが『文芸』献辞において扱っている諸論題のうち、「執筆にふさわしい題材の枯渇」をめぐる提示されている見解に、古典作家と自らの時代における文人との関係をめぐる問題意識が観察される。アルベルティは、知的研鑽の実りとして、何か作品を執筆するように周囲の者たちから促されたが、書くべき題材が見つからないという問題に直面し、「古典作家は真面目な題材も楽しい題材もすべて扱ってしまったので、我々が彼らの作品を読んで感嘆する余地と義務だけを残したのである」<sup>10)</sup>と嘆いている。執筆における独自性の確保をめぐるこの嘆きは、アルベルティによる創作論に通底している、「すでに述べられていない事柄は、何も述べられない」(*Nihil dictum quin prius dictum*) というテレンティウス由来のモットーから生じていると考えられる<sup>11)</sup>。この認識に立脚したアルベルティは『辛苦からの避難』において、作家としての独自性の問題を論じることになる。

文人においても同様である。アジアの才人、とくにギリシャ人たちはみな、長い間、すべての技芸と学問の発見者であった。パラス、また、ストア派哲学者たちの女神である「思慮」に捧げられたまるで神殿のようなものを、彼らは書物によって作り出し、その壁面を正誤をめぐる探求で広げた。自然の作用と力を見極め注釈することで、そこに列柱を建て、逆境から多くの労力を防御する屋根をそこに取り付けた。これこそが、悪を避け善を追求し、悪徳を憎み美德を求め愛することにおける熟達である。だが、何が生じているのであろうか。上述の状況の正反対のことである。細かい破片を集めたあの人物〔＝モザイクの発明者〕は、それで床を作成した。我々はといえば、私があ的人物やその人物のように小さな私的な住まいを飾ろうとしたとき、みなに知られこのうえなく高貴なあの建物から私の意図に沿うものを取ってきて、それをより細かくし、ここと思われる場所にはめ込んだのである。ここから、彼らが言うような言葉が生まれる。つまり、「すでに述べられていない事柄は、何も述べられない」という言葉が。文学的表現は多くの者たちによって取り上げられ、彼らが執筆した多くの作品において用いられ広められてきたので、現在、何かを論じようとする人物には、それらを集めて仕分け、他者とは何か異なるが、自らの作品に調和した仕方で、それらを組み合わせることしか残されていない。この点において、作家の意図とは、ちょうど、よそでモザイクの床を発明した人物を真似ることのようなものである。それらの部分が色彩によって、何かしら意図されていた図式にうまく当てはまる仕方で繋げられ、それらの間に重大な齟齬やみつともない隙間が観察されなければ私は満足し、これ以上は望めないと判断するのである。<sup>12)</sup>

『文芸』においても、アルベルティは古典作家が示した力量に驚嘆するだけでなく、執筆において自らを含めた同時代の作家に課されている限界を自覚している。『文芸』献辞を執筆

した時点で、アルベルティは「すでに述べられていない事柄は、何も述べられない」という認識を獲得していたと考えられるのである。

執筆に値する題材が見出せないという嘆きは、『コルッチョ・サルターティ称賛演説』(Laudatio Colucci Salutati) の執筆をめぐり、ブルーニとニッコリとの間でやり取りされた複数の手紙にも観察される。1406年に没したサルターティに捧げる演説の執筆を、ニッコリを通じて某フィリッポから打診されたブルーニは、「執筆すべき題材自体が豊かではないと思われるし、私自身がそれをよく知らないので」<sup>13)</sup>と述べ、その仕事を引き受けることに難色を示している。結局、ブルーニはこの依頼を受諾しているが、ニッコリに宛てた1408年3月30日付けの手紙では、その執筆が遅々として進まないと嘆いている。そして、その理由として、「いまや、私が理解しているように、また、君が何度も嘆くのが常であるように、現代において我々は小人にすぎない。我々には、たとえ、魂の偉大さが欠けていなくても、名誉と栄光を増すための題材が欠けているのである」<sup>14)</sup>と、自らの時代には特筆すべき立派な出来事、すなわち、執筆に値する題材が見つからないと述べている。

執筆すべき題材が見当たらないというアルベルティとブルーニの嘆きはどちらも、「文化的に、また、知的に不毛である自らの時代を凌駕する卓越した古代」という同一の認識に立脚しているように思われる。しかし、「自らの時代が示す不毛」について両者が示す見解の間には、違いが観察される。なぜなら、アルベルティが作家の力量という観点からこの問題を論じ、自らの時代における題材の「枯渇」を嘆いている一方、ブルーニは作家の力量という問題に触れることなく、ただ、自らの時代における題材の「欠如」を嘆いているからである。両者の認識の違いを明らかにするために、まず、ブルーニによる主張を確認してみよう。

1408年3月30日付けのニッコリ宛ての手紙において、ブルーニは偉人と偉業の多寡に注目し、古代と自らの時代とを比較している。数多くの偉人が無数の偉業をなした古代において、執筆すべき題材は豊富に見つけられた<sup>15)</sup>。他方、同時代には偉人および偉業が見出されないために、ブルーニは『コルッチョ・サルターティ称賛演説』を執筆することができないのである<sup>16)</sup>。このように、ブルーニは執筆に値する題材が見つけれない原因を、偉人および偉業が見出されないという時代状況に帰している<sup>17)</sup>。

同様の姿勢は、1400年代初頭に執筆されたとみなされている『対話』にも観察される。1401年に舞台が設定されているこの対話編において、登場人物の一人、サルターティは、やはり登場人物であるニッコリら若者が示す「読書には打ち込むものの、討論を軽視する姿勢」を問題視し、前者だけに没頭するのではなく後者の訓練をも行うことを彼らに推奨している。このサルターティによる勧告に対し、ニッコリは次のように反論している。

しかし、コルッチョよ、あなたが必要であるとみなすほどに〔討論の〕訓練を我々が行っていないとしても、それは我々の責任というよりも時代の責任なのです。〔……〕こうした嵐のうちに我々が生まれ、諸学科すべての混乱のうちに書物の大変な消失が生じ、どんな些細な事柄についてであろうとも、多大な厚かましさを伴わずに語ること

は誰にとっても不可能なのです。したがって、厚かましいと思われるよりも黙っているとみなされるほうを我々が望んだとしても、あなたは同意して下さることでしょう。<sup>18)</sup>

若き人文主義者が討論の訓練を忌避する理由が、「我々の責任」ではなく「時代の責任」であると説明されている。さらにニッコリは、たとえ非常に卓越し意欲的な才人であっても、文化的不毛という時代状況に阻まれて、学問を究めることは不可能であるとも主張している。

人々に知的資質や学習意欲が欠けているわけではありません。私が考えますに、そうではなく、学問の混乱と書物の欠乏によって学びの道すべてが閉ざされたのです。そのため、才知と学習意欲に最大限に溢れた人物がいようと、状況の困難さに阻まれて、望む場所まで到達することができないのです。<sup>19)</sup>

このように、『対話』における登場人物ニッコリは、旧弊なスコラ的思想にまだ支配されている諸学科の現状を嘆き<sup>20)</sup>、その知的不毛に浸食された状況下において文人は満足できないと主張している。ここでニッコリが「知的資質や学びへの欲求が欠けていない人物」、また、「才知と意欲に最大限に溢れた人物」と呼んでいるのは、15世紀初頭における文化的状況が満足させることのできない文人、つまり、自らを含めた人文主義者のことであるとみなされるであろう。

結局、『対話』における登場人物ニッコリの言葉、また、1408年3月30日付けでニッコリに宛てられた手紙におけるブルーニの言葉の双方ともに、「現代における文化的不毛の原因は、我々にはなく時代状況に求められる」という共通した見解を示している。前者では「学問が混乱し書物が欠乏している現代」が、また、後者では「偉人と偉業が見出されない現代」が、知的活動を展開できない理由として提示され、批判されているからである。

こうした見解を理解するためには、ブルーニがあらゆる面における古代の卓越を賛美している点だけではなく<sup>21)</sup>、自らが身を投じている人文学に対する深い信頼を示している点にも、注目しなければならない。たとえば、『対話』には、ピエトロ・パオロ・ヴェルジェーリオ (Pietro Paolo Vergerio, 1370-1444) に宛てられた献辞に観察されるフィレンツェ称賛の文言に、「今日に至りすっかり絶えてしまったかに思われた最高の学芸および人間性の種子がこの地に残存し、日々成長しており、私が思うに、近い将来、それらは少なからずの光を発することになるであろう<sup>22)</sup>」という一節が見出される。この献辞が帯びる賛辞としての性格は十分に考慮しなければならないが、ここで讃えられている学問は、まさに人文学であると考えられている。なぜなら、この学問観が、ヴェルジェーリオによる作品および手紙、また、サルターティによる手紙において描写されている人文学の姿と類似しているからである<sup>23)</sup>。さらに、1408年3月30日付けでニッコリに宛てられた手紙の末尾、「我々には、何が残されているというのか、〔古代と〕同等で比肩するようなものが。何が卓越し、称賛



に値しようか、『諸学科』（«studia»）と『読み書き』（«litteras»）のほかに」<sup>24</sup>という言葉にも、同様の姿勢が確認される。ブルーニは人文学、そして、この学問に身を捧げている文人だけを、時代が示す文化的な不毛から除外しているからである。実際、彼が1420年代に執筆することになる学問論は、『諸学科と読み書きについて』（*De studiis et litteris*）と題されることになる。

人文学に対しブルーニが示している信頼は、彼が自らの著述家としての力量について示している自負と密接に関連していると思われる。1408年3月30日付けのニッコリ宛ての手紙において、ブルーニは同時代における偉人と偉業の乏しさを嘆くだけで、古典作家と自らの、作家としての力量を比較せずに、「こうした古代の偉人たちについて称賛するならば、神かけて、弁論よりも先に紙片とインクが尽きるであろう」<sup>25</sup>と述べている。ブルーニは、キケロにとっての大カトーのような、執筆に値する題材を提供してくれる偉人さえいれば、『コルツォ・サルターティ称賛演説』を容易に執筆できると言わんばかりなのである。このブルーニの態度には、まさに「自らをキケロと同一視する傾向」<sup>26</sup>が確認されることになる。

『文芸』献辞におけるアルベルティは、ブルーニと比べると、より謙虚に、題材の「枯渇」という問題を分析している。友人らに促され、自らの研鑽の証しとして、何か作品を執筆することを決意したアルベルティは、この問題を次のように論じている。

私は探し回っていたのであるが、まったく思いつかなかったのである、神々しい古典作家たちによって立派に扱われていないような事柄など。彼らが立派に執筆を行ったので、たとえ、現代においてこのうえなく学識に溢れている人物であっても、古典作家以上に立派な仕方でも物事を語る余地も残されていないならば、彼らに匹敵する仕方でも適当かつ立派に同様の題材を私が扱う余地も残されていないのである。[……]そして、古典作家たちがおそらく放置したために残されていたいくらかの題材を、称賛と名声を求めて現代の先輩たちが篡奪したのである。<sup>27</sup>

ブルーニが偉人と偉業の多寡に注目して古代と自らの時代とを比較し、後者の退廃を嘆いている一方、アルベルティは古典作家と自らの時代の文人との力量差に注目し、前者の優越を称えている。また、『対話』におけるニッコリが、「才知と学びの欲求に最大限に溢れた人物」であっても時代状況に阻まれて学問を究めることができないと嘆いている一方、アルベルティは、若き文人である「私」はもとより、「現代においてこのうえなく学識に溢れている人物」であっても「神々しい古典作家」に比肩することはできないと主張している。アルベルティは、現代において執筆に値する題材が見出されないという問題が、時代状況ではなく、作家の力量差から生じたものとみなしているのである。結局、執筆に値する題材は、まず、同時代の文人すべてを凌駕する力量を持つ古典作家によって語り尽くされ、続いて、古典作家が扱わなかった題材を「称賛と名声を求めた同時代の先輩文人たち」が扱ったために、枯

渴したのである。

作家の力量差をめくり構築されるこのヒエラルキーには、「すでに述べられていない事柄は、何事も述べられない」というモットーが帯びるものと同種の、言い訳としての機能が付与されていると考えられる<sup>28)</sup>。なぜなら、まさにこのヒエラルキーによって、「生き方についての教師」としてブルーニが絶賛している「歴史(書)」(«historia») <sup>29)</sup>のような偉大な題材/作品ではなくても、「何かしら新奇な題材」(«aliquid novi») について「小作品」(«libellus» / «opusculum») を執筆することが、知性を訓練する若者には許されることになるからである<sup>30)</sup>。執筆に値する立派な題材の枯渇は、まず、古典作家が示した神々しいまでの卓越により生じた。そして、古典作家が扱わなかった題材は、称賛と名誉を求める年長の文人により汲み尽くされた。したがって、たとえ、彼らが認めて評価するような題材を見つけれなくても、それは若者の責任ではない。若者は批判を恐れずに、何かしら新奇な事柄について自由に執筆すればよいのである。

本稿序論において触れたように、アルベルティは『食間対話集』第二巻および同書第七巻献辞において、自らとブルーニとの間に二項対立を構築し、「文体の選択の自由」を主張している。『文芸』献辞における二項対立も、ボスケットが示唆しているように、同様の機能を果たしているとみなされるであろう。つまり、アルベルティは「歴史書を執筆する立派な文人」と「知性の訓練をする若者たち」とを対置させることにより、「題材の選択の自由」を主張していると思われるのである。同時に、この主張の根底に観察される歴史認識において、アルベルティが古典作家を「神々しい存在」とみなしている一方、ブルーニが「キケロと自らを同一視する傾向」を示しているという違いも明らかである。以上から、『文芸』献辞における年長の文人と若者との対置も、『抗議』などの諸作品に観察される対立構造と同じく、感情的であると同時に学問的論争としての性格を帯びていると考えられる。

## 2. 歴史書の執筆と小作品の執筆

『文芸』献辞における「歴史書を執筆する先輩文人」、つまり、ブルーニのような人文主義者と、「知性の訓練を行う若者」との対置には、執筆をめぐる「題材の選択における自由」を主張する機能が与えられていると考えられる。『文芸』献辞とブルーニ『フィレンツェ市民史』序文との間に何かしらの関連が存在するというカルディーニによる指摘は、アルベルティが主張している「執筆の自由」を、より深く理解するきっかけを与えてくれる。アルベルティは、題材を探すことに苦勞しながらもこの作品を執筆することを決意した理由について、次のように述べている。

文芸に埋もれて黙ったまま年老いるよりも、すべてにおいて完璧で完全ではなくても、何か執筆するほうがよいと、称賛を求める人物たちが正しくもみなしているからである。

Nam prestantius esse recte opinantur ii qui laudem cupiant quippiam etsi non omni ex parte

perfectum atque absolutum conari, quam in litteris silentio consenescere.<sup>31)</sup>

この文言によって、アルベルティは執筆に値する題材が見つけれない自らが、歴史のような立派な題材を扱った偉大な文学作品ではなく、何かしら新奇な題材を扱った不完全な小作品にすぎない『文芸』を執筆したことを正当化している。カルディーニは、アルベルティによるこの自己弁護における「称賛を求める人物たちが正しくもみなしている」という表現に着目している。カルディーニによれば、この主張はアルベルティ独自のものではなく、他者の見解、すなわち、ブルーニ『フィレンツェ市民史』序文 (c. 1416) における以下の文言からの引用である<sup>32)</sup>。

結局、こうしたこと〔=歴史書執筆の利点と困難〕を深く長々と考えたうえで、とくに次のような思いに私は行きついたので。執筆をめぐるどんな企図であろうとも、不活発に沈黙するよりは好まれるべきであろうと私は考えます。

Tandem vero his inter se multum diuque pensatis, in hac potissimum sententia constitui; ut censerem quamcumque scribendi rationem torpenti silentio esse praeferendam.<sup>33)</sup>

カルディーニは両言説間の対応を踏まえ、執筆という行為についてアルベルティがブルーニと見解を共有していたとみなしている。しかし、アルベルティがブルーニに対し反感を抱いていた可能性を考慮すると、はたして、両者の言説内容は完全に一致しているのかどうか、見直す必要があると思われる。

まず、アルベルティの言葉に観察される「称賛を求める人物たち」がブルーニを指しているという指摘は、妥当であると考えられる。ブルーニにとって『フィレンツェ市民史』に着手することが長年の望みであったことは、1404年に執筆されたとみなされている『都市フィレンツェ頌』における文言から了解される<sup>34)</sup>。歴史書執筆という企てに着手し、それを段階的に達成していたブルーニは、その労苦に対する報いとして、多大な称賛と名声を獲得している。このことは、この作品を執筆したことへの見返りとして、彼に与えられた実利的な報酬からも明らかである。1415年、ブルーニはフィレンツェ市民権と免税特権を申請し、翌年にはそれらを獲得しているが、これは『フィレンツェ市民史』の執筆に着手したことに対する見返りであったと考えられている<sup>35)</sup>。さらに1439年、ブルーニに与えられていた税務上の特権は拡大されているが、この際にも、同作品の執筆をめぐり、彼とフィレンツェの支配層との間に非公式に契約が交わされていたとみなされている<sup>36)</sup>。結局、この歴史書を執筆することで、ブルーニは歴史作家としての名声と称賛を勝ち取ったのである。

さて、『文芸』献辞におけるアルベルティの言葉が『フィレンツェ市民史』序文からの「引用」であり、「黙しているよりは何かしらを執筆する方がよい」という見解を彼がブルーニと共有していたとみなすことは、いささか性急であるように思われる。たしかに両者の言説はどちらも、作品執筆をめぐる自己弁護としての機能を帯びている。しかし、『フィレンツ

『市民史』序文においてブルーニが念頭においている執筆の対象が「歴史書」という困難な企てに限定されているのに対して<sup>37)</sup>、アルベルティが「すべてにおいて完全で完璧ではなくても、何かしら」を執筆することについて論じている点を見逃してはならない。

まず、ブルーニの言葉であるが、この言説は「社会にも個々人にも役立つ歴史書を執筆することに捧げられた労苦の尊さ」を前提としている<sup>38)</sup>。したがって、「歴史書の執筆」という企ては公益に資する立派な行為であるが、同時に非常な困難を伴うために——たとえ、その結果が期待通りではなくても——それに着手するだけで尊いと、ブルーニは述べているとみなされる。

そして、歴史書の執筆が偉大であることを示すために、ブルーニが比較対象として挙げているのが、作品の形態として遥かに劣り、執筆にほとんど困難を伴わない「手紙」と「小作品」(«libellus»)である。

なぜなら、小作品や手紙など、少し根を詰めれば執筆できるのですから。他方、歴史書の執筆においては、次の事々がすべて同時になされなければなりません。つまり、数多くの長く連なった論述を行わなければならない、生じた出来事すべての原因を個別に解説しなければならない、また、個々の事項について、みながわかる判断を下さなければならないのです。ペンにのしかかる尽きることのない重みをもたらすかのような歴史書の執筆を約束することは危険であり、歴史書を提示することは困難なのです。<sup>39)</sup>

ブルーニが示している「執筆についてのどんな企図であろうとも、試みないよりはましである」という見解は、非常に困難かつ公益に資する挑戦である歴史書の執筆にのみ、当てはまるのである。

さて、アルベルティの言葉に視線を戻そう。アルベルティが擁護しているのは、「すべてにおいて完璧で完全ではなくても、何かしら」を執筆することである。もし、ブルーニによる言葉をアルベルティが引用し、自らの作品執筆を擁護しているのであれば、ブルーニによる言説内容が歪曲されていることになる。ブルーニが、公益に寄与するために称賛に値する題材／形態である「歴史書」の執筆が尊いと主張している一方、アルベルティは、若者が訓練として新奇な事柄について不完全な「小作品」を執筆するだけであろうとも、その企ては評価されるべきであると述べているからである。両者の言説間に観察される隔たりがもつであろう意味を考慮するために、『食間対話集』第二巻、ブルーニに宛てられた献辞が参考になる。

『文芸』献辞の当該箇所を観察される「黙ったまま年老いること」(«silentio consenescere»)という文言が、『食間対話集』第二巻献辞にも確認されることをラウラ・ゴッジ・カロッティが指摘している<sup>40)</sup>。アルベルティはこの第二巻献辞において、「才知と学識の豊かさに雄弁の最高の力と豊かさを加えた」<sup>41)</sup>ブルーニに対し、自らを「他方、私は次のような人物である。つまり、無数の修辞を磨いて黙ったまま年老いるよりも、幼稚でつたない私の語りか

たによって道で田舎者を踊らせて喜ばせるほうが、より称賛に値するであろうとみなす人物である」<sup>42)</sup>と定義し、対置させている。ここでアルベルティがブルーニと自らとの間に「見せかけの敬意と卑下に彩られた二項対立」を構築し、自らの「完璧ではない語り口」を擁護していることが明らかである。

『食問対話集』第二巻献辞において、「黙ったまま年老いること」という文言が挑発的な文脈で用いられていることを踏まえ、『文芸』献辞における文言に視線を戻してみよう。もし、アルベルティによる自己弁護が、『フィレンツェ市民史』序文におけるブルーニの文言を意識したものであるならば、もともと「歴史書の執筆」について述べられた言説が、「何かしら新奇な事柄についての不完全な小冊子を執筆すること」の弁護に用いられているという捻じれば、この言葉がアルベルティによる一連の主張に連なることを示すと思われる。伝統的に価値を認められ、公益に寄与し、非常に困難な企てである歴史書を執筆したと自負している古参の文人に対し、新たな題材に取り組むこと、つまり、自由な執筆も、正当に評価されるべきであると述べることで、アルベルティはある種の挑発を行っているのではないだろうか。

以上から、『文芸』献辞におけるアルベルティが、題材および作品形態の選択をめぐる自由を主張しているとみなされるであろう。まず、執筆に値する題材は、卓越した古典作家、さらに、前世代に属す文人によって汲み尽くされたため、若者には新奇な題材について自由に執筆することが許されなければならない。さらに、伝統的に価値が認められた題材を扱わずとも、執筆を行うこと自体に価値が認められるべきである。これらの主張は、『文芸』という小作品を執筆する自己の立場を擁護する機能を果たすと同時に、一世代上の文人に対する何かしらの批判を含んでいるように思われる。この点を明らかにするために注目すべき点が、ブルーニが示す「文化的に不毛である現代において自らだけを特別視する姿勢」、また、「自らが行う執筆に対する自負」である。人文主義者が示すこうした特徴は、近代主義者の一人、ドメーニコ・ダ・プラートにより糾弾されている。

### 3. 人文主義者が示す傲慢さ

「歴史書を執筆すべき先輩文人」と「何かしら新奇な事柄を執筆することが許されるべき若者」との対置において、アルベルティは「執筆における題材および作品形態の自由」を主張していると考えられる。この主張は、後に『食問対話集』献辞において、ブルーニに対し直接的に表明されることになる「文体の自由」の主張と同質の構造をもっている。どちらの主張においても、その自由を否定する文人に対する不満は、「見せかけの敬意と見せかけの卑下に彩られた二項対立」を用いて示されているからである。

『文芸』献辞においてアルベルティは、時代が示す文化的な不毛から自らだけを除外しながら、古代人が残した題材を名誉のために篡奪し、称賛を求めて歴史書を執筆し、その作品について自信を示す文人に対し、反感を露わにしていると思われる。『文芸』献辞に観察されるこうした不満を理解するために、同時代人が人文主義をどのように捉えていたのかを知

ることが有益である。

人文主義者が示した名誉欲が同時代人によってどのように評価されていたのかを考える際に参考となるのが、近代主義者による反応である。彼らはスコラ的思想、また、フィレンツェにおける俗語文化の伝統を重視した知識人であり、その学問観はジョヴァンニ・ゲラルディ (Giovanni Gherardi, c.1367-1442/1446) による成立年代がまだ確定されていない作品、『アルベルティ一族の楽園』 (*Paradiso degli Alberti*) から窺い知ることができる。この作品の登場人物であり、知識人が集う邸宅の持ち主が、カルロおよびバットィスタと親密な関係を保持し続けた親族の一人であるフランチェスコ・ダルトビアンコの伯父、アントーニオ・アルベルティ (Antonio Alberti) である。バットィスタは『家族論』第三卷献辞の冒頭部において、この人物およびヴィツラに言及している<sup>43)</sup>。また、同書第四巻において、俗語詩人として名高かったアントーニオの詩作について、「それらの詩作は甘美な成熟に満ち、非常な優美さと優雅さをまとっており、その他のフィレンツェ俗語詩人と同じく読まれて大いに称賛されるに値する」<sup>44)</sup>と、高い評価を与えてもいる。フランチェスコ・ダルトビアンコを経由してのアントーニオとの繋がり、さらに、1430年代における俗語擁護の姿勢を考慮すれば、バットィスタと近代主義者の立場とが隔絶したものではないことが知られるのである<sup>45)</sup>。

実際、オッペルは伝統主義者の一人、ドマーニコ・ダ・プラートが残した人文主義者に対する糾弾と『文芸』献辞との間における論調の類似を指摘している<sup>46)</sup>。そこで、もともと1409年頃に人文主義者に対する糾弾として執筆され、1420年代末に『詩歌集』 (*Rime*) 第二十一歌の序として再利用されたものであると推定されているこの文章において<sup>47)</sup>、人文主義者がどのように批判されているのかを確認してみよう。

ドマーニコによる糾弾は、ブルーニ『対話』第一巻における登場人物ニッコリによる主張を踏まえ、人文主義者が示す傲慢な態度を批判している。『対話』において、自らの時代が示す文化的不毛を嘆くニッコリは、スコラ的思想に彩られた諸学問の価値を否定するのみならず、そうした文化的不毛を自覚せずに、厚かましくも創作を行ったダンテとペトラルカ、また、ボッカッチョを攻撃している<sup>48)</sup>。フィレンツェにおける俗語文化の伝統を完全に否定して、古典作家だけを称揚する人文主義者について、ドマーニコは次のように述べている。

「詩において、誰がホメロスやウェルギリウスになれるであろうか。哲学において、誰がソロンやアリストテレスになれるであろうか。修辞学や弁論において、誰がデモステネスやキケロになれるであろうか。文法学において、誰がアリストアルコスやプリスキアヌスになれるであろうか。弁証法において、誰がバルメニデスになれるであろうか」と彼らは述べ、自由学芸すべてについて、その他すべての技芸とともに、次のように結論付けている。つまり、古代人によって語られたり行われたりした以上によりよい仕方では、何事も行われることも語られることもできはしないと。すでに触れた、こうした批判者による空虚で結論的な申し立ては、彼らが自分たちのことを過去すべてについ

ての審判者、また、現在と未来についての判断者であるとみなしているということに、ほかならない。ああ、彼ら自身が与えることができない善の破壊者、篡奪者よ！彼らは理解しないのであろうか、彼らが自分たちの口で自分たち自身のことを批判していることを。彼らが言うように、すべての事柄がすでに語り尽くされているならば、何を求めて彼ら自身が語っていることになるのであろうか。／おそらく彼らは自らのことをその他すべての人々よりも賢いとみなし、また、批判と称賛を行う権利が他者でなく、彼ら自身だけのものであるとみなしているのである。<sup>49)</sup>

この文言には、スコラ的思想およびフィレンツェの俗語文化を否定し古典だけを称揚する人文主義者に対する反意が明らかである。ドマーニコはさらに、マントヴァの起源をめぐるダンテの認識を批判する人文主義者は、自らがダンテよりも優れているとみなしていること批判を加えている<sup>50)</sup>。こうした批判は、1408年3月30日付けのニッコリ宛ての手紙においてブルーニが示すような、「時代の不毛を嘆きながら、自らをそこから除外し特別視する態度」にも向けられているとみなされるであろう。

ドマーニコは、人文主義者が他者を批判する際に示す傲慢さのみならず、彼らが自らの知的活動について示す自負についても批判を加えている。たとえばブルーニは、すでに確認した『フィレンツェ市民史』序文においてだけでなく、アリストテレス『ニコマコス倫理学』翻訳序文 (*Praemissio quaedam ad evidentiam novae translationis Ethicorum Aristotelis*, 1416-1417) においても、自らの功績を自賛している。この序文において、ロベルト・グロステスタ (Robertus Grosseteste) が訳しムルベクのグリエルモ (Guilelmus de Moerbeke) が手を加えたとされている同書翻訳は、言語的側面からのみならず内容理解の点からも批判され、その価値を完全に否定されている。

したがって、ほとんど無数のこうした誤訳に刺激された私は、このような事態がアリストテレスにとって、また、我々と我々の言語にとっても不適當であるとみなし——というのも、ギリシャ語による議論として最高のものであるこの作品が帯びる甘美さが粗暴なものに変えられ、語が捻じ曲げられ、内容が不明瞭にされ、学識が揺るがされているのを目にしたからですが——新たな翻訳を行うことにしたのです。この翻訳において、何よりもまず、次のことを私がなしたと考えます。すなわち、私が、いま初めてこの作品をラテン語に訳したと。なぜなら、この作品のラテン語訳は、いまだかつて存在しなかったのですから。<sup>51)</sup>

この言葉に、ブルーニが抱いていた翻訳家としての強い自負が確認できる<sup>52)</sup>。だが、このような自負が近代主義者の反感を買ったであろうことは、容易に想像できる。実際、ドマーニコは、プラトンとプルタルコスの作品をラテン語に翻訳した人物、つまり、ブルーニを<sup>53)</sup>、次のように批判している。

翻訳について誇った古代人がいたとは私は思わない。また、今日読まれているものと同種・同量の、敬意を払うべき多くの作品をかつて翻訳した者たちによって、その作品の著者以外の名前が〔その訳書に〕冠されたなどとも思わない。古代の翻訳家たちは自らの名前を伏せたのである。というのも、彼らは虚栄心によるひけらかしのためにこうした翻訳を行ったのではなく、ギリシャ人やヘブライ人による規範と教えがラテン人に知られるように、慈愛をもって翻訳を行ったからである。<sup>54)</sup>

本来、公益に資するために無私でなされるべき翻訳という行為についてブルーニが示している個人的な自負を、ドマーニコは「虚栄心によるひけらかし」にすぎないとみなしている。ドマーニコによれば、「名声は作品の執筆者のものであり、翻訳者のものではない」<sup>55)</sup>のである。

さて、『文芸』献辞に視線を戻すと、アルベルティは執筆すべき題材の枯渇を、神々しい古典作家と同時に、前世代に属す文人の責任に帰している。また、歴史書を執筆したことを自負する文人に対し、「すべてにおいて完璧で完全ではなくても何かしらを執筆する」自由を主張している。アルベルティが一世代上の文人に対して示しているこの反感は、ドマーニコの言葉に観察される反感と類似したものとして捉えられるのではないだろうか。アルベルティが不満を抱いている、「称賛と名声のために」古代人が残した題材を刈り取った古参の文人、また、歴史書の執筆だけに価値を認め「称賛を求める人物たち」は、ドマーニコが糾弾した人文主義者の姿を想起させるからである。前世代に属す文人、とくに、現代における不毛から自らだけを除外し、知的業績について強い自負を示すブルーニのような人文主義者は、傲慢で身の程知らずな人物として、アルベルティの目に映っていたのではないだろうか。この点について、『食間対話集』第七卷献辞において展開されている、キケロ主義者に対する批判を確認してみよう。

#### 4. 超えられない壁としての古典

ドマーニコが指摘しているように、人文主義者は執筆および作品評価における基準として、古典作品だけに価値を見出していた。たとえばブルーニは、ニココロ・ストロツィ(Niccolò Strozzi, 1413-1477)に人文学の概要を教授しながら、キケロの著作あるいはそれらにかぎりなく近い卓越を示す書物だけを読むように忠告を与えている<sup>56)</sup>。他方、アルベルティは、『食間対話集』第七卷献辞において、執筆および作品評価における規範としてキケロだけを評価する風潮を批判し、代わりに弁論の多様性を主張している。

同献辞においてアルベルティは、まず、キケロが示した雄弁に到達しようとする人文主義者が示す無謀さを、罨で月を狩ろうとしたファウヌスとサトゥルヌスにたとえて揶揄している。アルベルティによれば、文人たちの多くはキケロを崇拜しつつ、自らがそこに到達した、あるいはそこに到達することが可能であると、不遜にも思い込んでいるのである。アル



ベルティはさらに、次のように続けている。

他者の著作を評価するとき、我々の大多数はみな一様に口うるさくなり、〔他者の著作が〕キケロの雄弁に比肩することを求めるのである、まるで、かつて称賛された作家すべてが、自らがキケロであったとみなしているかのよう。愚か者たちよ！雄弁の栄光と栄冠に役立つすべての事柄を与えようと、自然はただ一人、キケロだけを生み出したのである。しかし、多くの嫉妬屋がおり、学識ある人物と書物が非常に欠乏しているこの現代に、もしキケロがやってきたならば、彼は語りかたさえ忘れてしまうことであろう。<sup>57)</sup>

この文言は、作品執筆における規範、また、作品評価における判断基準として、キケロの文体だけに価値を見出す人文主義者に向けられた批判であるとされている<sup>58)</sup>。また、カルデューニはこの箇所における批判者の描写を、『文芸』献辞における「口うるさい批判者」に対する不満と結び付けている<sup>59)</sup>。さらに、バッケッリとダッシャは、この引用箇所に観察される「現代における知的不毛」への言及と、ブルーニ『対話』において登場人物ニッコリが吐露している「現代における知的不毛」への嘆きとの対応を指摘し、『対話』が執筆された時代から経過した三十年ほどの年月、また、翻訳家、歴史家、さらに弁論家であるレオナルド・アレティーノによる重要な功績<sup>60)</sup>をアルベルティが無視していると述べている。だが、注意しなければならないのは、アルベルティが「人文主義の特徴であるキケロ主義に席卷されている学問界」を批判している一方、『対話』におけるニッコリは「いまだスコラ的思想に支配されている時代の文化的不毛」を嘆いている点である。たとえば、『対話』においてニッコリは、スコラ的思想の特徴であるアリストテレス主義を次のように揶揄している。

彼らは言うのです、「あの哲学者〔アリストテレス〕がこうしたことを言っている」と。彼に対して反論することは許されていないのです。彼らには、「あの人物が言った」という表現は、「真実」と同義なのです。まるで彼だけが哲学者であったかのように。あるいは、彼の意見は、デルフィの神殿の深奥からアポロンが告げてきたように、確実にあるかのように。<sup>61)</sup>

さらに、中世を経て劣化を蒙ったアリストテレスの著作についてニッコリは、「もし、誰かがそれら〔改悪された〕作品をアリストテレス自身に渡しても、アリストテレスはそれらが自分の著作であるとは識別しないことでしょう、あの鹿に変えられたアクタイオンを、飼い犬が識別できたであろうほどにしか」<sup>62)</sup>とも述べている。アリストテレスがスコラ的思想における象徴であることを考えれば、『対話』においてニッコリが示している文化的不毛への嘆きは、やはり、スコラ的思想に支配された学問界を標的とした攻撃であるとみなされる。

さて、『食間対話集』第七卷献辞において、アルベルティは人文主義の象徴であるキケロ

に言及しながら、学問批判を行っている。たとえ、ここにブルーニ『対話』におけるニッコリの言葉との対応が観察されるにしても、批判が向けられている対象が異なっていることは明らかである。アルベルティは、スコラ的思想がいまだ影響力を保っていた時代ではなく、ブルーニを含め、キケロに盲従する人文主義者によって文化的に支配された時代を、「嫉妬屋ばかりで、学識ある人物と書物が非常に欠乏している」と批判しているのである。

『食問対話集』第七卷献辞では、続いて、キケロの雄弁が画一的なものではなく、臨機応変に変幻自在のものであったことが述べられている。

実際、雄弁とは多様なものであり、キケロでさえ、ときに語り方を変えている。臨機応変かつ明晰な語りは偉大である。それはあまりに偉大で立派なので、そこに到達することができないことは言うまでもなく、神がかった才知によって他者を飛びこえていかないかぎり、君はそこに近付くことさえできない。実際、ごく少数の古代人しか、それを達成することができなかった。それでも彼らの作品は読まれ、楽しまれている。したがって、私は次のように考える。つまり、現代において、どんなものであろうとも、何かしら我々を楽しませる作品を発表する人物は、まったく非難に値しないと。<sup>63)</sup>

『対話』におけるニッコリが、アリストテレスの虚像を信奉しているスコラ主義者を批判しているならば<sup>64)</sup>、この献辞においてアルベルティは、実態から離れたキケロ像を信奉している人文主義者を批判しつつ<sup>65)</sup>、「文体の多様性」を主張しているとみなされるであろう。この箇所にも、『文芸』献辞における「黙しているよりも何かしら執筆すべきである」という意識との繋がりが観察されるのである<sup>66)</sup>。

以上のように、『食問対話集』第七卷献辞を通じて、キケロに比肩しようとする人文主義者の無謀さが批判されていることは明らかである<sup>67)</sup>。アルベルティは、この献辞が捧げられた「誉れと権威において文人たちの王」である人物に対し、古代と自らの時代とが隔絶していることを自覚して、身の程を弁えよと忠告しているのである。このように、アルベルティによる忠告は、キケロおよびごく少数の古典作家だけに許された「雄弁の栄光と栄冠」を獲得しようとする（あるいは獲得したと思間違えている）人文主義者が示す無謀さ、そして傲慢さを批判していることになる。

さて、『文芸』献辞に視線を戻すと、同時代の作家が古代作家と同じ高みに到達することは不可能であるとアルベルティが主張していることは、明白である。アルベルティが、「何よりも、古代〔に比肩した〕雄弁と優美さを称賛されることを、多大な徹夜によって我々は求めるべきではない。たとえ、そうしようと全力を尽くして長々と打ち込んだところで、平凡な成果でさえも達成することは、我々には決してできなかったのだから」<sup>68)</sup>と述べているからである。『食問対話集』第七卷献辞における忠告を考慮すれば、この箇所においてアルベルティが「我々」と呼んでいるのは、「同時代の人文主義者すべて」であるとみなされるであろう。神々しい古代作家に劣るのは、駆け出しの若い文人だけではない。歴史書を執筆

し、口うるさく他者を批判する人物であろうとも、人文主義者は古典作家が示した卓越に到達することなどできないのである。アルベルティによるこの「古典作家と現代の文人との間に存する越えられない壁」の確認は、やはり、自らが執筆した作品に対する弁護として機能するであろう。同時に、不毛な当代において自らだけは優れた知見を持つと自負して歴史書といった偉大な作品を執筆し、その成果を誇る文人への批判、端的に言えば、ブルーニのような文人が示す「キケロと自らを同一視する傾向」に対する批判としての機能も、この文言は有していることになるであろう。

古代が示す卓越と自らの時代における文化的な不毛を主張しながら、自身の知的業績について胸を張る人文主義者に対し、「彼らが言うように、すべての事柄がすでに語り尽くされているならば、何を求めて彼ら自身が語っていることになるのであろうか」<sup>69)</sup>と、ドメーニコ・ダ・プラートは述べている。この皮肉に観察される、「現代の不毛から自らだけを除外している人文主義者が示す傲慢さ」に対する反感は、『食間対話集』第七巻献辞および『文芸』献辞におけるアルベルティによる主張に通底しているそれと同質ではないだろうか。

## 5. 歴史意識における差異

『文芸』献辞におけるアルベルティは、後に、「すでに述べられていない事柄は、何事も述べられない」というモットーによって表現されることになる認識を、すでに獲得していると考えられる。執筆に値する題材が見つけれない理由は、時代が帯びる文化的な不毛にではなく、人文主義者の作家としての力量の限界に求められるべきなのである。こうであるならば、『文芸』献辞におけるアルベルティによる主張は、「新奇な題材についての不完全な小作品」にすぎない『文芸』という作品自体を擁護しているだけでなく、身の程知らずにも名誉を求めて作品を執筆し、その作品について過剰なまでの自信を示していた人文主義者に対する批判としても機能していることになる。実際、同時代の文人が示すこうした姿勢にアルベルティが「傲慢さ」を感じとっていたことは、1433年頃の作、『聖ポテイトゥス伝』に付された献辞からも明らかである。アルベルティは、この聖人伝の執筆を彼に依頼した人物であり、作品の出来栄えに不満を示したグラード総大司教、モリーンに対し、次のように述べている。

さらにあなたはご存知です、おそらく、この聖人伝の執筆依頼を——こうした依頼を引き受けることで、才知と雄弁について古典作家との比較がなされてしまうのでありますが——多くの者たちがどれだけ固辞するのかということ。自分の書き物がすべて捨て去られるべきであると判断するほどに、彼らが自らを無知であるとみなすためではありません。そうではなく、自分たちの新たな作品を誇示することで古典作家の作品が忘れ去られるように努めた者たちのように、愚か者で傲慢であるとみなされることを、まずは避けるためです。<sup>70)</sup>

この箇所、エーレナ・ジャンナレツリは、「同時代人と、彼らが再提示し翻訳しようとする古典作品との間に存する鬭争的な関係という基本的な概念」<sup>71)</sup>を読み込んでいる。アルベルティは、古典作家と肩を並べようと努める同時代の文人を、愚かで傲慢であるとみなしていたのである。結局、『文芸』献辞における「歴史書を筆頭とした偉大な作品を執筆することだけでなく、何かしら新規な題材について不完全な小冊子を執筆することも正当に評価されるべきである」という主張は、「見せかけの卑下と敬意に彩られた二項対立」として、古典的雄弁に比肩することができると思込んでいる人文主義者が示す愚かさや傲慢さを際立たせることになる。

ガレンは、人文主義者が古典と向き合う際の姿勢が二面的であったことを指摘している。つまり、彼らは古典および古代を称賛するだけでなく、「古典との競争という概念」をも育んでいた<sup>72)</sup>。実際、人文主義的諸言説には、古代の卓越を賛美するトポスだけでなく、古代と比べて同時代の卓越を賛美するトポスも、多数確認されている<sup>73)</sup>。こうした点に注目すると、ブルーニが示していた「自らをキケロと同一視する傾向」や「翻訳家としての自負」と、アルベルティが示していた「知的エリート主義への反感」との差異は、歴史意識における差異に由来していると考えられることになる。ブルーニがキケロを称賛しながら、同時に古典に対する挑戦を行っていた一方、アルベルティは自らを含めた同時代の文人と古典作家との間に、超えられない壁が存在するとみなしていたのである。

以上のように、「アルベルティとフィレンツェ学問界、とくにブルーニとの関係」に着目すると、前世代に属す人文主義者に対する感情的であり学問的でもある反感の表明として、『文芸』献辞を捉えることが可能になる。アルベルティによる他作品に観察される、同時代の人文主義者に対する不満、そして、古代と自らの時代との関係をめぐり認識が、『文芸』献辞における「歴史書を執筆すべき文人」と「知性の訓練を行う若者」との二項対立からも立ち現れるのである。

執筆に値する題材を探していたアルベルティは、最終的に、「俗ではなく、今日に至るまで十分に掘り下げられてこなかった題材を」<sup>74)</sup>見出すことに成功した。彼は、自らが身を投じて経験した「文芸学」(«*studia litterarum*»)が、文人に対しどれだけの利益と不利益をもたらすのかを論じることにしたのである<sup>75)</sup>。そこで、次章では、『文芸』献辞に続く序文において論じられている文芸学に注目し、この作品を執筆することでアルベルティが何を意図していたのかについて、仮説を提案する。

## 第2章

### 『文芸』序文に観察される学問像

『文芸』献辞の末尾において、「文芸の利益と不利益」という、これまで十分に論じられてこなかった題材を見出したと、バッティスタは兄カルロに告げている。続く作品序文では、その題材についてどのような切り口から作品本論が進められていくのかが明らかにされている。アルベルティは、まず、前世代に属す文人が示す学問観へ疑義を呈し、続いて、自らの学問観の変容を説明している。この学問観の転向を語る際、かつて彼が最大限にその価値を認めていた「学識」に、新たに獲得された視点である「経験知」が対置されている。学識と経験知との対置は、たとえば、『家族論』に通底している構造である。そのため、この対置に注目することは、『文芸』において論じられている学問観を理解するためだけでなく、同時代の思想、また、アルベルティの思想におけるこの作品の位置付けを明らかにするためにも、重要であると思われる。

さて、『文芸』序文においてアルベルティは、まず、「文芸学」は文人に現世的利益をもたらさないという見解を、この作品の大前提として示している。

人々が最大の利便として捉えている現世的物の筆頭として、ある人々にとっては富、ある人々にとっては名誉、また、ある人々にとっては快樂が立派な事物としてみなされるのであるが、これらを獲得するために彼らは非常に争う。これら以外に、とくに運命に依存した利益としてみなされるべきものは知られていないと私は考える。なぜなら、運命に依拠した善として、これら以外には何事も利便と呼ばれたりみなされたりすべき事物が見出されないと思われるからである。だが、こうした事物すべてから、学者は排除されている。<sup>1)</sup>

アルベルティは、富、名誉、快樂を追求する社会と、それらの獲得から排除されている学者との間に二項対立を設定している。同様の二項対立は、同時代における人文主義者の言説にも観察される。たとえば、ブラッチョリーニはロスキに宛てた 1424 年の手紙において、次のように論じている。

したがって、ある者たちは富と威厳を追い求め、ある者たちは名誉を熱望し、ある者たちを支配欲が刺激し、いくらかの者たちは快樂におぼれ、多くの者たちが金銭欲に燃え立ち、金銭を獲得するためならどんな行いであっても汚らしいとはみなさないのである。他方、人文学——この学びが、何にもまして誠実さと威厳について、我々を教育してくれたはずなのであるが——に過ぎ去った時間の大部分を費した我々には、次のこ

とが非常に汚らわしく思われるのである。つまり、どんな称賛にも値しないと我々が知っているそうした事物の獲得に、この時代が、まるで美德と悪徳の区別をまったく弁えない者たちと同じように、巻き込まれているという事実が。<sup>2)</sup>

ブラッチョリーニによれば、現代は現世的利益に対する欲望によって支配されているが、人文学によって教育された文人は、そうした利益に価値を見出すことはない。

不死の神にかけて、文芸は我々にとって何の役に立つのだろうか。詩人や弁論家の作品を読むこと、道徳哲学者の作品を参照すること、このうえなく卓越した多くの人物たちが著した書物を絶え間なく研究することが、我々にいったい何をもたらしたといえようか。これらから、美德を諸善のうち最大のものとみなし、他方、財産、富、威厳や名誉、また、その他の運命に従属する事物を求めないように、あるいはそれらを最小限に評価するように、我々は忠告されるのであるが、もし、我々が愚か者たちの習わしに従って、そうした現世的諸善だけを崇拜し、学のない者たちのようにそれらに驚嘆してそこに身を投じ、美德への配慮を後回しにしたりするならば。<sup>3)</sup>

人文学に身を捧げた文人には、「美德の価値を知り、現世的利益を軽蔑すること」が、報奨としてもたらされる。この手紙におけるブラッチョリーニと『文芸』におけるアルベルティは、運命に依存する諸善と勉学との間に対立軸を設定しているという点において、共通した見解を示している。マルチェッロ・モンタルトはこの点に注目し、『文芸』を伝統的な「禁欲的学問論の系譜」に組み込んでいる<sup>4)</sup>。また、ジャルツォンベックも、『文芸』に観察される多くの論題が中世的な禁欲性を帯びているとみなし、勉学が求める「ほとんど宗教的な献身」<sup>5)</sup>を、この作品においてアルベルティが規定していると述べている。

しかし、『文芸』にきわめて禁欲的な学問観を読み込むこれらの見解が妥当であるのか、疑問が残る。なぜなら、ブラッチョリーニが現世的諸善を軽蔑すべき対象として描き出しているのに対し、アルベルティはそれらの価値に対する評価を明らかにしていないからである。また、ブラッチョリーニによれば、文人は人文学を通じて現世的諸善を自発的に軽蔑する術を知るが、アルベルティは、そうした諸善の獲得から文人が「排除されている」と述べているからである。

さらに、『文芸』序文においてアルベルティは、文人が文芸学から獲得を期待できる利益について、軽口を叩いている。

だから、大変な苦勞と徹夜によって、何を文人が求めているのか、私にはまったく理解できないのである。おそらく、文芸／書物によって保全されている事物をめぐる知識の虜、囚われの身となった彼らに、苦勞への耐性が人並み以上につくであろうこと以外には。しかし、私はといえば、文芸学のお蔭で、それが求める苦勞に打ち負かされて病弱

になっただけでなく、運命に依存する善すべてを奪われたと感じているけれども。<sup>6)</sup>

文芸学に身を投じる人物は、その労苦への報奨として、学識と労苦への耐性以外、見返りを期待できない。ブラッチョリーニが示している見解と比較したときに、アルベルティによるこの軽口は、いったいどのような意味をもつのであろうか。アルベルティはさらに、作品序文の末尾において、もし、現世的諸善の獲得を望むならば、人は文芸学という道を選択すべきではないと、警告を発してもいる<sup>7)</sup>。現世的諸善を軽蔑する術を知ることが人文学がもたらす報奨、すなわち利益であるとみなすブラッチョリーニとは異なり、アルベルティはそれらを獲得し享受することから排除される点を、文芸学に身を投じた人物が蒙る不利益として提示しているのである。実際、文芸学がもたらす「利益」ではなく「不利益」を論じ、文芸学が文人に求める過酷さに焦点を当てるというアルベルティの視点は独特である。この着眼点および題材は、アルベルティ自身の言葉を借りれば、たしかに「新奇」であるし、また、「今日に至るまで十分に掘り下げられてこなかった題材」でもある<sup>8)</sup>。同時代に執筆された人文主義的教育論および学問論は、人文諸学科という学問体系を定義し、そこに身を投じた場合に獲得することが期待される見返り、すなわち、学問がもたらす利益を数え上げはするものの、勉学に付随する不利益については、ほとんど一様に口を閉ざしているからである。

さて、ここで疑問がいくつか生じる。まず、アルベルティが論じている、非常に過酷であるものの、魅力的な見返りをもたらさない「文芸学」とは、いったいどのような学問であるのかという疑問、また、その学問に身を投じようとする人物に対し警告を与えるアルベルティは、この作品において何を行っているのかという疑問である。そこで本章では、まず、人文主義的教育論と学問論、とくに、ヴェルジェーリオが執筆した『子どものすぐれた諸習慣ならびに自由諸学芸について』(*De ingenuis moribus et liberalibus adolescentiae studiis*) (以下、『諸習慣』と略記)、また、ブルーニ『諸学科』および彼が1430年代前半にニコロ・ストロツィに宛てた手紙の内容を概観し、それらと比較した際に『文芸』が示す新奇さを確認する。続いて、『文芸』序文で論じられている文芸学をブルーニ『対話』の登場人物、サルターティが描き出している人文学と比較して、その特徴を明らかにする。最後に、アルベルティがこの作品において文芸学を論じることにより、何を意図しているのかについて、先行研究による指摘に注意を払いつつ、仮説を立てる。

## 1. 人文主義的教育論および学問論と『文芸』

学問あるいは教育をめぐる考察を人文主義者はさまざまな形で行っているが、とくに1300年代中葉から1400年代半ばまでに執筆された論考の多くには、医学、法学、神学といった、スコラ的思想の影響を受けた諸学問に対する対抗意識が観察される。たとえば、中世以降、知を占有していた大学において法学と医学との間で学問の高貴さをめぐり生じた論争に<sup>9)</sup>、人文主義者も参加している。こうした流れは、ペトラルカによる『医者に対する糾

弾』(*Invective contra medicum*, 1355)、また、『自らそして多くの者たちが示す無知について』(*De sui ipsius et multorum ignorantia*, 1367)において展開された形式的弁証法への批判へと遡る<sup>10)</sup>。ペトラルカの友人であり、彼とブルーニらの世代とを繋ぐ存在であったサルターティも、『法学および医学の高貴さについて』(*De nobilitate legum et medicinae*, 1399)において、「行動的生と観想的生との間、意志と知性との間、魂にかかわる学問と自然にかかわる学問との間」<sup>11)</sup>における対立を設定し、医学よりも人間的生に直接的な関係をもつ法学の優越を主張している。「医学に対する法学の優位」という主張は、サルターティにとって人文学の称揚と同じ意味をもっていたと考えられている<sup>12)</sup>。さらに時代が下り、人文学の体系が完成し一般化すると、人文主義者は医学のみならず法学をも批判することになる。たとえば、1450年頃に発表されたブラッチョリーニによる『食間論議』(*Disceptatio convivialis*)では、医学と法学それぞれの高貴さが論じられてはいるものの、最終的に、両者の欠点が暴露されている。ブラッチョリーニは、世俗的な知の頂点を競う二大学問の正統性自体に疑問を投げかけているのである<sup>13)</sup>。このように、人文主義者は既存の学問間論争に割り込むことで、いわば、漁夫の利を得ようとしていた<sup>14)</sup>。こうした流れの中、文法、詩学、歴史、弁論、道徳哲学から構成される人文学が<sup>15)</sup>、実利ではなく学習者の人格形成を目的とする新たな学問体系として称揚されていった。

15世紀前半に人文主義者が著した教育論および学問論にも、既存の諸学問に向けられた批判が観察される。人文主義的教育論の草分けは、1402年から翌年にかけて、ウベルティノー・ダ・カッラーラ(Ubertino da Carrara)に宛ててヴェルジェーリオが執筆した『諸習慣』である。この教育論において、ヴェルジェーリオは高貴な生まれの子弟にとって必須である教育として、軍事と学問を論じているが、そこで推奨されている「自由で高貴な諸学科」(«liberalia studia»)は、次のように定義されている。

したがって我々は、自由で高貴な人物にふさわしい学問を、自由で高貴な諸学科と呼ぶのです。それらを学習することにより、知と美德が鍛えられ、あるいはそれらが獲得され、また、肉体もしくは魂が、何かしら最上のものへと向けられるのです。人々はこのために、賢人にとって美德に続く報奨である名誉と栄光を求めるのが常であります。自由で高貴な気質ではない人物にとって金儲けと快楽が目的とされるように、自由で高貴な人物にとっての目的は美德と栄光なのです。<sup>16)</sup>

ヴェルジェーリオは、知と美德、くわえて栄光を学習者にもたらす「自由で高貴な学問」の名のもとに、自由七学芸から法学、医学、神学／形而上学<sup>17)</sup>までをも含む諸学科を論じている。しかし、これらの幅広い学問分野のうち、特別な地位を与えられている学科が確認される。

というのも、自由で高貴な才知の持ち主、また、公的業務や人間社会にかかわらざるを



えない人物にとって、歴史の知識と道徳哲学の学びが最もふさわしいからです。その他の学科は自由で高貴な人物にふさわしいゆえに、「自由で高貴である」と呼ばれています。哲学はしかし、その学びが人間を自由で高貴にするために、自由で高貴なのです。〔……〕。私が間違っていなければ、これらの学科に第三の学科、つまり、雄弁を付け加えなければなりません。雄弁は市民的学問の一部です。我々は哲学のおかげで、何事においても最優先されるべき事物を正しく認識することができます。また、雄弁のおかげで、威厳あり飾られた仕方で語ることもできるのですが、唯一、このことによって、大衆の心は最大限に結びつけられるのです。他方、歴史はこれら双方の点において我々を助けるのです。<sup>18)</sup>

ヴェルジェーリオはペトルカやサルターティに倣い、歴史と道徳哲学、そして雄弁を、とりわけ有益であると称揚している<sup>19)</sup>。

他方、この作品において、法学と医学および神学／形而上学も「自由で高貴な諸学科」に含まれてはいるものの、これらの学科の評価についてヴェルジェーリオが留保を示していることが明らかである。まず、医学はたしかに人々の健康にとって有益ではあるが、その学びに「高貴な訓練をほとんど含まない」<sup>20)</sup>。続いて、法学はたしかに公益に寄与するし、その教えを講義したり検証したりする行為は高貴ではあるが、「裁判を扱う者が報酬あるいは合意によって労力を売ることは高貴ではない」<sup>21)</sup>。さらに、神学／形而上学は「我々の感覚からかけ離れた高貴きわまりない要因や事柄について」<sup>22)</sup>の学問であり、人間の生き方と振る舞い、つまり、人格の形成には寄与しない。ブルーニ『対話』における登場人物、ニッコリと比べれば穏当であるとはいえ、ヴェルジェーリオも既存の支配的諸学問に対して一定の距離を保っているのである。こうした姿勢は、「現代における文化的不毛」に対してヴェルジェーリオが示している嘆きからも浮かび上がる。彼は、同時代における書物の欠如について、「このことについて我々は、ある時代、そしてそれに続く時代を、正当にも非難することができます。たとえ意味がなくても、怒ることが許されます。なぜなら、彼らは著名な作家による、かくも多くの輝かしい作品を滅びるままにってしまったからです」<sup>23)</sup>、また、現在まで保全されてきた書物についても、「〔現存している書物〕自体もその大部分において破壊され、半分にちぎられて変質した状態で我々は手にしているので、それらのうちどれも、我々に手渡されなかったほうがましなほどです」<sup>24)</sup>と述べている。こうした嘆きは、『対話』におけるニッコリが「現代における文化的不毛」に対して示すそれと同質であると考えられる<sup>25)</sup>。

『諸習慣』において、ヴェルジェーリオが人文学だけを学ばれるべき学問として提示しているわけではない点には注意すべきである。しかし、彼が「現代における文化的不毛」を嘆き、スコラ的思想の影響を受けた諸学科から一定の距離を保っていることに注目すれば、道徳哲学、歴史、雄弁という三学科に与えられた価値は際立つ。ヴェルジェーリオと比して、よりあからさまに、既存の学問に対する批判を梃としながら新たな学問体系を称揚したの

が、ブルーニである。

ブルーニは、1430年代前半にニコロ・ストロツィに宛てた手紙において<sup>26)</sup>、学ばれるべき学問体系を論じている。この若者が勉学に励んでいると聞き及んだブルーニは、手紙の冒頭において、次のように呼びかけている。

だから、徹夜しなさい、そして日々、何かしらをさらに付け加え、集めなさい。この種の学問において、君の生きかたと栄えある名声に対し偉大な報いが与えられると考えて。これら二つ、また、信じてほしいが、非常な富が続くのである。これら〔の報い〕は高名な人士、また、美德によって飾られることを望む人物に、決して欠けたことがない。<sup>27)</sup>

この学問は、学習者に生き方と名声にかかわる報い、また、富という報いをもたらす。さらに、この学問は学習者に快樂をももたらす<sup>28)</sup>。ブルーニは、こうした報奨をもたらす学問を「人文学」(«*studia humanitatis*»)と呼んでいる。

君の勉学は二面的でなければならない。一方は、俗でも並みでもなく、より勤勉で類まれな、読み書きにおける熟達についての勉学である。そこにおいて、君が非常な努力で熟達することを私は望む。他方は、生き方と振る舞いにかかわる事柄についての知識における勉学である。これらは、人文学と呼ばれる、なぜなら、それらは人を完成させ、飾るからである。<sup>29)</sup>

同様の定義は、1420年代に執筆されたとみなされており、ペーザロ公、ガレアツォ・マラテスタ (Galeazzo Malatesta) の妻、バットィスタ・マラテスタ (Battista Malatesta) に宛てられた学問論、『諸学科』にも確認される<sup>30)</sup>。

博識と言いましても、現在、神学を教えている者たちが用いている、あの俗で混乱したそれではなく、読み書きにおける熟達を事物にかんする知識と繋げた正統で高貴な博識、最上の神学者であり、同時に完璧な文人でもあった、ラクタンティウスやアウグスティヌス、ヒエロニムスが示した博識のことではありますが。他方、現在、その学問を教授している人物がどれだけわずかしか読み書きを知らないか、恥ずべきことでもあります。<sup>31)</sup>

こちらにおいても、学ばれるに値する学問は「読み書きにおける熟達」と「事物にかんする知識」から成ると定義されている。「読み書きにおける熟達」とは、テキストを正しく理解すること、また、自らの考えを明確に表現することを目的とした、基本的かつ正確な読解力と表現力である<sup>32)</sup>。「事物にかんする知識」は、道徳哲学、詩、弁論、歴史、また、とくに

女性教育においてはキリスト教文学を含む諸学科についての学識である<sup>33)</sup>。これらの諸学科は、学習者を道徳的に成長させるために有益であるという共通点をもつ<sup>34)</sup>。そのため、「事物にかんする知識」は、道徳哲学を筆頭とした「生き方と振る舞いにかかわる学識」として称揚されている。そして、「読み書きにおける熟達」と「事物にかんする知識」の両者は、最終的に統合されなければならない<sup>35)</sup>。

こうした学問を奨励する際に、ブルーニは既存の学問に対する批判を梃として用いている。たとえば、ニコロ・ストロツィ宛ての手紙では、法学が金儲けを指向する学問である一方、人文学は学習者の人格を高めることに寄与すると主張している<sup>36)</sup>。さらに、「事物にかんする知識」の基礎をなす道徳哲学<sup>37)</sup>を論じた『道徳学初歩』の冒頭では、「〔自然哲学〕は、たしかに高尚で卓越しておりますが、人間の振る舞いと美德にかかわる〔道徳哲学〕と比べれば、生き方をめぐる有益さの点で劣るのです」<sup>38)</sup>と、自然哲学との比較を通じて、道徳哲学の価値が主張されている。

このように、1400年代前半において人文主義者が著した教育論および学問論は、まず、学ばれるべき学問を具体的に定義して、それが人格形成のための最適な手段であると主張している。そして、人文学がもたらす諸利益について、スコラ的思想の影響を色濃く反映した諸学問に対する批判を梃としながら美辞麗句を並べたて、その学びを奨励している。

さて、『文芸』に視線を戻すと、この作品がこうした教育論および学問論と視点を共有していないことが明らかである。なぜなら、この作品においてアルベルティが、自らが論じる「文芸学」を具体的に定義しておらず、さらに、この学問がもたらす利益ではなく、不利益に焦点を当てているからである。こうした特異な意識は、『文芸』序文の末尾における、この作品の目的にかんするアルベルティの言葉からも明らかである。

周知の事実、そして思うに、私の議論が役立つであろう、純粋な博識と知以外のことを文芸に求める者を、その過ちから救い出すことに。また、まっとうで思慮深い学者に、文芸においては学識と事物にかんする熟達だけを享受し、その他の事柄を重視すべきではないと確認を取ることにも、役立たないことはないであろう。<sup>39)</sup>

アルベルティは、「文芸学」を明確に定義することよりも、その学問に身を投じる人物に注目し、彼らが学識以外の報奨を期待することを諷めている。この姿勢が、ヴェルジェーリオあるいはブルーニが行っているような「学問の称揚」を意図しているとは思われない。ガレンが人文主義者について述べている、「新たな指導者たちの作品は、あらゆる不毛な苦行を批判すると同時に、よき市民を育成する最良の道の人文学に認めている」<sup>40)</sup>という言葉は、『文芸』には当てはまり難いのである。

さらに、アルベルティが描き出している文人は、ブラッチョリーニが描き出しているような「美德を獲得し真の幸せを享受する文人」ではなく、みじめで憐みを誘う姿を示している。たとえば、文芸学に身を投じた若者の様子を、アルベルティは非常に否定的な調子で描写し

ている。

まさに幼少期から文芸に身を投じた者たちが、いわゆる紙片をめくりながら孤独に縛り付けられているのを我々は目にしている。鞭、教師、学びにかかわる心配、読書にかける熱意、そして労苦によって彼らが消耗され、多くの場合、その年齢が求めるのと比べていっそう青白いのを我々は目にしている。この後に少年期が続くが、彼らがどれだけの楽しみと喜びを覚えているのか、君は彼らの顔つきから判断できる。彼らがどれだけの青白さ、どれだけの悲しさ、身体のあらゆる点について無頓着でほとんど投げ捨てられたような状態で、学校および図書館という、あの永遠なる監獄から出てくるのか、目を凝らすが良い。<sup>41)</sup>

このような視点も、人文主義的教育および学問を奨励する言説には見出されない。学問がもたらす利益にのみ注目するヴェルジェーリオやブルーニとは異なり、アルベルティは学問に身を投じた人物が味わわなければならない過酷さ、つまり、文芸がもたらすさまざまな不利益に注目しているのである。したがって、アルベルティが見出した題材、また、それを扱う視点は、一般的な人文学称揚言説との比較において、やはり新奇で十分に議論が尽くされていないものであるといえる。

以上から、学問の称揚を目的とする同時代の諸言説とは異なった視点から、『文芸』におけるアルベルティが学問を論じていることが明らかである。しかし、この作品を禁欲的学問論としてみなすことにも疑問が残る。すでに確認したように、アルベルティがときに軽口を交えながら、文芸学がもたらす不利益を誇張していると思われるからである。そこで、続く節では、『文芸』序文において文芸学が、そもそもどのような学問として論じられているのかについて、検討する。

## 2. 『文芸』における「文芸学」とは

『諸習慣』において、ヴェルジェーリオは歴史、道徳哲学、また、雄弁を中心とした、学習者に名誉と栄光という報奨をもたらす「自由で高貴な学問」について論じている。また、『諸学科』およびニコロ・ストロツィに宛てた手紙において、ブルーニは、道徳哲学、詩、弁論、歴史から構成される「事物にかんする知識」と「読み書きにおける熟達」から成り、名誉のみならず富と快樂をも学習者にもたらす学問を論じている。他方、アルベルティは、現世的利益を一切もたらさない文芸学について論じながら、その学問がいかなる学科から構成されているのか、具体的な定義を行っていない。

それでは、『文芸』においてアルベルティが扱っている「文芸学」という学問、また、その学問に身を捧げている「文人」という存在は、いったい何を指しているのだろうか。この作品においてアルベルティが哲学者、法学者や医者といった幅広い知識人に言及していることについて、「アルベルティは法学および教養諸学という幅広い範疇において文芸学を

論じているものの、彼の注意は主として、精神に役立つ非専門的諸学科、とくに言語、雄弁、哲学へと向けられている」と、グレイソンは述べている<sup>42)</sup>。他方で、この作品におけるアルベルティが、ペトラルカやブルーニ、また、マッテオ・パルミエーリ (Matteo Palmieri, 1406-1475) へと連なる人文主義の伝統とは異なり、倫理学にくわえ、論理学、自然哲学をも含めた哲学の総体を評価している点が特徴的であるとの指摘<sup>43)</sup>、さらに、市民的人文主義に対する反意を示すこの作品において、アルベルティが自然哲学を頂点とした知のヒエラルキーを構築しているという指摘もなされている<sup>44)</sup>。

このように、さまざまな見解が混在している中、ミケーレ・フェーオは、蓄財を期待する知的職種である公証人、弁護人、医者をも、アルベルティが「文人」(litteratus)と呼んでいる点、また、法学、神学、物理学、倫理学、歴史学など多岐にわたる諸学科を「文芸」(litterae)と総称している点に注目し、この作品における「litteratus は我々が言うところの知識人に相当し、litterae は知的諸学科の総合体、哲学の娘たちすべてのことである」<sup>45)</sup>と述べている。

フェーオが提案しているように、『文芸』におけるアルベルティは、幅広い意味における学問全体の総称として、「文芸学」という表現を用いているのであろう。『文芸』と近接する時期に執筆された『家族論』に観察される描写からも、このような見解が妥当であると思われる。たとえば、同書第一巻において、リオナルド・アルベルティ (Lionardo Alberti) は、「文法」(«grammatica»)、「算数」(«abaco»)と「幾何」(«geometria»)にくわえて、「詩人」(«poeti»)、「弁論家」(«oratori»)、「哲学者」(«filosofi»)の学習を、子供の教育にふさわしい「文芸学」(«studi delle lettere»)の範疇に含めている<sup>46)</sup>。リオナルドはさらに、一族が輩出した知識人、すなわち、「自然哲学と数学」(«filosofia naturale e matematiche»)に通じていたベネデット (messer Benedetto)、「神学」(«sacre lettere»)に打ち込んでいたニコラーイオ (messer Niccolao)、『偉人伝』(Istoria illustrium virorum)と恋愛詩を執筆し、「天文学／占星術」(«astrologia»)にも造詣の深かったアントーニオ、「人文学」(«studia d'umanità»)と「詩人」(«poeti»)を楽しんでいたリッチャルド、「数学と音楽」(«matematici e musica»)において誰も比肩できなかったロレンツォ、また、「市民法」(«studii civili»)を学んだアドヴァルド (Adovardo)を、まとめて「文人」(«litterati»)あるいは「非常に学識深い人物」(«litteratissimi»)と呼称している<sup>47)</sup>。したがって、『文芸』においても同様に、studia litterarum は人文学を含んだ学問一般、litteratus は人文主義者を含んだ知識人一般を指しているとみなすことが可能であると思われる<sup>48)</sup>。

実際、こうした総合的な視点は、同時代に執筆された教育論および学問論、たとえば、法学、医学、神学／形而上学、さらに自然哲学や天文学／占星術をも「自由で高貴な学問」として論じていたヴェルジェーリオの思想にも確認される。ガレンは、人文主義的教育が帯びているこうした傾向について、

グアリーノの学校でケルススやストラボンの著作を読むこと、さらに、ヴィットリーノの学校でプリニウスやエウクレイデスの著作を読むことは、ラテン語やギリシャ語の

学習として行われただけでなく、むしろとりわけ、医学、幾何学、自然科学、地理学の基本的なテキストを、スコラ的な凡庸な要約の代わりに理解して記憶するためであった<sup>49)</sup>

と述べている。また、ブルーニも『諸学科』において、幾何学、算数、天文学／占星術、さらに、修辞学の学習について、非常に消極的ではあるものの、言及している<sup>50)</sup>。

以上のように、『文芸』においてアルベルティが具体的にどのような学科を論じているのかを明らかにすることは困難である。しかし、彼が論じている文芸学には、二面的な評価がなされる学問であるという特徴が観察される。『文芸』本編において、アルベルティは文芸学を否定的な視点から論じることになるが、作品序文において、彼はこうした認識に至る前、異なる見解を抱いていたと述懐している。そして、彼が経験した学問観における転向を述べる際に、文芸学が完全に読書に依拠していること、また、その目的が学識の獲得だけであることが明らかにされている。

『文芸』序文においてアルベルティは、文芸学を実践しながらもその学問に批判的である知識人に対し抱いた不満と疑念について、言及している。この箇所において、彼が「かつて」抱いていた学問観が明らかにされている。

私は次のような考えを抱いていた。つまり、学識に満ち溢れる人物たちが、自らの議論で文芸に多くの不利益をなすりつけていた一方、私はといえば、文芸は非常に楽しいものであるとみなしていた。また、文芸学など、その他の学びよりも後回しにされるべきであると彼らが考えていた一方、私は、文芸をその他すべてに優先させていたのである。結局、私は文芸／書物から学ばれる学識にすっかり没頭し、書物に書かれた立派な事柄すべてを心と意欲を傾けて学び、労苦と心労、徹夜によって追い求め、最大限、熱心かつ真摯に、できるかぎり究めたと言えるほどであった。どちらの意見や教えがより褒められるべきか、私にはわからなかった。知のため、また——文芸から獲得されると私は思っていたのだが——名誉と名声の獲得のため、疲労、徹夜、勉強にまつわるその他すべての心労と困難を耐えて我慢することが、立派な心の持ち主の務めであると、私は考えていたのである。そして、たしかに高貴ではあるが、避けがたく受け入れざるをえない性質のものではない、こうした意見と教えに私は従っていた、何が人々の役に立つのか、知らなかった間は。<sup>51)</sup>

かつてのアルベルティは、文芸学は労苦を求めるものの、万事に優先されるべき有益かつ魅力的な学問であるとみなしていた。そのため、彼は文芸学に身を投じながらもそれを批判する者たちの言葉には耳を傾けることなく、「文芸／書物から学ばれる学識」(«cognitio litterarum»)を追い求めていた。さらに、学問に必要とされる熱意への報いとして、学識と同時に名誉と名声が獲得されると信じていた。結局、かつてのアルベルティは、ヴェルジェ

ーリオやブルーニが描写し称揚している、有益かつ魅力的な人文学と類似した学問として、文芸学をみなしていたのである。

しかし、世間を経験することによって、文芸学に対するアルベルティの評価は一変している。

だが、実践および経験から、人々の習わしをよりよく理解するようになって以降、告白するが、かつて反対し軽蔑していた、文芸がもたらす不利益についてのあの言い分に、他のすべての意見にまして、私はいくらか心を動かされ、同意し始めた。くわえて、少なからぬ部分でそれが真実であると、経験から理解し始めた。<sup>52)</sup>

「実践および経験から」世間の仕組みを理解したアルベルティは、文芸学に捧げられた人生は精神的にも肉体的にも非常に過酷でありながら、何も利益をもたらさないと、「事実から」理解したのである<sup>53)</sup>。文芸学の価値に対する評価をめぐるこのような転向を経たうえで、読書に依拠した学識だけを求める文芸学が文人に対してもたらす過酷さを、作品『文芸』本論の主題としてアルベルティは扱うことになる。

この転向が実践と経験から生じたとアルベルティが述べている点は、重要であると思われる。なぜなら、『文芸』におけるアルベルティの主張は、経験から学ばれた知に立脚しているからである。アルベルティはまず、『文芸』献辞の末尾において、「今日までの歳月すべてを費やした文芸学がどれだけ有益で無益か、私は知っている」<sup>54)</sup>と述べている。実際に文芸学に身を投じたからこそ、アルベルティはその利益と不利益について、何かしらを論じることができるのである。また、実践と経験、さらに事実から、文芸学に対する彼の認識が一変したことは、すでに確認した通りである。世間を知ったからこそ、読書だけに立脚し学識だけを重んじる文芸学が社会的に無益であることを、アルベルティは認識したのである。このように、実践および経験によって獲得した知という視点から、文芸学、すなわち学識がもちうる価値をアルベルティが論じていることは、『自伝』における、「文芸について何が考えられるべきなのか、経験自体から学んで論じたのである」<sup>55)</sup>という証言からも、裏付けられる。

文芸学を実践し、さらに世間を経験し、学問の価値に対する評価をめぐる転向を経たうえで、アルベルティは文人と社会との関係を論じている。その描写によれば、肉体的にも精神的にも多大な労苦に耐えながら過酷な読書に専念する文人は、その愚かさを非難されるべき存在である。

哀れな文人は、長く退屈な読書、激しい徹夜、あまりの熱意になんと疲労困憊し、多大な心労によってどれだけ苛まれていることだろうか。その結果、人間性を持つ人物が彼らを見たらいつも、その苦労を憐れむかあるいはその愚かしさをより激しく非難するほどである。それもとりわけ、その艱難辛苦によって、何かしら運命がもたらす善の獲

得を文人が望んでいたりすれば、憐れみや非難の対象となるのが常である。それも当然である、書物からは学識のほか、何も実利——運命がもたらす善はこう呼ばれるべきである——など見つけられないのだから。したがって、この類の勉学に非常な苦勞と心勞を捧げる人物は、激しく非難されるべきである、もっと簡単に、最高で、物質的に豊かで、社会的に認められた人生を過ごすことができるのに。<sup>56)</sup>

社会が実利に価値を見出す一方、文人は非実利的な学識の獲得しか期待できない。くわえて、学識によって運命がもたらす諸善を求めようとする文人は、憐れみと非難に値する。現世的利益を求めるならば、そうした目的に、よりふさわしい選択肢が世の中には存在するからである。結局、過酷きわまりない文芸学に身を投じる文人は、名誉と名声を獲得することなどなく、むしろ、正しい判断と選択を下すことができない無思慮な人物として、社会から非難されるのである。過酷な読書に励む文人、また、彼らが獲得する学識に、社会は何も価値を見出さない。そのため、文人は社会から排除され、「永遠の監獄である学校あるいは図書館」に隔離されることになる<sup>57)</sup>。文人が社会から求められることはなく、彼らの学識が行動的生に還元されることもないと、アルベルティは十分に理解しているのである。結局、『文芸』全編において文芸学は、「生き方と振る舞いにかかわる事柄についての知識」(cognitio earum rerum quae pertinent ad vitam et mores)<sup>58)</sup>ではなく、「文芸／書物によって保全されている事物をめぐる知識」(«cognitio rerum earum que litteris continentur»)<sup>59)</sup>しか与えてくれず、そのために、社会との繋がりを断たれて自己完結する学問として描写されることになる。

以上のように、『文芸』において論じられている文芸学は、「人文学を含んだ学問の総体」としてみなされる。さらに、文芸学は、二面的な評価が下される学問としてみなされる。なぜなら、この学問は、一見、「非常に有益で、そこから名誉が獲得される学問」に見えるが、実際にそこに身を投じ、また、社会が従う価値基準を知ると、「過酷な読書に依拠して実利をもたらさない、社会から隔絶された学問」であることが知られるからである。さらに、アルベルティが実践、経験、また、事実から学ばれた知に立脚し、文芸学を論じていることも明らかである。

アルベルティがこのように提示している文芸学と類似した、読書だけに依拠して社会性を欠く学問の姿が、ブルーニ『対話』における登場人物の一人、経験から学ばれる知の重要性を説いているサルターティの言葉に見出される。そこで次節では、『対話』におけるサルターティの主張に着目し、アルベルティが描き出している「文芸学」のみならず、ブルーニが身を投じていた学問、すなわち「人文学」も、二面的な評価が下される学問であることを確認する。

### 3. ブルーニ『対話』におけるサルターティ

ヴェルジェーリオに宛てられた献辞の言葉によれば、『対話』はサルターティとニコリとの間で行われた討論を記録した作品である。この作品をめぐる研究は、ダンテ、ペトラル



カおよびボッカッチョに対しニッコリが行う批判と、ニッコリ自身によるその撤回がもつ意味を明らかにすることを中心になされてきた。同書第一巻において、若き文人に討論の訓練を勧めるサルターティに対し、ニッコリは「時代が示す知的不毛」を論じ、こうした状況下では討論を行うことは不可能であると訴えている。この見解に異論を唱えるサルターティは、たとえ時代が文化的な不毛を示していようとも、ダンテ、ペトラルカ、ボッカッチョという賢人が輩出されたことと反論する。ところがニッコリは、彼らフィレンツェ三詩人も取るに足らない文人であったとの評価を下す。しかし、翌日に舞台が設定された第二巻において、ニッコリは前日に自らが行った批判を撤回し、三詩人を称賛するのである。

この作品の解釈において、キケロ『弁論家について』(De oratore)からの影響が指摘されてきた。バロンはこの点を踏まえながらも、1402年、ミラノ公ジャン・ガレアツォ・ヴィスコンティ(Gian Galeazzo Visconti)が死亡したことにより、ミラノによる軍事的脅威からフィレンツェが脱したことに注目している。バロンによれば、1401年頃に執筆された『対話』第一巻は強烈な古典主義を示すが、1405年から翌年にかけて執筆された同書第二巻は、対ミラノ戦争を経験することによって醸成されたフィレンツェへの愛国心に溢れているのである<sup>60)</sup>。この見解に対しジェロルド・シーゲルは、『対話』の枠組みが『弁論家について』におけるアントニウスによる自説撤回を模倣していることを指摘し、作品の成立時期、また、ブルーニの思想も一貫したものであると主張している<sup>61)</sup>。ガレンもこの作品を、ある主題について「賛否双方の立場」(sic et non)から検討を加える一貫した修辭的作品であるとみなしている。ブルーニは、スコラ学派の唯名論者が提唱していた形式主義的な弁証法に代わる古典的討論の模範として、この対話編を執筆したのである<sup>62)</sup>。また、チャーザレ・ヴァゾーリは、人文主義的教育が勃興していく時期においてなされた、前世紀からの文化的伝統の分別がこの作品に確認されるとしている。すなわち、ダンテ、ペトラルカ、ボッカッチョによる知的および詩的経験は受け継ぐべき遺産として、他方、スコラ的色彩を帯びた学芸と方法論の総体は排除すべきものとして描写されているのである<sup>63)</sup>。これらの諸研究を含め、従来の『対話』解釈の多くは、作品の成立経緯、また、ニッコリによる自説撤回がもつ意味については一致した見解を示してはいないものの、作品内におけるニッコリら若者たちとサルターティとの対立が最終的な和解へ至るとみなしてきた。たとえばデヴィッド・マーシュは、「ブルーニが描くニッコリは、自説撤回によりサルターティと和解しグループに復帰する」<sup>64)</sup>と述べている。

しかし、作品全体を通して、「対話者間に調和がもたらされることはない」とする見方もある。たとえばデヴィット・クイントは、この作品における対立が最終的な和解へと至らない根源的なものであるとみなしている。クイントによれば、ニッコリによるダンテ批判の撤回には、サルターティが『僭主論』(De tyranno, 1400)において示したカエサルへの好意的な評価への不満が、また、やはりニッコリによるペトラルカ批判の撤回には、1379年、サルターティがジョヴァンニ・バルトロメーイ(Giovanni Bartolomei)に宛てた手紙において展開しているペトラルカ称賛に対する反意が、それぞれ確認される<sup>65)</sup>。結局、ニッコリによ

る自説撤回は本質的な撤回として機能しておらず、むしろ「フィレンツェの人文主義者たちの世代間における対立」<sup>66)</sup>が際立つことになる。

フビーニも、『対話』におけるニッコリがサルターティを旧世代に属す文人として分別しているとみなしている。フビーニは、作品第一巻から第二巻にかけて、スコラ的思想への批判、また、「現代の文化的不毛」への嘆きが撤回されていないことに注目しているのみならず、作品中に描き出されている対立が人文主義者たちの間で現実に生じていた対立を反映している可能性も指摘している。たとえば、1405年から翌年にかけて生じたブラッチョリーニとサルターティとの間におけるペトラルカの評価をめぐる対立、また、1405年、ヴィテルボに滞在していたブルーニを叱責するサルターティによる手紙に示されている両者の思想の差異が、『対話』の背景として影響を及ぼしていると考えられるのである<sup>67)</sup>。結局、『対話』を主導するテーマは、サルターティが若者たちの思想に対して覚えていた「怒り」であり<sup>68)</sup>、この作品は、歴史的サルターティが抱いていた政治観および学問観に対し歴史的ブルーニが示した決別のあらわれとしてみなされるのである<sup>69)</sup>。さらにフビーニは、この作品の成立がサルターティの死後、すなわち、1406年3月6日以降であるとみなしている<sup>70)</sup>。

文人間において現実に生じていた軋轢が作品『対話』に反映されているという指摘は、同時代の証言からも推察される。たとえば、近代主義者、ドメーニコ・ダ・プラートは、ブルーニらの世代に属す人文主義者が示す知的傲慢さについて、「ダンテ、フランチェスコ・ペトラルカ氏、ジョヴァンニ・ボッカッチョ氏、コルッチョ氏、また、彼ら〔人文主義者〕が美德のどんな点においても、いまだ凌駕することができないその他の人士を、間違った判断によって糾弾するときに確認される」<sup>71)</sup>と述べている。さらに、やはり近代主義者の一人であるゲラルディは、『アルベルティ一族の楽園』において、サルターティとスコラ学者との交流を描いている<sup>72)</sup>。

以上のように、『対話』には、ニッコリを筆頭とする新世代に属す文人と旧世代を代表するサルターティとの間に、文化的背景の差異から生じる思想的なすれ違いが存在することが指摘され始めている。この構図を踏まえて、この作品においてサルターティが、あるべき勉学の姿をどのように描写しているのか、確認してみよう。『対話』第一巻においてサルターティが最初に提起している問題が、「討論の習慣と訓練」<sup>73)</sup>の重要性である。サルターティは討論を読書に対置させて論じることで、前者の有用性を主張しているが、そのサルターティの言葉に、若き文人たちが身を捧げている急進的な古典主義を特徴とした学問が帯びている消極的な性格が示されている。まずは、サルターティがどのような視点から持論を展開しているのかを確認してみよう。

作品中においてサルターティは、自らの経験を回想しつつ、討論の価値を称揚している<sup>74)</sup>。彼は討論を実践してきたからこそ、それが有益であることを身をもって知っているのである。こうした姿勢は、サルターティが討論の称揚を締めくくるときの言葉にも明らかである。

だが、誰かに「なぜこんなにお前のことを〔語るのか〕」と問われたら〔私はどう答えようか〕。では、「お前だけが討論者なのか」と問われたら〔私はどう答えようか〕。「まったくそのようなつもりではない」〔と答えよう〕。たしかに私は、この〔討論の〕訓練を行った多くの人物を思い出すことができた。だが、自分のことを語ろうと考えたのである。討論の有益がどれだけ大きいか、私自身の知識によって君たちに示すために。<sup>75)</sup>

サルターティが自らの経験に基づいて、討論の有用性を説いていることは明らかである。なお、マーシュは、この視点が実際のサルターティの意見を忠実に反映していることを指摘している<sup>76)</sup>。

さて、自らの経験に基づいて持論を展開するサルターティは、討論と読書を対置させ、次のように若者たちを叱責している。

しかし、ただ一点、非常に重要な一点においてだけ、君たちはあまり評価に値しないように私には思われる。というのも、勉学にかかわる事柄その他すべてについては、立派で勤勉な人物と呼ばれようとする者に必要とされるだけ、君たちが配慮と熱意を注いでいると思うからである。しかし、ただ一点、討論の実践と訓練を蔑ろにしているというこの一点において、君たちが欠けており、自分たちの利益に注意していないように思われるのである。討論以上に君たちの勉学にとって有益であろうものなど、私には思いつきもしないというのに。不死の神にかけて、繊細な事柄について知り、論じるために、いったい何が討論以上に力をもつだろうか。討論では、ちょうど至る所から多くの視線にさらされるように、対象は真ん中に置かれ、いかなる点も見逃されず、隠されたままにされず、何事もみな視線をだますことができない。いったい何が、疲労困憊し、長時間、熱心な読書を伴う勉学に飽きた心を、より癒し回復させることができようか、輪になってみなでなされる討論と比べて。そうした討論においては、誰かを言い負かしたらその栄誉によって、また、言い負かされたら恥ずかしさによって、読書および勉学へと君は熱心に燃え立つのである。討論以上にいったい何が、才知をより磨き、より鋭敏かつ巧みなものにしてくれるのか。討論においては、一瞬で問題を把握し思いを巡らし、観察し、結び付け、結論を出すことが求められる。簡単に理解されることであるが、この訓練によって磨かれると、その他の学びについても鋭敏になる。討論が我々の弁論をどれだけ磨くか、それを自由自在に操ることができるようにするかは、語るまでもない。君たちは〔討論が弁舌を磨くことを〕次の者たちに観察できる。ラテン語を知っていると豪語し読書に励むが、この〔討論の〕訓練を避けてきたため、本を持ってしかラテン語を話すことができない多くの者たちに。<sup>77)</sup>

討論がもたらす利益として、それが論題の徹底的な検証に役立つこと、読書に疲れた心を癒してくれること、また、そこでなされるやり取りにおいて知性を鋭敏にさせ、弁舌を磨くこ

とが挙げられている。このように実践的で社会性を帯びた学びの手段として称揚されている討論と比べ、読書は孤独で退屈な行為であり、また、弁舌を磨くことに寄与しないために批判されている。結局、多くの利便をもたらす討論の訓練を放棄し、学識しかもたらさない読書だけに没頭する文人は、社会性および公益性に欠け<sup>78)</sup>、有用性についての正しい判断と選択を下すことができない人物、すなわち、無思慮な人物として批判されている<sup>79)</sup>。

以上のように、『対話』におけるサルターティは、実践と経験から学ばれた知に立脚し、読書が帯びる自己完結性を批判している。ただし、注意しなければならないのは、彼が行っている批判において、読書およびそこから獲得される学識のもつ価値が否定されているわけではない点である。むしろ、読書と討論は互いに支え合い、いわば、「完全な知」を形成するものとして示されている。たとえば、討論において言い負かされた文人は、雪辱を誓い読書に没頭する。他方、相手を論破した文人も、さらなる榮譽を求めて読書に没頭する。また、読書をしている際に疑問が生じたら、文人は他者の見解を尋ねに出かけ、それを解決する<sup>80)</sup>。討論は、学識をもたらすものの自己完結的な行為である読書の欠陥を補う行為として、価値を認められているといえる。したがって、サルターティによる批判は、若き文人たちが自らの学びから討論を排除している点、すなわち、実践および経験を通して学ばれる知の価値を軽んじている点に向けられていると考えられる。勉学のあるべき姿として、読書はそれだけでは不完全であるために、批判されているのである。

『対話』においてサルターティは、若者たちが行っている勉学が討論を排除して学識だけを求めている点、つまり、読書が勉学の姿として不完全である点を批判している。では、この点を作者ブルーニはどのように捉えていたのであろうか。『対話』第一巻における「討論をめぐる討論」は、「訓練および実践が万事において有益である」というサルターティの主張によって締めくくられている<sup>81)</sup>。しかし、サルターティが議論を締めくくる直前に観察されるロベルト・デ・ロッシ (Roberto de' Rossi, c. 1355-1417) がニッコリを称賛する台詞に、作者ブルーニを含めた若い世代に属す文人の見解が示されているのではないだろうか。

ニッコロが討論の訓練にほとんど精を出さなかったことを我々は知っております。しかし、あなた〔コルッチョ〕がお認めになり、我々もまたそう思うのですが、ニッコロは十分に流暢な返答をしました。したがって、私たちが討論に精を出さないでいたからといって、なぜ私たちに対しあなたはそんなに腹を立てているのでしょうか、討論の訓練を欠く人物であっても、自らの学びによってそれを十分に行うことができるのですから。<sup>82)</sup>

ロッシは、討論の訓練を不要であるとみなしている。さらに、作品の末尾、ニッコリが行った自説撤回に対するピエロ・セルミニ (Piero Sermini, ?-1425) による称賛においても、討論の訓練については、一切、触れられていない。

ニッコロよ、私は君の語りの力にいつも驚嘆してきたが、今日はとりわけ驚いている。君にほとんど解決策が残されていないように思われた難題を、これ以上に立派で優美に論じることはできないほどに君は扱った。〔……〕君はダンテの詩を非常に注意深く学び、ペトラルカに対する愛ゆえにパドヴァに赴き、まさにボッカッチョに対する愛情のために君の私財を投じて彼の図書館を飾った。そして、その他すべての事々を放棄して、文芸と勉学に君はすっかりと身を投じた。君はキケロ、プリニウス、ウァロ、リウイウス、結局、ラテン語を用いたすべての古典作家たちに通じており、何がしかの知識を持つ人々はみな、君をたいそう称賛するほどである。<sup>83)</sup>

作品冒頭でサルターティが奨励した討論の訓練の重要性をセルミニは完全に無視して、ニッコリが示した雄弁を、彼がこれまで身を投じてきた読書の成果としてみなしている。また、登場人物ニッコリ自身も、討論の訓練を積むことなしに立派な討論を行うことで、サルターティによる「読書は不完全である」という主張を否定するのみならず、サルターティが立脚している実践的かつ経験的な知の価値までも、完全に否定しているとみなされる。もし、『対話』全編におけるスコラ的思想への批判が一貫したものであり、また、ニッコリによる自説撤回が撤回として機能しておらず、若者たちとサルターティとの間の思想的な差異が埋められていないならば、同時に、若き文人たちが学びの手段として読書だけを重視する姿勢も、作品全体を通して保全されていると考えられるのではないだろうか。

ニッコリはくわえて、「現代における文化的不毛」を「討論が不可能であること」の理由として挙げながらも、古典作品を読むことによって鍛えられた自らが討論を立派にこなすことで、自らの意見そのものを否定している<sup>84)</sup>。この作品にシーゲルは、人文学とスコラ学とを区別し、前者を称揚する意識を読み込んでいる<sup>85)</sup>。この指摘を考慮すれば、本稿前章において確認した、ブルーニを筆頭とする人文主義者が抱いていたと考えられる、「時代が示す文化的不毛から、自らだけを除外する姿勢」が、ここにも観察されることになる。

以上から、やはりブルーニは、古典の読書だけに依拠するという勉学の在り方に、絶対的な信頼を置いていたと考えられるであろう。まさにそのために、『対話』の執筆からおよそ二十年を経ても、『諸学科』などの学問論においてブルーニは読書の奨励を続けているのである（他方、彼が残した学問論において、討論については触れられていない）。したがって、ブルーニにとっては常に、読書によって学識を獲得することこそが、理想的な学びの姿であったと考えられる。すでに確認したように、ブルーニは、ニッコロ・ストロツィ宛ての手紙において、こうした人文学を「生き方と振る舞いにかかわる学問」として定義している。しかし、『対話』におけるサルターティによる「読書だけに特化した学問の在り方に対する批判」を思い起こせば、『文芸』序文においてアルベルティが描き出している文芸学に観察されるものと同種の、自己完結し社会性に欠けた読書至上主義、また、学識至上主義とでも呼ばれるべき姿勢が、ブルーニの提唱する人文学にも内在していることが明らかになるであろう。

結局、文芸学と人文学は、読書だけに特化した学びであるという共通点をもつ。そして、この点について、評価が分かれることになる。『対話』に登場する若き文人たち、また、この作品の作者であるブルーニがそうした学びに対する絶対的な信頼を示している一方、『対話』の登場人物としてのサルターティ、また、『文芸』におけるアルベルティは、読書だけに依拠した学びに対する疑念を示しているのである。

#### 4. 『文芸』の機能をめぐる仮説

『対話』においてサルターティが批判し、若者たちが肯定している人文学の姿は、『文芸』序文においてアルベルティが論じている文芸学の姿を連想させる。その学問は読書だけに依拠し、学習者に学識しかもたらさない。さらに、『対話』においてサルターティが批判し、若者たちが称賛している文人の姿も、『文芸』序文においてアルベルティが論じている文人の姿を連想させる。転向を経たアルベルティは、「過酷な人生を学習者は過ごさなければならない。然るべく、その他すべての事々を放棄して、全身全霊を尽くして文芸に身を捧げる者たちのことであると了解されたいのであるが」<sup>86)</sup>と述べているが、この文人の姿は、『対話』末尾においてセルミニが、「その他すべての事々を放棄して、文芸と勉学に君はすっかりと身を投じた」<sup>87)</sup>と呼びかけているニッコリの姿を彷彿とさせる。したがって、『文芸』においてアルベルティが論じている文芸学は、同時代における人文学と類似した特徴を帯びていると考えられる。実際、アルベルティは『文芸』と同時期に執筆されたとみなされている諸作品において、勉学および学識の価値について、繰り返し論じている。以下ではそれらを確認しながら、『文芸』を執筆することで、何をアルベルティが行っているのかについて、仮説を立てる。

『文芸』序文において論じられている文芸学は、一見、魅力的で有益に思われるが、実際には、完全に読書に依拠した実利性のかけらもない学問である。学問が示すこうした二面性について、アルベルティはさまざまな機会において論じている。たとえば、『食問対話集』第一巻に所収されている対話編、『作家』において、登場人物レピドゥス (Lepidus) は、「私は小作品の執筆に没頭し、文芸によっていくらかの名声を獲得しようと努めていた」<sup>88)</sup>と、自らの近況を報告している。このレピドゥスに対し、やはり登場人物であるリブリペータは、「私が思うに、そのように無駄に徹夜するよりも、むしろ寝ているほうが、あるいは、そんな無駄で無益な苦労はすっかり放棄するほうが、お前にとってましであろう」<sup>89)</sup>と返答している。両者が示す認識の間に観察される大幅な乖離について、執筆／勉学が名誉をもたらすと信じ込むレピドゥスが現実に対して「盲目」(«blind»)である一方、それを無駄な努力であると嘲笑するリブリペータは世の中の在り方を「見ている」(«sees»)と、ジャルツォンベックは指摘している<sup>90)</sup>。純粋なレピドゥスは、学問観の転向を経験する以前、勉学を楽しみ、それを通じて名声が獲得されると信じていたアルベルティの姿と、また、皮肉屋リブリペータは、世の中を知り、学問から現世的利益は何ひとつ獲得されないと気付いたアルベルティの姿と重なるであろう<sup>91)</sup>。

さらに、『食間対話集』第四巻に収録されており、『文芸』と近接した時期に書かれたと考えられている『死者』において、『文芸』序文に観察されるものと類似した学問観の転向を経た人物が描かれている。ネオフロヌス (Neophronus) は死後、冥界の入り口で旧友であるポリュトロプス (Polytropus) と再会し、魂となって観察してきた現世の様子を語る。ネオフロヌスは、最愛の妻が農場管理人と不義の関係にあったこと、また、息子と下僕たちが彼の死を悼むのではなく喜んでることを知り、深く傷ついた。しかし、一番の悲しみは、彼が打ち込んできた勉学の価値が、一切、評価されていなかったと理解したことである。弔問に訪れた親族と知人は、彼が大切にしていた書齋を荒らしまわり、執筆途中であった年代記を破り、そこで見つけた高価な香油を持ち帰るための包み紙にしたのである。生前、「文芸は、そこに身を投じる者たちの心の快樂にとって役立つし、後世の者たちが知識と学識を獲得するための助けになる」<sup>92)</sup>とみなしていたネオフロヌスは絶望し、「私自身、自分について次のように告白できる。つまり、私が文芸に捧げた日々、労苦、読書の習慣すべて、まさに後になり、それらがまったく無益で無駄であったと学んだのである」<sup>93)</sup>と、考えを改めている。死を契機として、人々の習わしに触れたネオフロヌスは、有益であると思っていた学問が無益なものであったことを悟り、かつての自らの愚かさを悔やむのである。

これらの作品、とくに『死者』に観察されるネオフロヌスの転向あるいは幻滅は、『文芸』序文に確認されるそれと同質であると考えられるであろう。カルディーニは、『死者』に「見た目と実態との根源的な対置」<sup>94)</sup>を観察し、ネオフロヌスは「仮面を付けた人々の間で生きたが、そのことに、決して気付かなかった。妻、農場管理人、子供、親族、下僕、友人や知人も仮面を付けていたのである」<sup>95)</sup>と述べている。ネオフロヌスはさらに、学問にもまた、「常に騙されていた」<sup>96)</sup>のである。死により悟りを開いたネオフロヌスの姿は、『文芸』序文において、文芸学から期待される見返りは学識と労苦への耐性だけであると軽口を叩き、その点について無自覚なままにこの学問に身を投じる人物を「憐れまれるべき、または、叱り飛ばされるべきである」と断罪している作者アルベルティの姿と重なることになる。以上のように、アルベルティは『文芸』においてのみならず、その他の作品においても、勉学の価値について意識的に論じているのである。

さらに、勉学が帯びている「見た目と実態における相反」は、アルベルティが論じている文芸学にだけ観察されるものではなく、人文学および人文主義的教育が内包していた問題でもある。グラフトンとリサ・ジャーディンは、人文主義的教育が、その称揚言説に観察される理想通りに機能していたのかについて疑問を抱き、ゲアリーノ・ゲアリーニ (Guarino Guarini, 1374-1460) が行っていた教育に注目している<sup>97)</sup>。ゲアリーニは折に触れて、人文主義的教育が学習者の人格を育成すると述べている。しかし、グラフトンとジャーディンによれば、ゲアリーニが実際に行っていた教育は学習者の人格を養うことを目的とするというよりも、優れた言語運用能力を教授するものであった。ゲアリーニが主宰していた学校において、まず、暗記と反復、また、問答教授法を通じて、基礎的な言語運用能力を獲得することが目指される (グラフトンとジャーディンはこうした学習方法に「退屈さと疲労」<sup>98)</sup>を

観察している)。さらに、歴史、詩、天文学／占星術や地理といった諸学科におけるテキストから、正しい読み書きに必要とされる、語源、地理、神話にかかわる情報が教授される。これらの知識を習得した学生は、続いて『ヘレンニウスに与える修辞学』(*Rhetorica ad Herennium*)を用いて修辞を学び、さらに、キケロ『老年について』(*De senectute*)あるいは同『友情について』(*De amicitia*)といった道徳的著作を学ぶことになる。だが、この段階においても、講義の焦点は各作品の思想内容ではなく、そこで使用されている語彙の解釈に当てられており、結果的に、生徒の人格を育成することよりも言語運用能力を鍛えることが目的とされていた<sup>99)</sup>。結局、グアリーニによる人文学の称揚と、彼が実際に行っていた授業の内容との間には、「人間性の威厳を掲げる教育者としての人文主義者による主張と、教室内の授業において行われていた狭量な煩雑さとの間の齟齬」<sup>100)</sup>が確認されることになる。アルベルティが『文芸』において描写している「監獄のような学校あるいは図書館」は、このような人文主義的教育の実態を念頭に置いたものではないだろうか<sup>101)</sup>。

グアリーニが主宰していた学校において、教育とは読み書きを正しく行うための言語運用能力の獲得を目指したものであり、人格を磨くために有益であると称揚されている知識も、結局は前者の獲得を補助するために教授されていた。ブルーニによる主張にも、同様の傾向が観察される。たとえば、すでに確認したニッコロ・ストロツィ宛ての手紙であるが、ここでブルーニは、勉学とは「読み書きにおける熟達」と「事物にかんする知識」双方の獲得であると定義し、それぞれを簡単に説明した後、「したがって、君は〔道徳〕哲学者によって学識深くなるのみならず——これはこの学問の基礎である——詩人、弁論家、歴史家によっても磨かれていなければならない、君の弁論が豊かで多様性を持ち、万事において粗雑でなくなるために」<sup>102)</sup>と続けている。人格を鍛えるために有益であるとして称揚されている「事物にかんする知識」も、最終的に、雄弁の獲得という目標に従属しているのである。さらに、1421年に執筆された『正しい翻訳について』(*De interpretatione recta*)において、ブルーニは次のように述べている。

まず、原典で使用されている言語にかかわる知識が必要となる。その知識はわずかでも並みでもなく、膨大で深く行き届いたもので、哲学者、弁論家、詩人、その他すべての作家による作品を大量に長きにわたり読むことで、磨かれたものでなければならない。これらすべてを読まず、頁を繰らず、全体を読み返さず、理解していない人物は誰も、語彙の意味内容も、指示内容も理解できないのである。とくに、いわば、文芸の至高の教師であるアリストテレスとプラトンが、古代詩人や弁論家、また、歴史家による言葉と意見に満ちた、非常に優美な執筆方法を用いたからであり、さらに、字面からと習わしからとでは別個の内容を表現する比喩表現と慣用表現が、しばしば生じるからである。<sup>103)</sup>

『諸学科』やニッコロ・ストロツィ宛ての手紙において「事物にかんする知識」と呼ばれ



ている諸学科が、ここでは言語運用能力を磨くために推奨されていること、また、アリストテレスとプラトンが、彼らが論じた思想内容についてではなく、彼らの著作に観察される雄弁について称賛されていることが明らかである。こうした傾向がグアリーニによる教育法と共通しているならば、「人格を鍛え、名声、富、快樂を与えてくれる学問」というブルーニの言葉は、やはりそのまま鵜呑みにできるものではない。むしろ、『対話』においてサルターティが描写したような、「退屈で社会性に欠けた学問」の姿は、人文主義的教育論および学問論において、決して触れられることがない、人文学および人文主義の一側面を描写したものののではないだろうか。

さて、学問の価値をめぐるアルベルティの姿勢へと視線を戻すと、『文芸』序文や『死者』に明らかな「勉学がもたらす利益についての幻滅」は<sup>104</sup>、同時代の学問が内包していた問題を彼が認識していたことを示すのではないだろうか。カルディーニは、『文芸』において論じられている「文芸が内包する根源的な矛盾」<sup>105</sup>について、次のように述べている。

実際、『文芸』の論旨は次のようなものである。文芸は本質的に、解消できないほどに矛盾している。それが知と美德、知識と真実を獲得するための手段であるかぎり、あらゆる人間活動の頂点に位置し、人々を教育し、解放し、完成させ、幸せと最も純粋な喜びを与える。しかし、それは同時に失望させ、見せかけの間を歩き来し、苦しみに満ちた拷問、強制と自制の最も恐るべき形であり、そして、自然／本性に反する。<sup>106</sup>

『文芸』において、文芸（学）が帯びる矛盾が論じられていることを認めながらも、カルディーニはこの作品に描写されているきわめて禁欲的な学問観を、アルベルティが育んだ、市民的人文主義とは対極に位置する学問の理想像としてみなしている。他方、カルディーニは、皮肉と嘲笑に満ちた『食間対話集』と『モムス』において、アルベルティが「うわべと本質との間、また、見せかけと真実との間における乖離を気にかけて、あらゆる事柄の正体を暴いた」<sup>107</sup>と述べている。『文芸』序文において表明されている作者アルベルティの「転向」あるいは「幻滅」に注目すれば——カルディーニはこの点を見逃している——『文芸』も、『食間対話集』や『モムス』に観察されるものと同様の視点に立脚した作品であるとみなすことが可能になるのではないだろうか。この点については、『食間対話集』をめぐるダッシャとバッケッリが示している見解も参考になるであろう。彼らは、この作品集に観察される皮肉とパロディの根底に、「愚か者による経験を通じて真実が語られる」という特徴が存在することを指摘している<sup>108</sup>。この特徴は、『文芸』にも観察される。なぜなら、『文芸』におけるアルベルティは、文芸学が有益であると素直に信じそこに身を投じた結果、経験を通じて「過酷な文芸学からは実利は何も獲得されない」という「真実」を悟ったからである。さらにダッシャとバッケッリは、『食間対話集』が帯びている笑いが、「話者の卑小さと、その人物が発する金言の合理的な真実味との間に存する不均衡」<sup>109</sup>から生じているという特徴を指摘している。『文芸』献辞において、「見せかけの敬意と卑下に彩られた先輩文人と若

者との対置」が設定されていることを思い起こせば、この作品にも、魅力的な学問像を描き出しているブルーニのような偉大な文人とは対極に位置する視点から、いまだ駆け出しの文人にすぎないアルベルティがその学問の別の側面を暴露するという構造が見出されるのではないだろうか<sup>110)</sup>。

以上の点を考慮すると、この作品に描かれている文人像および学問像は、モンタルトあるいはジャルツォンベックが主張しているような、「禁欲的学問観の系譜」に連なるものではないように思われてくる。むしろ、この作品に同時代の文人および学問を素材／対象とした戯画を読み込むオッペルの見解が、より正確にこの作品が帯びる性格と機能を言い表していると考えられる。彼は『文芸』序文について、次のように述べている。

〔学究者が期待できる〕報奨は、心の高貴さ、精神的・心理的な充足感、美德および知という観点におけるものである。これらの報奨は、ストア派の賢者によってしか喜ばれない。こうしたストア派の役割を、この会話においてアルベルティは引き受けている。ストア派による判断、価値基準、心理的知覚は、一般大衆のそれらとはあまりにもかけ離れており、彼らの態度を完全に理解不能なものとしているのであるが。これは人文主義的作品において非常に一般的な戦略であり、かなり自覚的に自らの立場を貶める結果となる手法である。「ただストア的思想の持ち主しか、文人になろうなどとは望まない」ということが、アルベルティによる主張である、ただし、明らかなことであるが、ストア主義が現実世界や現実の生活と、まったく関係しないことを我々は知っている。我々はみな、ストア主義者が、実際には滑稽な存在であることを知っており、このことを、この作品は明らかにしている。アルベルティが同時期に執筆した他作品と同じように、この作品は喜劇である。徹頭徹尾、語り口は辛辣、議論は辛口であるが、こうした調子はアルベルティが喜劇的作品にふさわしいとみなしているものである。文人は、からかいの対象とされている。文人は滑稽に描かれているのである。<sup>111)</sup>

オッペルによるこの指摘を踏まえれば、『文芸』には、作者が理想とする学問観は直接的には示されておらず、そこで論じられている「あるべき文人の姿」とみなされてきた禁欲的文人像が、『死者』に見られるものと同質の戯画であることになる。このように捉えることで、文人が期待できる報奨をめぐる軽口、また、図書館や学校を監獄にたとえるといった誇張の姿勢も、同時代における一般的な文人観と学問観に対する揶揄としてみなされることになる。

『文芸』において論じられている、完全に読書だけに立脚し、学識しかもたらさないために社会性に欠ける文芸学は、一見、同時代における学問論および教育論において論じられている人文学の姿からは、遠くかけ離れているように思われる。しかし、アルベルティが描き出している文芸学は、『対話』においてサルターティが批判している人文学の姿と重なる。実際、グアリーニが行っていた教育、また、ブルーニが残した言葉から垣間見えるように、

人文学を称揚する言説とその実態との間には、大幅な乖離が存在したと思われるのである。そしてアルベルティは、『作家』や『死者』といった作品が示すように、学問の価値が二面的に評価されることを認識している。したがって、『文芸』序文において表明されている転向あるいは幻滅は、アルベルティがこの作品においても、人文学および人文主義の理想像と実態との間に存在する乖離を暴露するつもりであったことを裏付けるのではないだろうか。もし、このようであるならば、人文学および人文主義が隆盛を誇っていた1430年前後において、「学問がもたらす不利益」に焦点を当てた『文芸』は、たしかに「新奇」で「十分に論じられてこなかった」主題を扱う作品であるといえる。以下では、この仮説を念頭に置きつつ、同時代の思想、とくに、ブルーニの言葉に注意を払いながら、『文芸』本論を読み直していく。まず、次章では、アルベルティが文人と快樂との関係を論じている箇所を検討し、彼が同時代の学問界における諸動向を十分に認識したうえで、人文学を揶揄している可能性を確認する。

### 第3章

#### 文人と快樂：あらゆる快樂の享受から排除されている文人

アルベルティは、あらゆる快樂を享受することから文人は疎外されているという立場から、「学究者は眠らず、食事をとらず、休息せず、快樂をまったく覚えない」<sup>1)</sup>と述べている。マーシュは、アルベルティのこの言葉が、ペトラルカの理想、つまり、「食事を忘れること、書物に囲まれて徹夜を楽しむこと」<sup>2)</sup>を喜びとする文人像を誇張したものであるとみなしている。マーシュによれば、ペトラルカとアルベルティの両者ともに、セネカの思想に由来する禁欲性に立脚して文人を論じているのである<sup>3)</sup>。また、グレイソンも、ペトラルカが理想とした禁欲的な文人像と『文芸』において論じられている文人像との間に共通点を読み込んでいる<sup>4)</sup>。しかし、これらの指摘が妥当であるのか、疑問が残る。なぜなら、ペトラルカが読書を「喜びを伴う」行為としてみなしている一方、アルベルティによれば、文人は「快樂をまったく覚えない」からである。

実際、ストア的な禁欲性、ゴッジ・カロッティの言葉を借りるならば「英雄的な禁欲性」<sup>5)</sup>を、アルベルティによる主張に読み込む必要はないと思われる。『文芸』に描かれている文人は、自発的に諸快樂を放棄して過酷な勉学に取り組むわけではない。むしろ、文人は常に批判に怯える哀れな存在として描かれている。なぜなら、文人は、もし、読書を疎かにして気晴らしに興じれば、批判されるからである。また、勉学に専念している証拠として、知的成長を示さないかぎり、やはり批判されるからである。結局、文人は批判を受けて不名誉という汚名を着せられることを恐れているために、感覚的諸快樂に興じることを諦めて、精神的諸快樂をまったくもたらさない読書に専念することを強制されているのである。

勉学あるいは読書がもたらす精神的快樂など存在しないとするアルベルティの主張は、人文主義的教育論および学問論に観察される「読書の称揚」と比較すると、完全に異質なものである。しかし、アルベルティによる議論に、同時代の思想からの影響が観察されないわけではない。たとえば、感覚的諸快樂の一例としてアルベルティが挙げている「ダンスへの参加」は、人文主義的教育論において、文人を目指す若者にふさわしい息抜きであるか否かが論じられている。ただし、一般的な教育論において、若者によるダンスへの参加の是非は、道徳的観点あるいは教育的観点から論じられている。他方、アルベルティによれば、そもそも文人がダンスに参加しようとしても、他の若者たちがそれを拒絶する。このように述べているアルベルティの視線に、揶揄の意識が観察されるのではないだろうか。

また、「文人は、読書を疎かにして自らの知的成長を示すことができなければ批判され、不名誉という汚名を着せられる」と、アルベルティは論じているが、この主張は、同時代の学問界において実際に生じていた事件を下敷きにしている可能性がある。他者の作品を批判するだけで自らは執筆しない文人として批判されていたニッコリが、グアリーニ、ロレン

ツォ・ディ・マルコ・ベンヴェヌーティ (Lorenzo di Marco Benvenuti, c. 1383-1423)、さらにブルーニから、「勉学を疎かにしたために自らの知的成長を証明することができない似非文人」として、激しく糾弾されていたからである。ニッコリに対するこれらの糾弾をアルベルティが参照していた可能性が高い以上、『文芸』における主張にも、その影響を読み込むことができるのではないだろうか。

本稿前章において確認したように、「有益で楽しい学問」として称賛されている人文学は、実際には、読書だけに依拠しているために、ときとして過酷で退屈な学問として立ち現れる。実際、ニッコリに対する糾弾書、『口さがない怠け者に対する糾弾』においてブルーニが提示している理想的文人は、行動的生を完全に放棄して読書に専念する禁欲的な存在として描かれている。この理想的文人が身を投じている学問の姿と、『諸学科』やニッコロ・ストロツィ宛ての手紙において称賛されている人文学の姿との間には、明らかな齟齬が観察されることになる。

もし、同時代の学問界におけるさまざまな動向、また、学問をめぐる諸言説が孕むこうした矛盾を意識しながら、アルベルティが文人と快楽との関係について論じているならば、彼が描き出している「批判と不名誉に常に怯えている文人」は、称揚言説においては決して語られることのない、人文学の一側面を暴露していることになるであろう。こうした可能性を念頭に置きながら、本章では、まず、読書から得られる快楽をめぐる一般的な言説を概観し、それらとの比較において、アルベルティによる主張が異質であることを確認する。続いて、彼の主張を「感覚的諸快楽」(voluptates sensi) をめぐるものと「精神的諸快楽」(voluptates animi) をめぐるものとに大別して、それら各々に、同時代の学問界からの影響が存在する可能性を確認する。最後に、「アルベルティは『文芸』において、人文学が孕む二面性、とくに、その消極的な側面を暴露しているのではないか」という、本稿前章において立てた仮説の妥当性を検討する。

## 1. 「監獄」としての勉学あるいは読書、「紙片と死んだ羊」としての書物

上述のペトラルカによる言葉に明らかなように、読書、すなわち勉学は、喜びに満ちた甘美な活動として、伝統的に描き出されてきた<sup>6)</sup>。アルベルティはしかし、文人が過ごすべき人生について、「完全な喜び、楽しさや嬉しさなど、君は何も覚えはしない、我が学究者よ。君は文芸に専念し、書物に埋まり、紙片の間に永遠に葬り去られるのだから」<sup>7)</sup>と述べている。文人は読書に専念することを強制されているために、勉学以外の行為から獲得される感覚的諸快楽を味わうことを断念しなければならない。さらに、勉学あるいは読書自体が精神的快楽をもたらすこともない。そこで、アルベルティによるこの主張の特異性を知るために、まず、「読書あるいは勉学」、また、「書物」をめぐる描写が、同時代における諸言説と『文芸』における言説との間において、いかに隔たっているのかを確認しておこう。

同時代の教育論および学問論において、読書あるいは勉学は、快楽および慰めをもたらす行為として評価されている。たとえば、『諸習慣』においてヴェルジェーリオは、勉学は人々

の心に「驚くべき快楽を」(«mirabiles voluptates») もたらし、さらに、行動的生において疲弊した心を慰めてくれると述べている<sup>8)</sup>。こうした認識が一般的であったことは、ブルーニが残した手紙からも確認される。たとえば、1409年、教皇庁を退職しフィレンツェへ帰国した際にピエトロ・エミリアーニ(Pietro Emiliani)に宛てた手紙において、ブルーニは「慰め」(«solacium»)としての勉学を楽しんでいると、自らの近況を報告している<sup>9)</sup>。また、1416年、コンスタンツ公会議からフィレンツェに帰還した後にジョヴァンニ・コルヴィーニ(Giovanni Corvini)に宛てた手紙においても、人文学を楽しんでいると述べている<sup>10)</sup>。さらにブルーニは、1424年、ピレオ・デ・マリーニ(Pileo de' Marini)へ宛てた手紙、また、1433年から翌年にかけてチリーアコ・ダンコーナ(Ciriaco d'Ancona)へ宛てた手紙において、勉学および読書を魂の「避難所」(«refugium») <sup>11)</sup>と呼んでいる。くわえて、1416年から1417年にかけて彼が行った、アリストテレス『ニコマコス倫理学』新訳に付された教皇マルティヌス五世(Martinus V)宛ての序文、また、1418年頃、アントーニオ・カシーニ(Antonio Casini)に宛てた手紙において、「文芸学」(«studia litterarum»)を平穏な「港」(«portus»)と呼んでいる<sup>12)</sup>。ブルーニも、行動的生において疲弊した心を癒す行為として、勉学、また、読書を評価していたのである。

他方、アルベルティが勉学あるいは読書を「快楽」や「慰め」をもたらす「避難所」や「港」としてみなしていないことは、彼が図書館と学校を「監獄」(«carcer»)と呼んでいることから明らかである<sup>13)</sup>。書物と監獄を結びつける表現は、1416年、ブラッチョリーニがザンクト・ガレン修道院においてクインティリアヌス『弁論家の教育』(*Institutio oratoria*)の完全写本を発見した際に、グアリーニに送った報告に観察される。ブラッチョリーニはこの作品を擬人化し、「彼は死刑囚のように怯え、粗末な服を身にまとい、手入れしていないひげを生やし、髪はほこりまみれで伸び放題で、まさにその顔つきと身なりで、いわれのない判決に従っていると示していた」<sup>14)</sup>という状態で、「身の毛のよだつ暗い監獄に」(«in teterrimo quodam et obscuro carcere») <sup>15)</sup>繋がれていたと述べている。また、時代を遡れば、「監獄としての図書館」は、1350年代後半に成立したとみなされている、ペトラルカ『幸・不幸への対策について』(*De remediis utriusque fortunae*)にも確認される。ペトラルカは書物を大量に所有することの是非を論じ、書物を収集するだけで満足する人物への批判として、「お前は多くの書物を鎖に繋いでいる。それらの書物は、もし、外に出てきて喋ることができるならば、自分たちを『私的な監獄に繋いだとかどで』(«privati carceris»)、お前を訴える」<sup>16)</sup>と述べている。ペトラルカはさらに、最終的に1371年に完成した『孤独な生について』(*De vita solitaria*)においても、文芸と監獄とを関連付けている。孤独な閑暇は勉学に費やされるべきであると主張しているペトラルカによれば、「文芸に欠ける孤独な生活は、追放、『監獄』(«carcer»)、拷問である。文芸を足してみよ、すると、それは祖国、自由、喜びへと変わる」<sup>17)</sup>のである。

ブラッチョリーニやペトラルカの言葉に明らかなように、図書館は本来、「作家たちが監禁され鎖に繋がれる場所ではなく、彼らが人々と会話することができる場所」<sup>18)</sup>としてみな

されていた。しかし、『文芸』において図書館は、すべての快樂を放棄することを強制され、読書の義務に縛り付けられた文人が閉じ込められる監獄として描写されている。

こうした事々のため、文人が、彼らを縛り付けている労苦をどれも放棄したりゆるめたりしてはならないことは明白である。また、それらのゆえに、彼らは他人の意見に従って生きなければならず、若者に与えられた贈り物、若さの甘美さ、人生の華、さらには全生涯を、紙片と死んだ羊——書物をこう呼ぼう——の間に葬り去らなければならず、まるで、終身刑の監獄であるかのようにそこに閉じ込められ、自然／本性に抗い続ける必要が生じるのである。<sup>19)</sup>

文人は読書に専念しなければならない。そして「紙片と死んだ羊」、すなわち書物とともに過ごされる人生は、港でも避難所でもなく、「終身刑の監獄に」(«perpetuo carcere») 繋がれているも同然なのである。勉学あるいは読書についてアルベルティが下している評価が、「人を自由にする」人文学を称揚する伝統的な諸言説が示すそれとは大きく異なっていることが、明らかである<sup>20)</sup>。

アルベルティは、書物を「紙片と死んだ羊」と呼んでいる。この表現も、同時代における一般的な認識とは、大幅に異なっている。同時代において書物を表現する際に用いられた言説として、「書物との対話」というモチーフが知られている<sup>21)</sup>。一例として、ヴェルジェーリオ『諸学科』において描写されている「書物との対話」を確認してみよう。

したがって、いったいどんな人生が、常に読み書きを行うこと以上に喜ばしく、たしかに有益でありえましょうか。そうすることで、現代人はかつて起きた事々を知り、また、後世の人々と語り、このようにして、過去も未来もすべての時代を我々のものとするのです。私は呼びましょう、ああ、書物という輝かしき知識の総体よ。そして、キケロが正しくも呼んだように、ああ、喜ばしい家族よ。疑いもなく、書物は誠実かつ忠実な家族なのです。書物は騒ぎもしなければ叫びもせず、強欲でも貪欲でもなく、傲慢でもありません。命じられれば語り、また、黙るのです。そして、あらゆる命令に従う用意が常にできております。あなたが望むことについて望むだけ語り、それ以外の場合は黙っています。<sup>22)</sup>

書物とは、文人にとって「喜ばしい家族」あるいは「喜ばしく常にそばにいる仲間」<sup>23)</sup>なのである。こうした「書物との対話」というモチーフの背景には、ヴェルジェーリオの言葉に確認されるように、「言説は書物を媒介として時空を超える」という認識が存在するが、この認識はブルーニによっても共有されている。彼は、1428年から1435年の間にグロスター公ハンフリー(Humphrey di Lancaster)に宛てた手紙において、「唯一このことにより、不在の者が立ち現われ、より凄いことですが、死者もまた生きるのです。空間的距離も時間的距

離も、この対話を阻害しません」<sup>24)</sup>と、読書を称賛している。彼はまた、『ニコマコス倫理学』新訳序文において、キケロを引きながら、書物を「古き友人たち」と呼んでもいる<sup>25)</sup>。

『文芸』を執筆した際に、アルベルティはこうした「書物との対話」というモチーフを意識していたと思われる。なぜなら、彼は「図書館」(«bibliotheca»)、「文芸／書物」(«littere»)、「諸学科」(«discipline»)を擬人化し、文人に対し語りかけさせているからである<sup>26)</sup>。しかし、『文芸』において、これら擬人化された図書館、文芸／書物、諸学科は、文人にとって「喜ばしい家族や仲間」として描かれてはいない。

もし、君が服を欲しがれば、図書館が言うのではないか、「お前はこの金を私に負っている、だから禁じる」と。もし、君自身が狩り、音楽、格闘技や運動を行えば、文芸／書物が言うのではないか、「お前はその労力を我々にかけて奪った、だからお前に名声を与えはしない」と。もし、君が何かの着想、絵や図形を研究すれば、諸学科が言うのではないか、「お前はこうした活動で我々を裏切っている、だからお前には、最高の事物にかんする学識を与えない」と。<sup>27)</sup>

アルベルティは、1440年の作である『テオジェニウス』において、直接的に「書物との対話」のモチーフを用いているが、この箇所材源として、ペトラルカ『孤独な生について』における「書物との対話」が指摘されている<sup>28)</sup>。さらに、『文芸』と近接した時期に執筆されたとみなされている『死者』に、「書物が後世にあたえる利便」をめぐる言及が確認される<sup>29)</sup>。したがって、『文芸』における図書館、文芸／書物および諸学科の擬人化も、「書物との対話」というモチーフを念頭に置いたものとしてみなすことができるのではないだろうか。

ほとんどすべての社交を禁じられた文人に許されている会話は、この「図書館、文芸／書物、諸学科との対話」だけである<sup>30)</sup>。だが、この対話は甘美で慰めを与えてくれる対話ではない。図書館は蔵書を増やすことを命じ、文芸／書物は読書を命じ、諸学科は学ぶべき学問の取捨選択を命じているからである。アルベルティ自身が、「これら書物と文芸のもと、非常な労苦と徹夜により文芸の学びを深めないかぎり、文芸自体が、消えることのない非常な不名誉という脅しをかけてくる」<sup>31)</sup>と述べているように、これらの対話は文人に対する慰めではなく、脅迫として機能している。

以上のように、『文芸』においてアルベルティは、図書館、また、そこで行われる勉学あるいは読書を監獄として、さらに、文芸／書物を友人ではなく脅しをかけてくる敵として描写している。こうした認識が、ペトラルカを含め、人文主義者の思想に観察される学問観および書物観と大幅に異なっていることは明らかである。したがって、ペトラルカとアルベルティの思想の間に同質の禁欲性を読み込むことには、疑問が残るのである。むしろ、アルベルティによる言説が、同時代に観察されるトポイを下敷きにしたものであるならば、彼が



『文芸』において提示している学問像および文人像は、同時代における学問観および文人観を素材／対象とした戯画としてみなされうることになるであろう。

以上のような視点から、アルベルティは快楽を感覚的諸快楽と精神的諸快楽とに大別し、それらのどちらも文人は享受することができないと主張している。そこで、アルベルティが人文主義的諸言説、また、同時代の学問界における動向を意識したうえで、それらを揶揄していた可能性を、まずは感覚的諸快楽をめぐる議論について確認してみよう。

## 2. 感覚的諸快楽を禁止されている文人

### 1) 文人と高貴な若者との対置

快楽と文人との関係を論じる際の大前提として、「勉学あるいは読書に起因する労苦と心労に常に苛まれる文人は、あらゆる快楽を享受することができない」と、アルベルティは主張している。

幼年期から生涯にわたり、文人が労苦と徹夜に苛まれて圧迫され、終わりなき心労と苦悩から決して解放されることがないことを、我々は目にしている。そのために、かくも過酷な人生において、彼らが、たとえ些細なものであろうとも、快楽の気配がする事物を多く見出すなどと、誰も簡単には信じはしない。<sup>32)</sup>

若者には、結婚式、ダンスや歌、リラの演奏といった「彼ら〔若者の〕高貴な仕事」<sup>33)</sup>、さらに、馬や犬の飼育、肉体の鍛錬といった「若者に品格と飾りをもたらすすべての事々」<sup>34)</sup>を楽しむことが許されている。しかし、監獄である勉学に身を捧げ、紙片と死んだ羊を読み続けることを課された文人だけは、こうした感覚的諸快楽に興じることを諦めなければならない。

マリアンジェラ・レゴリオージは、一般的な若者が楽しむ感覚的諸快楽が、『文芸』において肯定的な表現を用いて描写されている点に注目している。他方、若者にふさわしい活動としてみなされている諸快楽を享受することができない文人は、社会から孤立した存在として描き出されている。レゴリオージによれば、アルベルティはこの対置により、「知識人による市民的対話への参加」<sup>35)</sup>というフィレンツェの学問界が示していた特徴のひとつに対する拒絶を表明しているのである。モンタルトも同様に、アルベルティが設定している「諸快楽と勉学」という対置に注目している。この対置は、諸快楽を享受することが許されている若者と、それらすべてを禁じられている文人との区分を明確にすることで、後者が身を捧げている「禁欲的な任務」<sup>36)</sup>を構築している。また、『家族論』において、乗馬などの気晴らしが青少年の教育の一環として推奨されている点に注目し、こうした感覚的諸快楽は、「家柄のよい子息に対する一般的な教育」が論じられている『家族論』においては称揚されるが、「専門的文人の教育」が論じられている『文芸』においては禁止されなければならないとする解釈もなされている<sup>37)</sup>。

これらの解釈はすべて、「一般的な若者」と「文人」との間にアルベルティが区分を設定しているとみなし、『文芸』における快樂享受の禁止に、何かしら崇高な、ストア的な禁欲性を読み込んでいるといえる。他方、オッペルは、本稿前章において確認したように、ストア的賢者を揶揄する喜劇的な作品として、『文芸』をみなしている<sup>38)</sup>。そこで、アルベルティによる快樂をめぐる議論に、ストア的な禁欲性、または、それに対する戯画のどちらを読むべきであるのかを検討するために、感覚的諸快樂のひとつ、ダンスへの文人の参加が論じられている箇所を確認してみよう。

文人がダンスへ参加することについて、アルベルティは次のように述べている。

実に、その他のことは省くとして、結婚式、ダンスや歌、若者の気晴らし、こうした楽しい行為が、どれだけ文人の出席を拒絶し憎むのか、誰が知らないというのか。リラの演奏やダンスといったその他の甘美な技芸は、あらゆる若者たちにわずかではない称賛をもたらし、彼らの高貴な仕事としてみなされている。こうした技芸に人並みに熟達している人物は、みなから歓迎され、喜ばれる。したがって、こうした技芸にいくらか通じているとみなされる人物はみな招かれ、そこに呼ばれるのである。ただし、文人だけは拒絶され、排除される。というのも、もし、いつものように青白い顔をした文人が、こうしたダンスに近づけば、無論のこと、みな笑いものになり、やっかいもの扱いされることであろうから。あるいは、もし、彼ら文人がそこに混ざれば、どれだけの嘲笑を掻き立てることであろう、どれだけの非難を耳にし続けることになるであろう。歌ったり踊ったりする文人に、いったい誰が怒りを覚えないであろうか。彼ら文人は、道化師、役者、そして非常に軽薄な人物として自らがみなされていることに気づき、もし、良識さえ持っていれば、そのことは悔やまれ、悲しまれることになるであろう。／したがって、他の者たちに喜びをもたらす事柄が、文人には悲しみをもたらす。他者に名誉をもたらす事柄が、文人には批判をもたらす。他者が招かれる場所から、文人は排除される、〔……〕。<sup>39)</sup>

引用箇所の末尾に注目すれば、アルベルティが「一般的な若者」と「文人」との間に区分を設けていることは明らかである。しかし、その区分は、文人を禁欲的で何かしら崇高な存在として、他者から区別しているわけではない。むしろ、感覚的諸快樂に興じることが許されている若者こそが、高貴な存在として描かれており、文人はそうした気晴らしから強制的に排除され拒絶される立場に置かれている。この描写には、「文人が帯びている禁欲性」を読み込むよりも、オッペルに従って、「文人に対する揶揄」を読むべきではないだろうか。この箇所で描写されている文人について、ベネッティ・ブルネッリも、「一般的に人々の手が届く範疇にあるすべての事物は、文人によって拒絶されなければならない。アルベルティはしかし、よりよい選民としてではなく、笑いもの、道化師として、文人を描写することになる」<sup>40)</sup>と述べている。文人は、たとえダンスに参加することを望んでも、他者から拒絶され、

その快樂の享受から強制的に排除される哀れな存在として描き出されているのである。

学問に身を投じた若者がダンスへ参加することの是非は、同時代における教育論においても、「勉学の合間における気晴らし」の一環として論じられている。たとえば、ヴェルジェーリオは勉学の合間における休息の必要を説き<sup>41)</sup>、そのための活動として、球技、狩り、鳥撃ち、釣りを挙げ、また、休息したり、乗馬したり、散歩することや、冗談や軽口で楽しむこと、さらに、歌やリラを演奏することを推奨している<sup>42)</sup>。これらの息抜きが若者の心身の健康にとって有益である一方、ダンスは彼らの道徳的退廃を招きかねないために否定されている<sup>43)</sup>。ヴェルジェーリオとは異なり、グアリーニは若者がダンスへ参加することを容認している。1434年頃、レオネッロ・デステ (Leonello d' Este) に宛てた手紙において、彼は球技や水泳といった活動、また、リラを演奏し歌って安らぐことを若者にとって有益な息抜きとして挙げている<sup>44)</sup>。グアリーニはさらに、クインティリアヌスの教えに従い、こうした種の息抜きのひとつとして、ダンスの価値も認めている<sup>45)</sup>。クインティリアヌスがダンスを肉体鍛錬として捉えていることを踏まえれば<sup>46)</sup>、グアリーニはダンスが帯びる教育的価値を評価していたとみなされる。

『文芸』におけるアルベルティによる忠告が、ヴェルジェーリオによる主張に明らかな道徳的視点、また、グアリーニによる主張が立脚している教育的視点のどちらも欠いていることは明白である。アルベルティは同時代における教育論に観察される主題のひとつ、つまり、「若者の息抜きとしてダンスは認められるか否か」という問題を、そうした快樂からの文人の強制的な排除という独自の視点から論じているのである。そして、この視点は、オッペルあるいはベネッティ・ブルネッリが指摘しているように、文人に対する揶揄として機能していると考えられる。実際、『家族論』第一巻、若者の教育が分析されている箇所において、アルベルティはダンスがもつ肉体鍛錬としての価値を、文人であるリオナルドに論じさせている<sup>47)</sup>。したがって、アルベルティは、ダンスが同時代における教育論のテーマとして論じられていることを十分に認識したうえで、『文芸』においてそれらの言説を歪曲させているとみなされるであろう。

さらに、馬や犬の飼育から得られる感覚的諸快樂をめぐるアルベルティの主張においても、それらがもつ道徳的価値や教育的価値は問題にされていない。アルベルティは、高貴な若者にふさわしいこれらの諸快樂に、読書を対置させている。

もし、文人が馬や犬の飼育、肉体の鍛錬、また、自由で高貴な人物にふさわしいその他の活動に心血注いで打ち込みたいと思っていたら、彼の心はどれだけ苦惱で満たされることであろうか。若者に品格と飾りをもたらし事々すべてを放棄して図書館にこもることを、不名誉への怖気によって強制されるのだから。彼には、ランプと書物以外、たとえ、最高で高貴きわまりない物事であろうとも、何事も扱うことが許されないのである。そして、それら他者にとって非常に称賛に値する事々は、勉学の邪魔となり、みなを批判へと掻き立てるため、我々によって放棄されるのだが、信じてほしい、それが

大きな苦しみを伴わないわけではないと。48)

この箇所においても、「自由で高貴な若者」と「文人」との間に区分が設けられていることは明らかである。そして、この区分も、文人がダンスから排除されることが論じられている箇所に観察されたそれと同じく、「高貴な諸快樂からの文人の排除」を揶揄していると考えられる。実際、馬や犬の飼育、すなわち狩りや肉体鍛錬は、ヴェルジェーリオによっても、グアリーニによっても、高貴さを認められている息抜きである。したがって、この箇所に観察される対置においても、文人の禁欲性が奨励されているというよりも、感覚的諸快樂の享受から排除され、そのことに苦悩する文人の惨めさが揶揄されているとみなすべきであろう。さらに、この箇所におけるアルベルティの主張にも、道徳的観点やストア的な禁欲性が欠けていることが明らかである。むしろ文人は、勉学を疎かにした場合に避けることのできない不名誉と批判を恐れるために、そうした息抜きを泣く泣く放棄せざるをえないのである。

文人を若者一般と対置させることで、前者の惨めさを誇張するという手法は、「文人は恋愛の快樂に身を委ねることはできない」というアルベルティの主張にも観察される。色欲が勉学の妨げとなるという伝統的な主張は、たとえば、ヴェルジェーリオによる教育論にも観察される。

したがって、若者たちができるかぎり長く純潔を保つように努めなければなりません。早熟な愛欲は心身の力を弱めます。こうしたことは、もし、彼らがダンスなどの遊び、また、女性とのあらゆる接触から遠ざけられれば、なされるでしょう。あるいは、もし、彼らがこうした事々について話したり聞いたりしなければ、なされるでしょう。49)

『文芸』におけるアルベルティも、一見、道徳的視点あるいは教育的視点から、文人に対し恋愛を禁止しているかに見える。

愛欲に捕らわれた捕らわれた人物で、誰が、完全かつ堅固な心持ちで文芸に打ち込むことができるというのか。誰が、学問に心を捧げ、教えに集中し、記憶を確かなものとするに鋭敏な状態でいられるというのか。尋ねるが、いったい誰が、愛欲という狂気の虜になって、何かしらよい学芸に向けられた継続的で確固たる意欲、才知や努力を保持できるというのか。50)

しかし、ヴェルジェーリオとは異なり、アルベルティは次のように言葉を続けている。

だが、こうした種の快樂すべてについて余すところなく、他者と比べて文人がどれだけそれらを手にするのに苦勞するか、語ることはやめておく。また、恋のライバルの上品

さと文人のみすぼらしさとの間にどんな違いが存するか、語ることもやめておく。服の優美さ、口説きの際の奔放さ、これらすべてについても語ることはやめておく。彼らに文人が遠く及ばないと、みなが同意する事々については、触れずにおく。<sup>51)</sup>

やはりアルベルティは、若者一般と文人とを対置させることで、後者の惨めさを際立たせて揶揄しているとみなされるであろう。

以上から、「文人が感覚的諸快楽を享受することは不可能である」というアルベルティの主張が、同時代の教育論において論じられている主題を下敷きにしていることが窺える。しかし、それらに観察される言説とは異なり、アルベルティの言葉には、道徳的観点や教育的観点が欠けている。アルベルティが描き出す文人は、高貴な息抜きを自ら放棄するのではなく、そうした快楽の享受から強制的に排除される存在なのである。また、その文人は、高貴な息抜きに憧れながらも、不名誉や批判を恐れ、監獄において紙片と死んだ羊の中に葬り去られることを強制されている存在でもある。これらの点を考慮すれば、アルベルティによる主張には、彼が個人的に育んだ禁欲的思想よりも、同時代における学問観および文人観に向けられた揶揄の意識を読むべきであると考えられる。

## 2) 批判を恐れる文人

アルベルティによれば、文人は感覚的諸快楽の享受から強制的に排除されると同時に、批判や不名誉を恐れるために、そうした息抜きを泣く泣く放棄して常に読書に打ち込まなければならない。彼らが恐れる批判や不名誉について、旅行の快楽が論じられている箇所を確認してみよう。

諸快楽のうち最も卓越し、唯一、自由で高貴な人物にふさわしいものが、さまざまな町や地域を巡り、多くの寺院や劇場、市壁・城壁やあらゆる種類の建築物を眺め、自然によって非常に心地よく、喜ばしく、堅固にされている場所、あるいは、人類の技術と知性によって、眺めるに美しく、敵の攻撃に対しより堅牢にされた場所を歩き回ることである。文芸に身を捧げている人物は、こうした輝かしい快楽から完全に排除されてはいないか。無論、旅人は旅行へと書物を携えて行けないし、新たな土地を見物することに気が散り、多くを読むこともできない。もし、十分に多くの書物を頻繁に読むことなく君が文人になれると思うのなら、いろいろな土地を巡る楽しみから引き戻すいわれは、何もないが。<sup>52)</sup>

旅行という快楽自体についても、アルベルティは肯定的な評価を与えている。この点についてゴッジ・カロッチィは、建築物や公益意識として表れる人間の才知に対するアルベルティの感嘆を読み込んでいる<sup>53)</sup>。さらに、人文主義者が旅行にかんする証言を多数書き残していることも忘れてはならない<sup>54)</sup>。彼らは、快楽をもたらす行為として旅行をみな

していたのである。アルベルティはしかし、高貴で自由な人物にふさわしい旅行という快樂の享受から、文人だけを除外している。文人は片時も書物を手放すことなく勉学に専念しなければならないが、旅行は、そうした文人に課せられた義務を阻害するからである。「〔読書への固執〕、それも途方もない固執なしに立派に文人になれると考える人物は、間違っている」<sup>55)</sup>のである。

そして、もし、文人が旅行という最上の感覺的快樂に耽れば、批判を受けることは避けられない。

しかし、君は気を付けなければならない、あらゆる旅行が勉学の妨げにならないようにするだけでなく、学者にとって激しい批判の理由とならないように。それは、何よりも、地元においてさえ、文人は楽しい事物へ少しでも心を惹かれたら、非難されるからである。〔……〕だから、文芸に身を捧げた若者に、気晴らしを目的として余所の土地を巡ってはならないと忠告がなされても、おかしいことではないと思う。彼らには、地元においてでさえ、不名誉の誹りを受けることなく、甘美で楽しい事々に耽ることは許されないのであるから。<sup>56)</sup>

地元においてダンスに参加しようとするだけで拒絶され、憎悪される文人が、旅行に出かけようなどとすれば、批判され、不名誉という汚名を着せられることは免れない。文人は、批判と不名誉を避けるために片時も書物から離れることはできず、そのために、高貴な快樂の筆頭である旅行を諦めなければならない。くわえてアルベルティは、ペトラルカ『孤独な生について』において称賛されているような田舎への小旅行も、不名誉を招きかねないために文人には許されないと述べている<sup>57)</sup>。

アルベルティによれば、文人と社会との隔絶は、自発的に望まれるものではない。文人は気晴らし、つまり、感覺的諸快樂を自発的に放棄するわけではなく、それらを享受することから強制的に排除される存在である。人々は文人がダンスに参加することを拒絶し、また、文人が読書を疎かにして感覺的諸快樂に耽っているのを目にしたら、すかさず批判を加えるからである。こうした点を踏まえると、アルベルティによる感覺的諸快樂をめぐる言説、そして「一般的な若者」と「文人」との間に設定されている区分は、やはり、禁欲的な理想的文人像を提示することを目的としたものではなく、オッペルあるいはベネッティ・ブルネッリが主張しているように、揶揄としての機能を帯びたものとしてみなされることになるであろう。

さらに、一般的な人文主義的教育論および学問論が、学者に対して名誉の獲得を約束することで熱心な読書を奨励している一方、アルベルティは批判、また、不名誉の恐れをちらつかせることで、文人に感覺的諸快樂の享受を諦めさせ、彼らを読書に縛り付けている。アルベルティは、以下の文言によって、文人と感覺的諸快樂についての議論をまとめている。

だから、万事において、次のように文人は振る舞わなければならない。つまり、まるで、事物について熟考し、永遠に家にこもり、諸学科について終わりなく心配することから、不名誉の誹りを受けずに離れることなどできないと彼らにみなさせる掟によって、労苦へと縛り付けられているかのように。<sup>58)</sup>

アルベルティによれば、文人は勉学あるいは読書を少しでも疎かにすると批判され、不名誉という汚名を着せられる。彼らには、同時代の教育論が認めている息抜きを含め、感覚的諸快楽を味わうことが許されていないのである。

以上から、『文芸』において、アルベルティが同時代における人文主義的諸言説を意識したうえで、それらを揶揄している可能性が示されたであろう。アルベルティによれば、たしかに文人は、社会から区別されるべき存在である。しかし、彼らは、決して高尚な存在ではない。彼らはむしろ、若者が楽しむ息抜きから強制的に排除され、さらに、批判と不名誉に常に怯える哀れな存在なのである。アルベルティによれば、こうした文人は、読書および勉学自体がもたらしうる精神的快楽を味わうこともできない。次節では、この点を確認する。

### 3. 精神的重圧としての勉学

#### 1) 知的成長の証明としての執筆

アルベルティは、「文人は読書に専念しないかぎり不名誉を避けることはできない」という掟を設定することで、文人が感覚的諸快楽——同時代における教育論によれば、勉学の合間における有用な息抜きでもある——を享受する可能性を否定している。文人は、不名誉を恐れるために、常に勉学に打ち込まなければならない。アルベルティは続いて、文人は勉学、すなわち読書から精神的諸快楽を獲得することができないと主張している。すでに確認したように、アルベルティは「監獄としての図書館および勉学」や「紙片と死んだ羊としての書物」、また、「文人を脅迫する図書館、文芸／書物、諸学科」といった表現を用いて、否定的な学問像を構築している。このような学問から、文人が精神的快楽を受け取ることはない。文人はむしろ、自らの知的進歩を示すことを常に要求され、さらに、完璧な学識を獲得しなければならないという精神的重圧に苦しめられている。そこで、以下では、まず、文人が自らの知的研鑽を証明する際に抱く苦悩について確認する。

『文芸』献辞において、アルベルティは、まるでニッコリのように他者を中傷する批判家、「全生涯で、何事も称賛しないこと以外、何も学ばなかった者たち」<sup>59)</sup>の存在に言及している。こうした中傷家から批判されるのではないかと怯え、何かしら作品を執筆することを躊躇していたアルベルティであるが、友人たちから励まされ、彼らの期待に応えるべく、自らの勉学の実りとして『文芸』を執筆することを決心した。

勉学においては、我々自身のためにだけでなく、それ以上に、友人たちの期待に応えるように努めなければならないと思われる。実際、私の威厳と名声を気にかけてくれてい

る近親者たちは、勉強への労苦と熱意によって私がいづか進歩したことが知られるような、何かしら、徹夜の成果を示すように、日々、求めてくるのである。<sup>60)</sup>

このように、『文芸』献辞において、近親者が寄せる期待は、文人が読書に打ち込み創作を行うことを後押しする刺激として描き出されている。

精神的快楽をめぐる議論において、アルベルティは近親者が文人に対し寄せる期待に、再び言及している。しかし、今度はその期待は、中傷家の存在とともに、文人が精神的快楽を享受することができない理由のひとつとして、否定的に論じられている<sup>61)</sup>。

次のような人物は、多くの精神的快楽を享受することができるであろうか。つまり、自分が期待されていると知っており、少しだけでもそれに応えなければ、彼ほどに軽蔑されようものは何もないと知っている人物は。次のような人物は、非常に激しい心労から解放され、軽い心もちでいられようか。つまり、できるかぎり彼が立派に進歩することを、近親者、友人や知人たち全員が望み、期待していると知っており、また、反対に、自らの怠慢、放縦、欲望のために何かしらを疎かにし、学識の頂点に到達できなかったら、誹謗中傷しようとライバル、嫉妬屋、中傷家が——この種の人物はごくまれな存在ではない——さまざまな場所で待ち受けていることを認識しているような人物は。<sup>62)</sup>

近親者や友人が寄せる期待は、中傷家から向けられる敵意と同じく、文人を精神的に苛む原因として描写されている。彼らはさらに、味方から敵へと変貌しうる。知的研鑽の実りを示すことができない文人に対し近親者が抱く幻滅について、次のようにアルベルティは述べている。

君の近親者にとって、何がいつそう軽蔑に値するであろうか、ずっとなろうと努めてきた人物に君がなれないことよりも。ずっと打ち込んできたことについて、君が最も博識であると示せないことよりも。ずっと腰を据え、卓越することができた学問において、君が最も秀でていたわけではないことよりも。<sup>63)</sup>

近親者や友人からの期待が軽蔑へと変化しうることは、同時代における人文主義者間のやりとりにも観察される。たとえば、作品を執筆しない文人として知られていたニッコリに対し、何か執筆するようにブルーニはたびたび求めているが、両者の友人関係が破綻する前後で、ブルーニの言葉が帯びる調子は懇願から批判へと変化している。1405年頃、ニッコリに宛てた手紙においてブルーニは、「ニッコロよ、君は黙っていても、何かを書いても私を打ち負かす。いま、君の沈黙が私を苦しめている以上に、かつて、君の大量の手紙が私を圧倒したことはない」<sup>64)</sup>と、手紙を書いてくれるように懇願している。しかし、



両者の関係が悪化すると、ブルーニは『口さがない怠け者に対する糾弾』を執筆し、ニコリが示す知的不毛を激しく批判することになる。何か作品を執筆することで文人が自らの知的成長を証明しなければ、近親者や友人からの応援は敵意へと変化する。文人は、直接的に批判を投げかけてくる中傷家の存在によってだけでなく、自らに寄せられる期待によっても苦しめられるのである。

## 2) 卓越した知識を獲得する必要性

近親者や友人からの期待に応えるために、文人は知的に進歩したことを証明しなければならない。同時代における一般的な言説と同じく<sup>65)</sup>、『文芸』においても、読書への専念を通じて卓越した学識を習得することを文人は求められている。しかし、たとえばブルーニが、名声、富、そして快樂という報奨を提示して読書を奨励している一方<sup>66)</sup>、アルベルティは、勉学が文人に精神的重圧をもたらすと主張している。この主張は、勉学に精神的快樂を見出す諸言説が示す見解から、かけ離れている。実際、一般的な言説に従えば、勉学自体、また、それがもたらす喜びも、漸進的である。たとえば、ブルーニは語学力の獲得について、その漸進的性格を指摘している<sup>67)</sup>。さらにヴェルジェーリオも、「幼年期において苦しい勉学であるものが、老年においては喜ばしい閑暇となります」<sup>68)</sup>と述べている。そして、ジョヴァンニ・モレッリ (Giovanni Morelli, 1371-1444) によれば、こうした種の知的進歩は漸進的な喜びを学究者にもたらす<sup>69)</sup>。また、シエナの聖ベルナルディーノ (San Bernardino da Siena, 1380-1444) も、1425年の説法において、聖書の読書がもたらす漸進的な喜びに触れている<sup>70)</sup>。これらの主張は、勉学あるいは読書に内在する不可思議な力、つまり、知的に進歩し続ければ、それだけ喜びが増すという力の存在を称えている。

他方、アルベルティは、「文芸学は、よくわからないが、次のような力を帯びている。つまり、君が学ばば学ぶだけ、より多くの事々について君自身が無知で、より激しい勉学が君には必要であると認識させる、そんな力を」<sup>71)</sup>と述べている。卓越した学識を獲得することを課された文人は、漸進的に増大する、いわば、「無知への恐れ」という強迫観念にとりつかれ、読書にますます没頭せざるをえなくなる。なぜなら、文人は至高の学識を獲得しないかぎり、「最もさげすまれ、ほとんど不名誉な」人物としてみなされることを免れないからである<sup>72)</sup>。こうした「無知への恐れ」、さらに、無知がもたらしうる「不名誉への恐れ」に常に苛まれているために、文人は読書から精神的快樂を獲得することなど望むことができない。アルベルティは、快樂をめぐる章の結論部において、次のように述べている。

文芸には、知るに相応しいことこのうえない無数の事柄が書かれており、それらについて熱心な人物を学びへの欲望がどれだけ圧迫するか、簡単には語りできない。〔……〕学究者は眠らず、食事をとらず、休息せず、快樂を覚えることはまったくくない。事物をすべて知り記憶するという、激しい心労が付きまとう。〔……〕これ

らすべての事々において、学びへの欲望に燃え立つ学者は、どんな節度も限度も見出すことができない。さらに、心の平安も許されない、未知の事柄すべてが明らかにされないかぎり。〔……〕辛い孤独、過酷な労苦、極限の徹夜、大変な熱意、これ以上ない専念、燃え立つ心労。こうした学者はどんな快樂も見出すことができず、その人生には苦勞と心勞の中断など、ほとんどないのである。<sup>73)</sup>

文人は、卓越した学識を獲得しないかぎり不名誉の汚名を着せられるために、「学びへの欲望」(«*ediscendi cupiditas*» / «*discendi cupiditas*»)に燃え立つ。そしてアルベルティは、この「学びへの欲望」を、文人が勉学から精神的快樂を獲得することができない理由のひとつ、つまり、精神的重圧として提示している。ペトルルカが描き出している理想的文人が、読書から獲得される精神的快樂に捕らわれて「食事を忘れること、書物に囲まれて徹夜を楽しむこと」を喜びとしている一方、アルベルティが描き出している文人は、「無知への恐れ」、また、そこから生じる「不名誉への恐れ」に捕らわれているために、「食事をとらず、休息せず、快樂を覚えることはまったくない」のである。

人文主義者による諸言説において、「学びへの欲望」が積極的に評価されていることを思い起こせば、アルベルティによる主張の特異性は、さらに際立つ。たとえば、ブルーニは『諸学科』において、学者が「学びへの激しく燃える欲望」(«*ardentissima cupiditas [...] discendi*») <sup>74)</sup>を抱き、完璧な学識を習得することを奨励している<sup>75)</sup>。そしてブルーニは、こうした努力に対する報奨として、名声、富、快樂の獲得を保証している。たしかに、アルベルティが描き出す文人も、学びへの欲望に燃え立つ存在ではある。しかし、その文人は、何かしらの報奨を獲得することを期待して勉学に励むのではない。そうではなく、文人は「無知への恐れ」、さらに、「不名誉への恐れ」に掻き立てられて学びへの欲望に燃え立ち、完璧な学識を習得するまで——すなわち永久に——読書に専念することを課され続けるのである。

以上のように、アルベルティによれば、文人は批判と不名誉への恐れに常に脅かされている<sup>76)</sup>。『文芸』において描かれている「社会から隔絶され、孤独に勉学と向き合う文人」は、ペトルルカが夢想したように、自発的に感覺的諸快樂から身を遠ざけ、社会から隔絶された状態で勉学から得られる精神的快樂を味わうわけではない。文人は、気晴らしさえも放棄して読書に専念しなければ、批判される。そのために、彼らは、同時代の教育論において推奨されている息抜きを含め、若者たちが享受している感覺的諸快樂のすべてを諦めなければならない。さらに文人は、知的進歩を示さないかぎり、批判される。したがって、彼らは、この精神的重圧により、勉学あるいは読書から精神的快樂を獲得することもできない。結局、『文芸』における文人は、快樂すべてを放棄することを自ら選択するのではなく、そうすることを強制されている哀れな存在として、描き出されているのである。

#### 4. ブルーニ『口さがない怠け者に対する糾弾』における禁欲的文人像

アルベルティによれば、勉学を疎かにして自らの知的研鑽の成果を示すことができない

文人は、批判される。読書を疎かにして自らの知的進歩を証明できなかったために、ブルーニを含めた複数の文人から激しく糾弾された人物が、同時代に存在する。他者を批判するばかりで自らは作品を執筆しない文人としてみなされていた、ニッコロである。『対話』におけるサルターティの言葉によれば、「ブルーニは、どんな意見においてもニッコロと一致しており、私とともに正しい意見に従うよりも、ニッコロとともに間違えるほうを望むほどに思われる」<sup>77)</sup>までに密であった両者の関係は、1410年代後半に破綻を迎えている<sup>78)</sup>。ブルーニとニッコロは、フランチェスコ・バル바로 (Francesco Barbaro, 1390-1454) の仲介により 1426年10月に公的に和解するが、その後、両者の間にかつての親密さが取り戻されたかは疑問とされている<sup>79)</sup>。このように両者の不和が表面化する以前から、ニッコロは人文主義者により糾弾されていた<sup>80)</sup>。まず、1413年、グアリーニが、ビアージョ・グアスコニ (Biagio Guasconi) に宛てた手紙、『鍍金の詩人へ〔の糾弾〕』 (*In auripellem poetam*) においてニッコロを批判している<sup>81)</sup>。続いて、1420年夏に、ベンヴェヌーティが『ニッコロ・ニッコロに対する糾弾』 (*Laurentii Marci de Benvenutis in Niccolauum Nicholum oratio*) を著している<sup>82)</sup>。1421年1月31日には、ブルーニがブラッチョリーニに宛てた手紙においてニッコロを批判し<sup>83)</sup>、さらに、1424年に『口さがない怠け者に対する糾弾』を執筆している。そして、1430年代に至っても、ニッコロ糾弾はフランチェスコ・フィレルフォ (Francesco Filelfo, 1398-1481) によって続けられることになる。

これらの糾弾は、知的観点、また、道徳的観点から、ニッコロを似非文人として批判している<sup>84)</sup>。同時に、これらの糾弾、とくにブルーニ『口さがない怠け者に対する糾弾』は、ニッコロを似非文人として描き出すのみならず、彼のような似非文人に対置されるべき理想的文人像をも明らかにしている。そしてブルーニは、『対話』においてサルターティが批判している文人の姿、また、アルベルティが『文芸』において描き出している文人の姿に類似した、「読書以外、すべての行為を放棄して図書館に閉じこもる文人」を、あるべき文人の姿として提示している。文人は自発的にあらゆる快楽を放棄して、労苦と心労に満ちた読書に取り組みなければならないのである。

立派な人物を観察すると、彼らの状況がたしかに不当であり、さらには、ほとんど哀れむべきものに思われるのが常である。何が、勉学に身を捧げている者の人生ほどに過酷であろうか。寝ることのできる夜、心労から解放される日中、仕事をこなす暇、運動や身体への配慮、宴や気晴らし、身近な者たちとの会話や雑談など、彼らには許されないのである。<sup>85)</sup>

読書への専念およびその他すべての活動の放棄を求める命令は、文人の人生を哀れなまでの過酷さで覆う。しかし、文人が支払うこの犠牲は、学識と名声の獲得によって贖われる。

知と名声は、他者を誹謗中傷することによって獲得されるのではない。不眠不休の勉

学、ほとんど耐えがたい労苦、永遠の家籠りと心労、さらに、人生において最も楽しい事々を節制・自制し放棄することによって、それらは獲得されるのである。お前はしかし、労苦よりも怠惰を、勉学よりも欲望を優先させている。日の出も日没も目にしたことがないくらいに、お前は徹夜から遠ざかっている。したがって、こうした報奨を獲得するための労苦や徹夜、その他の事々から身を遠ざけることをお前は願ったのだから、それらによって獲得される報奨から落ちて身を守れよ。もし、お前に栄光への欲望が生じるなら、労苦に耐え、徹夜し、その他の甘美な事々を諦めよ。

86)

過酷な読書に身を投じる文人には、その労苦と心労への見返りとして、知と名声を獲得することが許される。しかし、過酷な読書から逃避しながら栄光を求めるニッコリは、批判され、不名誉という汚名を着せられて当然なのである。さらに、ブルーニは、ニッコリが似非文人であることを次のように批判している。

まず、お前が精を出しているふりをしているその勉学であるが、いったい何を孕み、何を産み出したというのか。誰かお前のことを知っている人物が、お前によって執筆された何かしらの思いつくことができたであろうか、また、お前が何か執筆するであろうと期待を抱いたことがあったというのか。お前が創作活動をできるように望んでいるのかどうかわからないし、お前がそう望むことができるのかどうかもわからない。なぜなら、才知の愚鈍さがそうする能力を阻害し、また、墮落した習慣がそうする意欲を阻害しているのだから。したがって、お前の勉学は——少なくとも、それが眠りではなく勉学と呼ばれるべきならば——恥ずべきことに、六十年の時を経てもお前に何も実りをもたらしていない。お前には、そうした勉学の実りは、学びについても、生き方についても、何も見受けられないのである。<sup>87)</sup>

ブルーニは、ニッコリが勉学を疎かにし、その結果として知的に進歩していないことを批判している。さらに、ブルーニはニッコリに対し、自らの知的実りの証しとして、何か作品を提示するように求めている。

他者の無知をかくも傲慢に批判しているお前は、お前の学びによる作品を何か提示できるのか。お前に対し、偉大な作品や数多くの作品を求めはしない。何か、ちょっとした作品をひとつだけでかまわない。しかし、提示できるような作品を手紙一通さえも、お前は持っていない。このことが、お前の無知についての明らかきわまりない証拠なのである。とりわけ、執筆してくれと、多くの友人や敵がすでに促しているのだから。<sup>88)</sup>

『文芸』においてアルベルティが示している見解と同じく、作品執筆という行為に文人の知的進歩を証明する役割が与えられていることが明らかである。さらに、同様の言説は、ベンヴェヌーティによる糾弾にも確認される<sup>89)</sup>。

ブルーニはくわえて、ニッコリが長年打ち込んできたとされる学問において無知であることを、「たしかに誰についても、ここまで不毛に過ごされた六十年を聞いたことがない、基礎文法も、何かしらの学科の知識も見出すことができないのだから」<sup>90)</sup>と、批判している。ニッコリの無知についてはグアリーニも、彼が長年学んできた事柄にかんする知識を欠くことを<sup>91)</sup>、また、ベンヴェヌーティも、ニッコリが熱意を注いで学んだはずのギリシャ語を習得できなかったことを嘲笑している<sup>92)</sup>。このように、ブルーニをはじめとした糾弾者は、読書を疎かにしたために作品を執筆することができず、また、卓越した知識を示すこともできないニッコリを批判している。結局、自らの知的進歩と卓越した知識を証明することができないニッコリは、これらの諸糾弾により文人としての名誉を汚されたことになる。ブルーニはさらに、怠惰で無知な似非文人であるニッコリに、「名誉という報奨を手にするために、どんなに甘美なことであろうとも、あらゆる行為を自ら放棄して、過酷な読書に専念する」、禁欲的な理想的文人像を対置しているのである。

本稿前章で確認したように、ブルーニを筆頭とした人文主義者が示している学問観の根底には、読書だけに価値を見出し、経験から学ばれる知の価値を無視する、書物と読書への強い執着、また、学識の価値を絶対視する姿勢が認められる。ブルーニの学問観において、この姿勢は徹底している。なぜなら彼は、「読み書きにおける熟達」だけでなく、生き方と振る舞いにかかわる「事物にかんする知識」も、書物から獲得されなければならないとしているからである。たとえば、「事物にかんする知識」の筆頭とされている道徳哲学が論じられている『道徳学初歩』において、登場人物ブルーニは、この哲学を学ぶ利点を尋ねる友人、某マルチェッリーノ (Marcellino) に対し、「なぜ私に尋ねるのか、〔……〕むしろ、こうした事柄にかかわる知識を残してくれたローマやギリシャの作家が書いたものを、君自身が読むほうがよいのではないか」<sup>93)</sup>と、何よりもまず、読書を奨励している。ここにも、書物から学ばれる学識を重んじると同時に、経験から学ばれる知を軽視する姿勢が観察される。

こうした書物と読書への強い執着、また、読書から学ばれた学識を絶対的に信頼する姿勢は、『対話』におけるサルターティ、そして、『文芸』序文におけるアルベルティが指摘しているように、ときとして、勉学を過酷で退屈なものとする要因であると考えられる。ブルーニはしかし、人文学を称揚する諸言説において、読書が内包するこの消極的な側面については、一切、言及していない。こうした種の言説においてはむしろ、名声、富、快樂といった勉学から手にされる報奨が提示され、熱心に読書に励み卓越した知を獲得することが奨励されている。他方、ニッコリ糾弾における主張から、勉学が内包する消極的な面をもブルーニが十分に認識していたことが知られる。さらに、同糾弾においてブルーニは、読書が帯びうる過酷さを「名声という報奨を獲得するための犠牲」として提示し、その過酷さに耐えて卓越した知を獲得し、作品を執筆すれば、報奨として、文人は名誉を手にすることができる

と述べている。ブルーニは、場合に応じて、勉学が帯びる消極的な側面を隠蔽あるいは偽装しているとみなされるであろう。その結果、人文学を称揚する言説においては、楽しく豊かで有益な学問像が提示される一方、ニッコリを糾弾する書においては、きわめて禁欲的な学問像が描き出されることになる。結局、ブルーニが行っている人文学の称揚において描き出されている学問像と、ニッコリ糾弾において規定されている学問像との間には、グァリーニが行っていた教育についてグラフトンとジャーディンが指摘したものと類似した二面性、また、それらの間における乖離あるいは矛盾が確認されるのである。

さて、『文芸』に視線を戻すと、アルベルティが文人に対し与えている忠告に、『口さがない怠け者に対する糾弾』においてブルーニが構築している禁欲的の文人像との類似が確認される。

だから、名声と称賛について何かしら考えられるべきであると彼ら文人がみなすならば、しっかりと家に閉じこもり、外界の優美で甘美、羨望に値する事々すべてを放棄し、自制することであろう、こうして然るべく、より熱心に、文芸にかかわる知識へとしがみつけるように。<sup>94)</sup>

この忠告と『口さがない怠け者に対する糾弾』との間に見られる類似を、どのように我々は受け取るべきであろうか。もともとアルベルティが「中傷者」、「誹謗者」、「対立・嫉妬」を、好んで執筆のモチーフとしていることが知られている<sup>95)</sup>。そして、1440年代初頭に執筆された『辛苦からの避難』における、「だが、文芸に内在する妬みと不利益については、余所で語るべきであろう」<sup>96)</sup>という言葉が、作品『文芸』を示唆していることが指摘されている<sup>97)</sup>。この指摘に従えば、『文芸』も、「文芸学が文人にもたらす不利益」と同時に、「文芸学に内在する妬み」、すなわち、文人間の悶着を意識して執筆された作品であるとみなされることになる。さらに、『食問対話集』における登場人物リブリペータの人物像にニッコリとの共通点が確認されることから、アルベルティがニッコリに向けられた諸糾弾を参照していた可能性も指摘されている<sup>98)</sup>。これらの点を考慮すると、『文芸』においてアルベルティが文人に与えている忠告も、同時代における人文主義的糾弾、とくにブルーニによるニッコリ糾弾を下敷きとしていたとみなされるのではないだろうか。実際、アルベルティは文人が批判にさらされる辛さを、次のように表現している。

さらに、次のことが付け加わる。つまり、すでに着手された勉学を、何かしら重大な理由もなしに放棄すれば、君は軽薄の汚名を着せられることを恐れることになる。これらの点に付け加えよ、君の才知が文芸には不適格である、あるいは、君の精神力がその労苦には脆弱すぎると宣言するよりは、どんなに辛いことであっても、それに耐えるほうがまだまともであると君には思えることになる。<sup>99)</sup>

ブルーニは、『口さがない怠け者に対する糾弾』において、名誉を求め、あらゆる事柄を放棄して勉学に進む理想的文人像を提示した。同時に、彼はこの糾弾を執筆することで、ニコリに似非文人という不名誉な汚名を着せた。文人は、勉学を途中で放棄すれば、まるでニコリのように似非文人としてみなされ、激しく糾弾されることになる。そうした事態を避けるために、文人はあらゆる快楽を放棄して、読書に専念しなければならないのである。アルベルティは、当時の学問界において現実に生じていた人文主義者間の悶着を踏まえて、こうした忠告を文人に与えているのではないだろうか。

## 5. 人文学に内在する禁欲性の暴露

アルベルティは、文人は名誉を求めて自発的に諸快楽を放棄するのではなく、批判と不名誉を恐れるために、あらゆる快楽を放棄することを強いられていると主張している。文人は、ニコリに向けられたような批判、また、彼に着せられたような汚名を恐れるからこそ、同時代の教育論において推奨されている息抜きを含め、あらゆる感覚的諸快楽に興じることを諦め、過酷な読書に専念することを余儀なくされている。さらに、彼らは自らの無知を曝け出すと、ニコリのように批判され、不名誉な汚名を着せられる。その恐れに常に苛まれているために、彼らは勉学から精神的諸快楽を獲得することもできない。アルベルティによるこうした見解に、ペトラルカが称揚するような「文芸に注がれる閑暇」(otium litterarum)という観念、あるいは、「禁欲的な英雄性」<sup>100)</sup>を見出すことは難しいと思われる。やはり、文人と快楽との関係をめぐるアルベルティの議論は、同時代における人文主義的諸言説、また、学問界の動向を意識したうえで、それらを素材／対象とした揶揄であるとみなされるべきであろう。

それでは、『文芸』におけるアルベルティが当時の学問界を意識しながら快楽の問題を論じているのであれば、我々はそこにどのような意味を見出すことができるのであろうか。この点を考えるために、『口さがない怠け者に対する糾弾』において描き出されている理想的文人像と、アルベルティが論じている惨めな文人との間に観察される、大きな違いに注目すべきであると思われる。

『口さがない怠け者に対する糾弾』において、勉学あるいは読書は非常に過酷な行為であるという認識をブルーニは示している。この過酷さゆえに、知と名声という報奨を望み、自発的にすべてを投げ打ち勉学に励む文人は、まさに「禁欲的な英雄性」を帯びた存在として描かれている。他方、アルベルティが論じている哀れな文人に、こうした高尚な禁欲性は認め難い。さらに、アルベルティによれば、すべてを投げ打ち過酷な勉学に打ち込んだところで、その見返りとして期待されるのは学識、また、労苦への耐性にくわえて<sup>101)</sup>、「不名誉を避けること」<sup>102)</sup>にすぎない。両者の主張に観察されるこうした違いを考慮すると、伝統的な諸研究が『文芸』に読み込んできた「禁欲性」とされるものは、アルベルティの思想に内在しているわけではなく、むしろ、『口さがない怠け者に対する糾弾』にも観察される人文学の特徴のひとつ、書物と読書への強い執着に、その根源が求められるべきなのではないだ

ろうか。もし、こうであるならば、『文芸』におけるアルベルティは、人文主義者による言説において、英雄的に名誉を求める存在として描き出されている文人を、不名誉への恐れに突き動かされているにすぎない文人として書き換えることで、揶揄していることになるであろう。

さらに、ニッコリ糾弾においてブルーニが提示している学問像と、『諸学科』やニッコロ・ストロツィ宛ての手紙において称揚されている学問像との間に存在する乖離は、本稿第2章末で提案した仮説、つまり、『文芸』を執筆することによって、アルベルティは人文学および人文主義が内包している二面性について暴露を行っているのではないか」という仮説を検討するうえで、示唆を与えてくれる。文人が「名誉への渴望」ではなく「不名誉への恐れ」に突き動かされているならば、ブルーニが行っている「読書の奨励」が、実際には、「読書への脅迫」であること<sup>103)</sup>、また、ブルーニが主張しているような「読書への専念により、文人は名声という報奨を獲得できる」という認識の裏に、「読書を疎かにすれば、文人は似非文人という不名誉な汚名を着せられる」という実態が存在することが、暴露されるのである。このように明らかにされる、人文学を称揚する言説においては決して触れられない、過剰なまでの読書至上主義という特徴に注目すると、勉学や図書館は港や避難所としてではなく、監獄として、また、書物は家族や友人ではなく、脅しをかけてくる敵、あるいは死んだ羊として、立ち現れることになる。

以上から、文人と快樂との関係をめぐる議論において、アルベルティが、人文学を称揚する言説に観察される積極的かつ肯定的な学問像が孕んでいる欺瞞を露わにし、揶揄しているとみなされるであろう。実際、アルベルティは、学問を称揚する諸言説の裏に隠された消極的な側面を露悪的に暴露するだけでなく、勉学には積極的な面と消極的な面の双方が同居していることを冷静に認識している。彼は、勉学が精神的快樂をもたらすこと自体は認めつつ、その快樂を心労と労苦が上まわると述べているのである。

学びへの欲望を満たすことは、たしかに、何かしらの快樂をもたらすが、それでも、学究者に求められる過酷きわまりない労苦、また、精神的なあまりの重圧は、常に、快樂よりも苦悩をもたらす。結局、彼らは学びから快樂を手にしたところで、それを最大級の心労と労苦で覆い尽くしてしまうのである。<sup>104)</sup>

アルベルティはこのように、勉学が孕む二面性について客観的な認識を示しつつ、この二面性を自覚していながら、勉学に積極的かつ肯定的な評価だけを与える人物に対し、皮肉を述べている。

しかし、文人が味わうこうした類の快樂は、快樂というよりも、むしろ苦しみと呼ばれうるものである。〔文人は〕永遠に机に向かい、ずっと読書し、熱心に熟考し、無限に孤独で、永遠に喜びと楽しみから除外される、そんな人生を過ごさなければなら



ない。これを快楽に満ちていると呼ぶほど、私は無粋で厳しい人物ではない。<sup>105)</sup>

ここで揶揄されている人物は、一方で、豊かで快楽に満ちた学問として人文学を称揚し、他方で、きわめて過酷な学問観を提示し、その規範から逸脱する者を激しく糾弾する、ちょうどブルーニのような人物であると考えられるのではないだろうか。

以上から、『文芸』における快楽をめぐる議論を、同時代の学問界へと目を向けながら見直すと、たしかに人文学に内在するにもかかわらず、この学問を称揚する言説においては決して触れられることのない負の側面を、アルベルティが暴露し揶揄している可能性が確認される。文芸学および人文学は、過剰なまでの読書至上主義に立脚しているために、「読書の掟」に縛られた文人は、あらゆる快楽を享受することから強制的に排除されるのである。

## 第4章

### 文人と金銭的富：貧困を強制されている文人

アルベルティは、文人と快樂との関係について分析を行い、文人は読書に専念することを強制されていると主張している。『口さがない怠け者に対する糾弾』においてブルーニが規定した理想的文人が、名誉を求めて自発的に禁欲的な生活を選択する一方、『文芸』において描かれている文人は、批判と不名誉に怯えて読書に専念せざるをえないのである。この「強制」という視点は、文人と金銭的富との関係をアルベルティが論じる際にも観察される。アルベルティによれば、文人はストア的な禁欲性に基づいて金銭を軽蔑し、蓄財を自ら放棄するわけではない。たとえば、「熱心で欲深いことこのうえない人物」であろうとも、文芸学を通じて蓄財することは、現実的に不可能なのである<sup>1)</sup>。

たしかに、文人と金銭との関係をめぐるアルベルティの主張は、一見、伝統的な禁欲性を帯びているようにも見える。

よき文芸から獲得されるのは、節度と度量、美德に知であるが、これらは、希望と熱意を抱き偉大な事柄に身を投じている高貴な魂の持ち主が、金儲けやそれに付随する無数の事柄にかかわることを禁じている。そして、まさにその知と美德が、はかない事物の中で正しい心が墮落することを許さない。したがって、欲望を捨て去り、学究者には拒絶されている金銭的富ではなく、驚くべき事物にかんする知識を追求する人物が、称賛されるのである。<sup>2)</sup>

従来 of 諸解釈はこうした文言に注目し、『文芸』においてアルベルティが示している金銭観にストア的な禁欲性、すなわち、「自発的な清貧」(paupertas voluntaria) という思想を読み込んできた。金銭的富を軽蔑し、美德と知を称賛する姿勢は、人文主義者による言説にも頻繁に観察される。たとえばブルーニも、ニッコロ・ストロツィに宛てた手紙において、学問から富が獲得されると述べながらも、人文学は法学とは異なり、金儲け自体を目的にはしていないと主張している<sup>3)</sup>。

しかし、『文芸』におけるアルベルティの言葉を追っていくと、彼が道徳的な観点から金銭の価値を論じているのではなく、より現実的かつ合理的な視点から「文人が蓄財することは不可能である」と主張していることが明らかになる。文人が文芸学から期待できなくわずかな収入と、文芸学が彼らに対して求める莫大な出費とを比較してみれば、文人による蓄財は、事実上、不可能なのである。

稼ぎが多く頻繁であり、出費が少なく稀であると、財産はすぐに増大すると言われてい

る。よく言ったものである。というのも、君が出費よりも多くの貯蓄を日々していけば、家産は増大するからである。この事実は、文人のもとでは真逆である。なぜなら、彼らはわずかしか稼ぐことができず、生涯にわたり莫大な金銭を消費するからである。だから疑いようもなく、彼らは貧苦を避けられないのである。<sup>4)</sup>

ペトラルカを含め、人文主義者は金銭を悪としてとみなし、文人が味わう貧しさを「自発的な清貧」として称賛してきた。他方、文人の収支に着目するアルベルティは、彼らの貧しさを、いわば「強制された貧困」として捉えている。勉学はわずかな収入しかもたらさない一方、多大な出費を要求するために、文人が蓄財することは現実的に不可能であり、結果として、彼らは貧困を余儀なくされるのである。

文人が味わう貧困について、「次のいずれの理由によっても、文人は豊かな資産を持つことから排除されていると思われる。つまり、一方で、富もうとする欲望が、他方で、豊かになる能力が取り去られているのである」<sup>5)</sup>と、アルベルティは述べている。この認識に、金銭の価値をめぐる道徳的な観点と現実的な観点との併存を認めることが可能であると思われる。伝統的な価値観に従うならば、文人は金銭および蓄財を望むのではなく、軽蔑しなければならない。また、現実的な収支に着目してみれば、学問に身を捧げた人物は、たとえば望んだところで、蓄財することができない。どちらの場合においても、文人は貧しさから逃れられないのである。

本章では、『文芸』においてアルベルティが示している金銭観が現実的な視点に立脚していることを意識しながら、文人と蓄財との関係をめぐる議論を見直す。以下では、まず、ペトラルカに遡る伝統的な金銭観、また、1410年代以降に導入された新たな金銭観を概観する。続いて、アルベルティによる議論を、文人が期待できる収入をめぐるものと、彼らに課されている支出にかかわるものとに区分して観察する。文人の収入について、アルベルティはまず、千人の若者のうち、蓄財ができるほどに豊かな文人になれるのは何名であるのか、統計的な分析を行っている。続いて、公証人、医者、法学者という実利的な職種に就く文人と、人文諸学に身を投じた文人とを対置させ、両者の差異を論じている。さらに、文人が経済的に豊かになる手段のひとつとして、結婚による嫁資の獲得という問題が検討されている。これらの議論を通じてアルベルティは、伝統的な金銭観と新たに導入された金銭観の双方を揶揄していると思われる。文人の支出については、さる高名なボローニャ市民が法学者である息子について漏らした嘆きが紹介され、勉学が文人に莫大な出費を求めることが示されている。さらに、このボローニャの挿話は、家政と勉学、また、行動的生と観想的生が両立不可能であることを揶揄することで、市民的人文主義の理想像が孕む矛盾を暴露していると考えられる。

## 1. 金銭の価値をめぐる評価の変容

「自発的な清貧」という思想は、ストア的な禁欲性とキリスト教の伝統とが融合すること

で誕生し、強化されていったとされている<sup>6)</sup>。この思想は、人文主義的諸言説にも見出される。たとえばペトラルカは、観想的生について次のように述べている。

こうした〔閑暇〕において莫大な金銭が必要とされるなどと、誰も我々を欺きはしないし、納得させもしない。富は助けではなく障害となり、重荷とはなるが援助とはならない。観想的生へと人は上昇するのであるが、上昇しようとする者は誰も、余計な重荷を自ら望みはしないし、罠に捕らわれることもない。金銭ほどに重く儂い事物は存在しない。日々の糧を求めるため以外に金銭を望んだり愛したりすべきではないのである。

〔……〕たしかにそれは、感覚にとって眩惑的な豪華さと軽妙さをもたらすが、魂には影や棘、つらく差すような心配という苦しみをもたらす。そして、それが清廉に思われるだけ、実際には悪徳によって毒されている。富はそれだけで到来するのではなく、さまざまな無数の悪と数多の労苦、危険の原因を引き連れてくるのである。<sup>7)</sup>

ペトラルカによれば、金銭は糊口をしのぐために必要ではあるが、勉学に捧げられた閑暇にとっては障害であり、悪と同義である。そのために、金銭は文人によって軽蔑され、自発的に放棄されなければならない。このように道徳的な観点から金銭の価値を論じる姿勢は、ヴェルジェーリオによる『諸習慣』にも観察される。

多くの人々にとって家産の困窮は障害でありました。それは自由な魂を持つ人物、また、よりよい事柄に適した資質を持つ人物を、暮らしを立てることに専念させたのです。しかし、極限の困難によって鍛えられることにより、高貴な魂は高みへと上昇します。また、究極の困窮よりも過度の豊かさの方が、立派な才知の持ち主にとっては有害でもあります。<sup>8)</sup>

経済的な困難が勉学にとって障害であることを認めている点において、ヴェルジェーリオはペトラルカよりも現実的な態度を示してはいる。しかし、同時にヴェルジェーリオは、貧しさは人格を鍛えるために有益であり、経済的な豊かさは人格を墮落させるために有害であるという認識を示してもいる。この点が主張されることにより、貧しさには道徳的な価値が認められることになる。

「貧しさは勉学にとって障害ではあるが、道徳的観点からは有益である」という見解は、『貧困論』(*De paupertate*, 1404/1409)の作者であるアントーニオ・ダ・ロマーニョ (Antonio da Romagno, c. 1360-c. 1409) が、1398年にアルベルト・マイネンティ (Alberto Mainenti) に宛てた手紙にも観察される。

まさに幼い頃から、何か若き情熱と生来の気質によって、私が雄弁を獲得しようとしていたことを否定しない。私はしかし、後になって、立派な情熱を邪魔する運命により、

才知を耕すことから家庭を切り盛りすることへと導かれ、歩み始めた道から呼び戻された。そして私は、逆境のせいで、君が呼ぶところの港に到着することなく、出航してきた浜辺へと、不幸な航海者として投げ返された。〔……〕しかし、貧しさが私の敵であるとは考えないでもらいたい。私は幼少期から貧しさに親しんできた。そしていま、貧しさについて、私は不満をほとんど抱いていない。なぜなら、貧しさが才知を高めることにほとんど寄与しなかったことは事実であるが、それはおそらく、よりよい事柄のきっかけを私に与えてくれたからである。というのも、度を越した欲望に対する最上の歯止めである貧しさは、理性だけではなしえなかったであろう次のことをなしてくれたのである。つまり、事物の豊かさや甘美さに慣れておらず、偉大な魂をしばしば軟弱にさせる事物にも慣れていなかった私は、ごくわずかなものだけを必要とすることを学んだのである。したがって、こうした姿勢——あるいは良識、または気の小ささと人は言おうか——が設定され、多くを求めずに自らの限度にとどまることを、私は学んだのである。<sup>9)</sup>

貧しさは、たしかに勉学に対する現実的な障害をもたらすはするが、それ以上に大きな「人格を鍛える」という道徳的価値を帯びている。同様の見解は、彼が執筆した『貧困論』にも明らかに観察される。この対話篇において、夢に顕現した聖フランチェスコに対し、「〔貧しさが〕知の学習から遠ざけることだけを、私は非常につらく感じているのです」<sup>10)</sup>と、ダ・ロマーニョは述べている。貧しさがもたらす現実的な障害とそれが帯びる道徳的な価値との狭間で苦しむダ・ロマーニョに向けて、聖フランチェスコは伝統的な清貧の思想を説いている。聖フランチェスコによれば、古代において「市民的業務へと美德を用いていた者たち」<sup>11)</sup>、また、「世俗的事物を軽蔑し、自らをより高く、知の観想へと至らしめた者たち」<sup>12)</sup>のどちらも、富を軽蔑していた。

彼らのうち前者は、思慮やそれに関連した諸美德以上に、何事も有益で美しいとはみなさなかつた。また、後者は、知以上に、何事も卓越して甘美であるとはみなさなかつた。その他のものとして、快楽や飾り、あるいは、敬意を獲得することにではなく、身体への配慮や友人に対する好意にかかわる事物、さらに、自らの生活の糧にかかわる事物だけを彼らは求めていた。しかし、どちらの集団においても、金銭的富に対する大きな——知を目指す者たちにおいては最大限の——軽蔑は明らかであった。滅びることのない諸善と比べて、そうした富がどれだけ無力であるのか、正しい認識を持つ人物にとってはあまりに自明な事実である。このために彼らは、富を魂の重荷であるかのようにみなし、それを求めずに捨て去った。そうすることで、富から解放された魂が、地べたへ引きずり下ろそうとする重荷なしに、より軽やかに高みへと上昇することを望んだのである。彼らは貧しさを拒絶しなかつたのである、たとえ困窮していなくても、まるで高貴な事物にこのうえなくふさわしい敏捷な馬車であるかのようにそれを求めるほ

どに。<sup>13)</sup>

古代人は、行動的生においては思慮と諸美德を、観想的生においては知を最終的な目的としてみなしていた。そうした目標を達成するために金銭は障害である一方、貧しさはそこに辿り着くための有効な手段としてみなされていたのである。ダ・ロマーニョは、日々の生活の糧を得るために金銭が不可欠であること、また、貧しさが勉学を阻害することを熟知していた。それにもかかわらず、彼は貧困がもたらす現実的な障害に目を瞑り、聖フランチェスコが奨励する自発的な清貧に賛同している。

ヴェルジェーリオとダ・ロマーニョは、生活のために金銭が必要であることのみならず、貧しさが学問を究め知を獲得するうえで障害であることも認識している。彼らはしかし、貧困がもたらす現実的な諸問題をめぐる議論に道徳的視点を持ち込むことで、貧困を「有益な清貧」として定義し直しているのである。

他方、金銭の価値を肯定的に評価する動きも、まさにペトラルカから始まっている。1354年の手紙においてペトラルカは、過度な豪奢だけでなく、過度な清貧にも問題があると論じ、「すべての事々において中庸を好む者たちがいる。そうした者たちの一員になることを私は望む」<sup>14)</sup>と述べている。中庸の徳に対する賛同は、たとえばブラッチョリーニの言葉にも見出される。彼はピエトロ・ドナート (Pietro Donato) に宛てた 1424 年の手紙において、「エピクロス派はあまりに放埒である。ストア派は、より厳格である。逍遥学派は中庸を守り、財産の価値を認め、威厳を軽視することもない。彼ら逍遥学派が選択されるべきであると思われる」<sup>15)</sup>と述べている。こうした姿勢は、ヴェルジェーリオ、また、ダ・ロマーニョが未解決のまま放置した、貧しさをどのように捉えるべきかという問題に折り合いをつける試みとしてみなされるであろう。

経済的富の価値をめぐる評価の変容において決定的な役割を果たしたのが、バルバロによる『結婚論』(De re uxoria, 1416) と、1420 年から翌年にかけてブルーニが翻訳し注釈を加えた偽アリストテレス『家政論』(Oeconomica) である。まず、バルバロは、結婚をめぐる諸相を分析する中で嫁資の重要性を論じる際に、家産が有益であると明言している。

したがって、財産は多くの事柄にとって非常に役立ちます。なぜなら我々は、威厳を獲得するために誰に対してでもそれを分け与えることができますし、隣人や、好意によって非常に強く結ばれている人々に、多くの事物を与えることもできるのです。したがって、財産を通じて我々が恩恵を与えた相手からの感謝と援助によって、我々の子供たちを助けることになるのです。<sup>16)</sup>

清貧の思想と比較すると、バルバロが主張している金銭観は具体的かつ現実的である。財産は美德を実践するために有益であり<sup>17)</sup>、子弟の教育にも役立つのである<sup>18)</sup>。

金銭は威厳、つまり、社会的名声を獲得するために有益であるという見解は、ブルーニに

よっても共有されている。彼は、『家政論』翻訳に付したコジモ・デ・メディチ (Cosimo de' Medici) 宛ての献辞において、「金銭的富は所有者にとって飾りとなりますし、美德の実践を容易なものとししますので、有益です。さらに、子供たちの役にも立ちます。彼らは富のおかげで、より容易に誉と威厳の高みに昇ることができるのです」<sup>19)</sup>と述べている。人文主義者は、家政およびその目的である家産の増大という新たな主題について論じる際に、「寛大」(liberalitas) や「度量」(magnificentia) といった道徳的諸美德を実践することを容易にし、また、子孫の養育および教育にも役立つ金銭の有用性に着目して、その価値を積極的に肯定し始めたのである。そして、家政の目的は家産を増大させることであると明言し<sup>20)</sup>、その目的を達成するために家父長が果たすべき役割を論じている『家政論』翻訳および注釈は、貧しさを清貧として称揚し、金銭的富を悪としてみなしてきた伝統的価値観と真っ向から対立したために、論争を巻き起こしながらも、同時に、多くの読者を獲得することになる<sup>21)</sup>。

『家政論』翻訳と注釈の発表以降、金銭の価値を積極的に評価する言説は広く共有されていく。たとえば、フィレンツェの「市民隊長」(capitano del popolo) であったステーファノ・ポルカーリ (Stefano Porcari) は、1427年に行った演説において、財産の重要性と必要性を宣言している。

日々の糧が金銭的富に依拠していることは明らかであると思われる。私的な日常の必要を考えてみよう。我々と家族が平穏と静寂を楽しむ家と邸宅を、何によって備えるのか。富によってである。衣服や家具、また、適度な装飾を、何によって備えるのか。富によってである。我々と我々の子供たちの食事と補給を、何によって行うのか。富によってである。何によって我々の息子たちを教育し徳高くさせるのか。何によって娘たちを結婚させるのか。富によってである。こうした事々について、我々は次のことを知るのである。つまり、共和国が生きていてこそ、そこで我々は業務を行い富を獲得することが許されており、法とよき習慣が認めるかぎり、我々の生活の糧を気前よく備えることができるのである。<sup>22)</sup>

こうした現実的な視点は、1430年代前半以降に執筆されたと考えられている、パルミエーリによる『市民生活論』(Vita civile) や、アルベルティが財産の獲得とその保全について分析を行い<sup>23)</sup>、さらに「貧しさは勉学の妨げである」と述べてもいる<sup>24)</sup>『家族論』へと引き継がれていくことになる。

このように、長きにわたり支配的であった禁欲的な金銭観は、1410年代から1420年代にかけて大きく変容している。この変容が生じるまでは、金銭を積極的に評価することは否定されてきた。貧困がもたらす現実的な困窮という問題は、貧しさが帯びる道徳的価値の問題へとすり替えられて、軽視されてきたのである。しかし、人文主義者にとって新たな主題である家政をめぐる議論が、一定の条件を付けながらも蓄財を肯定し、金銭の価値を積極的に評価する土壌を作った。そのため、元来、相容れないとされてきた家政と勉学、また、両者

の最終的な目的である蓄財と美德は、ともに評価され追求されるべきものとしてみなされ始めたのである。

以上の流れを確認すると、『文芸』を執筆した時点においてアルベルティは、同時代に生じていたこうした金銭観の変化を十分に意識していたと思われる。たしかに『文芸』には、禁欲性を帯びていると思われる金銭観は観察されるものの、アルベルティによる主張の根底には、経済的収支に注目する現実的視点が存在しているからである<sup>25)</sup>。実際、この視点は、『家族論』第三巻、「家政」(*Economicus*)をめぐる対話の末尾において、人生経験に満ちたジャンノッツォ (*Giannozzo*) が与えている、「君たちの出費が、決して収入を上回ることがないようにしなさい」<sup>26)</sup>、また、「出費が収入と同じか、それを下回るようにしなさい」<sup>27)</sup>という忠告に観察される視点と一致している。さらに、『文芸』においてアルベルティが蓄財そのものを否定していない点も、注目に値するであろう。『文芸』において、軍務と商業、さらに農業が、蓄財にふさわしい立派な職業として奨励されている。

非常に確かな財産を築くことに適した誠実でたしなみのある手段が少なからず、列挙すれば長くなるほどに存在する。しかし、次のことが軽視されてはならない。つまり、文芸によって経済的に富むことに比べて、ずっと簡単に富むことができないような技術や学問は存在しないということ。もし、君が軍務に身を投じれば、文芸において期待されるわずかな富と比べてずっと頻繁に、豊かきわまりない富を獲得することができる。戦場において兵士たちには、莫大な富を獲得したり、このうえない偉大さを獲得したりするための様々な道が開けている。他方、文芸が実利的であることを望む人物は、卑しい守銭奴として立ち現れざるをえないのである。もし、君が商業に従事するならばどうだろう。君が望むだけの間、稼ぎ続けられるのではないだろうか。君が何か商品をもたらすことを期待する無数の港、土地、人々が、あらゆる場所に存在しているのではないだろうか。さらに、君が農業に従事するならばどうだろう。いったいどんな生き方が、より幸せであろうか。より豊かで金儲けにふさわしく誠実な実りが、何かしら見つけられるというのか。平和で自由な農業だけが、学識のない人物には平穩を、学識ある人物には幸せをもたらすことができる。というのも、しっかり耕された農地からの収穫ほど確かなものを、その他のどんな活動からも期待できないし、よく幸せに生きるための多くの閑暇、また、あらゆる喧騒と面倒からの驚くべき解放を、農地は与えてくれるからである。農村の生産物からもたらされるものほどに偉大かつ持続する利益は何もないということも、付け加えなければならない。しかし、農業やその他の実利的な職業をめぐる称賛は、また別の機会に行うことにしよう。<sup>28)</sup>

『家族論』においてと同じく『文芸』においても、金銭の価値、また、金銭を稼ぐという行為自体は否定されていないのである。

この箇所を観察される農業の称揚についてゴッジ・カロッティは、『家族論』第三巻にお



ける「農園」(villa)を称賛する言説との対応を指摘している<sup>29)</sup>。さらにオッペルも、上記引用箇所、アルベルティが三職の称賛を閉じる際の文言に、『家族論』への示唆を読んでい<sup>30)</sup>。くわえて、軍務、商業、そして農業の称賛が、人文主義者による言説に頻繁に観察されることも忘れてはならない。たとえば、これらの職種についての言及は、ブラッチョリーニ『貪欲論』において蓄財を称揚する役回りを与えられた登場人物、ロスキの台詞に確認される<sup>31)</sup>。また、同様の言説は、1443年の作ではあるが、マッフェーオ・ヴェージョ(Maffeo Vegio, 1407-1458)による教育論、『子供の養育と彼らの輝かしい振る舞いについて』(*De educatione liberorum et eorum claris moribus*)にも確認される<sup>32)</sup>。したがって、『文芸』を執筆した時点において、アルベルティが同時代における人文主義的諸言説を意識していたこと、また、『家族論』において示されている合理的かつ現実的な金銭観をすでに獲得していたことが、推測されるのである。

『文芸』と『家族論』が密接に関係していることは、経済的に豊かになるための手段をめぐるアルベルティの分析からも裏付けられる。『家族論』第二巻において、リオナルドは稼ぎを二種に大別している。

稼ぎは我々自身から、あるいは、我々の外部から生じる。我々自身においては、勤勉さや才知といった種の我々の精神力が稼ぎに適している。〔……〕さらに、稼ぎにふさわしい身体の活動も存在する。〔……〕また、我々自身による稼ぎのうちには、精神と身体が協働する活動で、それにふさわしいものも存在する。〔……〕我々自身の内部に存在するこうした稼ぎの手法はすべて、技能と呼ばれる。〔……〕我々の外部において稼ぎにふさわしい事柄は、運命の支配下にある。たとえば、隠された財宝を見つけ出す、あるいは、遺産や贈与が君に転がり込んでくるといった、少なからずの人々が望む事柄である。<sup>33)</sup>

人は、自らの才覚によって、あるいは、運命の好意によって、経済的に豊かになることができる。この見解は、すでに『文芸』において提示されている。

実際、豊かになる可能性と方法とはいかなるものであるのか、調査されることになる。人間にとって蓄財するための道が二つ、つまり、一方で、運命が我々に対し開く道、他方で、技能と熱意がもたらす道が開かれていると誰かが言うならば、私が思うに、その人物は正しい意見を述べることになるであろう。我々は運命のお蔭、たとえば、遺産相続や贈与といった、我々の美徳からではなく運命の好意から生じる贈り物によって、富むことがある。他方、我々の熱意、たとえば商業や報酬、こうした種の稼ぎによって富むこともある。したがって、このような点について文芸がどれだけ有益きわまりないのか、調べられなければならない。<sup>34)</sup>

『文芸』を執筆した時点において、アルベルティが『家族論』において詳述することになる現実的かつ合理的な金銭観をすでに獲得していたことが、やはり推測されるのである。結局、『文芸』においてアルベルティが示している金銭観を検討するためには、「自発的な清貧」という思想に注目するだけでは不十分であると思われる。

しかし、『文芸』において実利的な職業が称揚されている背景として、利潤の追及が認められた社会一般と、金銭に価値を見出さない学問世界との間に、ある種の区分が設定されているとみなすことも可能かもしれない。たとえばレゴリオージは、『文芸』における金銭をめぐる議論に「観想的活動と実利的活動との対置」<sup>35)</sup>を観察している。また、アルベルト・ジョリは、バットィスタが、実業で財を成したアルベルティ一族と自らとの対比を通じ、「正統な知識人すべてが、儲けに向けた視点と自らとの間に設定する関係」<sup>36)</sup>を明らかにすることを試みたとみなしている。さらに、この作品に独特の経済観を観察しているオッペルも、学問が商業的に扱われることをアルベルティが拒絶していると述べている<sup>37)</sup>。

しかし、非常に曖昧な表現を用いてモンタルトが示唆しているように<sup>38)</sup>、文人が学問を通じて収入を得ることは、『文芸』において否定されていない。

学究者よ、ここでいっそうしっかりと次のことを私は述べておきたい。子供を教授したり、小作品を執筆したり、裁判で弁護したり、熱を治したり、あるいは、法について長々と論じたり、こうした仕方によって得られる非常にわずかな収入によって富むことができるなどと、君は期待してはならない。決してそうはならない。なぜなら、そうした収入は日々の必要をなんとか満たすほどにわずかであり、莫大な財産になるには非常に時間がかかるほどに稀でしかないのだから。<sup>39)</sup>

このように、教育、執筆、弁護、法学の講義、医療といった自らの本分を弁えた仕方で文人が収入を得ること自体は、否定されていない。ただし、彼らがこうした「文芸に由来する正当な報酬によって」蓄財を行い裕福になることは、不可能なのである<sup>40)</sup>。蓄財を行うためには、「稼ぎが多く頻繁であり、出費が少なく稀で」<sup>41)</sup>なければならないからである。

結局、アルベルティは『文芸』においても、道徳的観点から否定されるべきものとして金銭をみなしているわけではないと思われる。たしかに、この作品には、金銭を軽蔑する自発的清貧という視点に立脚すると思われる言葉も確認される。しかし、禁欲性を帯びているように思われるこうした諸言説にこそ、同時代に生じた金銭観の変容、また、読書の掟に縛られた哀れな文人に対する揶揄の意識を見出すことが可能なのではないだろうか。この点を念頭に置きつつ、文人が期待できる収入をめぐるアルベルティの主張を見直してみよう。アルベルティによれば、文人が期待できる収入はわずかきわまりない。この見解を証明するために、千人の若者のうち何人が裕福な文人になりうるのか、統計的な分析が行われている。続いて、蓄財に適した諸学問と人文諸学科との対置から、後者に身を投じた文人の貧しさが明らかにされている。さらに、文人が結婚を通じて経済的に豊かになる可能性が論じられて

いる。これらの問題に、文人と金銭との関係をめぐる伝統的な見地と同時に、同時代において新たに導入された視点が観察されることになる。

## 2. 文人が期待できる収入

### 1) 統計的分析

アルベルティによれば、「たしかに、人生においては無数の出来事が生じ、それらに揺り動かされた人々のうちごく少数の者たちだけが、文芸からの報酬を手にすることができるようになる」<sup>42)</sup>。文人が経済的に豊かになることが困難であり、ほとんど不可能であることを示すために、千人の若者のうち何名が四十歳まで生きながらえることができ、蓄財できるほどの収入を期待できる文人になれるのか、アルベルティは分析を行っている。オッペルは、この「文人層の人口動態の分析」<sup>43)</sup>について、アルベルティの独自性を読み込んでいる。他方、ボスケットは、この「統計」という叙述方法が、同時代において法学者の間で広く読まれていた、ジャン・ピエトロ・フェッラーリ (Gian Pietro Ferrari) による『法学の現代的実践』 (*Pratica moderna iudicialis*) に付された序文に観察されることを指摘している<sup>44)</sup>。いずれにせよ、アルベルティによれば、文芸研究に適性を持つ人物のうち、勉学の過酷さに耐え、運命による障害にも負けず<sup>45)</sup>、四十歳を迎えて文芸学から収入を期待できる人物は、わずか三名にすぎない<sup>46)</sup>。しかし、この三名の文人は、人格的に気高い理想的な文人ではなく、悪辣な人物である。

ああ、学者たちの厳しい運命よ！ 何が最もつらい不幸であろうか。千人もの人物の労苦、無数の心労、多大な徹夜、また、学者において日々増大し、とても信じられないほどの熱意は、ただ三名に、しかも、悪意によって名高い者たちにしか、実りをもたらさないのである。彼らの運命は好意を獲得することに、知性は狡猾さに、心は嘘に、生き様は恥辱に傾き慣れ親しんでいるのであるが、彼らのことを非常に学識深いと学識に欠ける人々はみなしており、また、彼らについて大衆が下す軽率な評価が幅を利かせているのである。<sup>47)</sup>

大衆による支持を獲得しないかぎり、文人は貧困を免れない<sup>48)</sup>。そして、無知な大衆は、「不正を美德とみなし、偽りと偽装の技術を、まるで何か学識の特別な力であるかのように誉めそやし、文芸をめぐる学識から悪意、悪行、また、欺瞞が獲得されると考えている」<sup>49)</sup>。したがって、文人として適性を持ち過酷な勉学に耐えてきた三名の文人のうち、「不正きわまりない人物」が、蓄財できるだけの収入を獲得することになる<sup>50)</sup>。

グレイソンは、アルベルティによるこの分析において描かれている、熱心に勉学に打ち込む、一見、禁欲的に見える文人像に、『ブルートゥス』 (*Brutus*) におけるキケロとホルテンシウスの姿を読み込んでいる<sup>51)</sup>。しかし、この分析が最終的に、蓄財を行う文人に対する批判へと変容している点に注目すれば、むしろ、ここにはアルベルティによる揶揄の意識を認

めるべきであると思われる<sup>52)</sup>。実際、ボスケットは、この統計において、ただ一人、富むことができる不正きわまりない文人が、ブルーニの姿を指し示している可能性を指摘している<sup>53)</sup>。ブルーニが資産家であったことは、同時代人にとっても周知の事実であった。たとえば、ブラッチョリーニによるブルーニへの弔辞では、彼が「教皇ヨハネス二十三世の好意により、多くの金銭を稼いだ」<sup>54)</sup>と述べられている。さらに、ジャンノッツォ・マネッティ (Giannozzo Manetti, 1396-1459) も、「労苦と徹夜、そして、あの信じられないほどの雄弁により、豊かな財産を獲得した」<sup>55)</sup>と、ブルーニの経済的豊かさについて証言している。たしかにブルーニは、『フィレンツェ市民史』執筆に対する報いとして、フィレンツェ市民権のみならず、免税特権をも獲得している<sup>56)</sup>。さらに、1427年に実施されたカタストによると、彼は数々の地所および国債を所有し、商業と銀行業に多額の投資を行っている。ブルーニは、フィレンツェにおける全納税者のうち上位1パーセントに入る高額納税者であり、また、課税対象となる資産以外の収入も得ていたのである<sup>57)</sup>。さらに、ブルーニが貪欲として悪名高かったこと、また、彼がその悪評を気にかけていたであろうことは、1429年、ブラッチョリーニが『貪欲論』の校正を依頼するためにニッコリに宛てた手紙からも推測できる<sup>58)</sup>。これらの点、また、アルベルティが『食間対話集』第二巻をブルーニに献呈し、その貪欲さを揶揄している点をも踏まえると、『文芸』におけるこの統計をブルーニに対する揶揄としてみなすボスケットによる提案は、妥当であると思われる。

アルベルティによれば、文人は正当な仕方で稼ぐかぎり、わずかな収入しか期待できない。他方、蓄財することが可能なほどの大金を稼ぐ文人は、無知な大衆からの賛同を得た、悪辣な存在である。こうした「愚かな大衆」への言及は、人文主義者による言葉、それも、ニッコリに対する諸糾弾に、頻繁に確認される。たとえばグアリーニは、ニッコリを糾弾する際に、「大衆は、学識を生き方の飾りや名誉の親としてはみなさず、むしろ、人類に対し継母として準備され、傲慢さの仲間、中傷の娘、真実の敵対者として見つけられたと叫びまわるのである」<sup>59)</sup>と述べている。大衆は、学識の価値を正しく判断することのできない、愚かな存在なのである。そのために、こうした愚かな「大衆の意見に迎合することは、みっともなく、学究者にとってふさわしくない」<sup>60)</sup>行為としてみなされていた。実際、ブルーニは、ニッコリについて、「彼は並外れた愚か者しか騙すことができていない。そして、その自惚れで自らを苦しめて、知的な人物に笑いや失笑の種を提供している」<sup>61)</sup>と述べている。ニッコリは、まっとうな文人からは蔑まれ、愚かな大衆からしか賛同を得られない似非文人なのである。

ニッコリのような人物を立派な文人であると誉めそやす愚かな大衆は、自らを正統であるとみなす文人にとって、唾棄すべき存在である。しかし同時に、大衆が形成する世論は、文人にとってある種の脅威でもある。ブルーニは、『口さがない怠け者に対する糾弾』の執筆を決意した理由として、「これ以上、お前が私を傷つけ、あらゆる手段をつくして中傷と攻撃で挑発し、お前の仲間の耳に吹き込み、彼らがそれを聞いて大衆の間にデマを流すなら、それでも私は黙して耐えるだろうか」<sup>62)</sup>と述べている。文人は大衆を軽蔑しつつ、同時に彼

らを恐れていたとみなされるであろう。人文主義者が大衆に対して抱くこの相反する感情を、『文芸』におけるアルベルティは意識していたと思われる。快樂をめぐる議論において、彼が次のように述べているからである。

大衆は、ちょうど振る舞いの検閲官として立ち現れるが、文人に対しては必要以上に、また、他の者たちに対してよりも激しく非難を加える。「こんな時間はよくない、そんな服を着ているとは常識外れだ、こうした交友関係はよくない、その場所は高貴さに欠ける、それはやりすぎだ、それは言いすぎだ」と。結局、みながかぎりない憎しみで、学究者の名声を引き裂こうと必死に務めているのだから、もし、君が軽薄きわまりない道化師や怠け者としてみなされたくないならば、君が思うまま自由にではなく、このうえなく厳しい大衆の検閲に従って生きなければならない。<sup>63)</sup>

この箇所においてアルベルティは、「本来ならば軽蔑に値する大衆の意見に迎合せざるをえない文人」を揶揄しているとみなされる。この姿勢を踏まえると、「蓄財できるほどに稼ぐことができる唯一の文人は、大衆の賛同を獲得している」という主張は、ブルーニのように経済的に豊かな文人に対する強烈な批判として機能することになる。

以上のように、アルベルティはこの統計的分析に大衆蔑視というトポスを持ち込むことで、金銭の価値を肯定的に評価する新たな価値観に従い蓄財に邁進する文人を、大衆迎合として批判し、揶揄していると考えられる。しかし、金銭の価値をめぐる革新的な思想を揶揄しているからといって、アルベルティが伝統的な立場を支持して蓄財を批判し、文人の清貧を称揚しているとみなすのは早計である。この点について、実利的な学問と金銭的報酬を期待できない学問との対置を、以下で観察する。

## 2) 実利的学問と人文学との対置

アルベルティはさまざまな知的職種の実利性について論じているが、この箇所にも、現実的な視点は欠けておらず、結果的に、同時代の思想に向けられた揶揄の意識が観察される。彼は実利という観点から、知的職種を次のように分類している。

数多の学問分野に分かたれている文人すべての群れのうち、三つの職種だけが実利的であることが知られている。まず、裁判と契約の記録を取る者たちの職、続いて、法律を監督する者たちの職、三番目に、病人を治療する者たちの職である。その他の職種はすべて、学識によってよりも、その貧しさによって名高いと思われる。これは不当なことではない。なぜなら、身体や富にまつわる諸善に役立つ職種だけが儲けのために生じたのであり、それにふさわしいのであるから。他方、魂と才知を育む学芸は、何かしら、より偉大で永遠不滅なものを求めるのである。<sup>64)</sup>

さらに、公証人、法律家、そして医者という、実利的な職種にしか社会的な価値が認められておらず、「魂と才知を育む学芸」は蔑まれているという現状も、分析されている。

したがって、次のような事態にまで至っているのである。つまり、公証人や医者、法律家という三職に従事する文人だけが、立派で有用な文芸を学んだとみなされているのである。なぜなら、彼らは文芸をうまく金儲けの道具にしたからである。その他、知性、事物の本性、振る舞いや、最大級に卓越し優雅きわまりない事柄にかかわる学識は、不毛かつ無価値であるとして市民たちから軽蔑され、排除されるのである。そして、実利的な文芸だけが称賛されるのである。<sup>65)</sup>

レゴリオージは、「有用性と不誠実さとの絶対的で一義的な同一視」をこの見解に読み込み、アルベルティがキケロの思想に見出される「有用性と誠実さとの同一視」とは真っ向から反する姿勢を示していると指摘している<sup>66)</sup>。さらにジョヴァンニ・ロッシは、こうしたアルベルティによる批判が実利的な学問そのものではなく、「誠実さおよび正しさという観念すべてとともに失われた公益意識をめぐる、社会全体としての習わしにおける墮落と混乱」<sup>67)</sup>に向けられているとみなしている。結局、アルベルティの姿勢には、実利に背を向けた禁欲性が読み込まれてきたのである。

しかし、アルベルティによるこうした批判は、レゴリオージ自身が指摘しているように、ペトラルカ『医者に対する糾弾』や、ボッカッチョが1375年の死に至るまで校訂を続けた『異教の神々の系譜』(*De genealogia deorum gentilium*)、さらに、ダンテが1300年代初頭に執筆した『饗宴』(*Convivio*)にまで遡る、伝統的なトポスである<sup>68)</sup>。また、実利という視点からなされる学問間の区分は、ブルーニがニコロ・ストロツィに宛てた手紙に確認されるように<sup>69)</sup>、人文主義者が人文学を称揚すると同時にスコラの諸学問を批判する際に、頻繁に用いた構図と一致している。実際、モンタルトは、『文芸』に観察されるこの対置と、ブラッチョリーニが1424年にロスキに宛てた手紙に観察される対置とが類似していることを指摘している<sup>70)</sup>。この手紙において、ブラッチョリーニは次のように、実利的な知的職種と人文学とを対置させている。

我々の学問は、金儲けへのあらゆる希望から遠く離れており、欲望を刺激するような何かではなく、むしろ、欲望に対する軽蔑、また、真の美德の道を我々に約束してくれる。さらに、学問においては学問自体のほか、何も期待されるべきではないということを教えてくれる。蓄財や稼ぎ方について、何も我々に教えはせず、むしろ、それらを軽蔑し放棄することを教えてくれる。したがって、人文学に深く身を投じた者たちの多くが、あらゆる野心や人々の喧騒から遠く離れ、閑暇と平穏、また、清貧のうちに生きたことが知られるのである。／あるいは、君が法学や医学、さらに、その学識が立派である数多くの技術にかかわる学問のことを考えてみれば、それらのうちいくらかが、実入りが

よく実利的な技術であることに気付くであろう。知を求めてそれらの学問に進む人物は誰もいない。むしろ、儲けと稼ぎのためなのである。もし、そうした希望をそこから取りされば、それらの学科は黙し、かの者たちの書物は、錆とほこりにまみれて汚れ放題になるであろう。<sup>71)</sup>

モンタルトは、『文芸』におけるアルベルティの論調と、このブラッチョリーニの手紙に観察される思想とが類似していることを指摘しながらも、前者が示す金銭観と比較すると、後者の見解にはある種の節度が観察されると主張しており<sup>72)</sup>、その根拠として、ブラッチョリーニの手紙から、次の箇所を提示している。

私は次のような人物でもない。つまり、偶発的に手にされる諸善に対し宣戦布告がなされるべきで、栄誉、富、財産および威厳が、すっきりと拒絶されるべきであると考えられるような人物ではない、こうした事柄が誠実な仕方で獲得され、美德の真の道がそれらへと続いているという条件のもとではあるが。私はしかし、美德をめぐる教えが好まれるべきであるとみなす。その教えによる抑制から、その他の事柄をめぐる配慮がなされるのである。さらに、その教えだけが、我々に魂の真の安らぎを与えることができるのである。<sup>73)</sup>

このように、蓄財を含めた現世的諸善の価値をめぐり、ブラッチョリーニがある種の妥協を認めている一方、『文芸』におけるアルベルティは、学問と金銭との間に存する「絶対的な不可侵性」を主張していると、モンタルトはみなしている<sup>74)</sup>。しかし、すでに触れたように、アルベルティも文人が稼ぐこと自体を否定してはいない。ただ、悪辣な仕方ではなく、「文芸に由来する正当な報酬によって」<sup>75)</sup>文人が裕福になる可能性を、アルベルティは否定しているのである。この点は、実利的な職種である公証人および医者についても当てはまる。なぜなら、「密告したり口が軽いおかげで経済的に豊かな公証人よりも、誠実きわまりないために貧しい公証人を数多く私は知っている」<sup>76)</sup>、また、「私は医者について、より長々と批判を繰り広げていたことであろう、もし、数多くの善人である医者が、常に苦勞して貧苦と激しく格闘し、攻撃する準備を整えていることを、私が知らなかったならば」<sup>77)</sup>と、アルベルティが述べているからである。実利的な職業に就く文人が正当かつ誠実な仕方で収入を手にすることも、アルベルティは否定していないのである。したがって、アルベルティによる主張が、ブラッチョリーニの示す見解よりも禁欲的であるとは、必ずしも断定できないことになる。

両者の意見の間に差異を見出すならば、実利的な知的職種の扱いに目を向けるよりも、むしろ、そうした職に従事する文人に対置されている文人——ブラッチョリーニによれば人文主義者、アルベルティによれば「魂と才知を育む学芸」に身を投じた文人——の扱われ方の違いに注目すべきであると思われる。アルベルティは、実利的ではない諸学問に身を投じ

た文人を、次のように描写している。

もし、こうしたことを君が否定するならば、尋ねるが、文法家、修辞学者や哲学者たちが、文芸に少ししか熱意を注いでいないと君には思えるのだろうか。続いて尋ねるが、彼らのうちどれだけが、金持ちであると君は知るのであるか。こうした種の文芸ほとんどすべてが、施しを求めて家庭教師として市民たちの家々をめぐっていることに、君は気付かないのか。立派な返答を教えよう、哲学者たちは金銭を最大の悪として軽蔑したために、文無しの貧乏人として横たわっているのである。<sup>78)</sup>

アルベルティが描き出している「魂と才知を育む学芸」に身を投じた文人、あるいは「文法家、修辞学者や哲学者たち」は、ペトラルカ『孤独な生について』における「金銭を重荷としてみなし、自発的に清貧を求める文人」、また、ブラッチョリーニが称揚している「金銭を軽蔑し、穏やかな心で勉学に打ち込む文人」からは、かけ離れた姿を示している。文人は、不誠実で悪辣な人物を除き、理想論としての清貧の思想に縛り付けられているために、わずかな収入を求めて奔走せざるをえないのである。

アルベルティは、人文主義者が実利的職業に従事する文人に向けて行った批判を熟知していたと考えられる<sup>79)</sup>。したがって、『文芸』における公証人、医者、法学者に対する批判に、アルベルティが個人的に育んだ禁欲的思想を読み込む必要はないと思われる。むしろ、「魂と才知を育む学芸」に身を投じた文人、また、「文法家、修辞学者や哲学者たち」、つまり「人文主義者」としてみなされる文人の扱われ方に注目すると、伝統的に価値を認められてきた「自発的な清貧」が、実際には「強制された貧困」にすぎないことをアルベルティが暴露し、揶揄していることが明らかになるのではないだろうか。

金銭的富を含めた現世的諸善を軽蔑し、人文学に身を捧げた文人は、道徳的観点からは、たしかに高貴な存在なのかもしれない。しかし、そうした文人は、現実的な障害しかもたらさない「自発的な清貧」という思想に縛られているために、実際には、生きるために惨めに施しを求めて奔走しなければならない。「自発的な清貧」は、「強制された貧困」にすぎないのである。さらに、こうした貧しい文人との比較のうえで、金銭の価値を肯定する価値観に従い、蓄財が可能なほどの大金を稼ぐことができるごく少数の文人——たとえばブルーニのような文人——は、愚かな大衆からの賛同を獲得し、何かしら不正な方法を用いて経済的に豊かになった、悪辣きわまりない文人として、揶揄されることになる。

以上から、ブラッチョリーニのように「自発的な清貧」という伝統的な価値観を提唱し続ける文人、また、ブルーニのように「金銭は有益である」という新たな価値観に従って行動する文人のどちらも、アルベルティによる批判と揶揄の射程に入っていることが窺える。文人からは、「一方で、富もうとする欲望が、他方で、豊かになる能力が取り去られているのである」<sup>80)</sup>というアルベルティの言葉は、この点を裏付けることになるであろう。文人は、伝統的な価値観に縛られているのならば、金銭的富に対する欲望を放棄しなければならず、



また、もし、新たな価値観に従ったところで、不正かつ悪辣な方法に頼らないかぎり、蓄財できるほどの稼ぎを期待することは不可能なのである。

### 3) 文人による結婚

アルベルティは、同時代における人文主義的諸言説を踏まえて、伝統的な金銭観、また、新たな金銭観の双方を揶揄していると考えられる。こうした姿勢は、文人が蓄財する方法のひとつとして結婚が論じられている箇所に、より明らかに観察される。伝統的に、文人にとって結婚は忌避されるべきものとしてみなされてきた。たとえばペトラルカは、「尋ねるが、とりわけ夜間の孤独と静けさ、小さな寝台における休息と自由以上に、何が幸せであろうか。したがって、独身でいること以上に幸せなことはなく、独身者にとって孤独以上にふさわしいものは存在しない」<sup>81)</sup>と述べている。しかし、バルバロによる『結婚論』、また、ブルーニが行った『家政論』の翻訳および注釈により、市民生活に必要なとされる古代的な規範に則った「家父長」(pater familias)の姿が称揚され始めた。そしてブルーニは、『ダンテ伝』において、文人による結婚を奨励することになる。この伝記を執筆するに当たりブルーニは、ダンテが結婚していたという事実をボッカッチョが否定的に捉えていることに、不満を露わにしている。

この点についてボッカッチョは我慢がならず、妻帯は勉学の対極にあると述べている。彼はしかし、次のことを考慮していない。つまり、かつて存在したうちで最高の哲学者であるソクラテスが妻子を持ち、祖国において政務に就いていたことを。また、その著作において知と学識についてそれ以上語ることもできないアリストテレスが、同時期にはないにせよ、妻を二人娶っており、子息と豊かな財産を保持していたことを。さらに、キケロ、カトー、セネカ、ウァロや至高のラテン哲学者たち、彼らすべてが妻子を持ち、政務に就いていたことを。したがって、ボッカッチョにはお許し願いたい、この点にかんして、彼の判断は根拠を欠いており、正しい意見からかけ離れている。すべての哲学者が認めるところによると、人間は市民的な動物である。そして、その根底に存在する結びつきが夫婦関係であり、それが増大して町を形成する。こうでないかぎり物事は完全ではなく、この愛情だけが自然で正統、そして、完璧なのである。<sup>82)</sup>

こうした市民的人文主義の理想像を体現するかのよう、ブルーニは早くも1411年頃に某トマサーザ(Tommasa)と、また、ブラッチョリーニは1436年にヴァッジャ・ディ・ジーノ・ブオンデルモンティ(Vaggia di Gino Buondelmonti)と結婚している。そして、ブルーニが1100フィオーリーニの嫁資を得たこと<sup>83)</sup>、また、薬屋の息子であったブラッチョリーニが名家の娘を娶ったこと<sup>84)</sup>から明らかのように、結婚は実利的な側面をもっていた。実際、結婚が帯びる実利性についてバルバロは、嫁の選択において嫁資の多寡だけを重視する風潮を戒めている<sup>85)</sup>。アルベルティは『文芸』を執筆する際、結婚をめぐるこうした諸議論を意

識していたと思われる<sup>86)</sup>。なぜなら、実利的な職種に就く文人と人文主義者との比較に続き、高名な法学者といった文人は結婚の引く手数多であり、嫁資によって経済的に富むことを期待できるのではないかという意見を分析しているからである。

アルベルティはまず、「文人は結婚を避けるべきである」という伝統的な立場から、彼らが嫁資を獲得することにより経済的に豊かになる可能性を退けている。アルベルティによれば、「学識ある人物は、まず、自由を望むのであり、何よりも他人への隷属、とくに女性への隷属を避けるのである。〔……〕というのも、女性という種はその本性として愚かで傲慢、喧嘩好きで大胆、横柄で軽率なためである」<sup>87)</sup>。こうした言説には、ユウエナリスに遡る女性蔑視の視点に加え<sup>88)</sup>、ペトラルカの影響も指摘されている<sup>89)</sup>。ペトラルカは、たとえば『幸・不幸への対策について』において、「美しい嫁」を娶ることについて次のように述べている。

お前は喧嘩好きで横柄な偶像を所有しているのである。お前はひれ伏してそれを讃え、魂が抜かれたように驚嘆し、崇拜し、すっかりとそれに依存しているのである。お前は頭をくびきへと差し出し、嫁の容姿に満足し、その他の事柄、そして、自らの自由を遠くへ捨て去るがよい。〔……〕だから、お前は嫁の命令に従って生き、女主人の指示を配下として順守するがよい。お前はもはや夫ではなく、奴隷にすぎないのである。<sup>90)</sup>

「結婚は妻への隷属であるために、文人はそれを避けるべきである」という見解は、文人による結婚を肯定的に評価する新たな視点が導入された後にも確認される。たとえば、ブラッチョリーニによる『老人は嫁を娶るべきか』(*An seni sit uxor ducenda*, 1436)において、登場人物の一人であるニッコリは、「なんという愚かしさなのか、老年に至るまで君は嫁を娶ることを軽蔑し、好きなように自由に生きてきたのに、いまになって自ら隷属に飛び込み、新たな面倒の原因を求めるとは。そうした面倒を背負い込むことは簡単ではないし、それらを捨て去ることもできないのに」<sup>91)</sup>と述べている。バルバロやブルーニにより新たな価値観が導入されても、文人にとって「避けるべきくびき」として結婚をみなす姿勢は、根強く残存していたのである。

実際、『文芸』におけるアルベルティも、

誰が否定するであろうか、次のような人物が味わう隷属が、もっとも恥ずべき隷属であることを。つまり、おしゃべりで、いつも実家の財産と経済的豊かさを持ち出してくる妻に耐えることを決心した者たちが味わう隷属のことであるが。豊かな嫁資にはこうした面倒が、決して欠けはしないのである、人々の不幸よ。〔……〕言われているように、金持ちの女性よりも耐え難いものなど、何も存在しないのである<sup>92)</sup>

と述べている。妻に対する夫の隷属は、嫁資を目当てに結婚がなされた場合、より過酷なも

のとなるのである。こうした見解も伝統的なものであり、ペトラルカも、「豊かな嫁資を持つ嫁よりも手におえず憎むべきものは、何も存在しない。彼女は自分に禁じられていることなど、何もないとみなし、自分の財産を夫の貧しさと比較し、夫を養い、自分が仲間ではなく女主人であるとみなしている」<sup>93)</sup>と述べている。このようにアルベルティは、伝統的な女性蔑視の視点に根拠を据えた「文人は結婚を避けるべきである」という言説を用いて、文人による結婚、また、結婚により彼らが経済的に豊かになる可能性を否定している。こうした姿勢は、『文芸』と近接した時期に執筆されたと考えられている『食間対話集』所収の『妻』(Uxoria)にも観察されている<sup>94)</sup>。この作品では、本性的に大胆で軽率な妻を夫はどのように扱うべきかが議論され、夫はそうした妻の不品行を耐えるのでも、それを矯正するのでもなく、そもそも結婚自体を避けることが、もっとも賢明な選択であるという結論が出されている<sup>95)</sup>。

伝統的な女性蔑視の視点から「文人は自発的に独身生活を選択すべきである」と主張しているアルベルティではあるが、続いて、文人による結婚という問題を、まったく異なった視点から論じている。文人が伝統的な価値観を捨て、豊かな嫁資を期待できるような立派な家柄の娘を娶ることを望んだところで、自らの娘を文人に嫁がせることを認めるような奇特な母親などいない<sup>96)</sup>。母親は、「私は反対し禁じます、あの半死半生で汚らしく陰気な文人に、私たちの娘を嫁がせるなんて」<sup>97)</sup>と叫ぶはずである。当事者である娘も、哲学のことしか話すことができない文人へ嫁入りすることを、拒絶するはずである<sup>98)</sup>。また、娘の兄弟は、文人よりも垢抜けた人物との姻戚関係を望むはずである<sup>99)</sup>。結局、文人は婿の候補としては最悪であり、たとえ彼らが望んだところで、経済的に恵まれた結婚をすることは不可能なのである。

貧乏なお前は金持ちと競ってはならない。青白く陰気な自分を他の若者たちと比べてはならない。娘たちの前で、見た目の美しさよりも権威を優先させてはならない。行け、いや、むしろ逃げろ、お前の図書室に閉じこもれ。なぜなら、行動的で快活、また、美しく優雅な若者が、思い人をお前が奪い去らぬように、あらゆる技と才知を用いて気を付けているからである。お前は笑いものになることであろう、みすぼらしく薄汚れた我が文人よ、もし、結婚をめぐり、優雅で洗練されたライバルと張り合おうなどとすれば。なぜなら、もし、お前がめかしこんで姿を現したりすれば、文芸の権威や威厳など、すべて投げ捨てることになるからである。<sup>100)</sup>

「文人は婿として望まれない」というこの主張には、ダンスなど、高貴な若者にふさわしい諸快樂から排除される文人の描写に観察されたものと同様の、揶揄の意識が明らかである。アルベルティが描いている文人は、女性を軽蔑し結婚を自ら放棄する禁欲的で高潔な存在ではない。文人は婿として拒絶されるために、たとえ望んだところで、結婚をすることができないのである。それでも嫁を娶ることを望む文人に対し、アルベルティは次のような助言

を与えている。

それでは、〔彼らに〕どんな嫁を娶らせるべきであると判断しようか。まず、貧しい嫁は究極の悪として避けるべきである。続いて、若い嫁を求めてはならない。そうした年齢の女性は学究者の敵であり、彼らにとって安心できる存在ではない。私は自分が語っていることを知っており、諸例は挙げるまでもない。したがって、文人は、誰か年増の寡婦を捕まえるがよい。そうした女性からは、他の女性からよりも軽蔑されることはないであろう。なぜなら、そうした年増の女性は、子供たちの反抗や姻戚からの攻撃によって圧迫されているという態度を示すことで、誰かしら、一緒にいれば、非常にうるさい姻戚によって彼女たちが日々引きずり出されている判事の前で、より安心感を得ることができるような人物、あるいは、家において、心配や不安なく落ち着くことができるような人物を、財産をちらつかせて誘惑しているからである。たとえ争いをもたらした敵意に満ちているにせよ、こうした嫁資によって豊かになることができたなら、文人は財産について正しく振る舞うことになるとみなすべきである。嫁をめぐるこの議論において私が冗談を言っているように見えるなら、文人たちの結婚を思い出してみればよい。嫁の貞節については語らずとも、彼女たちの年齢と嫁資について検討してみてください。何を君が考えているか簡単にわかるが、こうした笑い話は置いておこう。<sup>101)</sup>

文人は経済的に豊かな年増の寡婦と結婚すべきであるというアルベルティによる忠告は、バルバロが『結婚論』で提示している理想的な嫁の姿を裏返したものである。

しかしまず、次のことが忠告されるべきです。つまり、寡婦ではなく乙女が、年増ではなく若い娘が選ばれなければならない。というのも、若い乙女は必要で役に立つ事々をより容易に覚え、もし、何かしらの悪癖を身につけていたにせよ、より素早くそれらは根絶されるからです。〔……〕若い頃、傲慢さや淫蕩、また、向こう見ずさや冷酷さを見聞きしてそれらに慣れ親しんだ人物が、老年を迎えて上品な人物になるなどと、いったい誰が考えるでしょうか。寡婦も同様に、もし、彼女らが耐え難い病にかかっていたのであれば、そこから立ち直り、我々の生き方に合わせることは非常に困難であると、心構えをしておかなければなりません。<sup>102)</sup>

バルバロによれば、理想的な結婚生活を送るために、夫は嫁を教育しなければならない。したがって、嫁を選ぶ際には、嫁資の多寡よりも、女性の内面性を重視しなければならない<sup>103)</sup>。このため、先夫との結婚生活において、何か悪癖を身に着けている可能性が高い寡婦との結婚は、たとえ多額の嫁資が期待されるとしても、避けるべきなのである。

アルベルティは、結婚および妻の選択をめぐるこうした諸議論を熟知していた。『家族論』第二巻において、理想的な嫁の条件として、「したがって、嫁にはまず、魂の美しさ、つま

り、習わしと美德を求めるべきである」<sup>104)</sup>と、述べているからである。また、嫁の年齢についても、「少女は年齢において純潔で、悪癖を身に着けておらず、性格は内気で、完全な悪賢さも身に着けていない。だから、夫の習わしや望みをすぐに素直に理解して、反抗することなくそれらに従うのである」<sup>105)</sup>と、述べているからである。さらに、嫁資についても、

嫁資は巨額すぎず、確実かつ現実的な額であるべきである。なぜなら、それが多額であればあるほど、支払わせるために時間がかかり、相手方の反応が刺々しくなり、支払は嫌々ながらに行われ、こうした事々において、いちいち大きな負担が君にかかると思われるからである<sup>106)</sup>

と、その多寡を優先してはならないという忠告がなされている。こうした諸条件は、バルバロ『結婚論』に観察されるものと、大幅に異なるものではない。このように、同時代における結婚観を熟知したうえで、アルベルティは悪妻の代表である寡婦を、文人にとってふさわしい嫁として提示していると考えられるのである<sup>107)</sup>。

オッペルは、ブルーニやブラッチョリーニらの結婚が、実際には、決して順風満帆なものではなかったことを指摘している<sup>108)</sup>。結婚を積極的に奨励していた文人も、結局は、理想通りの結婚生活を送ることができたのか、疑問が残るのである。こうした時代状況をも踏まえると、文人による結婚をめぐるアルベルティの議論が揶揄として機能していた可能性は、より高くなるであろう。アルベルティは、文人による結婚を否定的に捉える伝統的な視点だけでなく、それを積極的に評価する新たな価値観をも、同時に揶揄しているのである。

以上のように、文人が期待できる収入について、アルベルティは人文主義的諸言説を意識しながら、それらを揶揄していると考えられる。アルベルティによれば、文人は、誠実に振る舞うかぎり、わずかな報酬しか獲得できない。逆に、経済的に豊かな文人は、大衆に迎合したきわめて不正な人物である。さらに文人は、嫁資により富むことも期待できない。結局、アルベルティは、伝統的な禁欲性に基づいた金銭観と、新たに導入された金銭観の双方を意識しながら自らの議論を展開し、文人は多額の収入を期待することができないと主張していることになる。

それでは、文人に求められる支出について、何をアルベルティは論じているのだろうか。彼は、法学者を息子に持つ、さるポローニャ市民の嘆きを紹介し、文芸学がいかに巨額の出費を求めるのかを説明している。

### 3. 文人に求められる支出：ポローニャの挿話<sup>109)</sup>

#### 1) 勉学に邁進する息子と現実主義者の父

アルベルティは、「しかし、もし文芸学において莫大な金銭が浪費されることを疑う人物がいるならば、この点について、このうえなくふさわしい話題がある」<sup>110)</sup>として、文芸学に必要とされる出費がいかに巨額であるのかを示すために、あるポローニャ市民が漏らした

嘆きを紹介している。この挿話は、文人に課された出費の莫大さを示すのみならず、アルベルティが市民的人文主義に対し向けている疑念を表現していると考えられる。そこで、以下ではこのボローニャの挿話を、ブルーニが『家政論』に付した注釈を念頭に置いて、読み直す。

さて、このボローニャ市民は家業の助けになると考え、法学を学ぶことを希望する息子を大学へ進学させた。しかし、息子が勉学にあまりに没頭し家業をまったく顧みないことを目にし、この父は自らが下した判断について深く後悔している。

父は、もし、息子が文芸に没頭することを認めなければ、高給で雇われた管理人に任せなければならなかった多くの事々を息子の力で達成していたことであろう。管理人を雇うことで父の稼ぎは出費に圧迫され、そのため、わずかきわまりない額になってしまった。もし、家業に外部の人物ではなく息子の力を用いていれば、事態は異なっていたであろう。<sup>111)</sup>

経済的観点に立てば、勉学に没頭し家業に参加しない息子は「家人のうちで格段に無用」な存在なのである<sup>112)</sup>。父は続いて、文芸学に必要な出費を列挙している。

教師、文法家、また、弁証法家へ支払や謝礼がなされ、その他の教師が雇われ、書物が準備され、次から次へと別の書物が購入され、本屋や取立人が途絶えることは、決してなかった。さらに、学位取得と呼ばれる盛大な儀式が続いた。そこにどれだけの巨費が注ぎ込まれ、浪費されたことか、多大な金銭が投じられ、衣服とトーガが仕立てられ、宴が催されて。さらに、家が改修され飾り立てられ、多くの馬鹿騒ぎが続き、ほとんど家産すべてを使い果たしてしまうほどであった。せめて、家の内外における日ごとの出費が増大しないように、こうした事柄に節度が設定されてさえいれば！かつて、息子は祖先の習わしを守り、私的に平穏かつ誠実に生活していた。しかしいまや、学士のトーガがまわれ家名が高められると、すべて、より豪華で豊かなものが求められるのである。<sup>113)</sup>

父は、息子の勉学のために浪費された金銭が莫大であったことを嘆くのみならず、「もし、息子の書物と衣服に費やされた金銭が、そうできたように、投資に回されていれば、いいかい、莫大な富を築いていたはずだ。私は、息子に浪費した金銭を手元に所持していたであろうし、同時に、年利によって殖える分も手にしていたことであろう」<sup>114)</sup>と、言い添えている。

父は、学業がもたらした経済的損失を嘆くだけではなく、勉学に没頭しすぎてやつれ果てた息子の健康も気にかけている。「したがって、慈愛のゆえに苦悩に突き動かされ、息子を書物から遠ざけ、何かしらの気晴らしをさせようとさまざまな仕方で試み、また、寝食を忘

れて自分をそこまで苛むのではないと、しばしば命じていた」<sup>115)</sup>父に対し、当の息子は次のように返答している。

父よ、私をこうした生き方から遠ざけようとししないでください。むしろ、知ってください、私には、こうした熱意を文芸に注ぐことが義務付けられていると。そして、もし、そのことを知り、私の威厳を気にかけてくださるならば、より熱心に私がこうした生き方を追求するようにさせてください。また、私が図書館から、決して出てこないように励ましてください。私の熱意と勤勉によって獲得した名声を、あなたのこうした忠告によって汚してしまわないように気を付けてください。父よ、私が顧客からの信頼を保ち、友人から引き受けた訴訟を全身全霊でこなすようにあなたが命じてくださるならば、より喜んで私はあなたの言葉に耳を傾けることでしょう。あなたは次のことを簡単に理解されるのですから、つまり、友人の期待に応えるために、持ちうるかぎりの熱意を注ぎ、常に並外れた弁護人として私が立ち現れようとしていることを。だから父よ、私が自分の仕事を続けるように放っておいてください。<sup>116)</sup>

息子は読書に没頭するために休息を拒み、そのようにして獲得した学識により友人からの信頼と期待に応え、威厳と名声を獲得し保持することを望んでいた。他方、親心からの忠告に耳を傾けようとしないう息子にあきれ果てた父親は、「衰弱し陰気で青白く病弱な息子を養うよりも、たとえ賢くなくても、頑強で明るく健康な息子を持ちたいと考え、そのため、このうえなく学識ある息子よりも愚かな息子のほうがよかったと、しばしば明言していたのである」<sup>117)</sup>。

この挿話に続いてアルベルティは、実家から離れた土地の大学へ息子を進学させる場合に父が負担しなければならない仕送りについても言及し、「これらすべての事柄を計算してみれば、君は疑いもなく次のことに気付くはずである。つまり、文芸学の学習者は、何かしらの文芸から期待される収入をはるかに凌ぐ金銭を、文芸を学んでいる間に支出することを」<sup>118)</sup>と、文人に求められる出費について結論付けている。以上のように、文芸学が文人に求める出費の例であるこの挿話において、アルベルティは現実的な経済観念を持つ父親と勉学だけに没頭する息子との間に対立を設定している。

アルベルティがポローニャ大学で法学を学んでいたことから、ロッシは、ポローニャの挿話を文学的トポスから外れた作者の個人的な経験の表明であるとみなしている<sup>119)</sup>。また、グラフトンは、学位授与の際に求められる虚飾的儀礼に対する作者の反感を、そこに読み込んでいる<sup>120)</sup>。しかし、この挿話を、法学教育の枠内における作者個人の経験および見解の表明としてではなく、より幅広い視野から検討する諸研究も存在する。たとえば、オッペルは、「実業家である父と学問を志す息子が経済的観点から対立する」という枠組みについて、中世以降の大学教育における「書簡作成術」(ars dictandi)との関連を指摘している。この技術を教授する際に使用されていた題材として、「大学で学ぶ息子が父に金の無心をする」書

簡、つまり、金銭をめぐる父子間の対立という主題が、しばしば確認されるのである<sup>121)</sup>。また、同様の主題が、人文主義者によっても扱われていることが指摘されている。たとえば、サルターティは、父子間の対立をめぐり、ピエトロ・トゥルキ (Pietro Turchi) を批判している。トゥルキは、「文芸学」(«studia litterarum») を志していた若者、ピエロ・セルミニに対し、父の言葉に従い学問の道を諦めて家業に参加するように助言を与え、若者の学習意欲を削いだのである<sup>122)</sup>。

さらに、この挿話に観察される対立項を「父子間の諍い」という枠組みから広げ、「行動的生と観想的生との対置」としてみなすならば、アルベルティが論じている問題は、より一般的なものとして把握される。たとえばグアリーニは、1408年、実業と勉学のどちらを選択すべきか思い悩むバルバロに宛てた手紙において、実業から期待される実りは金銭である一方、学問からは美德が獲得されるとして、後者を選択すべきであると助言している。グアリーニによれば、前者を勧める人物は「愚か者」<sup>123)</sup>なのである。また、アルベルティ自身も、『食間対話集』所収の『孤児』や『苦悩』などにおいて、実利を追求する実業と、美德の獲得を目指す勉学との対置を扱っている。これらの事例を考慮すれば、ボローニャの挿話を大学という枠組みにおける作者個人の経験および見解の表明へと収斂させる必要はないと思われる。

勉学と実業との間における二者択一をめぐる問題は、サルターティやグアリーニの意見に明らかのように、知と美德の獲得を目的とする前者が蓄財を目的とする後者よりも優先されるべきであるという結論に落ち着く。ボローニャの挿話も、同様の見解を念頭において評価されてきた。この挿話には、「現実主義者である父があまりに勉強熱心な息子へと向けた不適當な気遣いに対する批判」<sup>124)</sup>、また、「よき諸学芸の学習者」と「欲深い人物」との対置<sup>125)</sup>が読み込まれてきたのである。実際、勉学へと息子が注ぐ熱意は、ブルーニ『口さがない怠け者への糾弾』における理想的な文人が示しているそれと、ほぼ完全に一致している<sup>126)</sup>。さらに、サルターティによれば、勉学は「業務からの解放」を必要とするし<sup>127)</sup>、グアリーニも、勉学へ全身全霊をかけて専念することを文人に求めている<sup>128)</sup>。勉学以外の諸活動すべてを放棄して読書に打ち込み、友人や知人の信頼を獲得することで名誉を求めるボローニャの息子は、人文主義的文脈において推奨される文人の姿を体現しているのである。他方、経済的損失を気にかけて勉学の価値を正しく認識できない父は、いわば、「愚かな守銭奴」にすぎないとみなされる<sup>129)</sup>。その結果、この挿話は「金銭的価値を超越した勉学の素晴らしさ」を称揚する機能を付与された言説として解釈されてきたのである。

しかし、アルベルティが『文芸』によって市民的人文主義を批判している可能性を考慮すれば、この解釈を鵜呑みにすることには慎重にならざるをえない。たとえば、ベネッティ・ブルネッリは、この挿話を通じてアルベルティが勉学の価値を正しく評価しない社会を批判しているのではなく、文芸に捧げられた労力こそが無益であることを示している可能性に言及している<sup>130)</sup>。実際、法学者である息子は休息を拒否し、健康への気遣いなどせず、図書館から出ることを拒むまでに読書に労力を注いでいる。この姿勢は、たしかに、観想的



生における文人のあるべき姿として肯定される。他方、この息子が示す熱意は、当時の「法学学習法」(de modo in iure studendi)において推奨されていたそれとはかけ離れた、過剰なものでもある。法学の学習は多大な労力を求めるからこそ、効率的に作業を進めるために学習者は規則正しく健康的な生活を送るべきであり、寝食を疎かにするほどの行き過ぎた熱意は避けられなければならない<sup>131)</sup>。こうした点を考慮すると、アルベルティがボローニャの息子を本当に「理想的文人」として提示し、家業と勉学という選択肢のうち後者が選択されるべきであるという伝統的トポスを肯定していると解釈するのは、早計であると思われる。この息子が勉学へ傾ける熱意をアルベルティがいかに評価していたのかを知るために、まずは、否定的にみなされてきた父の姿を見直すことが必要である。

先行研究の多くは、息子が学問に注ぐ熱意を理解しない父を、いわば、「愚かな守銭奴」として消極的に評価してきた。しかし、実際には、父はこの挿話において、「誠実きわまりない市民」<sup>132)</sup>、「勤勉な父」<sup>133)</sup>、「思慮深い人物」<sup>134)</sup>、「このうえなく慈悲深い父」<sup>135)</sup>、「非常に堅実なその人物」<sup>136)</sup>、また、「町の筆頭である市民」<sup>137)</sup>と、積極的な言葉を用いてしか表現されていない。とくに、アルベルティが彼を「思慮深い人物」と呼んでいる点は重要であると思われる。ブルーニ『道徳学初歩』によれば、「思慮」(prudentia)は道徳的美徳すべてを統括し、極端を避け我々を中道に引きとどめる美徳である<sup>138)</sup>。思慮はさらに、「提示された複数の利益から最大かつ最良と思われるものを、あるいは、提示された複数の不利益から最もましなものを選ぶときになされる」<sup>139)</sup>判断と選択にもかかわる。したがって、物事に節度を求め<sup>140)</sup>、利益あるいは不利益という観点から息子についての判断を下すボローニャの父は<sup>141)</sup>、たしかに「思慮深い人物」と呼ばれるにふさわしい。これらの表現を考慮すると、息子の勉学に端を発した経済的損失、また、息子の健康を憂慮する父は、ただの守銭奴ではないように思われる。この父の言動を正しく評価するために、家産を増大させ家を繁栄させることを目的とする「家政」という主題に注目してみよう。

## 2) 理想的家父長としての父

ボローニャの父は「家産」(res familiaris)のみならず、息子の「健康」(valetudo)も気にかけている。家産と健康は、1420年代以降、新たな価値を認められつつあった「外部的善」(bona externa)である。ブルーニが翻訳し注釈を加えた『家政論』は、やはりブルーニが翻訳したアリストテレス『ニコマコス倫理学』および同『政治学』(Politica)とともに、行動的生をめぐる哲学的教えの一翼を担うとみなされていた<sup>142)</sup>。しかし、『家政論』は金銭の価値を積極的に評価しているために、ストア的な伝統と激しく対立した。ここから生じた論争に身を投じたブルーニは、1420年から1428年までの間に論敵であるトンマーゾ・カンピアトーレ(Tommaso Cambiatore)に宛てた手紙において、プラトンの言葉を引き、「彼が言うには、万物のうち善でも悪でもなく、中庸でもないものは存在しない。知、健康、また、富は善である」<sup>143)</sup>と述べている。さらに、これらの外部的善について、次のように主張している。

剛毅や公正、その他の行動的美徳に依拠する幸せにおいてのみならず、観想的で閑暇に満ちた幸せにおいても外部的善が必要であると、アリストテレスは正しくみなしている。〔……〕だから、君は次のことを理解しなければならない。すなわち、我々が身を投じている市民的生において、非常に多くの外部的善が必要とされることを。また、美徳の働きが偉大になり卓越すればするほど、より多くの外部的善が必要となることを。他方、観想的生も、より少なくではあるが、身体的善および外部的善を必要とする。なぜなら、それらなくして、観想的生も幸せではありえないからである。<sup>144)</sup>

財産や健康は、行動的生あるいは観想的生のどちらに身を投じていようとも、人間存在にとって必須である<sup>145)</sup>。そして家政は、こうした外部的善の価値を肯定し獲得するための教えであり、その中心に据えられるのが「理想的家父長」である。この新たな価値観を踏まえてポローニャの父が示す言動を見直すと、彼がただの守銭奴ではないことが明らかになる。

ブルーニは『家政論』注釈において、金銭をめぐる理想的家父長の務めを次のように分類している。

金銭について家父長は四種の役割を果たさなければならないと、アリストテレスは語っている。まず、家父長は稼ぎ手でなければならない。第二に、彼は稼ぎの管理者でなければならない。第三に、彼は金銭を用いて飾られる術を知らなければならない。第四に、彼は家産を享受しなければならない。〔……〕家父長が知るべき四種の役割のうち、二種は家産の増大、つまり、稼ぎとその保全管理にかかわり、二種はその使用、つまり、財産を飾りへと用いること、また、それらを享受することにかかわる。<sup>146)</sup>

ブルーニは、理想的家父長の義務のうち「家産の増大」の一部である「稼ぎ」の重要性について、次のように述べている。

しかし、アリストテレスが、まず、稼ぎ手であれと述べていることは、当然である。というのも、もし、これが行われなければ、金銭はどれだけの価値を有することであろうか。したがって、家父長は稼ぎ手でなければならない、つまり、稼ぎを生み出すことに迅速かつ巧みでなければならない。<sup>147)</sup>

この定義により、「もし、息子の勉学に費やされた金銭が家業に投資されていれば、利潤を獲得し家産を殖やすことができたはずである」という、皮算用にすぎないとも思われるポローニャの父による嘆きは<sup>148)</sup>、稼ぎをめぐる失敗の分析として理解される。父は、息子に進学を許したという誤った判断により稼ぎの機会を逸し、家政に経済的損失をもたらしたと、十分に認識しているのである<sup>149)</sup>。

続いてブルーニは、金銭を稼ぐことについてのみならず、それを「保全管理」することについても家父長は熱心でなければならないと忠告している。

第二に、家父長は稼ぎの管理者でなければならない。このことも必須である。なぜなら、保全管理しなければ、稼ぐことになんの意味があるだろうか。また、稼ぐことよりも保全管理の方が、より少ない熱意でなされるなどと誰もみなしてはならないことも、知らなければならない。<sup>150)</sup>

この教えを踏まえれば、「もし、息子が家業に参加していれば、外部から管理人を雇う必要はなく、人件費を削減することができたはずである」という、吝嗇きわまりないとも思われる父の嘆きは<sup>151)</sup>、稼ぎの保全管理における失敗の分析として理解される。実際に父は、息子を進学させたことに起因する出費を、すべて無駄な浪費であったとみなしている<sup>152)</sup>。

このように、息子の勉学のために利殖に失敗し家産を目減りさせたことを悔やむポローニャの父は、ブルーニが提唱している富の「稼ぎ手」、同時にその「管理者」の姿を想起させる。続いて、彼が富の「使用」をめくり示す姿勢を、簡単に観察してみよう。

金銭にかかわる家父長の務めのうち「使用」について、ブルーニは「家を飾る」こと、また、「財産を享受する」ことを奨励している。

アリストテレスは家父長の務めの残り二つ、つまり、財産により飾られる術、そして、財産を享受する術を知ることを挙げている。〔……〕財産は家を飾るため、また、名誉を獲得するために役立つ。このことをアリストテレスは、「財産によって飾られる術を知らなければならない」と表現している。我々が適当かつふさわしい出費をするとしたら、財産に見合った邸宅を準備すること、家庭を立派な状態に保つこと、十分な家具を備えること、馬と衣服を上品に整えることが、そうした出費に含まれる。さらに、友人に対する恩恵や、サーカスや剣闘士の試合、また、開かれた宴を開催するといった公的活動における度量も、この種の出費の一部である。〔……〕他方、日々の食事や利便にかかわる事柄を財産で賄うことができれば、我々はそれを享受することになる。しかし、豊かであるのに餓えるほど、稼いだものを儉約しすぎてはならない。<sup>153)</sup>

ポローニャの父は、たしかに実利的な期待を抱き、息子が法学を学ぶことに投資した。しかし、子供の教育は、そもそも両親に課された義務のひとつであり<sup>154)</sup>、さらに、息子による法学の学位所得は家名を高めた<sup>155)</sup>。それに伴い、父は息子の社会的地位にふさわしい仕方でも家を建て直して飾り、衣服を揃え、公的宴を催したのである。したがって、父は家産の増大という有形の利益にのみならず、家の名誉という無形の利益にも寄与することを期待して、息子が法学を学ぶことを許可し、学業に出資したとみなされるであろう。この姿勢は、家の繁栄を目的として家産を増大させることを命じると同時に、その財産により飾られる

術を知らなければならぬとする家政の教えに適うものであったと考えられるのではないだろうか。

以上から、ポローニヤの父は「家産の増大」にかかわる二点、すなわち、富の「稼ぎ」とその「保全管理」について、さらに、富の「使用」にかかわる「財産によって飾られる術を知る」という点について、理想的家父長に課せられた義務を履行しようと努めていたとみなされる。この父は、守銭奴としてではなく家政の教えに忠実に従う理想的家父長として、振る舞っていたのではないだろうか。しかし、彼の計画は思惑通りには進まず、家計は破綻しかけることになる。父は、富の「使用」にかかわる「財産を享受する術を知らなければならぬ」という教えを実践できないほどの経済的破綻に追い込まれたのである。その原因は、息子の勉学が必要とした出費に節度が設けられていなかったことに求められる。実際、ブルーニも、よき稼ぎ手であるために、家父長は収支を気かけなければならぬと説いている。ブルーニによれば、

常に実りが損失を上まわるべく注意が払われているように、熱心に配慮しなければならない。もし、財産として金 8000 を所持しているならば、金 5000 の価値の邸宅を所有すべきではなく、高額の土地を郊外に所有してもいけない。そうすれば、実りが減少してしまうのである。<sup>156)</sup>

ブルーニは、周囲の人々に恩恵を与える際の出費についても、「しかし、こうした事柄すべては、財産の質とその人物の相応しさに応じてなされなければならない」<sup>157)</sup>と、ある種の節度を設定する必要性を述べている。実際、『道徳学初歩』によれば、友人・知人に対し恩恵を施す美德である「寛大」は、「節度／中道」(«mediocritas»)に存する。

寛大は、稼ぎと支払におけるある種の節度であり、むしろ、貪欲が示す汚らわしきや浪費が帯びる狂気から、かけ離れている。稼ぎに対する過剰な欲望、また、必要とされるよりも金払いが悪いのが、貪欲な人物の特徴である。浪費家は、こうした二点とは反対の特徴を示す。なぜなら、稼ぎを気にせず、気前のよさに節度を設けないからである。これら二者の中道に位置するのが、寛大な人物である。その人物は、どこで、いつ、どれだけ稼ぐべきであるのか、また、支払うべきであるのかを弁えており、理性に従い、いまこうして振る舞う習慣を経験から学んだのである。<sup>158)</sup>

寛大は、公的な催しを主催するといった、より大規模なかたちで実践される美德、「度量」とともに<sup>159)</sup>、節度を弁える美德として、極端を避け中道を選択する。道徳的美徳である寛大と度量は、思慮の支配下に存するからである。

家政についてブルーニは、たしかに「家を飾る」ために財産を鷹揚に用いること、また、寛大と度量の美德を実践することを推奨している。ただし、人間存在に必須である外部的善

であり、また、「まっとうな生活を送る」ための基盤である家産を脅かさないように、理想的家父長は思慮深く、こうした出費における節度を弁えなければならない。このように、極端を避け中道を求める美德である思慮が家政には必要とされることを踏まえ、ボローニャの挿話に視線を戻すと、「家産の増大」とその「使用」を気に向け、物事に節度を求める父は、やはり理想的家父長としてみなされることになる。しかし、家計について父が示したこうした配慮はすべて、勉学へと息子が注いだ度を越した熱意、同時に、その熱意に比例して際限なく膨れ上がった出費により、無に帰したのである。

さらにこの父は、息子が勉学に熱意を注ぐあまり、健康を損なっている点も気にかけている。そこで彼は、息子に勉学を中断させ休息させようとするが、この試みは失敗する<sup>160)</sup>。こうした父子関係は、『家政論』において推奨されている教えに反している。まず、ブルーニによれば、子供に対する家父長の支配権は絶対的なものである<sup>161)</sup>。さらに、両親に対し息子が反抗することは、自然に反する行為である。親子は相互に支え合うべき存在であり、子供が幼い間、頑健な両親が彼らを守り、両親が年老いたら、今度は頑健に育った子供が彼らを守らなければならないからである<sup>162)</sup>。しかし、勉学に対する度を越した熱意のため、人間存在にとって必須である健康を害しているボローニャの息子に、この「親から息子への、そして息子から親への循環」<sup>163)</sup>を望むことは不可能である。

しかし、こうした状況であっても、父は次のように語っていた。つまり、息子が莫大かつあまりに奔放なまでの出費をもたらしたことを、より激しく悲しんだというよりも、息子に最上の期待をかけることができないと思えたことに、より深く苦しんだのである。彼は、文芸をめぐる心労のために息子が健康を損なったことを目にし、この弱々しい息子には平安が決して訪れないであろうことを理解したのであるが。<sup>164)</sup>

家産にも健康にも配慮することなく勉学に打ち込む息子は、父の日々の生活を経済的に圧迫するのみならず、彼の老後への備えをも脅かしたとみなされるであろう。息子が勉学に注ぐ節度に欠けた熱意は、父の計画をことごとく破綻させたのである。

このように、家政という視点を意識すると、勉強熱心な息子に対し父が下す「家人のうちで格段に無用」<sup>165)</sup>であり「無益きわまりない」<sup>166)</sup>という評価、「たとえ賢くなくても、頑強で明るく健康な息子が欲しかった」<sup>167)</sup>という父の嘆きは、正当な訴えとして理解されることになる。父は愚かな守銭奴ではなく、健康および財産という外部的善に配慮することで家と家人の繁栄を目指す理想的家父長として、度を越して勉学に身を投じる息子は家政にとって大きな損失であると、思慮深く判断を下しているのである。他方、この父の姿と比較すると、金銭と健康のどちらの点についても節度を弁えずに勉学に没頭する「理想的文人」である息子は、完全に思慮を欠いた人物として立ち現れることになる。

以上のように、ボローニャの挿話は、家政の教えに忠実に従う父が、勉学に無思慮なまでの熱意を注いだ息子のせいで、家の切り盛りに失敗する逸話として読み直されるであろう。

文芸学は、理想的な家父長が管理する家産であろうとも、それを食いつぶしてしまうほどの出費を必要とするのである。この挿話はさらに、「理想的文人」である息子と理想的家父長である父親との対立を描き出すのみならず、観想的生における熱心きわまりない読書に基づいた「文芸学」そして「人文学」と、行動的生における教を説いた「家政」とが両立不可能であることを示しているとみなされるであろう。アルベルティは、文人に求められる出費の莫大さを揶揄すると同時に、観想的生と行動的生を両立させるという、市民的人文主義の理想そのものに、疑義を呈していると考えられるのである。

#### 4. 観想的生と行動的生の両立への疑念

伝統的な金銭観、あるいは、新たに導入された金銭観のどちらに従っても、文人は多額の収入を得ることはできない。彼らはさらに、理想的家父長でさえも匙を投げるほどの、莫大な出費を必要とする。『文芸』における議論に現実的な収支の意識が通底しているを思い起こせば、「文人は自発的に清貧を選択しているのではなく、貧困を強制されているにすぎない」とアルベルティがみなしていることが明らかである。こうしたアルベルティの主張に、ストア的な禁欲性を読み込む必要はないであろう。アルベルティはむしろ、同時代に生じていた金銭観の変容を意識しつつ、新旧双方の価値観を揶揄していると考えられる。

さらに、蓄財を目的とする家政が行動的生の一翼を担い、知と美德の獲得を求める文芸学が観想的生に属するのであるから、アルベルティが示している見解は、ブルーニが『キケロ伝』において提示し、後に『ダンテ伝』において繰り返すことになる、「卓越した知識人であると同時に、卓越した個人、家父長、また、市民として、行動的生に積極的に参加する」という市民的人文主義の理想を、実現不可能なものとして否定していることになる。ボローニャの挿話に示されているように、行動的生において市民的諸活動が求める熱意と、観想的生において勉学が求める熱意とは、決して両立されないのである。

ボローニャの挿話は、市民的人文主義の理想を夢想として揶揄していると同時に、人文主義の特徴のひとつである、勉学への節度を弁えない熱意をも揶揄していると考えられる。この挿話において、理想的家父長である父の計画が破綻した理由が、「理想的文人」である息子が勉学に注いだ節度を弁えない熱意に求められるからである。元来、節度は、万事において守られなければならないとされている。一例として、蓄財について論じているブルーニの言葉を観察してみよう。彼はまず、蓄財が自己目的化してはならないと述べている。

さらにもし、財産はそれ自体として追及されるべきであり、いたるところからかき集められるべきであると主張しているのであれば、私は非難されるに値することであろう。しかし、美德のため、また、美德を実践するための道具として、私はそのように主張しているのであり、さらに、「それが誠実になされるかぎり、また、その獲得に熱心になりすぎて我々が道理に反しないかぎり」と付け加えたのであるから、私の主張のどこを誰が非難できるというのであろうか。<sup>168)</sup>

ブルーニによれば、金銭はそれ自体として評価され、追求されるのではなく、美德の獲得と実践という、より偉大な目標を達成する際の道具として有益なのである。さらにブルーニは、蓄財に節度を設けなければならないと述べている。

また、有益な事物はすべて、道具としての価値をもつが、道具としての性質があまりに小さすぎたり大きすぎたりすると、それ自身の使い勝手が悪くなる。たとえば、ただ1キュービットしか大きさが無い船は役に立たないし、2スタジアムの大きさの船も役に立たない。有益な事物についてほどに節度が求められる事物は存在しないのである。財産が美德のために有益であると私は述べたが、船についてと同じく、財産についてもその小ささは障害となり、その過剰さは役に立たない。そのため、財産については公正で適度な追求が求められ、その増大は美德を目指すものでなければならない。<sup>169)</sup>

蓄財に適当な節度が設定されることにより、無制限な富の追及は抑止され、目的としての美德が手段としての金銭に対し優位を保つことが保証される。このようにブルーニは、金銭の価値を道具としての有用性に限定して認め、また、その追求に節度を設定することで、蓄財という行為が貪欲あるいは吝嗇に墮することを防止している。

このように、蓄財にかんする熱意には節度という歯止めがかけられている一方、書物を求め、読書に没頭することについて、人文主義者は際限ない熱意を許容し、むしろ、それを奨励している。ブルーニが『諸学科』やニコロ・ストロツィ宛ての手紙において奨励している学問観、また、『口さがない怠け者に対する糾弾』において提示している理想的文人の姿、くわえて、「理想的文人」であるポローニャの息子といった諸例に明らかなように、勉学、すなわち読書には、節度を設ける必要が認められていないのである。このような姿勢は、たとえば、ペトラルカが吐露している「書物への欲望」にも確認される。

満たすことのできない欲望がただひとつ、私を捕らえている。今日に至るまで、私はその欲望を抑制できなかつたし、そうしようとも望まなかつた。たしかに、私は自分自身を勇気づけている、誠実な事物への欲望は不誠実なものではないと。君はこの病の種を聞きたいかね。私は書物によって満足させられることができないのである。そして私は、おそらく必要である以上に多くの書物を所有しているのであるが、その他の事物についてと同じようなことが、書物についても生じている。つまり、求め続けることが、貪欲さに拍車をかけるのである。実際、書物は何か特殊な力を有している。金、銀、宝石、高貴な衣服、大理石で作られた家、耕された農地、絵画、飾られた馬といった事物は、無口で表面的な快樂をもたらす。他方、書物は人を心の底から楽しませ、会話し、忠告を与え、何か生き生きとして上品な親密さによって我々と結び付けられている。また、それぞれの書物は、読者に対し自らを曝け出すだけでなく、ほかの書名を提示し、続く

書物は、また別の書物への欲望を掻き立てるのである。<sup>170)</sup>

ボローニャの父を嘆かせること必至であるこうした姿勢が、1400年代における「書物との対話」というトポスの流行の背景に存在することを考慮すると、『文芸』においてアルベルティが揶揄している「大量の書物を誇示する法学者」の姿は<sup>171)</sup>、人文主義者の姿をも連想させることになる。そして、アルベルティによる次の皮肉は、法学者のみならず人文主義者をも、その射程に含めたものになる。

頼むが、考えてみてくれ。かくも大量で豊かきわまりない書物を購入することで干上らず、ほとんど素寒貧にもならないだけの財力を、誰が所持していると君はみなすだろうか。こうした出費によって富が獲得されるなど、これ以上ないほどに愚かな行為であるのだが。もし誰かが、かくも大量の書物、かくも多大な出費によって富を望むならば、その人物は、「黄金の網で漁を行う人物」とカエサルが呼んだ者たちにそっくりではないか。<sup>172)</sup>

この箇所についてロッシは、アルベルティが個人的な経験に基づいて、法学者が示す書物への執着を揶揄しているとみなしている<sup>173)</sup>。しかし、書物への執着は、アルベルティが『文芸』において論じている文人全体に共通する特徴である。そしてアルベルティは、『食間対話集』において、人文主義に内在する「書物に対するフェティシズム」<sup>174)</sup>を揶揄している。したがって、『文芸』に観察されるこの皮肉も、法学者にかぎらず、人文主義者を含めた文人全体が示している、際限なく書物を求め、無条件に読書を奨励する姿勢に対して向けられていると考えられる。

さらに、この揶揄、また、ボローニャの挿話において、「書物を購入するための費用」にアルベルティが言及していることも注目し得る。なぜなら、書物を称賛し、読書を奨励する人文主義的言説において、書物を入手するための費用についての言及は、ほとんど観察されないからである。たとえば、『対話』において登場人物ニッコリは、「学びの場、教師、また、書物なくして、誰も勉学において何かしらについて秀でているなどと示すことはできません」<sup>175)</sup>と述べている。ニッコリはしかし、そうした学校、教師、書物にかかる費用については、一言も触れていない。また、ブルーニはカンピアトーレとの論争において、観想的生における金銭の価値を説いてはいるが、そこで論じられているのは文人が生きるために必要とされる費用であり、勉学が求める具体的な出費については、まったく触れられていない<sup>176)</sup>。

もし、アルベルティによる皮肉が、人文主義者が示している書物への執着をも念頭に置いたものであるならば、この皮肉を通して、文人の清貧を奨励する伝統的な価値観、また、金銭の価値は認めながらも、学問が求める出費については口を閉ざしている新たな価値観の双方に共通する、ある種の矛盾が炙り出されることになる。人文主義者は「文人の清貧」、



あるいは「万事における節度」を奨励しながらも、多大な出費を必要とする勉学、つまり、読書だけは無制限に奨励し、称揚しているのである。このような角度からも、人文学および人文主義が帯びている書物と読書への強い執着という特徴を、アルベルティは揶揄していることになる。そして、まさにこの書物と読書に対する強い執着のために、観想的生と行動的生は両立されることがないのである。

ブルーニを筆頭とした人文主義者が行っている読書の奨励は、文人による行動的生への参加を阻害する。そして文人は、まっとうな仕方で稼ぐかぎり、わずかな収入しか期待できず、もし、蓄財できるほどの収入を得れば、悪辣きわまりない人物として批判されることになる。彼らはさらに、結婚を通じて社会とかかわり、経済的に豊かになることもできない。くわえて、文人が熱心に読書に励めば励むほど、出費は増大し、家産は目減りする。結局、読書に没頭せよという人文主義者の言葉に従うかぎり、文人は行動的生に参加することができないのである。観想的生と行動的生とを融合させるという理想を掲げる市民的人文主義の根底に存在するこの矛盾を、アルベルティは文人と蓄財との関係を論じることで暴露し、揶揄しているのではないだろうか。

## 第5章

### 文人と社会的名誉：公益性に欠ける文人

アルベルティは、同時代の思想および学問界の動向を十分に意識して、文人と快樂との関係、また、文人と蓄財との関係を論じていると考えられる。彼はまず、人文主義的教育論と学問論に観察される諸言説を下敷きにして、人文学の根底に存在する、禁欲的な読書至上主義を暴露している。続いて、15世紀前半に生じた金銭観の変容を踏まえ、行動的生と観想的生との両立という市民的人文主義が掲げる理想像に対し、疑問を呈している。文人に認められるべき「社会的名誉」(honor)が論じられている章にも、同様の姿勢が観察される。この章においてアルベルティが念頭に置いているのが、ダンテ『饗宴』により活発なものとなった「高貴さ」(nobilitas)をめぐる問題であると考えられる。

アルベルティはまず、全人類のうちで、社会的名誉を与えられるに最もふさわしい存在は文人であると主張している。

実際、最大限の名誉が文人に与えられるべきであることが否定されてはならない。というのも、もし、功績をなした人物に対する報いとして名誉が与えられるのならば、それを与えるにおいて、誰を文人に先立たせようか。もし誰かが、よき学芸において長きにわたり艱難辛苦に力強く耐え、美德と知を獲得しようと勉学に歳月を費やし、あらゆる快樂をはねのけ、あらゆる欲望を投げ捨てて功績をあげたら、あるいは、もし誰かが、きわめて豊かで人類にとってこのうえなく必要で、みなから感謝されるに値する事物——よき学芸、よき教え、このうえなく卓越した振る舞い、また、書物から獲得される知——を求め、労苦、出費、時間、財産、人生を捧げて功績をあげたら、あらゆる人間に文人を先立たせることを否定するような悪意ある人物がいるであろうか。したがって、みな判断により、文人は蔑ろにされてはならない。また、多くの点において人類はその他すべての生き物よりも卓越しているが、とくに知識と理性の力を用いるゆえに、それらをはるかに凌駕している。このため、人間精神が本性的に天界の存在と変わらないことが、容易に納得される。実際、海中および地上に存在する動物すべてが人類の才知に服従し隷属していることが知られている。したがって、自然界において人類が動物たちのうち最も誉れ高い存在で王者であると、みなが認めている。こうであるならば、人間の理性あるいは精神——これらのゆえに自然は人間を事物の主として規定したのであるが——を、学芸により完全かつ完璧なものにして、勉学と才知を通じて耕し飾る人物、あるいは、まさにその理性と知性のゆえに、他の人々を凌駕する人物、人類のうち卓越しているこうした人物こそが、みなから名誉と敬意を与えられ、受け入れられるべきではないだろうか。さらに、神ご自身が、その他無数の点において卓越してい

ると同時に、偽りから真実を識別し、最上の事物を選択し、理性と予見によって物事を完璧に整えることができることも、その神性において疎かにされてはならない。こうした神々しい事柄について学識を持ち、また、造詣深いと称する人物が、まさに神々しい名誉で人々から讃えられ、あらゆる人間よりも重んじられるべきではないだろうか。<sup>1)</sup>

快樂を放棄し、貧苦に耐えながら勉学に身を捧げ、美德と知を追求する文人は、全人類のうちで最大限に敬意を払われるべき存在である。ゴッジ・カロッティは、この箇所を観察される、「その他の動物と比較して、人類は卓越した存在である」という見解が、キケロの思想にも観察されることを指摘しているが、同時に、『文芸』においてこの主張が、行動的生の称揚と結びついていないことも指摘している<sup>2)</sup>。さらにレゴリオージは、人間に与えられた「言語能力」(verbum)ではなく「理性」(ratio)をアルベルティが称揚していることに着目し、「純粋な思索である自然哲学および形而上学」<sup>3)</sup>がこの作品において理想的学問として提示されているという、持論の根拠としている。これらの解釈は、社会に対して自発的に背を向けた、いわば、孤高の文人像を、アルベルティの言葉に読み込んでいる。続いてアルベルティは、文人を「軍人／騎士」(miles)と対置させ、本来ならば、全人類のうち最も尊敬されるべき文人が、彼らよりも下位に置かれている現状を嘆くそぶりを示している。もし、「文人には最大限の社会的名誉が与えられなければならない」と、アルベルティが真剣に主張しているならば、文人が軍人／騎士よりも軽んじられている現状に対するこの嘆きは、「文人に価値を認めようとしない社会」に対する真摯な憤慨として、解釈されるであろう。実際、オッペルを含めた研究者の多くは、この箇所に作者による本音の吐露を読み込んでいる<sup>4)</sup>。

他方、こうしたアルベルティの言葉に、「高貴さ」をめぐる伝統的な議論が影響を与えている可能性も指摘されている<sup>5)</sup>。「名誉」という概念は、元来、「高貴さ」や「威厳」(dignitas)といった概念と混同された状態で用いられていたことが知られている<sup>6)</sup>。『文芸』におけるアルベルティも、「名誉」を「高貴さ」、「威厳」、そして「権威」(auctoritas)といった言葉で言い換えているのである<sup>7)</sup>。また、「文人と軍人／騎士との対置」も、中世以降、法学者が行っていた学問論争の伝統に、そのモデルが求められることが指摘されている<sup>8)</sup>。もし、これらの指摘の通り、アルベルティによる主張が学問的伝統を踏まえたものであるならば、この箇所に読み込まれてきた「作者自身の真摯な嘆き」の信憑性を、検討し直すべきではないだろうか。実際、アルベルティは、文人が軍人／騎士よりも軽んじられているだけでなく、金満家にも劣る存在として扱われていると述べ、最終的に、文人は社会全体から軽蔑されていると結論付けている<sup>9)</sup>。アルベルティが導き出しているこの結論は、文人は高貴な存在であると主張する人文主義の伝統、また、軍人／騎士に対する法学者の優越を主張する法学における伝統と比べると、明らかに異質である。本章ではこの点を意識しながら、アルベルティが文人を評価しない社会に対して心から憤慨しているのかどうか、検討を加える。

以下では、まず、高貴さをめぐる議論の発展を概観し、アルベルティによる主張がこの伝統を踏まえている可能性を確認する。続いて、文人の高貴さを主張する言説の根拠のひとつ

であり、市民的人文主義の根幹をなす「文人が帯びる公益性」という認識を念頭に置きながら、アルベルティが行っている文人と軍人／騎士との対置、また、文人と金持ちとの対置を見直す。最後に、文人による政治参加という問題を検討することで、「文人には、高貴さの根拠となる公益性が欠けている」点をアルベルティが問題視し、揶揄している可能性を提案する。もし、このようであるならば、アルベルティは、市民的人文主義が実現不可能であるとみなしていることになるであろう。

## 1. 高貴さをめぐる諸言説

ダンテ『饗宴』によれば、高貴さは「古くからの家産と立派な習慣」<sup>10</sup>から生じるわけではなく、また、血統からもたらされるわけでもない<sup>11</sup>。そうではなく、高貴さとは「個々の事物におけるその本性の完成」<sup>12</sup>、したがって、同一種の内部における卓越であり<sup>13</sup>、とくに人間にとってのそれは神から与えられる「幸せの根源」<sup>14</sup>、また、「美德の種子」<sup>15</sup>として規定されている。そのため、行動的生において実践される道徳的諸美德、また、観想的生において鍛えられる知的諸美德ともに、それらを身に着けている人物が高貴であることを証明する。

ダンテによる主張は、1300年代以降における、高貴さをめぐる諸議論に影響を与えている。法学者、バルトロ・ダ・サッソフェッラート（Bartolo da Sassoferrato, 1313/1314-1357）は高貴さを三種に区分し、ダンテが論じたそれを人間には不可知である「神学的高貴さ」（*nobilitas theologica*）、また、種の内部における卓越をめぐる「本性的高貴さ」（*nobilitas naturalis*）として否定し、法に根拠を置いた「政治的・市民的高貴さ」（*nobilitas politica et civilis*）の正当性を主張している<sup>16</sup>。バルトロによれば、高貴さは普遍的な概念ではなく、権力者あるいは法によって授けられるものである<sup>17</sup>。したがって、美德は、ある人物に高貴さを付与する際の要因とはなりうるが、高貴さと同一視はされない。たとえば、権力者の意向によっては、悪行をなした人物に高貴さが認められることも起こりうるからである。このように、「政治的・市民的高貴さ」という視点に立つと、「美德の存するところに高貴さは存する」というダンテによる主張は否定されることになる<sup>18</sup>。バルトロはさらに、財産や血統は、直接的に高貴さの要因とはならないものの、それを獲得する手助けになるとみなしている<sup>19</sup>。

バルトロによる「政治的・市民的高貴さ」という主張にもかかわらず、高貴さと美德とを直接的に結び付け、それらをほとんど同一視する動きは加速していく。法学者、ラーポ・ダ・カスティリオンキオ・イル・ヴェッキオ（Lapo da Castiglionchio il Vecchio, ?-1381）は、息子、ベルナルドから「高貴さとは何か」と尋ねられた際、「政治的・市民的高貴さ」を詳細に解説している。しかし、カスティリオンキオは、高貴さを獲得するためには美德を磨くことが重要であるとも言い添えている<sup>20</sup>。ダンテが「美德は高貴さの実りである」と主張したのに対し、カスティリオンキオは高貴さを獲得するための手段として、美德をみなしているのである。

高貴さを獲得するための手段として美德をみなす姿勢は、人文主義者にも引き継がれて

いる。たとえば、『法学および医学の高貴さについて』において、サルターティは「先祖伝来の高貴さ」(nobilitas hereditaria)が存在することを認めながらも、高貴さと美徳の関連について、「真の高貴さは、家系や血統ではなく諸美徳に存する」と述べている<sup>21)</sup>。彼はさらに、モーセを例に挙げて、「このうえなく神々しいあの指導者は、高貴な者たちという表現を用いて、何を意味したのであろうか、まず、彼が賢人と呼んだ人物、また、知と美徳において卓越した人物のことでなければ」<sup>22)</sup>とも述べている。サルターティによれば、「美徳」のみならず「知」も、高貴さを決定する要因なのである。

高貴さが美徳だけでなく知にも由来するという主張は、法学者、ブオナッコルソ・ダ・モンテマーニョ (Buonaccorso da Montemagno, 1391/1393-1429) が晩年に著した、古代ローマを舞台とした討論、『高貴さについて』(De nobilitate)を通じて、より一般的なものとなる<sup>23)</sup>。この人文主義的作品において、経済的にも血統の点においても恵まれていないながらも、勉学を修め軍務に身を投じ、人々の役に立つ生き方をしてきたフラミニウス (Flaminius) と<sup>24)</sup>、裕福で家柄も良いコルネリウス (Cornelius) が<sup>25)</sup>、ルクレツィア (Lucretia) との結婚をめぐる、各々、自らの高貴さを主張している。作者であるブオナッコルソ自身は、どちらの意見がより正しいか、最終的な判断を明示してはいないが、美徳と知が高貴さの根源に存するというフラミニウスの意見が<sup>26)</sup>、作者による主張であると推測されている<sup>27)</sup>。

そのフラミニウスは、高貴さを次のように定義している。

高貴さとは、より価値ある存在を、より価値が劣る存在に優越させる、ある種の卓越にほかならない。したがって、魂の卓越のゆえ、人類がその他の動物よりも価値があるのと同様に、魂の明晰さのゆえ、ある人物が他の人物を凌駕するのである。実際、最上の学芸において長く鍛えられた魂の持ち主は、公正さ、慈悲、堅実さ、豪華さ、節制、思慮によって輝き、不死の神々、親族、友人、近親者と国家に対し功をなし、神々しい文芸学において教育されており、他の者たちよりも高貴であり、権威あり、著名かつ高名であるとみなされている。<sup>28)</sup>

この言葉に、ダンテが「個々の事物におけるその本性の完成」と呼び、バルトロが「本性的高貴さ」と呼んだ認識、また、その認識に依拠した「知識人の卓越」という主張が観察される。魂における卓越のため、人類という種全体がその他の動物よりも高貴な存在としてみなされ、さらに人類という種の内部において、魂の明晰さに応じて高貴さが決定されるのである<sup>29)</sup>。そして魂の明晰さは、最上の学芸、また、神々しい「文芸学」(«litterarum studia»)から獲得される。

この作品ではさらに、生まれや家産には恵まれずとも、自らの才知により知を獲得した賢人の高貴さも主張されている。ソクラテスやデモステネスは卑しい生まれではあったが、彼らが高貴であることは誰も否定できない事実である。したがって、「〔……〕勤勉さ、また、最上の学芸にかかわる教養が、その才知と力量を他の人物以上に認めていたのみならず、ほ

とんど神性にまで導いた、そんな人々が、すべての人間のうちで最も高貴であったはずである」<sup>30)</sup>と、学究者の高貴さが宣言されている。結局、ブオナツコルソは富や血統といった先祖伝来の諸条件ではなく、個人的に獲得される美德と知こそが人を高貴にする要因であると主張している。この作品において美德と知は、高貴さを獲得するための手段としてみなされているのである。

高貴さを論じる際に、美德と知という個人的かつ内面的な条件を重視するという姿勢は、ブラッチョリーニによる『真の高貴さについて』(*De vera nobilitate*, 1440)によって確定されることになる<sup>31)</sup>。この対話編において、高貴さを決定する諸条件について、ニッコリとロレンツォ・デ・メディチ(Lorenzo de' Medici)が意見を交わしている。まず、高貴さは美德のみならず、血筋、経済的豊かさ、そして公益性からもたらされると主張するロレンツォに対し<sup>32)</sup>、「魂、つまり知と美德から、人間を称賛の高みへと引き上げる唯一の存在である高貴さを、我々は引き出さなければならぬ」<sup>33)</sup>と、ニッコリは返答している。ニッコリはさらに、高貴さを獲得するために、知と道徳哲学が重要であるという見解を示している。

知、また、人生を救い耕すすべての諸美德をめぐる学識へと我々を導く唯一の存在である哲学の仲間、それらに打ち込んだ人物だけである。なぜなら、思慮深く賢く生きる人物は、ほかでもなく自分自身で人生における諸善を獲得するからである。彼が手にする称賛は、まさに彼自身に由来するのであり、他者からの借り物ではない。諸美德を実践してきた人物だけが、外部から助けを借りずに自らの栄光を生み出し、そこから輝かしい高貴さが生じるのである。<sup>34)</sup>

さらに、知と美德だけに価値を見出すストア的な禁欲性を帯びた文人は、市民的生から乖離しているために、高貴であるとみなすことはできないと主張するロレンツォに対し<sup>35)</sup>、ニッコリは次のように反論している。

私は次のことを否定はしない。つまり、自らの国家において名誉と威厳を備えた人物が、もし、その人物自身が誠実さの守護者であるならば、高貴であることを。しかし、次のような人物も付け加えておきたい。つまり、政治にかかわる業務から距離をとり、美德とよき心を育むことに身を捧げ、閑暇に身を置く人物のことも。悪徳に対し戦を仕掛ける人物が、敵に対し戦を仕掛ける人物と比べて劣るなどと、私は言わない。さらに、自らの人生を誠実なものとする人物、また、何が求められるべきで、何が避けられるべきであるのかを教えてくれる人物が、政治に心を配り、公益のために戦争と平和について決定を下す人物と比べて、賢明でないなどとも私は言わない。自らの学びと徹夜により、さまざまな学芸を通じて人間の生を耕し、書き物や模範により、振る舞いを高貴なものとし悪徳をはねのけるために我々の役に立った哲学者や学識ある人物たちは、たとえ引きこもっていようと、高貴というよりも、高貴きわまりないと私は言ったことであ

ろう。<sup>36)</sup>

ニコリによれば、行動的生に身を置き、政治参加という直接的かつ具体的なかたちで国家に貢献する人物のみならず、観想的生に身を置き、正しい振る舞いについて「書き物と規範」を示すことで人々の役に立つ文人にも、公益性は認められなければならない。結局、学問は個人的に美德を獲得するための手段であるのみならず、みなにそれを普及させる手段でもあるために、文人は公益に資する高貴な存在としてみなされるのである。こうした見解は、たとえば、クリストフォロ・ランディーノ（Christoforo Landino, 1424-1498）が1487年以降に執筆したと考えられている、『真の高貴さについて』（*De vera nobilitate*）へと引き継がれていくことになる。

以上のように、ダンテによれば「高貴さを帯びている証し」であった美德は、「高貴さを獲得する手段」としてみなされていくことになる。同時に、高貴さの条件として、美德とともに知の重要性が説かれ始め、「文人の高貴さ」が論じられていくことにもなる<sup>37)</sup>。この流れを踏まえて、『文芸』におけるアルベルティの言葉を見直すと、彼がこの伝統を十分に意識していたことが明白であろう。アルベルティはまず、「きわめて豊かで人類にとってこのうえなく必要で、みなから感謝されるに値する事物」<sup>38)</sup>である美德と知に注目して、文人に与えられるべき社会的名誉、すなわち、高貴さを論じている。さらに、ダンテが「個々の事物におけるその本性の完成」と呼び、バルトロが「本性的高貴さ」と呼んだ基準に依拠して、「人間という種の内部における文人の卓越」をアルベルティが主張していることも明らかである。結局、文人に認められるべき社会的名誉をめぐるアルベルティの主張は、「文人の高貴さ」を主張する伝統、時代的に見れば、ブオナッコルソ『高貴さについて』からブラッチョリーニ『真の高貴さについて』へと至る流れの中に、組み込まれることになる。ただし、ブオナッコルソとブラッチョリーニが文人の卓越を主張しているのに対し、アルベルティは、「文人はあらゆる社会階層のうち、最も軽蔑されている」<sup>39)</sup>という結論を導くことになる。この差異は、高貴さの重要な条件である公益性を文人に認めるか否かという違いから生じていると考えられる。以下では、市民的人文主義の根幹にかかわる問題でもある、「知識人が帯びる公益性」に注目してみよう。

## 2. 「知識人が帯びる公益性」をめぐる諸言説

「文人は高貴な存在である」という主張の根拠のひとつが、彼らが帯びるとされている公益性である。文人は、たとえ直接的に政治に参加しなくても、勉学に身を投じ執筆を行うために、公益に資する存在としてみなされる。このように文人に公益性を見出す姿勢は、市民的人文主義の根幹に確認される。たとえば、ブルーニは『キケロ伝』において、この理想的文人が政治において失脚した後も、勉学を通じて公益に尽くしたと述べている。

そこからローマへ帰還すると、〔……〕彼は文芸と勉学へ再び身を投じた。他の方策が

与えられなかったので、少なくともこの道によって同胞の役に立とうとしたのである。  
〔……〕その他の時間すべては、近親者との議論あるいは読み書きにあてられた。実に彼は、政治あるいは学識において人々の役に立つために生まれた人物であった。というのも、政治においては、コンスルとして祖国を、また、弁論家として無数の人々を救い、学識と執筆においても、同胞のみならずラテン語を使用するすべての人々に対し、博識と知の光を示したのであるから。<sup>40)</sup>

文人が公益性を帯びた存在であるという見解は、行動的生にかかわる諸活動を放棄して勉学だけに邁進する文人像が提示されている、『口さがない怠け者に対する糾弾』にも観察される。ブルーニは、「そして彼ら文人は長きにわたる心労に身を投じ、個人的な仕事を後回しにし、自らの徹夜と労苦によって大いに公益に資したのであるから、彼らはこのために、みなから正当に感謝されるべきである」<sup>41)</sup>と述べている。ブルーニはさらに、自らがニッコリよりもよき市民であると主張する際に、「高貴さ」をその根拠に据えている。ブルーニはまず、次のように高貴さを定義している。

私はいつも、次のように考えてきた。つまり、高貴さは祖先の名高さから我々に生じるというよりも、個々人の卓越と美德に由来するのであると。ちょうど、どんな生まれであろうとも、駆けることに秀でている馬を高貴であると我々がみなすように。また、非常に俊敏で力強い犬を、このうえなく高貴であるとみなすように。したがって、人間も祖先の影や墓ではなく、その人物自身の美德によって高貴になるのである。〔……〕／尋ねるが、諸学科と読み書きについての学識、読み書きをして私が耐えてきた徹夜と労苦のすべて、結局、私の著作として知られている作品のすべてにもかかわらず、私を高貴ではないと呼ぶことを、お前は恥じないのか、ああ獣よ。<sup>42)</sup>

この作品においてブルーニは「先祖伝来の高貴さ」を否定し、「種の内部における卓越」あるいは「本性的高貴さ」という考え方に依拠しながら、高貴さは個々人の内面、それも、知に由来すると主張している。ブルーニはこの定義に基づき、ニッコリに対する自らの優越を宣言している。

お前はフィレンツェ市民であり、たしかにこの点においては、お前が私と同等であることが知られている。しかし、私は次の点において、お前よりも上等で、祖国にとって有益な市民である。つまり、執筆活動や政治活動を通じて、フィレンツェ市民と祖国の栄光に対する援助を惜しまなかったという点において。<sup>43)</sup>

ブルーニは、政治に携わるだけでなく、知的活動を通じて公益に寄与したために、自らがニッコリよりも高貴であると主張しているのである。



『文芸』におけるアルベルティも、文人の公益性という問題を意識している。彼は学者の卓越を論じた直後、次のように文人を軍人／騎士と対置させている。

だから、どんな理由によって定められたのであろうか、公的行事において、騎士階級が文人に先立つなどということが。あるいは、騎士階級に属す誰かしらが文人と比較されるなどということが。どんな厚かましきによって我々は、粗野で物事を知らず、大抵の場合、向こう見ずな軍人／騎士を、すべての文人に先立たせるのであろうか。このことは、我々の祖先の習わしによるのではなく、高慢な軍人／騎士の傲岸不遜さにより慣習となったと私はみなしている。文芸よりも黄金に名誉が与えられるべきであるなどと、我々の祖先がみなしたのでなければ、美德、よき振る舞い、また、知の輝きを何も持たず、ただ、宝石や黄金製の装飾によって非常に目立とうとする軍人／騎士を優先し、他方、よき振る舞い、美德、才知、文芸と最上の事物にかんする知識、くわえて、理性によってこのうえなく彫琢され輝いている文人を蔑ろにすることは、不条理、恥ずべき慣習、不合理である。／〔……〕軍務はある種の公的責務であり、軍人／騎士の義務と職務は並大抵の仕事ではない。乙女、見捨てられて頼る術を持たない寡婦、孤児やあらゆる貧乏人、このように苦しむ人々すべて、同時に、国家全体を、自らの力、資産と武力で見張り、守り、防御するのである。こうした事々が軍人／騎士の義務であると私はみなす。しかし、軍人／騎士がどれだけ正しく義務に従い行動しているのか、あるいは、そのために彼らがどれだけ名誉に相応しいのか、他の人々が評価すればよい。だが、学識ある人物たちが、その学びによって国家、また、すべての哀れな人々のみならず、きわめて裕福な市民たちにも、非常に多くの益をもたらしていることを誰も否定しないのであるから、いったい誰が、何か理由を付けて擁護するであらうか、思慮深い者に愚か者を、賢人に無知な者を、有益な人物に無益な者を、そして、活動的で、日々役立っている文人に怠け者を、何事かにおいて優先させるべきであるなどと。<sup>44)</sup>

アルベルティは文人を軍人／騎士と対置させ、上席権の問題、文人が示す高潔さと軍人／騎士が示す墮落という問題を論じ、さらに、両者が帯びる公益性を比較している。この対置については、キケロが「偉大な弁論家」と「下級の将軍」とを対置し、前者の優越を述べている文言との対応が指摘されている<sup>45)</sup>。また、この対置とブルーニ『軍務（騎士）について』との関連が示唆されてもいる<sup>46)</sup>。しかし、オッペルは、より直接的に、中世において法学者が行っていた論争からの影響を、この対置に観察している<sup>47)</sup>。実際、人文主義者が文人の高貴さを主張し始めるよりも前から、法学者は軍務と比較した際の法学の高貴さについて論じていた。そして、人文主義者が道徳的観点から自らの精神的な高貴さを論じたのに対して、法学者は、たとえば上席権をめぐる問題のように<sup>48)</sup>、具体的かつ現実的な視点を含めて、自らの高貴さを論じていたのである<sup>49)</sup>。そこで、まずは簡単に、法学者による高貴さをめぐる議論を概観してみよう。

法学者は、法学が帯びる公益性に依拠し、自らの高貴さを主張している。彼らは、ユスティニアヌス法典における「帝国の威厳は、戦時および平時のいずれにおいても正しく統治されうるように、〔……〕武器によって飾られるのみならず、法律によって武装されている必要がある」<sup>50)</sup>という文言に立脚し、自らが置かれていた地位の向上を計ると同時に、上席権を含め、軍人／騎士に与えられていた諸特権の正当性に対し疑義を呈している。彼らは軍務と比較した際の法学の相対的な地位を向上させるために、自らの高貴さを主張するだけでなく、「軍務とそれを生業とする人物たちの価値を下げる」<sup>51)</sup>必要を感じていたのである。たとえば、チーノ・ダ・ピストイア (Cino da Pistoia, 1270-1336) は、軍人／騎士が示している墮落を次のように揶揄している。

現代における軍人／騎士のうち、商業や個人的な事業に従事していない人物について語ることは、ほとんど不可能である。また、武装する術を知らず、非常に卑しい仕事に手を染めている軍人／騎士も、いくらか見出される。結局、彼らは帯剣し、水を浴び、酒を飲むことに優れ、さまざまな色彩の革や黄金の鎧という名誉を享受して、何かしら特別な敬意をもって挨拶されるのである。彼らはこうした特権を十分に享受している。その他の特権については、軍人／騎士はそれらを享受するにふさわしくない。<sup>52)</sup>

このような軍人／騎士の墮落は、文学的トポスと化していく。騎士階級が示していた墮落に向けられた憤慨あるいは揶揄は、たとえば、ボッカッチョやフランコ・サッケッティ (Franco Sacchetti) らによる作品に<sup>53)</sup>、また、向こう見ずで粗野な傭兵に対する憤慨は、ペトラルカやサルターティが残した手紙に確認される<sup>54)</sup>。さらに、チーノによる問題提起から、「法学者と軍人／騎士のどちらが重んじられるべきであるのか」(Utrum sit praeferendus doctor an miles) という論題が生じている<sup>55)</sup>。たとえば、1340年に行われた法学講義において、シニョローロ・オモデイ (Signorolo Omodei, 1308-1371) は公益性の観点から、軍人／騎士に対する法学者の優越を主張している。

ここから次のことが導かれる。つまり、自らおよび他者のために善をなす人物は、ただ自らのためだけにそうする人物よりも有益であるということが。〔……〕しかし、自らおよび他者のためにこうした業務を引き受ける法学者は、そのために、自らのためだけに働く軍人／騎士よりも有益である。<sup>56)</sup>

時代は下るが、オモデイによるこの講義に注釈を付したルドヴィーコ・ボロニーニ (Ludovico Bolognini, 1446-1508) も、上席権の問題、軍人／騎士が示す無知、また、法学者の美德という伝統的な主題を論じると同時に、公益性に焦点を当てて、軍人／騎士に対する法学者の優越を説いている。

我々のボローニャ市民は、卓越した法学者をその美德ゆえに、あらゆる軍人／騎士よりも先立たせている。教養ある人物は、名誉によって讃えられるべきなのである。〔……〕たとえ、軍人／騎士に公益性という大義が存するにせよ、〔……〕法学者も公益性を帯びているのである。〔……〕しかし、軍人／騎士に与えられた特権の根拠は、その他の理由と同時に、彼らの無知に求められる。他方、法学者においてはそうではない。彼は自らの美德により諸特権を獲得しており、こうした法学者は美德において力を発揮するのである。<sup>57)</sup>

このように、法学者による言葉には、「弁護人の行為を、公益と正義を守るために軍人が行う戦闘行為と同一視する類推的な主張」<sup>58)</sup>が観察されるのである。

以上から、『文芸』においてアルベルティが行っている軍人／騎士と文人との対置は、法学の伝統を踏襲したものであると推測される。彼が上席権の問題に触れ、前者の墮落と退廃を憤慨してみせ、最終的に、両者が帯びる公益性を比較しているからである。この対置は同時に、「文人は公益性を帯びている」という主張を仲介として、たとえば、ブルーニのような人文主義者による「文人の高貴さ」という主張にも連なるであろう。実際、アルベルティの友人、カスティリオンキオ・イル・ジョーヴァネは、1434年頃の手紙において、人文学に身を投じるために軍務を辞した友人を称賛している。軍務が古代と比して明らかな退廃を示している一方、学問界には古代に劣らず卓越した知識人が存在するため、友人が下した決断は称賛に値するのである<sup>59)</sup>。さらにビオンドも、『ボルスス』(Borsus, 1460)において、法学論争の枠組みを踏襲しつつ、法学にかかわる史料のみならず幅広い古典文献を用いて、法学と軍務の両者を比較している<sup>60)</sup>。

以上のように、アルベルティが論じている「文人に与えられるべき社会的名誉」、また、「文人と軍人／騎士との対置」は、それぞれ、既存の学問的伝統にモデルを見出すことができる。ただし、「文人が軍人／騎士に劣る存在として扱われている」という現状を、アルベルティが赤裸々に描き出している点には注意しなければならないであろう。ここに観察される、いわば、暴露の意識は、人文主義的伝統、また、法学における伝統のいずれと比べても異質であり、ブルーニらが示している「文人は公益性を帯びているために高貴である」という認識と、真っ向から対立しているからである。

この点を踏まえると、『文芸』においてアルベルティが示している嘆きは、真剣な憤慨の表れであるというよりも、むしろ、『食間対話集』に収録されている『美德』(Virtus)に観察されるものと類似した、皮肉な調子を帯びていると思われる。この短編において、美德の女神と彼女につき従うキケロら文人は、運命の女神とその取り巻きであるマルクス・アントニウスら軍人から、暴行を受ける。そして、美德の女神はこの出来事をユピテルに報告しようとするが、運命の女神を恐れる天上の神々は、彼女の訴えに耳を傾けようとはしない。美德とその仲間である文人は、結局、運命とその信奉者である軍人に屈することになるのである<sup>61)</sup>。

レゴリオージは『文芸』に観察される嘆きについて、「文人が都市において生きている疎外の状態」をアルベルティが苦々しさを覚えつつ甘受しているとみなしている<sup>62)</sup>。しかし、『美德』において文人の無力さが揶揄されていることを考慮すれば、『文芸』における文人と軍人／騎士との対置にも、同様の皮肉な調子が見出されるのではないだろうか。もし、このようであるならば、なぜアルベルティが文人を無力で哀れな存在としてみなしているのか、確認しなければならない。この点を明らかにするために、文人の公益性という問題をアルベルティがどのように捉えているのか、以下で検討する。

### 3. 「文人が帯びる公益性」に対する疑念

#### 1) 文人と金持ちとの対比

法学者および人文主義者の主張によれば、知識人は公益性を帯びている。アルベルティもその伝統に従って、文人は公益性を帯びていると主張している。しかし、彼の言葉は、そうした学問的伝統とは異質の、何かしら皮肉な調子を帯びていると思われる。この皮肉な調子は、「文人は公益性を帯びている」という主張そのものに向けられているのではないだろうか。なぜなら、文人と軍人／騎士との対置に続き、アルベルティは金満家に文人を批判させているが、その批判が「文人には公益性が欠けている」という認識に立脚しているからである。金持ちは、次のように文人を批判している。

実に、いったいどんな理由によって、お前はあの文人を私よりも好むのか。〔……〕我々はみな、同一の祖国を持つのではないのか。私の親族や近親者が彼のものよりも卑しいのであろうか。あるいは、私の出自が彼のそれよりも卑しいのであろうか。私がラテン語を知らないからといって、議会における私の意見と投票が、かの文人のそれらよりも価値をもたないというのか。我々の祖国、魂は自由であり、我々が母国語で話すことは、たしかに許されるべきである。そして、促されているにもかかわらず黙ってしまったなどと思われぬように、母国語を用いて自由に語ろうではないか。あの文人は書物の中で、繊細な語彙を楽しむがよい。他方、我々金持ちは、議会において我々の意見が通るように気を配ろう、私は知っているが、重厚な修辞を用いる誰かこのうえなく学識深い人物よりも、富という権威を用いる我々のほうが、より簡単に、そうしたことをなすであろう。我々は黄金で飾られた意見を、彼らは月桂樹で飾られた意見を述べるのであるが、月桂樹は黄金に屈するがよい。〔……〕いまやこうした文人たちは、その愚かさや些細な議論で満足してくれ。そして、金儲けの屁理屈を携えて公の場に出てくることをやめてくれ。むしろ、彼らがその悪臭をまき散らしているランプのもとへ帰ってくれ。至高の神々よ、この人間のくずを視界から消し去ってくれ。もし、彼らがいなければ、言い争いの喧騒や口論における中傷はなくなり、論争や諍いは止み、町々に最大限の調和がもたらされるであろう。市民間に定められた和平は守られて、永遠に続く言い争いや終わることのない訴訟も長続きはせず、公平で善良な指導者である自然のもと

で、裁判は公正に行われるであろう。<sup>63)</sup>

こうした意見は、一見、無学で愚かな金満家の戯言にすぎないように見えるかもしれない。しかし、この言葉にも、高貴さをめぐる伝統的な議論が影響を与えていることが確認される。まず、この金満家は、血縁や出自に由来する先祖伝来の高貴さについて言及し、さらに、俗語とラテン語との対比を通じて、公益性という観点から文人を批判しているからである。

本稿序論において確認したように、アルベルティは『家族論』第三巻序文、『トスカーナ語文法』、さらに『抗議』といった作品において、俗語が有する価値を主張し、文人による積極的なその使用を称揚している。作品を執筆する際の使用言語をめぐる問題が公益性の問題と密接に関連しているとアルベルティが認識していたことは、『家族論』第三巻序文から明らかである。古代において、教養ある人物の専有物であったラテン語と同時に、大衆も理解できた俗語が併存していたという、ブルーニを中心とした一派の見解を、アルベルティは公益性の観点から、完全に否定している。もし、古代において、共通語としての俗語が存在していたならば、知識人にしか理解されないラテン語ではなく、みなに理解されるその俗語を用いて、古典作家は作品を執筆したはずだからである。

かくも多大な労苦を注いで同胞の役に立とうとした古典作家たちが、なぜ、少数の者たちにしか知られていない言語を用いて執筆したというのか。〔……〕むしろ、学ある人物は誰も私の考えを否定しないと思うが、古典作家たちはすべて、あらゆる同胞に理解されることを非常に望みながら執筆していたのであろう。<sup>64)</sup>

みなが理解できる言語を用いることで作家は公益性を獲得するという認識のもと、アルベルティは自らが『家族論』を俗語で執筆した理由を述べている。

むしろ、おそらく思慮深い人物は私のことを褒めるであろう、もし、私の述べていることをみなが理解できる仕方で執筆し、少数の者たちに好かれることよりも、多くの人々の役に立つように努めたら。というのも、君が知っている通り、今日、文人は非常に数少ないからである。<sup>65)</sup>

アルベルティは、俗語が公益性を帯びているために、自ら率先してそれを用いて執筆を行っているのである。

作品執筆の際に用いられる言語が帯びる公益性については、ブルーニも『キケロ伝』において言及している。

〔キケロ〕はまず、ラテン語を用いて哲学を提示したのである。哲学は、それまで我々の文学に知られておらず、ローマの言語にはほとんど無縁であり、多くの学識ある人物

たちが、ラテン語では執筆されることも論じられることもできないとみなしていたのであるが。彼は、哲学者たちによる発見と議論がいつそう明晰かつ簡便に理解されるように、多くの言葉を祖国の語彙に付け足した。彼は、語りの教えと技術をローマ人の誰よりも先んじて、また、ギリシャ人の誰よりも学識深く提示しながら、紹介したのである。ローマ帝国の権勢に、人間的事物の支配者たる雄弁を彼は加えたのである。したがって、彼は祖国の父というよりも、雄弁および我々の文芸の父と呼ばれるべきなのである。<sup>66)</sup>

ギリシャの文化であった哲学を、みなが理解できるラテン語で紹介することで、キケロはラテン人の思想と言語を磨き上げたと同時に、文人としての公益性を獲得したのである<sup>67)</sup>。

さて、こうした「言語が帯びる公益性」という認識を踏まえ、『文芸』に視線を戻すと、金満家の意見は首肯しうるものとなるであろう。議会において、みなに理解される俗語を用いる金持ちの意見は、ごく少数の人物にしか理解されないラテン語に固執する文人のそれと比べたときに、より公益性を帯びるのである。他方、ラテン語を用いる文人の意見は、大衆によって理解されることも、共感されることもない。キケロによれば、弁論家は知識人のみならず、大衆の賛同も獲得しなければならない<sup>68)</sup>。この点を考慮すると、まず、ラテン語に固執する時点で、金満家が描き出している文人には、弁論家としての資格が欠けているのである。

ラテン語と大衆との関係については、1435年、言語論争の際にブルーニがビオンドに宛てた手紙の一節を確認しておくことが有益であると思われる。古代においてラテン語と俗語が併存していたという立場をとったブルーニは、「したがって、ラテン語で学識深く発話された弁論を、卓越した人物たちは非常に明快に理解していた。他方、パン職人や調教師といった群衆は、いまで言え、ミサの典礼の文言を理解するほどにしか、弁論家の言葉を理解していなかったのである」<sup>69)</sup>と述べている。ミルコ・タヴォーニは、ブルーニのこの見解と、『フィレンツェ市民史』等の著作において理想とされている「共和制ローマ」のイメージとの間に大幅な乖離が存在することを指摘している<sup>70)</sup>。言語論争においてブルーニは、ラテン語を理解することのできない大衆を、いわば、切り捨てているのである。結局、ブルーニがキケロに見出して称賛していた「公益性」は、その対象として知識人しか想定していない限定的なものであったことになる。そして、たとえば『フィレンツェ市民史』のように、ブルーニが公益に資するために執筆したと胸を張る諸作品も、実際には、読者を選ぶものであったことは明らかである。

こうした見解および姿勢から立ち現れる知的エリート主義を問題視したために、アルベルティが言語論争に身を投じたことを踏まえれば、『文芸』における金満家の言葉も、同時代の文人に対する揶揄として機能していると考えられることになる。ラテン語に固執し俗語の価値を否定する文人は、いくら立派な事柄を述べようとも、公益性に欠けているのである。

金満家はさらに、彼が経済的に豊かであるために、彼の意見は文人のそれよりも大衆に受け入れられやすいと述べている。この点について、大衆側の姿勢をめぐりアルベルティが行っている分析を確認しておこう。

しかし、大衆について語ることに戻ろう。彼らのもとでは常に、黄金と財産に最高の名誉が与えられてきた。大衆がどんな考えで、美德ではなく豪奢さに対する敬意によって動かされるのかは、明らかである。無知な大衆は、自らの目で見られる事物によって動かされる一方、精神をいっそう鋭敏なものにしてきて、そうされるべきである事物によっては動かされない。したがって、大衆は目で見ることのできる財産を望み、自分が知らない知を軽んじ、富を追求し、美德を軽蔑する。金持ちは高慢さとその仕草で尊大な雰囲気を出し、友人と下僕たちを長々と引き連れて道を行くが、それは多くの財産と豊かさで、何かを約束したり脅したりするのと変わらないのである。大衆は、目つきと顔つきで金持ちに賛同する、その人物の財産を欲深く考慮して。したがって、彼がやってくると大衆はすぐに起立する。そして、財産が保証しているだけ、その人物を重んじなければならぬとみなし、そう公言するのである。だから、市民たちが、その人物の恩顧と金銭により援助されようとしている人物を、すべての文人より優先させても、それはおかしいことではない。結局、このように、これらすべての事々のため、とりわけ我々の町の人々の中で、燃え盛る欲望に火をつけられた意見が力をもち、金持ちや金満家にだけ最大限の名誉が与えられると彼らはみなしているのである。彼らは他方、文人については、役に立つことが無いであろう事物についてほどにしか、評価しない。実際、さまざまな仕方で文人は軽蔑されているのである。<sup>71)</sup>

この分析も、美德の価値を評価することができない愚かな大衆に対する批判<sup>72)</sup>、あるいは、フィレンツェが謳歌している過度の「自由」(libertas)に対する批判<sup>73)</sup>としてみなされるかもしれない。しかし、大衆の意見は軽んじられるべきではないというキケロの見解<sup>74)</sup>、また、『文芸』において大衆が検閲者としてみなされている点<sup>75)</sup>を考慮すると、彼らが示す態度をアルベルティが完全に否定し、批判しているとみなす必要はなくなるかもしれない。実際、上記引用箇所においても、大衆が文人よりも金満家に敬意を払うことについて、アルベルティは「それはおかしいことではない」と述べている。

この点については、バルバロやブルーニにより導入された新たな金銭観において、寛大や度量など、公益性に直結する美德を実践するために、金銭が不可欠であるとみなされていることを思い起こすべきであろう。公益性を獲得するためには、経済的豊かさも必要なのであり、そのために、大衆は金持ちに敬意を払う。他方、貧しさを強制されている文人が寛大の美德や度量の美德を実践することは不可能であるために<sup>76)</sup>、彼らが金満家よりも軽視されていても、それはおかしいことではない。

公益性は経済的豊かさに依存しないと見る見解も、たしかに存在する。たとえばブオナッ

コルソは、貧しい人物であっても公益に資することは可能であると主張している。貧しく質素な生活を送りつつも国家へ多大な貢献をしたマルクス・アグリッパ (Marcus Agrippa) や ウァレリウス・プブリコラ (Valerius Publicola)、ルキウス・クィンクティウス・キンキナトゥス (Lucius Quinctius Cincinnatus) といった「栄えある清貧」<sup>77)</sup>を体現している人物は、ブオナッコルソによれば、寛大の美德を最高のかたちで実践している。

誠実で栄えある貧乏人が寛大の美德を実践することはまったくできないなどと、誰もみなしてはならない。そうしたこのうえなく輝かしい人々が祖国を防衛し、新たな領土を獲得し、国家に対するこのうえなく素晴らしい義務によって友人たちの必要を満たし、同胞に向けられた攻撃をはねのけたとき、これらの行為は寛大という美德の至高のかたちとしてみなされたのではないのか。財産の豊かさに依拠して寛大の美德を実践する人物は、たしかに批判されるべきではないが、それでも、かぎられた人々に対してしか、寛大に振る舞うことはできない。財産から引き出した分だけ、恩恵を与えるための資力が失われることが必然だからである。公的・私的な事柄に対する援助と奉仕によって役立つことに努める人物は、そうした恩恵を頻繁に与えることで国家における権威、また、友人たちからの助けを獲得した分だけ、日々、いっそう寛大になることが可能である。<sup>78)</sup>

ブオナッコルソによれば、「栄えある清貧」は、より広範な人々に対し、より持続的な恩恵を与えることができるために、「金銭的手段による寛大」以上に価値を認められるべきである。しかし、『文芸』においてアルベルティが描き出している文人には、こうした方法で公益に資することも許されていない。人々は、「文人については、役に立つことが無いであろう事物についてほどにしか、評価しないのである」<sup>79)</sup>。

結局、金満家の言葉は、「文人には公益性が欠けている」ことを暴露しているのではないだろうか。まず、文人はラテン語に固執するために、彼らが発する月桂樹で飾られた抽象的な金言は、検閲者である大衆には届かない。さらに、文人は貧困を課されているために、寛大および度量という美德を通じ、人々に具体的かつ物質的な恩恵を与えることができない。そして、文人は常に喧騒を巻き起こすために、町に彼らが存在すること自体が公益に反している。このように、あらゆる点において公益性を欠く文人は、高貴さや名誉を認められないどころか、あらゆる社会階層から軽蔑されるのである。

以上から、アルベルティが示していた嘆き、さらに、「学識ある人物たちが、その学びによって、国家、また、すべての哀れな人々のみならず、きわめて裕福な市民たちにも、非常に多くの益をもたらしていることを誰も否定しないのであるから」<sup>80)</sup>という言葉の信憑性が、疑わしいものとなる。アルベルティは、文人に社会的名誉が認められていないという現状の原因を、文人の価値を理解しようとしないう社会にではなく、公益性に欠けている文人に帰していると考えられるからである。この点は、文人による政治参加という問題についてアルベ



ルティが示している見解からも確認される。

## 2) 公職からの文人の排除

アルベルティは「文人の価値を正当に評価しない社会」について嘆くそぶりを示しながら、実際には、「文人には公益性が欠けている」という点を暴露し揶揄していると思われる。この意識は、彼が文人による政治参加を論じている個所に、色濃く観察される。そもそも、文人による政治参加は、観想的生と行動的生とを両立させるのみならず、学識を通じてそれらを融合させることを目標とする市民的人文主義が掲げる理想のひとつである。たとえば、ブルーニはキケロについて、次のように述べている。

この人物による著作をめぐってみれば、業務に取り組むための時間など、彼にはなかったと思われるであろう。反対に、もし、彼が行った政治上の功績、抗争、業務、また、公私を問わない対立のことを考えてみれば、読み書きするための時間など、彼にはなかったと思われるであろう。このように、私が思うに、全人類のうちただこの人物だけが、最高でこのうえなく困難な二種の仕事を成し遂げたのである。政治において全世界の調停者として多忙きわまりないのに、閑暇と勉学に身を捧げている哲学者たちよりも多くの作品を執筆し、他方、勉学や執筆活動に最大限に勤しみながら、文芸にかかわるあらゆる心労から解放されている人物がこなす以上に多くの業務に立ち向かったのであるから。この理由は、私が思うに、まず、彼の才知が示している驚嘆すべき神々しい偉大さ、続いて、注意深く勤勉な性格、第三に、あらゆる知と学識に満ちた状態で政治の道に進んだ事実求められるであろう。したがって、まさに哲学の深奥から、国家を治めるための行い、また、執筆し他者に忠告するための言葉を引き出したのである。<sup>81)</sup>

キケロは、観想的生と行動的生の双方において卓越した業績を残したのみならず、学識を政治に適用することで両者を融合させた文人として、市民的人文主義における理想像を体現している。他方、行動的生に参加することを拒絶する文人は、市民的人文主義という視点からは、称賛に値しない。たとえば、『孤独な生について』などの著作において、キケロが示した公益性の価値を認めつつも、自らは行動的生への参加を拒絶するという立場をとったペトラルカの姿勢を、ブルーニはダンテとの比較を通じて批判している。

彼ら両者について語る際に、次のような仕方で論じることができる。つまり、行動的かつ市民的な生において、ダンテはペトラルカよりも価値を有していた。なぜなら、ダンテは祖国のために軍務および政務職に、称賛に値するかたちで身を投じたからである。ペトラルカについて、こうしたことは語られない。というのも、ペトラルカは市民によって政治が行われる自由な都市に住んでいたわけではなく、また、美德の偉大な現れであることが知られている、祖国のための軍務に服したこともないからである。くわえて、

ダンテは追放と貧苦に追い立てられながらも輝かしい勉学を放棄せず、多くの困難の中で美しい作品を執筆した。他方、ペトラルカは穏やかで甘美かつ誠実、また、非常に平穏な生活に身を置いて、作品を執筆した。たしかに、平穏さは望まれるべきではあるが、それでも、不幸な境遇において勉学に集中できることは、最上の美德の表れである。それもとりわけ、順境から逆境へと変転する場合には。〔……〕 こうした理由により、名誉の点については、ダンテが選ばれるべきであると思われる。<sup>82)</sup>

このように、行動的生を象徴する政務および軍務にペトラルカが就かなかった点を、ブルーニは問題視している。

しかし、観想的生を選択したペトラルカを否定的に眺めているブルーニ自身も、行動的生を忌避する姿勢を示している。1427年、ブルーニはフィレンツェの書記官長に再任されているが、翌年、ガエリーニに宛てた手紙において、「しかし、閑暇に満ちて文芸と勉学にあてられた生活の方が、業務に満ちた市民的生よりも、私としてはずっと楽しく平穏であった」<sup>83)</sup>と述べている。さらにブルーニは、「私が思うに、私が公的名誉を避けようと努めたほどに全力を尽くしてそれを獲得しようとした人物は、誰もいなかった」<sup>84)</sup>と続けている。同様の見解は、同年、マルコ・ダンドロ (Marco Dandolo) に宛てられた手紙にも確認される。

知って欲しいのだが、私がこの公職を避けて放棄しようとしたほどの欲求で、公的名誉を求めた人物は誰もいない。公職がもたらす嵐と混乱を私は知っていた。そして、私自身、あの喚き声とは無縁な生活の閑暇と平穏を、全力で抱きしめていた。だから、私はその職を望んでいなかっただけでなく、観想的生から私を引き出そうとする者たちに抗った。また、抗うのみならず、戦った。〔……〕 いま、たしかに他者にとっては喜ばしいが、私には煩わしいこの公的業務に没頭している。他の事々と同じく、国家が私に課した配慮と熟慮の委託においても、私は称賛と名誉を獲得することであろう。しかし、思うに、この業務に努める間、私の学びのとんでもない放棄が生じるのである。<sup>85)</sup>

ブルーニは、『口さがない怠け者に対する糾弾』において描き出したような、勉学および読書だけに没頭する観想的生を志向し、公的生を煩わしいものとして否定しているのである。市民的人文主義が掲げる理想像とは真っ向から対立するこの見解をめぐる、バロンは、1421年以降、実際にブルーニが行動的生よりも観想的生を優先させていた可能性を指摘している<sup>86)</sup>。しかし、勉学にあてられた観想的生への渴望、また、公務に忙殺される行動的生への不満にもかかわらず、ブルーニは後者へと本格的に身を投じることになる。彼は、1426年にミラノとの和平交渉のため、フィレンツェを代表する外交官としてローマへ派遣された後、1427年から1444年に没するまで、書記官長の職にとどまり続けている。同時に、1420年代から30年代にかけて、フィレンツェにおける七大ギルドのうち四ギルドに加入し政治的基盤を固めると、1430年代後半から政府における要職を歴任し、寡頭政体の中枢へと食い込んでいくことになる<sup>87)</sup>。

ブルーニの胸中において、観想的生と行動的生のバランスがどのように変化していったのかを詳らかにすることは困難ではあるが、いずれにせよ、文人には、行動的生への参加について、自らの判断で選択することが許されていたといえる。ペトラルカは、自らの意志に基づいて、公的生を拒絶した。また、ブルーニも、書記官長の職を引き受けた場合の面倒と、それを拒絶する際に生じる煩わしさを天秤にかけ、思慮深く、判断を下したのである<sup>88)</sup>。

さて、文人による政治参加について、『文芸』におけるアルベルティは、どのような見解を示しているのだろうか。彼は、「公職」(«publica munera»)、「外交官」(«legationes»)、また、「行政官」(«magistratus»)は、その職に就く人物に社会的名誉をもたらす<sup>89)</sup>と認めると同時に、政治は文人に不利益をもたらすとも述べている<sup>90)</sup>。アルベルティは、市民的人文主義の理想像、また、行動的生を忌避する伝統的見解の双方を意識しているのである。この点を踏まえ、我々が注目すべきは、「政治からの文人の排除」をアルベルティが論じている点である。

しかし、行政の要職に就く人物に、長い実践と行動を通じて完璧なものとなった経験以上に、大量の書物を国家が求めるなどとは、私には思えない。[……] というのも、私は次のことが確実であると思うからである。つまり、政治において、天空や星々についてはめったに考察がなされないし、神々の本性や魂の誕生と機能については、決して考察されることはない。無論、議会においては、戦争と平和について、歳入と歳出について、調整と監視がなされるべき市民的問題すべてについて、文芸／書物ではなく実践と経験に基づいて論じられるのである。[……] 文人は、和平と同盟に関する公文書の作成と裁可だけを引き受けるべきである。その他の公務はすべて、非常に経験豊かで実践に長けた市民が正当に引き受け、大衆の望みと命令に従いそれに努めるべきである。実際、文芸よりも実務の習慣において造詣深く熟達しているとみなされようなどしない文人は、ちょうど、非常に聡明な証人の立会のもとであるかのように、目の前で行われた事々を公的記録に記載すれば、自らの業務を果たすことになる。<sup>91)</sup>

アルベルティが描き出している文人には、ペトラルカ、また、1420年代前半におけるブルーニのように、政治から身を遠ざけるという希望を表明する自由さえ、与えられていない。彼らは、ただ、政治から排除される存在である。なぜなら、文人が誇る大量の書物、また、そこから獲得される学識は、経験的かつ実践的な知を求める国家によって、必要とされていないからである。結局、文人は書物から学ばれた学識しか持たないために、公益性の最大の証明である公職に就くことから、強制的に排除されるのである。

そして、もし、知識人として身の程を弁えた文人が政治に関与するならば、実証的な公的記録の作成といった、身の丈に合った業務だけに従事すべきであると、アルベルティは続けている。この忠告は、積極的に政治に参加するだけでなく、政治的な目的を優先させるために実証性を疎かにした文章、たとえば、国家や軍務を讃える「賛辞」(laudatio)のような文

章を作成する「職業的修辞家」(professional rhetorician)<sup>92)</sup>としての文人に対する揶揄として機能しているのではないだろうか。というのも、『文芸』献辞において、暴君ブシリスを称賛し、ソクラテスを批判した修辞学者、イソクラテスが揶揄されているが<sup>93)</sup>、こうしたアルベルティの姿勢に、クインティリアヌスによる「悪人は心にもないことを語り、善人は誠実に語る」という見解を下敷きとした、ソフィストとしての弁論家に対する反感が存在することが指摘されているからである<sup>94)</sup>。また、アルベルティが『文芸』において、賛辞に必須の要素である「敷衍」(amplificatio)を否定し、「簡潔さ」(brevitas)を称揚していることが指摘されているからである<sup>95)</sup>。このように、『文芸』におけるアルベルティが、修辞に満ちた賛辞を否定的に眺めているのであるならば、人文学と人文主義者を熱烈に称賛しながらも、必要とあらば、軍人／騎士が文人よりも優れていると述べることも厭わないブルーニのような文人が<sup>96)</sup>、この箇所に観察される揶揄の射程に入ることになるであろう。

以上のように、アルベルティが描き出している「ラテン語に固執し、経済的に貧しく、書物から学ばれた学識しか持たない文人」は、知識人は高貴であるという伝統的な主張の根拠であり、市民的人文主義の根幹をなす概念でもある公益性を、まったく帯びていない。この点からも、文人に名誉が認められていない現状に対しアルベルティが示している嘆きの信憑性が、疑われることになる。こうした現状の原因は、文人に名誉を与えない社会の愚かさではなく、文人に公益性が完全に欠けているという事実求められるべきではないだろうか。

#### 4. 学識の価値への疑念

文人の社会的名誉について論じる際に、アルベルティは知識人の高貴さをめぐる伝統的な言説を下敷きにして、とくにその要件のひとつ、知識人は公益性を帯びているという見解を揶揄していると考えられる。なぜなら、文人は、みな理解できる俗語ではなく、ごく少数の知識人しか理解できないラテン語に固執し、また、人々に具体的な恩恵をもたらす諸美德を実践するだけの経済力を持たないからである。さらに、文人が誇る学識は、公益性の最上のかたちであり、そこに携わる人物に社会的名誉をもたらす政治において、不要なものとしてみなされているからである。

『文芸』におけるアルベルティによれば、学識に価値を見出さないという姿勢は、社会全体に観察される。このことは、まず、金持ちによる次の言葉に明らかである。

結局、この文人を誉めそやすことをやめなさい。〔……〕 どうして私は彼の前で立ち上がる必要があるのか。なぜ私は道を譲り帽子をとらなければならないのか。どんな関係が私と彼との間に存するというのか。彼は文芸を知っているが、それがどうした。彼は学校を経営し、少年たちを教育すればよい。彼は法律を知っているが、それがどうした。彼は吠えて叫び、訴訟を引き起こし、寡婦を食い物にし、訴訟を起こしている人物を餌食にし、取るに足らない客は好きなように蔑ろにし、市民たちの守護者、また、忠告者

として立ち現れればよい、それがどうした。こんな守護者を抱く都市は、見捨てられることになるであろう。彼は医学を教授しているが、それがどうした。彼は酔っ払い、大食い、浪費家を治療すればよい、薬や毒を売ればよい、おぞましく汚らしいことこのうえない、あらゆる事物を好きに扱えばよい、それがどうした。彼は神学を追求しているが、それがどうした。彼は叫び声で老婦人を満たし、説教壇で好きなように喚きたてればよい、それがどうした。こんな文人は、成功してはならない。彼がすべてを知り、あらゆる事柄を学びとり、万物を理解していようとも、それがどうした。<sup>97)</sup>

人文主義的教育者、法学者、医者、さらに神学者はまとめて、その価値を否定されている。文人が書物から獲得した学識は、金持ちにとって無価値なのである。同様の認識は、大衆のもとでも観察される。大衆は文人に対し、次のように語りかけている。

さらに、お前たち文人が公言する通りであるとしよう、お前たちは文芸によって、万物について学識深くなってくれ。だが、かくも豊かで神々しい贈り物が文芸に存しており、万物についてお前たちが知らないことなど何もないのであれば、人類のうち、お前たち文人以上の愚か者が存在するであろうか。お前たちはどれだけ気が狂っているのか、貧困から抜け出すことを第一に学ばず、自分たちの貧しさと惨めさを嘆かないとは。したがって、お前たちが文芸を習得したという事実を我々は評価すべきであろうか、お前たちは多くの場合、知を示すのではなく、餓えて渴いているというのに。もし、何かしらを知っていると思われないのなら、学んでくれ、学んでくれ、文人よ、困窮することなく生活する術を。それから、称賛されて生きることを望めばよい。<sup>98)</sup>

金持ちと同様に大衆も、文芸、すなわち書物から学ばれる学識に価値を認めず、物質的な豊かさを評価しているのである。このように、高貴さを証しする条件のひとつとして法学者と人文主義者がみなしていた「知」は、『文芸』において、社会的価値を、まったくもたないものとして描写されている。そして、文人が、唯一誇ることのできる学識に、公益性が存しないのであるから、彼らがあらゆる社会階層から笑いものにされ、社会の底辺へと押しやられているという現状も、当然なのである。

以上のように、「書物から学ばれる学識は、現実社会において役に立たない」とアルベルティが主張しているのであれば、この点に、市民的人文主義への明らかな批判と揶揄を読み込まざるをえなくなる。市民的人文主義は、観想的生と行動的生を両立させるだけでなく、学識を通じて両者を融合させることを理想として掲げているからである。たとえばブルーニは、勉学を修めてから政治へと進み、哲学の教えを国家統治に生かしたためにキケロを称賛している<sup>99)</sup>。しかし、アルベルティが主張しているように、社会が学識に価値を認めないならば、それは、観想的生と行動的生を融合させる際の紐帯として機能できないことになる。『文芸』に示されている見解に従えば、市民的人文主義は、やはり夢にすぎないのである。

文人と社会的名誉との関係をめぐる章の末尾において、アルベルティは、『対話』におけるニコリの言葉を想起させる文言を用いて、学問が置かれている現状を嘆いている<sup>100)</sup>。ただし、『食間対話集』第七巻献辞や『文芸』献辞に観察された認識と同様に、アルベルティの憤慨は、スコラ的思想の影響を色濃く残した諸学問に対してではなく、文芸学、すなわち、人文学を含め、書物から学ばれる学問すべてが置かれている状況に対して向けられている<sup>101)</sup>。また、『対話』におけるニコリが、文化的不毛の原因を時代に求めていたのに対し、アルベルティは、文芸学に身を投じている文人そのものを批判している。アルベルティによれば、かつて、多大な名誉が認められていた学識および文人の社会的価値が、かくも低下した原因は、現在、文芸学に身を投じている文人が、それを金儲けの道具、あるいは、社会的地位の上昇のための道具としてみなしていることに求められる<sup>102)</sup>。アルベルティが示しているこの憤慨は、たしかに、当代の文人が「神々しいことこのうえない学問」を蹂躪し冒瀆している点<sup>103)</sup>、すなわち、彼らが学識に実利を求めている点に向けられているのであろう。しかし、アルベルティが市民的人文主義の理想を否定している可能性を踏まえると、この批判は、学識に公益性が欠けていることに無自覚なまま、行動的生に積極的に参画していく文人の愚かさに対する揶揄としても機能していると考えられるのではないだろうか。

## 結論

### 市民的人文主義に対する揶揄としての『文芸』

『文芸』においてアルベルティが描き出している文人は、勉学を通じて快樂、富、社会的名誉を獲得することができない。彼らはこうした現世的諸善を軽蔑し、自発的に放棄するわけではなく、それらを楽しむことから、強制的に排除されているのである。まず、文人は批判を避けるために、勉学の合間の息抜きとしての感覚的快樂さえ諦めて、読書に専念することを強いられている。そして、その読書は精神的快樂ではなく、不名誉に対する恐れという精神的重圧を文人にもたらす。文人に課されている読書自体が、あらゆる快樂を彼らから奪い去るのである。続いて、文人が懸命な読書によって獲得する学識に、社会は価値を認めない。そのため、人文諸学に身を投じた文人はもちろんのこと、法学者、医者、公証人といった実利的な職種に就いた文人も、まっとうな仕方では稼ごうとするかぎり、ごくわずかな収入しか期待できない。他方、勉学は、文人に多大な出費を求める。とくに書物には莫大な投資が必要とされるが、こうした書物と読書への節度に欠けた熱意は、むしろ、奨励されている。このために、文人の経済的な収支は常に赤字であり、彼らは貧しさを免れることができない。最後に、俗語を蔑みラテン語に執着し、人々に具体的で物質的な恩恵を与えるだけの経済力を持たず、読書から獲得される学識しか誇ることができない文人には、社会的名誉の重要な根拠とされている公益性が欠けている。社会は学識に価値を認めず、そのために、文人は社会において無用の存在として、あらゆる人々から軽蔑されている。

結局、『文芸』において描写されている文人は、いわば、「読書の掟」に縛られているために、現世的諸善を放棄することを強制され、社会全体から排斥されている。また、彼らが身を捧げている文芸学は、書物から学ばれる学識の獲得だけを目指すために、社会性に欠けて自己完結する学問とならざるをえない。カルディーニは、『文芸』におけるアルベルティが、市民的人文主義の特徴である社会性を拒絶しているとみなしている<sup>1)</sup>。しかし、実際には、社会が文人を拒絶しているのであり、しかも、それには正当な理由があると、アルベルティは主張しているのではないだろうか。

『文芸』結論部において、アルベルティは書物の口を借りて、きわめて内向的な学問像を提示している。擬人化された書物による文芸学の称揚は、次の通りである。

若者よ、度重なる徹夜のために疲弊して、お前はどこへ向かうのか。こうした労苦が、何に役立つというのか。我々書物のもと、能力と熱意を捧げ、何をあなたは求めているのか。お前の徹夜、心労、思索はどこへ向かうのか。自分自身を心労で苛みながら、お前は楽しむことを求めているのか。お前は何かしらの休息を自らに与えたことはあるのか。お前は金銭的富を望むのか、お前自身、我々書物のもとで、貧しさを恐れないこと

を学んだのに。あるいは、お前の頭から抜け落ちているのか、我々書物にかかわる事柄はどれも、売り物ではないということが。若者よ、お前は次のことを忘れてはならない。つまり、我々書物は、我々の愛好者が金持ちであるよりも、貧しい方がよいとみなしていることを。というのも、我々は次のことを経験しているからである。つまり、あらゆる学者は経済的に豊かになるとすぐ、事物の快樂と豊かさに浸り、我々との繋がり、我々との結びつきを煩わしく感じ始めることを。さらに何があるか。お前は権力を求め、名誉を享受し、威厳を獲得し、豊かさを望むのだろうか。お前は間違っている、若者よ、お前は間違っている。もし、大衆からの賛同、平民からの称賛を、美德以上に重んじるならば。あるいは、もし、運命のいたづら、広場の喧騒、大衆の動向を、学識と知よりも重視するならば。こうした事柄は、儂く脆く、無駄な労力や恐れ、さらに、疑念に満ちており、危険や破滅を孕んでいる。こうした事柄を、魂の平安、安定した美德、学問の美しさと、誰が引き比べるであろうか。若者よ、お前の頭から抜け落ちているのか、我々書物のもとでは、あらゆる場所を美德が取り巻いていることを。そして、その美德が、いかなる欲望、傲慢、慢心、魂の軽薄さも愛さず、むしろ、あらゆる暗闇、あらゆる汚らわしさの陰から魂がこのうえなく浄化されることを望んでいることを。そして若者よ、お前はわからないのか、我々書物が言葉を用いて語っている知が、どれだけの光と輝きで、我々に身を投じた人物を有名で著名きわまりなくさせようと努めているのかを。我々書物のもとに、過去の事績にかんする非常に古い記憶、また、完全なる思慮が存していることを思い出すがよい。それらは、運命によるあらゆる攻撃と危険からお前を救いだし、支えてくれる。だから、欲望にまみれた精神、偉大さを望んで膨れ上がった心を捨て去りなさい。金銭的富や空虚な名声、また、誤った称賛に隷属する労苦——お前はそうした労苦を文芸へと注いでいる——を避けなさい。苦労しても獲得できない事物を追求することは愚かである。もし、達成できなければ、そこに注いだ労力をお前が悔やみ、もし、獲得できても、その卑しさをお前が恥じるような事物を獲得しようと努めることは、愚かきわまりないのである。我々のもとで、お前は労苦を軽減し、よりいっそう、美德に励むがよい。お前は我々のもとで、正しくも美德の仲間としてみなされている学識における卓越を獲得するだけでなく、むしろ、希望、理性、また、熟考により、日々、完全な美德にいっそうふさわしい存在に、お前自身が変わっていくのである。実際、学識と学芸から、あの輝かしい報奨が与えられることになる。つまり、知を望むことが許されるのである。そして美德から、お前はあの神々しい報奨を手にするようになる。つまり、魂の平安、称賛、威厳、そして、幸せを、お前は獲得するのである。もし、然るべく、お前がその他の事柄を後回しにして美德の獲得へと邁進すれば、あらゆる悪徳からの最大限の解放がなされ、最大級の称賛と栄光が続くことになる。美德は卓越し優越する。なぜなら、悪徳やあらゆる過ちから我々を引き離してくれる、何か神々しい力が美德には結びつき、そこに統合されているからである。また、称賛、名誉、完全で永遠なる魂の快樂と平安が、美德につき従い、持続するからである。そうし



た美德を、心と意欲、さらに振る舞いによってかき抱く人物、堅固で明瞭な美德が、平民による判断ではなく心の優美さと輝きに存することを覚えている人物は、運命とのかかわりをまったく望まず、自らの善すべてが自らのうちに存するとみなすことであろう。したがって、この人物はたしかに、非常に名高く、また、喜ばしく、神々のような生き方をするようになる。こうであるのだから、若者よ、美德に身を捧げなさい。そして、運命が与えてくれる利便については、次のように考えるがよい。つまり、それらのうちどれも、熱烈に望まれるべきではなく、よき心よりも優先されるべきでもない。そして、非常に評価された人物によって、知と美德以外、何事も追及されるべきではなく、また、無知と悪徳以外、何事も恐れられたり避けられたりするべきではない。自らの心をこのうえなく飾り上げようとする人物は、「快樂」と呼ばれている、あの汚らしいもの、また、「富」あるいは「財産」と呼ばれている、あの美德の敵、さらに、「名誉」、「威厳」、「偉大さ」と呼ばれている、あの振る舞いと魂における災厄すべてを軽蔑し、憎み、遠ざけなければならない。もし、以上の事柄すべてに非常に勤勉に努めたら、文芸がたいそう快樂に満ちており、称賛、栄光、後世に残り永遠不滅の実りを獲得することに、非常に適していることをお前は知るであろう。<sup>2)</sup>

文人は、現世的快樂、経済的豊かさ、社会的名声を軽蔑し、勉学における快樂、清貧、後世における評価を追求しなければならない。書物の言葉によれば、文芸学は現世的価値観およびそれに従う社会から完全に隔絶された崇高な行為であり、文人は自発的にそうした学問に身を捧げるべきなのである。

この書物による文芸学の称揚には、作者アルベルティの理想が反映されているとみなされてきた<sup>3)</sup>。しかし、この賛辞と、『文芸』本論の検討を通じて我々が確認してきたアルベルティの姿勢との間には、多くの齟齬が観察される。まず、書物は、勉学から得られる魂の平安や快樂について論じているが、これは、アルベルティが文人と快樂との関係を論じながら否定した、一般的な言説にすぎない。勉学は、感覚的快樂に耽る暇を文人に与えてくれなればかりか、それ自体として、精神的な重圧なのである。続いて、書物は文人の清貧を称揚しているが、これは、アルベルティが立脚している現実的な経済感覚とは一致しない。さらに、書物は富を美德の敵と呼んでいるが、実際には、公益性を獲得するために、金銭を手段とする諸美德を実践することが必要である。最後に、書物が勧めているように社会的名誉を拒絶し放棄することは、言語論争を通じてアルベルティが主張している「文人が帯びるべき公益性」を放棄することと同義である。また、書物は作家としての不朽の名声を文人に対し約束しているが、『死者』において、こうした名誉の獲得は不可能であることが明らかにされている<sup>4)</sup>。

このように、『文芸』本論においてアルベルティが示している見解と、作品結論部における書物による文芸学の称揚との間には、明らかな矛盾が確認される。この矛盾に注目すると、アルベルティが理想とする学問像が、この賛辞において直接的に示されているとみなす解

積の信憑性が、疑わしく思われてくる。そこで、書物によるこの賛辞が、どのような機能を果たしているのか明らかにするために、まず、同時代の思想と『文芸』との関係を整理し、続いて、アルベルティによる他作品と『文芸』との関係を確認してみよう。

## 1. 同時代の思想と『文芸』との関係

『文芸』においてアルベルティが扱っている論題には、同時代の学問界、とくに、フィレンツェを中心に花開いていた市民的人文主義が示していた諸動向の痕跡と思われるものが観察される。まず、文人と快楽との関係が検討されている章には、人文主義的教育論および学問論との関連が観察される。人文主義者が読書からもたらされる利益を数え上げながら人文学を称揚している一方、そこから生じる不利益を隠蔽し偽装していることを、アルベルティは暴露している。続いて、文人による蓄財という問題が論じられている章には、伝統的な「自発的な清貧」という視点と同時に、金銭の価値を積極的に評価する、新たに導入された視点も観察される。アルベルティは、伝統的な視点が欺瞞であることを暴露すると同時に、新たな金銭観も文人の生き方には適用されないことを明らかにしている。最後に、文人に認められるべき社会的名誉が論じられている章には、知識人の高貴さをめぐる伝統的な議論の影響が観察される。アルベルティは、高貴さの根拠である公益性が文人に欠けていることを暴露しているのである。結局、アルベルティは、文人と快楽、文人と金銭的富、文人と社会的名誉という論題をめぐり、伝統的な価値観および人文主義的価値観を十分に意識したうえで、それらの双方を揶揄していることになる。そして、彼が行っている揶揄の素材／対象は、書物だけを珍重し、そこから学ばれる学識だけを貴ぶ文人、つまり、人文主義者が示している書物と読書への強い執着、また、学識を絶対視する姿勢であると思われる。

この点を確認するうえで、市民的人文主義の旗手であるブルーニの思想と『文芸』との関連は、重要な手掛かりを与えてくれる。両者の関連については、たとえば、『文芸』献辞における『フィレンツェ市民史』への示唆など、いくつかの点が先行研究により指摘されている。しかし、本稿でなされた検討を踏まえると、『文芸』においてアルベルティは、ブルーニが提示している思想の全体に観察される様々な矛盾を問題視し、揶揄していると考えられる。

まず、ニッコロ・ストロツィ宛ての手紙や『諸学科』においてなされている「熱心な読書の奨励」は、『口さがない怠け者に対する糾弾』において、「過酷な読書の命令」として提示されている。ブルーニの言説に内在するこの矛盾を踏まえることで、『文芸』においてアルベルティが提示している「読書によって苛まれる文人」の姿は、容易に理解されることになる。文人は、ニッコロのように似非文人として批判され、糾弾されることを恐れているために、その他すべての活動を放棄して、読書だけに身を捧げなければならない。人文学は、その根底に、いわば、「読書の掟」とでも呼ぶべき禁欲性を隠しもっているのである。

さらに、こうした読書の掟に忠実に従う文人は、『家政論』翻訳および注釈において奨励されている教えを実践し、その目的を達成することはできない。読書が行動的生への参加を

阻害すると同時に莫大な出費を求める一方、家政の目的は蓄財だからである。この矛盾を踏まえると、文人の経済的収支についてアルベルティが提起している問題は、容易に理解されることになる。読書の掟を課され、学識しか持たない文人は、わずかな収入しか期待できないにもかかわらず、多大な出費を求められているために、経済的に裕福になることができないのである。結局、読書の掟と『家政論』の教え、すなわち、観想的生と行動的生は、両立されることがない。市民的人文主義の理想は、実現不可能なのである。

そして、ブルーニは『キケロ伝』や『ダンテ伝』において、読書から獲得される学識を通じて、観想的生と行動的生とを融合させることを奨励している。ブルーニによれば、文人と社会とを結びつける紐帯である学識は社会性と公益性を帯びており、まさにその学識によって、文人は社会性と公益性を獲得するのである。しかし、『対話』におけるサルターティの言葉、『口さがない怠け者に対する糾弾』、また、ブルーニが観想的生への憧憬を吐露した手紙において明らかにされているように、読書は文人を社会から切り離す行為である。さらに、言語論争の際にブルーニが示した態度は、社会の大部分をなす大衆を切り捨てた、知的エリート主義の表れにほかならない。ここから生じる疑問、つまり、「学識は本当に社会性と公益性を帯びているのか」という疑問に対し、アルベルティは端的に答えている。彼によれば、学識、また、学識しか誇るものを持たない文人は、社会的に無価値なのである。そのために、学識を紐帯として、観想的生と行動的生が結び付けられることはない。市民的人文主義の理想は、やはり実現不可能なのである。

くわえて、ブルーニは『フィレンツェ市民史』のみならず、『フィレンツェ頌』、『軍務（騎士）について』、『ナンニ・ストロツィ弔辞』、また、『ニコロ・ダ・トレンティーノ称賛演説』といった政治的な作品を多数執筆しているが、アルベルティはこうした賛辞全般に対する疑念も示している。

結局、ブルーニが提示している、文人が読書に励んだ場合に期待される報奨、すなわち、快楽、富、名誉の獲得を、アルベルティはシニカルであると同時に現実的な視点から、完全に否定している。そして、アルベルティによれば、文人がそうした現世的諸善を獲得できない原因は、彼らが示している書物および読書への激しい執着、また、学識の価値への絶対的な信頼に求められるのである。実際、ブルーニが提唱している人文学、さらに、市民的人文主義の理想像にも、書物および読書への激しい執着、くわえて、学識の価値への絶対的な信頼が確認される。ブルーニはまず、学識を通じて社会に積極的に参加していく文人像を提示しながらも、『対話』や『口さがない怠け者に対する糾弾』においては、家にこもり読書しかしない禁欲的な文人を描き出し、それを称賛している。さらに、勉学だけに専念する文人への憧憬は、公職の受諾をめぐる顛末を記した、1428年の二通の手紙から明らかである。結局、ブルーニの言説自体に、社会に背を向け、自己目的としての読書だけに勤しむ文人像が、確認されるのである。そしてブルーニは、『対話』や『口さがない怠け者に対する糾弾』においてのみならず、行動的生にかかわる道德哲学が論じられている『道德学初歩』においても、まず、読書を勧めている。ブルーニは、学識はそれだけで完全かつ完璧であるとして、

その価値を絶対的に信頼しているのである。彼が示している知的エリート主義も、結局は、学識——それも、古典語で執筆された作品の読書によって得られる学識——への絶対的な信頼から生じていると考えられるであろう。

この点を踏まえて『文芸』末尾へ視線を戻すと、書物による文芸学の賛辞にも、書物および読書への激しい執着、また、学識の価値への絶対的な信頼が示されていることが明らかである。結局、『文芸』末尾における賛辞は、「書物を称揚し、読書以外の学びを排除し、学識の価値を絶対的に信頼する文人」が称賛している学問の帰結を描写し、さらに、この帰結と、彼らが掲げている理想との間に生じる齟齬を揶揄していることになるのではないだろうか。もし、このようであるならば、『文芸』は、グラフトンとジャーディンが指摘しているような、「人文学および市民的人文主義をめぐる諸言説とそれらの実態との間に観察される矛盾や欺瞞」<sup>9)</sup>を明らかにすることで、人文主義者の思想に内在している、書物と読書への強い執着、また、学識を絶対視する姿勢を炙り出していることになる。こうした見方を裏付けるために、『文芸』と近接する時期にアルベルティが執筆したいくつかの作品を確認してみよう。

## 2. アルベルティによる他作品と『文芸』との関係

ブルーニの思想との関連を意識しながら『文芸』末尾における文芸学の賛辞を見直すと、そこに示されている学問観および文人観は、アルベルティが理想とするものではなく、むしろ、書物と読書への強い執着、また、学識を絶対視する姿勢という、人文主義の特徴に対する揶揄として機能している可能性が浮かび上がる。擬人化された書物が示す学問観および文人観をアルベルティ個人が育んだ理想としてみなす必要はないであろうことは、この作品が『死者』および『家族論』といくつかの特徴を共有していることから裏付けられる。

従来、1428年頃に執筆され、禁欲的な学問観と文人観を表明する作品としてみなされてきた『文芸』には、行動的生に対する拒絶および観想的生の称揚が読み込まれてきた。しかし、この作品の成立が1432年以降、すなわち、アルベルティがフィレンツェの学問界に対する挑戦を開始した時期に先送りされ、また、本稿において検討されたように、この作品に同時代における学問界の動向が反映されているならば、もはや、作品末尾に示されている禁欲的な学問観を作者の理想としてみなす必要はなくなる。むしろ、この作品には、勉学の価値について文人が味わう幻滅が揶揄されている『死者』、また、学識の価値を繰り返し問いかける対話編である『家族論』との強い結びつきが確認されることになる。

本稿序論において、アルベルティによる他作品と『文芸』が、反フィレンツェ人文主義という姿勢を共有していることを指摘した。この点について、より細かく確認をしておきたい。アルベルティが示している反フィレンツェ人文主義という姿勢は、1) 公益性を強く求める意識、2) 勉学に対する二面的な評価、3) 学識の価値への疑念という諸点に、細分化される。そこで、以下では、本稿において提示された新たな視点を踏まえて、『死者』および『家族論』を中心としたアルベルティの他作品に示される思想と『文芸』との関連を見直し、書物

による賛辞がアルベルティの理想を反映していない可能性を提案する。

まず、『家族論』第三巻序、『トスカーナ語文法』、さらに、『抗議』において示されている言語観から明らかであるのが、「知識人は真に社会性および公益性を帯びた存在でなければならない」というアルベルティの信念である。本稿で確認したように、この認識は、いわば、裏返されたかたちで、『文芸』の随所に観察される。文芸学に身を投じた文人がダンスへの参加や結婚を拒絶され、さらに、政治参加からも排除される姿を描き出すことで、彼らには社会性および公益性が完全に欠けていることを、アルベルティは繰り返し揶揄している。そして、その理由は、文人が身を投じている文芸学、また、それが与えてくれる学識に、社会性と公益性が欠けていることに求められる。したがって、作品結論部において書物が奨励している社会性と公益性に完全に欠けた文芸学を、アルベルティが理想とする学問の姿として捉えることは、不自然であると思われる。

アルベルティの思想が示す第二の特徴は、勉学の価値について、彼が常に複数の視点から論じているという点である。たとえば、『作家』および『死者』において、読書と執筆、つまり勉学が、学究者にとって有益な行為であるのか、あるいは、無益な行為であるのかという問題が扱われている<sup>6)</sup>。さらに、『自伝』においては、文芸、すなわち書物が、ときに魅力的なものとして、また、ときに過酷なものとして立ち現れることが述べられている。

〔アルベルティ〕が非常に楽しんでいた文芸は、時折、花のように香しい芽に見えて、空腹や眠気によっても書物から離れることが困難なほどであった。しかし、時折、彼の眼の奥に文芸自体がまるでサソリのように堆積し、書物ほど見られないものは何もないほどであった。したがって、文芸を楽しむことができない場合には、音楽、絵画、運動へと、彼は身を向けていた。<sup>7)</sup>

書物と読書が肯定的に評価される場合もあれば、否定的に評価される場合もあると、アルベルティは自覚しているのみならず、明言しているのであり、この点において彼の姿勢は、書物および勉学を、ただ称賛するだけで、それらについて決して消極的な評価を下さない人文主義的諸言説と比べると、異質なのである。『文芸』本論においてアルベルティが主張している内容と、作品結論部において書物が語っている言葉との間に確認された齟齬は、まさに、この姿勢から生じていると考えられる。

カルディーニは、『文芸』においてアルベルティが、学問に内在する曖昧さと矛盾を論じていると述べている<sup>8)</sup>。ここで注意しなければならないのが、『文芸』本論におけるアルベルティと、作品末尾において擬人化された書物は、文芸学という同一の対象について、それぞれ異なった評価を下しているという点である。つまり、『文芸』において問題とされているのは、勉学や書物が孕む曖昧さや矛盾、すなわち、それらの二面性というよりも、不変の対象である文芸学が、どのように受け取られるべきであり、いかに評価されるべきであるのかという、文芸学に対する評価であると思われる。この点を踏まえて『文芸』の構造を見直

すと、作品本論において、アルベルティが揶揄に満ちた消極的な視点から眺めている文芸学を、作品末尾において、文人の敵である書物が、欺瞞と隠蔽を交えながら、積極的に評価していることが明らかである。これに類した構造が、『死者』においてネオフロヌスが示している転向に観察される。ネオフロヌスは死後、生前の自らが、いかに勉学を積極的に評価していたのか、述懐している。

なぜなら私は、徹夜によって非常に大きな報奨が獲得されると考えていた。私の労苦が後世の人々に喜ばれないことはないと思っていたのである。さらに愚かなことに、私の小作品によって私の名前が不滅のものとなると考えていたのである。何年間、私はあの労苦に満ちた仕事に打ち込んだことか、どれだけの徹夜をしたことか、どれだけの夜を寝ずに過ごしたことか、何度、私にとって必要な立派な食事を抜かしたことか。だから私は愚かであったのだ、餓えや乾き、眠気、寒さや暑さを軽蔑し、その他の困難全てを耐えることが立派な人物の務めであるなどと私は信じ込み、書物に埋まり昼夜すべてを過ごし、書物に没頭していたのであるから。だからいまや私は、自分がどれだけ愚かであったのか、理解している。読み書きに取り掛かったら、家の用事、儲けの機会、事業の問題やその他の事々も、ランプと書物から私を引きはがすことはできなかったのである。私は文芸に非常な価値を見出していたので、私のすべての財産や、家の内外におけるあらゆる仕事、友人との会話、休日やあらゆる快樂など、放棄するほどであった。<sup>9)</sup>

生前、勉学の価値を肯定していたネオフロヌスは、現世的善の追及を放棄し、学識、また、作家としての名誉を求めて、読書と執筆に打ち込んでいたのである。しかし、死を経て「社会は学問に価値を見出さない」という現実を知った後、彼が勉学に対して下す評価は、次のように変化している。

君は次のような人物が賢いとみなすのか。つまり、激しい勤勉と労苦、燃え立つ熱意と絶え間ない苦勞、粘り強さでもって、どんな実りも、どんな報奨も、どんな対価も得られないような事柄にしがみつくような人物を。君は次のような人物を思慮深いと判断するのか。つまり、苦惱、心勞、労苦、魂の果てしない動揺のほか、何事も獲得できないような事柄に自らの生涯を費やすような人物を。私の考えは次の通りであり、間違っていないと思う。すなわち、困難で厳しく無益で実利的でもない事柄をこなそうとして、非常に有益で喜びに満ちており、実利的でもあるその他の物事を疎かにしたり見下したりする人物はみな、もし、企図通りに物事を成し遂げたとしても、常軌を逸しているし、何も利益や称賛なしに、極限かつあまりにも困難な度胸試しをしたがるのにほかならないのである。報酬が取り上げられているのに、どこかで何かしらの仕事を引き受けるような思慮深い人物がいるというのか。もし、報酬のかわりに損害と出費が降りか

かるのであれば、いったいどんな愚か者がそこから身を遠ざけないというのか。<sup>10)</sup>

読書と執筆には、現世的諸善の獲得を放棄してまで身を投じる価値などない。このように、文人に対し多くの犠牲を求める勉学の価値についてネオフロヌスが下す評価は、彼の死をきっかけとして、劇的に変化しているのである。

『死者』に観察されるネオフロヌスの転向と『文芸』との関係について、カルディーニによる見解を確認しておこう。彼はまず、『文芸』が『食間対話集』や『モムス』と同系統の作品であり、市民的人文主義に対する挑戦の書であると認めながらも、『文芸』だけを真剣な作品、あるいは、喜劇的ではない作品としてとみなし、「ウモリズモ」に満ちた他の二作品から分別している<sup>11)</sup>。そのうえでカルディーニは、生前、ネオフロヌスが示していた見解が、『文芸』における理想と一致していると述べている<sup>12)</sup>。カルディーニは、『文芸』におけるアルベルティが、書物の口を借りて、自らが理想とする学問像および文人像を提示しているとみなしていることになる。

しかし、『文芸』献辞において、勉学の価値についての幻滅をすでに経験したと、アルベルティは告白している。たしかに、幻滅を経験する以前のアルベルティは、生前のネオフロヌス、また、擬人化された書物と同じく、文芸学の価値を肯定し、この学問を積極的に評価していた<sup>13)</sup>。しかし、社会を経験したアルベルティは、死を経たネオフロヌスと同じく、この評価が誤りであることに気づき、「労苦と苦悩の点で、文人による学びが凌駕しないような生き方、あるいは、運命による好意の点で、学究者の人生がはるかに凌駕されないような生き方はひとつもない」<sup>14)</sup>と、見解を改めたのである。そのため、『文芸』本論においてアルベルティは、死後のネオフロヌスと同様に、消極的かつ否定的な視点から文芸学を論じているのである。この点に注目すれば、擬人化された書物による文芸学の称揚は、幻滅を経験する以前のアルベルティが示していた勉学の価値に対する積極的かつ肯定的な評価とともに、否定されることになるであろう。もし、このようであるならば、擬人化された書物による言葉に作者の「理想」を読み込む必要はなくなる。さらに、『死者』におけるネオフロヌスの転向に「ウモリズモ」が確認されるのならば、『文芸』本論においてアルベルティが描き出している文芸学と、擬人化された書物が描き出している文芸学との間に観察される齟齬にも、「ウモリズモ」が読み込まれることになり、この作品を『食間対話集』や『モムス』から分別する必要はなくなる。以上のように、アルベルティが学問の価値について常に二面的な評価を行っていることに注目すると、擬人化された書物による賛辞は、アルベルティの理想像を反映しているわけではないことになる。

こうした見方を最大限に裏付けるのが、アルベルティの思想が示す第三の特徴、学識の価値に対する疑念である<sup>15)</sup>。まず、アルベルティにとって「学び」とは、読書だけに限定されるものではない。たとえば『自伝』には、「鍛冶職人、建築家、船職人、靴職人や仕立屋にも、〔アルベルティ〕は尋ねていた、その人物の技術に独特な、何か貴重で知られていない事柄はないのかと」<sup>16)</sup>という文言が確認される。読書から得られる学識ではなく、経験や実

践に基づいた知を評価する姿勢は、1436年にフィリッポ・ブルネッレスキ（Filippo Brunelleschi, 1377-1446）に献呈された『絵画論』（*De pictura*）において、画家、彫刻家、建築家が、修辞学者と詩人よりも評価されている点にも確認される<sup>17)</sup>。さらに、『トスカーナ語文法』にも、生きた現実的な言語使用に対する強いこだわりの存在が指摘されている<sup>18)</sup>。

経験から学ばれる知を重視するというアルベルティの姿勢は、『文芸』においても随所に確認された。そもそも、アルベルティは、自らの経験に基づいてこの作品を執筆したと述べている。そして、勉学の価値について彼が幻滅した理由も、社会を経験したためである。また、ボローニャの挿話や文人の政治参加についての考察など、学識だけを誇る文人の愚かさが揶揄されている箇所において、経験から獲得された知が梃として用いられていることも明らかである。息子を勉学の道に進ませたことを悔やむボローニャ人の父親は、「見て分かるように、何か他者の意見に動かされたのではなく、経験を通して賢くなった」<sup>19)</sup>であり、文人が政治への参加を拒絶されるのは、彼らに実践的な経験知が欠けているためである。結局、『文芸』の作者としてのアルベルティは、「知、それも、社会において必要とされる知は、書物に依拠した学識によっては獲得されない」と、十分に理解していたのである。アルベルティが示すこの姿勢は、「学識の限界」が繰り返し論じられている『家族論』にも確認される。

『家族論』第一巻において、古典に依拠して持論を展開するリオナルドと、学識深いと同時に豊かな人生経験も併せ持つアドヴァルドとの間で、子育てにまつわる父親の喜びと苦悩について討論がなされている<sup>20)</sup>。この巻の結論部においてリオナルドは、「だが、これらの事々について、鋭い議論と同時に長い経験によって君が論じることができるならば、いっそう喜ばしいのであるが」<sup>21)</sup>というアドヴァルドによる言葉、つまり、「学識はそれだけでは不完全である」という認識に屈している。

さらに、家政について対話が行われている同書第三巻において、長い人生経験を誇るものの、学識には完全に欠けているジャンノッツォが、文人であるリオナルドおよびアドヴァルドと自らとの間に二項対立を設定し、学識の価値に対し疑念を呈している。

リオナルドよ、私が教養に欠けていることを君は知っている。人生において、他人の言葉からよりも私自身の経験から物事を知るように、私は努めてきた。そして、こうしたことを、他人が行う議論からではなく、事実から私は理解したのである。一日中読書している人物が、「こうである」と私に言ったところで、私に同意を迫るような理由ではなく、実際にそうであることを示してくれるような明白な理由を目にしないかぎり、私は彼の言葉を信じはしない。そしてもし、無学な人物が、まったく同じ理由を私に示してくれるなら、そこに権威を持ち出さずとも、私はその人物の言葉を信じるであろう、書物から証拠を示してくれる人物を信じるのと同じように。というのも、作家といえども、私と同じく、人間にすぎなかったと思うからである。<sup>22)</sup>



ジャンノッツォは、ボローニャの挿話における父親と同じく、他者の意見によってではなく自らの人生経験から多くを学んだのである。ジャンノッツォはさらに、経験は学識よりも重んじられるべきであると主張している。

世の中の事柄の多くは、判断や思慮よりも経験を通じて、よりよく理解されるのである。文芸によって鍛えられてはいないが、実践と年月により博識になった我々のような人間は、生活の秩序全般について、何が最上であるのか考えて見極めたのである。疑ってはいけませんが、我々は実践を通じて、多くの事々をうまくこなすことができるのである、お前たち文人が、その鋭敏さと狡猾な規範で行うことが許されているよりも。<sup>23)</sup>

このように、経験および実践から学ばれる知を学識よりも評価しているジャンノッツォであるが、同時に、彼が学識を完全に無価値なものとしてみなしているわけではなく、むしろ、経験と学識との融合を称賛している点には注意を払う必要がある<sup>24)</sup>。また、彼の人物像が、クセノフォン『家政論』(Oikonomikos)におけるイスコマコス(Iscomacos)、さらに、キケロ『老年について』における大カトー(Cato Maior)を下敷きにしているために<sup>25)</sup>、『家族論』第三巻に観察される二項対立自体が、学識に依拠した作為的なものである点にも、注意を払う必要がある。アルベルティは意図的に、「学識の限界」を論題のひとつとして扱っているのである<sup>26)</sup>。

同様の問題意識は、友情について論じられている同書第四巻にも確認される。アドヴァルドは、学識が万能ではないことについて、次のように不満を漏らしている。

閑暇や観想的生において文人間で話し合う場合は、こうした学術的な定義や描写が喜ばしいものであり、軍務にとっての剣術のように、準備としての価値をもつことを、私は否定しない。だが、人々の習わしと振る舞いのなか、社会と対峙する際に、もし文人が、父親よりも母親のほうが子供を愛するのかどうか、息子へと父親が向ける愛情のほうが、息子が父親へ向ける愛情よりも大きいのかどうか、あるいは、どんな理由によって、兄弟は慈しみあうのか知ること以外、何事も持ち出さなければ、逍遥学派の哲学者、ポルミオに降りかかったようなことが、彼らにも起きてしまうのではないかと私は危惧する。軍務について彼が論じたきわめて冗長な弁論を聞いたハンニバルは、彼に対して、次のように答えた。つまり、多くの人間を見てきたが、この人物よりも愚かな者を知らないとおそらくポルミオは語りながら、次のように考えていたのである。つまり、平穏な学校において論じられる事柄が、戦場、また、敵の面前においても有効であるなどと。<sup>27)</sup>

学識は、それ自体として、何かしらの価値をもつ。ただし、学識は、現実的な諸問題に対応することができるほどに、完全で完璧なわけではない。友情にかんする多くの美辞麗句が古

典作品に観察されるのは事実であるが、それらの多くは経験から学ばれうるものであり、また、実践的ではないのである<sup>28)</sup>。結局、「[友情]にかかわる教えは、黙して動かない書物からだけでは学ばれることはできない。広場の真ん中、公的な集会や私的な集いにおける、他の種の訓練と明白な経験が必要なのである」<sup>29)</sup>というアドヴァルドの言葉に明らかなように、学識は無益ではないが、実効性に欠けるといふ限界をもつために、経験によって補完されなければならない。

『家族論』第四巻におけるアドヴァルドの言説全体について、アルベルティが「その構造を、キケロをキケロ自身に對置させることで完成させている」<sup>30)</sup>と、レゴリオージは指摘している。さらに、アドヴァルドが学識の不完全性について論じる際に挙げているポリオの挿話は、キケロの言葉に材源が求められる<sup>31)</sup>。したがって、アドヴァルドが立脚している二項対立も、結局は、学識に依拠して作為的に構築されたものである。やはりこの巻においても、アルベルティは学識と経験知とを意図的に對置させ、前者の限界を問題としているのである。フランチェスコ・タテオはこの点について、作品第四巻冒頭において、古くから一族に仕えている使用人であり、学識に欠けるブート(Buto)が述べている言葉に注目している。ブートは、彼が仕えた「非常に学識深い」(«litteratissimi») <sup>32)</sup>一族の面々が友情について論じていたことを回想し、次のように結論付けている。

彼らは友情について、耳に心地よい数多くの事柄を語っておりました。しかし、それらの事柄は、あとから実践する人にとってはただの物語にすぎないような事柄でした。だから、あなた方にご忠告いたしますが、立派に語る術をお持ちであっても、無益なことしか語らないお方たちの言葉に、あまり耳を傾けないでください。<sup>33)</sup>

タテオは、このブートによる言葉がキケロおよびアリストテレスに遡るトポスであることを指摘すると同時に、まさにこの見解が、『家族論』第四巻全体を通してアドヴァルドが検証していくことになる、「古典学識は、そのまま現実に適用されることはできない」という認識へ繋がっていくことを指摘している<sup>34)</sup>。

以上から、『家族論』の構造として、学識と経験知とが意識的に對置されていること、また、この作品における重要な論題のひとつとして、学識の限界という問題が提起されていることが明らかである。経験から学ばれた知に立脚する話者と、学識にしか価値を見出さない話者との間の討論と云えば、『対話』が想起される。しかし、『家族論』と『対話』との間には、大きな違いが観察される。この点については、『家族論』において、学識深くはあるものの、人生経験に欠ける人物としての役割を与えられている登場人物、リオナルドが、討論に価値を認めている点が注目に値する。結婚について論じられている同書第二巻冒頭で、「他の学者たち、とくに、非常に学識豊かで、鋭敏な返答をするアドヴァルドとともにいるのが私の習慣であった。そして、友人たちの間で無為に黙ったままでいないように、私は質問したり、他者の見解に反する意見を擁護して返答してみたりするのである」<sup>35)</sup>と、リオ

ナルドは述べている。読書だけに学びを見出し、討論の訓練を軽視して、サルターティに促されるまで黙り続けていた『対話』における若者たちと比べると、討論という開かれた学びに対して肯定的な評価をリオナルドが与えていることは明らかである。そして、ジャンノツォとアドヴァルド、さらにブートは、『対話』におけるサルターティと同様に、書物から学ばれる学識が不完全であることを十分に認識している。『家族論』には、『対話』においてサルターティが問題視したような、読書しかせず、討論という実践的かつ経験的な学びを軽視するような登場人物は、一人も確認されないのである。結局、『家族論』も、同時代の学問界、とくに、古典学識だけに価値を見出す人文学および人文主義に対し、疑念を示す書なのである<sup>36)</sup>。

このように、『家族論』に通底している、読書だけに依拠した学識の価値への疑念を踏まえると、『文芸』末尾における、学識だけを追求する文芸学の賛辞をアルベルティの理想としてみなすことは、やはり困難に思われるのである。

### 3. 市民的人文主義に対する知的挑戦

『文芸』を同時代の学問界が示していた諸動向と比較すると、作品末尾における書物による賛辞は、同時代の思想、とくに人文学および市民的人文主義がその根幹に隠しもっている書物と読書への強い執着、また、学識を絶対視する姿勢を炙り出しているように思われる。そして、『文芸』をアルベルティによる他作品と比較すると、書物の言葉がアルベルティの理想を代弁しているとはみなしがたいことが確認される。アルベルティは公益性を重視し、学問に対する評価が時に応じて変化しうることを理解し、さらに、学識に絶対的な価値を見出す姿勢に疑念を抱く文人なのである。このように、書物による文芸学の称賛が帯びている機能を見直してみると、『文芸』は、アルベルティによる他作品と同様に、人文学および市民的人文主義が読書と学識にしか価値を見出していない点を攻撃する作品として立ち現れることになる。くわえて、作品末尾において文芸学を称揚しているのが、作品本論において文人の敵として描写されていた書物であることに注目すると、この攻撃が揶揄に満ちたものに見えてくる。

というのも、アルベルティは、『聖ポテイトゥス伝』において、市民的人文主義を悪魔に称賛させている<sup>37)</sup>。また、『食間対話集』所収の『花輪』において、栄光の花輪を手に入れようとする修辞学者が、女神たちの前で雄弁を称える弁論を行っているが、その弁論が空虚であると批判されると、彼はすぐに遁走してしまう<sup>38)</sup>。アルベルティは、何事かについてのあからさまな賛辞を、それには不適格な話者に任せることで、その賛辞の信憑性自体を疑わしいものとして提示しているのである。これと同種の姿勢が、書物による文芸学の称揚にも観察されるのではないだろうか。この点に着目すると、現世的諸善を放棄して、社会から隔絶された観想的生へ身を捧げよという書物による勧告は、聖ポテイトゥスを誑かそうとする悪魔の言葉、また、女神たちを謀ろうとする修辞学者の言葉に観察されるものと同様に、何かしらの欺瞞を隠しもっているように思われてくる。なぜなら、ここで書物が奨励してい

る「理想的学問」が、実際には、「永遠の監獄である図書館の中、死んだ羊を絶え間なく読み続けること」にすぎないと、すでに我々は知っているからである。ここで、グラフトンとジャーディンによる分析を、再度、思い起こしてみれば、人文主義者も、『文芸』における擬人化された書物と同様に、美辞麗句を用いて人文学の不利益を隠蔽し、あるいは、その不利益をまるで利益であるかのように偽装し、若者たちを誑かしていたことが想起されることになる。人文学は、実際には、読書至上主義および学識至上主義という特徴のために、そこに身を投じた学究者に対して実利を与えることができないのである。

アルベルティは生涯にわたり、学識に依拠しながらも、その限界を論じ続けていくことになる。たとえばフビーニとガッロリーニは、『辛苦からの避難』におけるアルベルティが、ディオゲネス・ラエルティオスに依拠しながら、「美德と幸せは学識からは獲得されない」と主張していることを指摘している<sup>39)</sup>。また、レゴリオージは、『モムス』において、画家が経験から学びとる認識と、抽象的な思索とが対置されていることを指摘している<sup>40)</sup>。そして、『デ・イキアルキア』(De ierarhia, 1465)において、アルベルティは「人生に必要な技術は、実践から学ばれる」<sup>41)</sup>と述べている。『文芸』末尾における書物の言葉に確認される「読書に身を投じれば、美德は獲得される」という見解を、全生涯にわたり、アルベルティは否定し続けているのである。

たしかにブルーニも、「美德を学ぶために読書せよ」と命じるだけではなく、「行動的生にかかわる哲学は生き方をめぐる教えを含んでいるが、実践に移さないかぎり、それらの教えを知っているだけでは意味がない」<sup>42)</sup>と述べている。この言葉は、一見、学識が自己目的化することを否定しているように見える。しかし、この主張にも、「学識は、それだけでは不完全であり、現実に適用されることは困難である」という認識が欠けている。この点は、1405年にブルーニがニッコリに宛てた手紙からも裏付けられる。ブルーニはニッコリが短気であることを諷め、「実に君は、たいそうな称賛を獲得しながら長年身を投じてきた学問によって、もっと威厳あり、もっと成熟した人物になるはずなのだが」<sup>43)</sup>と述べている。この見解に従えば、ただ勉学に身を投じるだけで、人格は矯正されることになる。学識の完全性に対するこうした信頼が、『道徳学初歩』へと引き継がれていることは明白であろう。

他方、アルベルティは、学識が現実社会へと、そのままのかたちで適用されることが可能であるなどと、盲信してはいない。学識はあくまでも学識にすぎず、それだけでは現実に対応しきれないと、アルベルティは十分に理解している。結局、人文主義者が「生き方と振る舞いにかかわる事柄についての知識」<sup>44)</sup>と呼ぶものは、「文芸／書物によって保全されている事物をめぐる知識」<sup>45)</sup>にほかならないのである。

それでは我々は、『文芸』におけるアルベルティが、学識についてどのような見解を表明していると判断すればよいのであろうか。作品序文においてアルベルティは、勉学の価値にかんする幻滅を告白した直後、次のように言葉を続けている。

私はしかし、かつてみなしていたほどに、文芸が有益なわけではないと知っても、それ

が完全に放棄されるべきであるとみなすほどに、昔の習慣から身を遠ざけたわけではない。むしろ我々は、文芸学において次のように鼓舞されなければならないと考えた。つまり、このうえなく高貴な事物にかんする知識以外、運命に由来するすべての善は、あまりにくだらないと我々がみなし、知だけで我々が満足するようにと。<sup>46)</sup>

この言葉に「文芸学の限界」をめぐる皮肉が観察されることは、もはや明らかであろう。文芸学に身を投じた文人は、運命に由来するすべての善をくだらないとみなすほかはなく、学識を獲得することだけで満足せざるをえない。なぜなら、文芸学は現世的諸善をもたらすことはできず、ただ、学識しか与えてくれないからである。それでも、学識は無価値なわけではなく、文芸学を放棄する必要はない。こうした認識は、超えられない壁である古典作家と比較した際の自らの卑小さを冷静かつ謙虚に認めつつ、それでも作品執筆に励むアルベルティの姿勢からも窺い知れるであろう。結局、『文芸』の作者としてのアルベルティは、『家族論』におけるジャンノッツォやアドヴァルドと同じく、学識の価値を肯定しつつも、それを絶対視することに警鐘を鳴らしていると考えられるのではないだろうか。市民的人文主義という理想は、書物から学ばれる学識に信頼を置きすぎるために、観想的生と行動的生を両立させることができず、それらを融合させることもできないのである。社会が学識に価値を認めていないことに無自覚なまま、学識だけを通じて行動的生に参加しようと試みる文人は、ダンス、結婚、また、政治から当然にも排斥される文人と同じく、愚かな存在なのである。

以上から、『文芸』が、同時代の学問界の動向および思想を十分に意識したうえで執筆された作品であること、また、この作品が、アルベルティの思想全体と密接な関係を保持していることが、明らかにされたであろう。アルベルティは、『文芸』においても、人文学および市民的人文主義の根底に確認される書物と読書への強い執着、また、学識を絶対視する姿勢を揶揄しながら批判しているのである。この意味において、『文芸』は、1430年代から1440年代初頭へと至る、アルベルティによるフィレンツェの学問界への挑戦と敗北の流れに沿った、挑発的な知的論争の一環としてみなされることになる。